松山市文化財調査報告書 208

下難波地区農地整備工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書

下難波腰折遺跡

－１次・２次調査－

２０２２

松 山 市 教 育 委 員 会

公益財団法人松山市文化・スポーツ振興財団

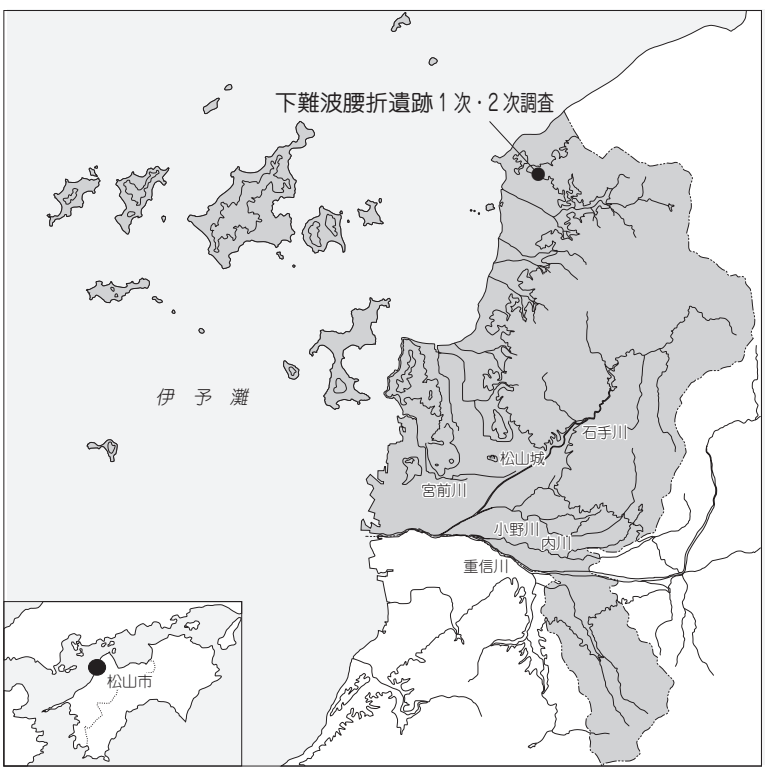
埋 蔵 文 化 財 セ ン タ ー

下難波地区農地整備工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書

しもなんばこしおれ

下難波腰折遺跡

－１次・２次調査－



２０２２

松山市教育委員会

公益財団法人松山市文化・スポーツ振興財団

埋蔵文化財センター

巻頭図版 1.　下難波腰折遺跡 1 次調査地遠景（南より）

巻頭図版 2.　1 号墳遺物出土状況（西より）

巻頭図版 3.　1 号墳出土遺物

巻頭図版 4.　２号墳石室全景（南東より）

巻頭図版 5.　２号墳木炭床検出状況（南東より）

巻頭図版 6.　下難波腰折遺跡 2 次調査地遠景（東より）

巻頭図版 7.　5 号墳遺物出土状況（北より）

巻頭図版 8.　5 号墳出土遺物

巻頭図版 9.　5 号墳出土遺物（装身具）

巻頭図版 10.　5 号墳出土遺物（大刀）

巻頭図版 11.　６号墳石室全景（北より）

巻頭図版 12.　７号墳石室全景（東より）

巻頭図版 13.　SX1 遺物出土状況（北西より）

巻頭図版 14.　近世墓 SK1 検出状況（北東より）

巻頭図版 15.　６号墳出土遺物

巻頭図版 16.　近世墓 SK1 出土遺物

巻頭図版 17.　７号墳 出土遺物

巻頭図版 18.　その他 出土遺物

序　　言

下難波腰折遺跡は、北条平野の北部にそびえる腰折山の南麓に位置し、東側には中世の山城があった恵良山、西側には新城山があります。これらの丘陵部には新城古墳群や下難波古墳群など、数多くの古墳が知られていますが、発掘調査された古墳は少なく、古墳の墳形や規模などが確定されたものは多くありません。

今回報告の下難波腰折遺跡１次・２次調査は、下難波地区の農業基盤整備事業に伴い令和元年度と令和２年度に実施したものです。調査の結果、７基の古墳と土坑などを検出しました。古墳はすべて壊されていましたが、須恵器、鉄器、勾玉、ガラス玉などの副葬品が数多く出土しました。また、腰折２号墳では松山市で２例目となる全国的にも珍しい『木炭床』を確認しています。

今回の調査により、下難波腰折古墳群の詳細が判明したことで、北条平野北部地域における古墳の様相の一端が明らかになりました。

本書が、松山市民をはじめ、多くの方々に松山市内にある貴重な遺跡を知っていただく機会となり、埋蔵文化財の保護・普及と調査研究のための資料として、ご活用いただければ幸いに存じます。

最後になりましたが、発掘調査および報告書刊行にご協力いただきました関係機関並びに地権者に厚くお礼申し上げます。

令和４年12月23日

公益財団法人松山市文化･スポーツ振興財団

埋　蔵　文　化　財　セ　ン　タ　ー

例　　言

1．本書は、公益財団法人松山市文化・スポーツ振興財団埋蔵文化財センターが令和元（2019）年10月15日～令和2（2020）年1月31日の間に実施した下難波腰折遺跡1次調査と、令和2（2020）年10月15日～同年12月25日の間に実施した2次調査の埋蔵文化財調査報告書である。

2．発掘調査は、農業基盤整備事業にあたり、一部は発掘調査国庫補助事業対象となっている。そこで1次・2次調査とも調査地をＡ区とＢ区に区別し、それぞれＢ区の調査を国庫補助対象として実施した。

3．1次・2次調査で見つかった古墳名称については、調査地が松山市の文化財包蔵地外であることから、遺跡名称より調査順に下難波腰折1号墳、2号墳・・・と呼称した。そのほか見つかったものについては遺構名は略号化し、土坑：ＳＫ、性格不明遺構：ＳＸで記述した。

4．本書で使用した標高数値はすべて海抜標高を示す。方位は国土座標を基準とした座標北である。1次・2次調査の国土座標軸測量は、南海測量設計株式会社に業務を委託した。

5．本報告書の遺構埋土・土層の色調の一部は、農林水産省農林水産技術会議事務局監修の『新版標準土色帖』（2003）に準拠した。

6．屋外調査での写真は調査担当者のほか大西朋子が撮影を行った。報告書作成に関わる遺物写真と図版作成は大西朋子が担当した。空中写真については、南海放送サービス株式会社に業務を委託して、1次・2次調査とも調査前と調査後の2回実施した。

7．遺物の復元及び実測・製図は調査担当者の指示のもと令和3年度は池内芳美・越智田美紀・原冨美・和泉順子が行い、令和4年度は篠原綾、渡部美佐緒が行った。

8．本書掲載の遺構図や遺物図の縮尺は縮分値をスケール下に記した。

9．本書の執筆は調査担当の相原浩二のほか、松山市教育委員会文化財課（発掘調査時）　山内英樹が行い、編集は相原浩二が行った。執筆にあたっては、基本的に概要報告・年報に掲載された文章や図面を参考にし、一部については加筆・修正を行った。

10．下難波腰折5号墳については、徳島文理大学　大久保徹也氏にご教示を頂いた。腰折5号墳出土の耳環については、独立行政法人奈良文化財研究所に蛍光Ｘ線分析で材質の鑑定をお願いした。ここに記して感謝を申し上げます。

11．本書に掲載した記録類や遺物は、松山市立埋蔵文化財センターにおいて保管されている。

本 文 目 次

第Ⅰ章　はじめに …… **1**

第１節　調査に至る経緯 …… 1

第２節　調査・整理・刊行組織 …… 3

第３節　遺跡の立地と歴史的環境 …… 4

第Ⅱ章　調査の概要 …… **7**

第１節　調査の経緯 …… 7

第２節　整理作業 …… 7

第Ⅲ章　下難波腰折遺跡１次調査 …… **10**

第１節　調査区と検出遺構 …… 10

第２節　Ａ区の調査 …… 11

1. 腰折１号墳 …… 11

2. 腰折２号墳 …… 21

3. 腰折３号墳 …… 28

第３節　Ｂ区の調査 …… 32

1. 腰折４号墳 …… 32

第４節　小結 …… 36

第Ⅳ章　下難波腰折遺跡２次調査 …… **44**

第１節　調査に至る経緯 …… 44

第２節　調査区と検出遺構 …… 45

第３節　Ａ区の調査 …… 47

1. 腰折５号墳 …… 47

2. 腰折６号墳 …… 66

3. その他の遺構（SX1・SK1）・遺物 …… 67

第４節　Ｂ区の調査 …… 72

1. 腰折７号墳 …… 72

第５節　小結 …… 74

第Ⅴ章　考　察　―腰折５号墳の埴輪とその評価― …… **87**

第Ⅵ章　まとめ …… **89**

挿図目次

第 1 図　調査地位置図 …… 1
第 2 図　試掘トレンチ位置図 …… 2
第 3 図　周辺地質図 …… 4
第 4 図　調査地周辺の主な遺跡 …… 5
第 5 図　調査区位置図 …… 8
第 6 図　調査前測量図 …… 10
第 7 図　遺構配置図と調査地エレベーション図 …… 11
第 8 図　腰折 1 号墳完掘図 …… 12
第 9 図　腰折 1 号墳ベルト土層図 …… 13
第 10 図　腰折 1 号墳石室・墓坑測量図 …… 13
第 11 図　腰折 1 号墳石室測量図 …… 14
第 12 図　腰折 1 号墳出土遺物平面図 …… 15
第 13 図　腰折 1 号墳出土遺物実測図（1） …… 17
第 14 図　腰折 1 号墳出土遺物実測図（2） …… 18
第 15 図　腰折 1 号墳出土遺物実測図（3） …… 19
第 16 図　腰折 1 号墳出土遺物実測図（4） …… 20
第 17 図　腰折 2 号墳完掘図 …… 21
第 18 図　腰折 2 号墳測量図（1） …… 22
第 19 図　腰折 2 号墳測量図（2） …… 23
第 20 図　腰折 2 号墳出土遺物平面図 …… 25
第 21 図　腰折 2 号墳石室内出土遺物実測図（1） …… 26
第 22 図　腰折 2 号墳石室内出土遺物実測図（2） …… 27
第 23 図　腰折 2 号墳墓道出土遺物実測図 …… 27
第 24 図　腰折 2 号墳周溝出土遺物実測図 …… 28
第 25 図　腰折 3 号墳石室と墓坑測量図 …… 29
第 26 図　腰折 3 号墳出土遺物平面図 …… 30
第 27 図　腰折 3 号墳石室内出土遺物実測図 …… 31
第 28 図　腰折 3 号墳その他出土遺物実測図 …… 31
第 29 図　腰折 4 号墳完掘図 …… 32
第 30 図　腰折 4 号墳石室展開図 …… 33
第 31 図　腰折 4 号墳出土遺物平面図・遺物実測図 …… 33
第 32 図　B 区その他の出土遺物実測図（1） …… 34
第 33 図　B 区その他の出土遺物実測図（2） …… 35
第 34 図　調査区位置図及び遺構配置図 …… 44
第 35 図　A 区調査後コンター測量図 …… 45
第 36 図　腰折 5 号墳 墳丘測量図 …… 46

第 37 図　腰折 5 号墳墓坑と石室測量図 …… 47
第 38 図　腰折 5 号墳石室測量図 …… 48
第 39 図　腰折 5 号墳石室内出土遺物平面図 …… 50
第 40 図　腰折 5 号墳石室内出土遺物実測図（1） …… 51
第 41 図　腰折 5 号墳石室内出土遺物実測図（2） …… 52
第 42 図　腰折 5 号墳石室内出土遺物実測図（3） …… 53
第 43 図　腰折 5 号墳石室内出土遺物実測図（4） …… 54
第 44 図　腰折 5 号墳石室内出土玉類区分図 …… 55
第 45 図　腰折 5 号墳玉類 A 群出土平面図 …… 55
第 46 図　腰折 5 号墳石室内出土遺物実測図（5） …… 56
第 47 図　腰折 5 号墳石室内出土遺物実測図（6） …… 57
第 48 図　腰折 5 号墳石室内出土遺物実測図（7） …… 58
第 49 図　腰折 5 号墳石室内出土遺物実測図（8） …… 59
第 50 図　腰折 5 号墳石室内出土遺物実測図（9） …… 60
第 51 図　腰折 5 号墳石室内出土遺物実測図（10） …… 61
第 52 図　腰折 5 号墳石室内埴輪出土位置図 …… 62
第 53 図　腰折 5 号墳石室内出土遺物実測図（11） …… 63
第 54 図　腰折 5 号墳石室内出土遺物実測図（12） …… 64
第 55 図　腰折 6 号墳測量図 …… 65
第 56 図　腰折 6 号墳遺物出土平面図 …… 66
第 57 図　腰折 6 号墳石室内出土遺物実測図 …… 67
第 58 図　SX1 測量図 …… 68
第 59 図　SX1 出土遺物実測図 …… 69
第 60 図　SK1 測量図 …… 70
第 61 図　SK1・その他出土遺物実測図 …… 71
第 62 図　腰折 7 号墳測量図 …… 72
第 63 図　腰折 7 号墳出土遺物平面図 …… 73
第 64 図　腰折 7 号墳出土遺物実測図 …… 73
第 65 図　腰折 2 号墳と瀬戸風峠 4 号墳石室測量図 …… 90
第 66 図　番塚古墳と腰折 5 号墳 …… 91

表目次

第Ⅰ章　はじめに

表 1　調査地一覧 …… 3

第Ⅲ章　下難波腰折遺跡 1 次調査

表 2　腰折 1 号墳玄室内出土遺物観察表　土製品 …… 37

表 3　腰折 1 号墳玄室内出土遺物観察表　装身具（勾玉）…… 38
表 4　腰折 1 号墳玄室内出土遺物観察表　装身具（平玉）
表 5　腰折 1 号墳玄室内出土遺物観察表　装身具（切子玉・算盤玉）
表 6　腰折 1 号墳玄室内出土遺物観察表　装身具（丸玉）
表 7　腰折 1 号墳玄室内出土遺物観察表　装身具（管玉）
表 8　腰折 1 号墳玄室内出土遺物観察表　装身具（ガラス玉・臼玉）…… 39
表 9　腰折 1 号墳玄室内出土遺物観察表　装身具（耳環）
表 10　腰折 1 号墳玄室内出土遺物観察表　鉄製品（鏃）
表 11　腰折 1 号墳玄室内出土遺物観察表　鉄製品（馬具）…… 40
表 12　腰折 1 号墳玄室内出土遺物観察表　鉄製品（農工具ほか）
表 13　腰折 2 号墳玄室内出土遺物観察表　土製品
表 14　腰折 2 号墳玄室内出土遺物観察表　装身具（耳環）…… 41
表 15　腰折 2 号墳玄室内出土遺物観察表　鉄製品
表 16　腰折 2 号墳墓道出土遺物観察表　土製品 …… 42
表 17　腰折 2 号墳周溝出土遺物観察表　土製品
表 18　腰折 3 号墳玄室内出土遺物観察表　土製品
表 19　腰折 3 号墳玄室内出土遺物観察表　装身具（耳環）…… 43
表 20　腰折 3 号墳玄室内出土遺物観察表　鉄製品
表 21　A 区その他出土遺物観察表　土製品
表 22　B 区腰折 4 号墳石室内出土遺物観察表　土製品
表 23　B 区その他出土遺物観察表　土製品

第Ⅳ章　下難波腰折遺跡 2 次調査

表 24　腰折 5 号墳玄室内出土遺物観察表　土製品 …… 75
表 25　腰折 5 号墳玄室内出土遺物観察表　装身具（耳環）…… 77
表 26　腰折 5 号墳玄室内出土遺物観察表　装身具（勾玉）
表 27　腰折 5 号墳玄室内出土遺物観察表　装身具（棗玉）
表 28　腰折 5 号墳玄室内出土遺物観察表　装身具（平玉）
表 29　腰折 5 号墳玄室内出土遺物観察表　装身具（切子玉・算盤玉・丸玉）
表 30　腰折 5 号墳玄室内出土遺物観察表　装身具（管玉）…… 78
表 31　腰折 5 号墳玄室内出土遺物観察表　装身具（ガラス玉）
表 32　腰折 5 号墳玄室内出土遺物観察表　鉄製品（大刀）…… 82
表 33　腰折 5 号墳玄室内出土遺物観察表　鉄製品（鏃）
表 34　腰折 5 号墳玄室内出土遺物観察表　鉄製品（馬具）
表 35　腰折 5 号墳玄室内出土遺物観察表　鉄製品（農工具ほか）…… 83
表 36　腰折 5 号墳玄室内出土遺物観察表　土製品（埴輪）
表 37　腰折 6 号墳玄室内出土遺物観察表　土製品 …… 84

表 38　腰折 6 号墳玄室内出土遺物観察表　装身具（管玉）
表 39　腰折 6 号墳玄室内出土遺物観察表　装身具（土玉）
表 40　腰折 6 号墳玄室内出土遺物観察表　鉄製品（農工具）
表 41　SX1 出土遺物観察表　土製品
表 42　SX1 出土遺物観察表　鉄製品（農工具）…… 85
表 43　近世土坑墓 SK1 出土遺物観察表　土製品（皿）
表 44　近世土坑墓 SK1 出土遺物観察表　陶磁器
表 45　近世土坑墓 SK1 出土遺物観察表　金属製品（銭貨）
表 46　その他出土遺物観察表　陶磁器
表 47　その他出土遺物観察表　金属製品（銭貨）
表 48　腰折 7 号墳玄室内出土遺物観察表　装身具（勾玉）
表 49　腰折 7 号墳玄室内出土遺物観察表　装身具（管玉）
表 50　腰折 7 号墳玄室内出土遺物観察表　装身具（ガラス玉）…… 86
表 51　腰折 7 号墳出土遺物観察表　鉄製品（工具）

図版目次

巻頭図版 1.　下難波腰折遺跡 1 次調査地遠景(南より)
巻頭図版 2.　1 号墳遺物出土状況（西より）
巻頭図版 3.　1 号墳出土遺物
巻頭図版 4.　2 号墳石室全景（南東より）
巻頭図版 5.　2 号墳木炭床検出状況（南東より）
巻頭図版 6.　下難波腰折遺跡 2 次調査地遠景(東より)
巻頭図版 7.　5 号墳遺物出土状況（北より）
巻頭図版 8.　5 号墳出土遺物
巻頭図版 9.　5 号墳出土遺物（装身具）
巻頭図版 10.　5 号墳出土遺物（大刀）
巻頭図版 11.　6 号墳石室全景（北より）
巻頭図版 12.　7 号墳石室全景（東より）
巻頭図版 13　SX1 遺物出土状況（北西より）
巻頭図版 14.　近世墓 SK1 検出状況（北東より）
巻頭図版 15.　6 号墳出土遺物
巻頭図版 16.　近世墓 SK1 出土遺物
巻頭図版 17.　7 号墳出土遺物
巻頭図版 18.　その他出土遺物

下難波腰折遺跡 1 次調査

図版 1　1. 1 次調査前遠景（伐採前・南東より）
2. 1 次調査樹木伐採後遠景（東より）
3. 1 次調査前全景（南より）
図版 2　1. 1 次調査地完掘遠景（南より）
2. 完掘状況①（上空より・写真上が北方向）
3. 完掘状況②（南西より）
図版 3　1. 1 号墳検出状況（東より）
2. 1 号墳石室床面検出状況（西より）
3. 1 号墳奥壁北東隅遺物出土状況（南より）
図版 4　1. 1 号墳玉類出土状況（北東より）
2. 1 号墳床面状況（東より）
3. 1 号墳石室全景（南上より）
図版 5　1. 1 号墳出土遺物①
図版 6　1. 1 号墳出土遺物②
図版 7　1. 1 号墳出土遺物③
図版 8　1. 1 号墳出土遺物④
図版 9　1. 2 号墳石室検出状況（東より）
2. 2 号墳礫床検出状況①（北東より）
3. 2 号墳礫床検出状況②（北より）

図版 10　1. 2 号墳耳環出土状況（南より）
2. 2 号墳墓道遺物出土状況（南より）
3. 2 号墳木炭床検出状況（南東より）
4. 2 号墳木炭床断面状況（東より）
5. 2 号墳石室全景（南より）
図版 11　1. 2 号墳奥壁側面と裏込め土層（東より）
2. 2 号墳木炭撤去後の床面状況（南西より）
3. 2 号墳全景（南より・木炭床検出前）
図版 12　1. 2 号墳出土遺物①
図版 13　1. 2 号墳出土遺物②
図版 14　1. 2 号墳出土遺物③
図版 15　1. 3 号墳石室検出状況（南より）
2. 3 号墳床面遺物検出状況（南より）
3. 3 号墳完掘全景（真上より・上が北方向）
図版 16　1. 3 号墳出土遺物
図版 17　1. B 区 4 号墳検出状況（東より）
2. 4 号墳検出状況（西より）
3. 4 号墳遺物出土状況①（西より）
4. 4 号墳遺物出土状況②（東より）
5. 4 号墳完掘全景（南より）
6. 4 号墳出土遺物
図版 18　1. B 区遺物出土状況①（北より）
2. B 区遺物出土状況②（北より）
3. B 区遺物出土状況③（北より）
4. B 区出土遺物①
図版 19　1. B 区出土遺物②

下難波腰折遺跡 2 次調査

図版 20　1. 2 次調査地遠景（東より）
2. 2 次調査地 調査前状況（北より）
3. 2 次調査地 完掘全景（北上より）
4. 2 次調査地 B 区完掘状況（東より）
5. 5 号墳石室西側ベルト土層①（南より）
6. 5 号墳石室西側ベルト土層②（南より）
図版 21　1. 5 号墳検出状況①（北西より）
2. 5 号墳検出状況②（南より）
3. 5 号墳石室内埴輪出土状況①（南より）
4. 5 号墳石室内埴輪出土状況②（西より）
5. 5 号墳床面玉類出土状況（南より）
6. 5 号墳床面須恵器出土状況（東より）
図版 22　1. 5 号墳床面状況（北より）
2. 5 号墳前庭部（南より）
3. 5 号墳石室全景①（北東より）
4. 5 号墳石室全景②（北上より）
図版 23　1. 5 号墳出土遺物①
図版 24　1. 5 号墳出土遺物②
図版 25　1. 5 号墳出土遺物③
図版 26　1. 5 号墳出土遺物④
図版 27　1. 5 号墳出土遺物⑤
図版 28　1. 5 号墳出土遺物⑥
図版 29　1. 5 号墳出土遺物⑦
図版 30　1. 6 号墳石室全景（北より）
2. 6 号墳鉄器出土状況（北より）
3. 6 号墳より 5 号墳を望む　（東より）
4. 6 号墳出土遺物
図版 31　1. SX1 と 5 号墳（北より）
2. SX1 土層堆積状況①（東より）
3. SX1 土層堆積状況②（南より）
4. SX1 完掘状況（東より）
5. SX1 遺物出土状況全景（北東より）
図版 32　1. SX1 出土遺物
図版 33　1. 近世墓 SK1 遺物出土状況（北東より）
2. 近世墓 SK1 出土遺物
3. その他の出土遺物
図版 34　1. B 区 7 号墳検出状況（南より）
2. 7 号墳勾玉出土状況（北より）
3. 7 号墳鉄器出土状況（北より）
4. 7 号墳石室全景（北より）
5. 7 号墳出土遺物

第Ⅰ章　はじめに

第１節　調査に至る経緯

本調査は、松山市埋蔵文化財包蔵地外における農地中間管理機構関連農地整備事業「下難波地区農地整備工事」に伴う事前の発掘調査である。

平成 30（2018）年 12 月 21 日、愛媛県中予地方局産業経済部農村整備第二課（以下、申請者という）より松山市下難波乙 114 番 2 の一部外における埋蔵文化財の確認申込書が、松山市教育委員会文化財課（以下、文化財課という）に提出された。申請地全体の面積は 91,739㎡、地目は畑、田である。

文化財課は、申請された地点について埋蔵文化財の有無と遺跡の範囲や性格を確認するため試掘調査を行う事となった。

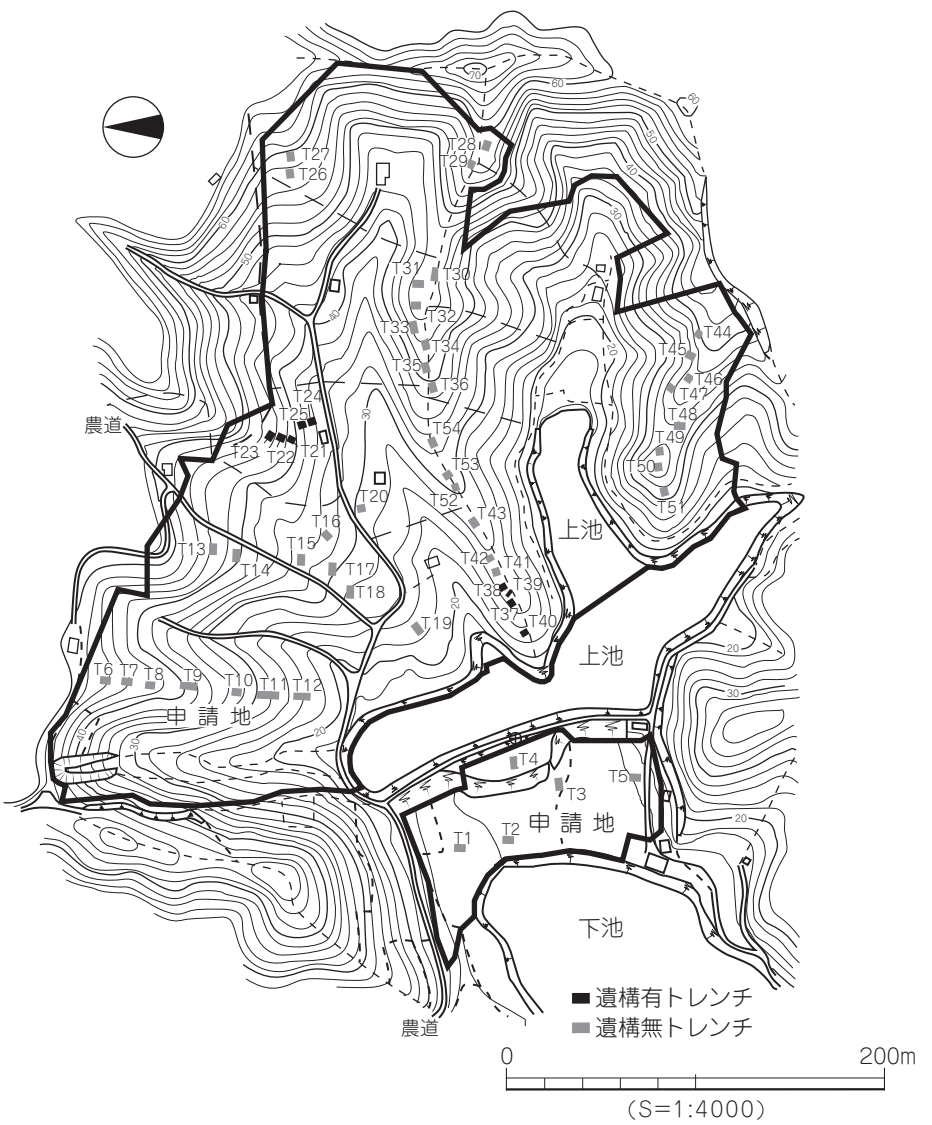
試掘調査は、平成 31（2019）年 2 月 6 日～ 3 月 1 日の間、文化財課の委託を受けて公益財団法人

第1図　調査地位置図

松山市文化･スポーツ振興財団埋蔵文化財センター（以下、埋蔵文化財センターという）が実施した。申請地は、松山市下難波（旧北条市）の腰折山南麓の標高 13m ～ 66m の丘陵地で、申請面積は 91,739㎡である。現況はミカン栽培地や休耕地で、休耕地では成長の早い樹木が生い茂り、雑木林や藪地となっている。

申請地を確認後、主に古墳の存在を確認するため試掘トレンチの設定は丘陵の尾根筋と緩やかな斜面を中心に掘削場所を選定した。その後、樹木の伐採などを行いながら、重機による掘削や手掘りで 54 ヶ所に及ぶトレンチ（Ｔ１～Ｔ 54）の掘削を行い、土層堆積状況の観察、遺構・遺物などの有無の確認、記録写真撮影・測量を実施した。

調査の結果、腰折山南麓の緩傾斜地Ｔ 21 ～Ｔ 25 とその谷を挟んだ東から西に延びる尾根筋のＴ 37 ～Ｔ 40 で古墳の石室や墳丘の一部が見つかったほか、須恵器や埴輪などが出土し、遺跡の存在が確認された。文化財課ではこの結果を受け、遺構・遺物が見つかったトレンチ周辺について発掘調査が必要と判断された。このため、埋蔵文化財センターと申請者は発掘調査についての協議を行い、開発に伴って消失する遺跡に対して記録保存のため発掘調査を実施する事となった。



第2図　試掘トレンチ位置図

発掘調査は、Ｔ 21 ～Ｔ 25 の周辺域を１次調査、Ｔ 37 ～Ｔ 40 の周辺域を２次調査として申請者の委託を受けて埋蔵文化財センターが主体となり令和元年度より本格調査を行った。以下、表１に遺跡名・所在地・屋外調査期間・調査面積を記した。

表１　調査地一覧

	所　在　地	調　査　期　間	調査面積
下難波腰折遺跡１次調査	松山市下難波乙 114 番 2、乙 114 番 21、乙 115 番 2 の各一部	2019（令和元）年 10 月 15 日～ 2020（令和 2）年 1 月 31 日	2,323㎡
下難波腰折遺跡２次調査	松山市下難波乙 9 番 41、乙 9 番 42、乙 109 番 1 の各一部	2020（令和 2）年 10 月 15 日～ 2020（令和 2）年 12 月 25 日	1,349㎡

第２節　調査・整理・刊行組織

〔平成 31・令和元年度　調査組織〕（平成 31 年４月１日時点）

公益財団法人松山市文化・スポーツ振興財団		理事長	本田　元広
	事務局	局　長	片山　雅央
		次　長	大野　昌孝
	施設管理部	部　長	片上　俊哉
	埋蔵文化財センター	所長兼考古館館長	梅木　謙一
		主　任	相原　浩二（調査担当）

〔令和２年度　調査組織〕（令和２年４月１日時点）

公益財団法人松山市文化・スポーツ振興財団		理事長	本田　元広
	事務局	局　長	片山　雅央
		次　長	杉野　公典
	施設管理部	部　長	杉野　公典
	埋蔵文化財センター	所長兼考古館館長	梅木　謙一
		主　任	相原　浩二（調査担当）
		一般嘱託職員	山邊　進也（調査担当）
		一般嘱託職員	浅井　茂之（調査担当）

〔令和３年度　整理組織〕（令和３年４月１日時点）

公益財団法人松山市文化・スポーツ振興財団		理事長	本田　元広
	事務局	局　長	片山　雅央
		次　長	杉野　公典
	施設管理部	部　長	杉野　公典
	埋蔵文化財センター	所長兼考古館館長	梅木　謙一
		主　査	吉岡　和哉
		専門嘱託職員	相原　浩二（整理担当）
		一般嘱託職員	山邊　進也（整理担当）

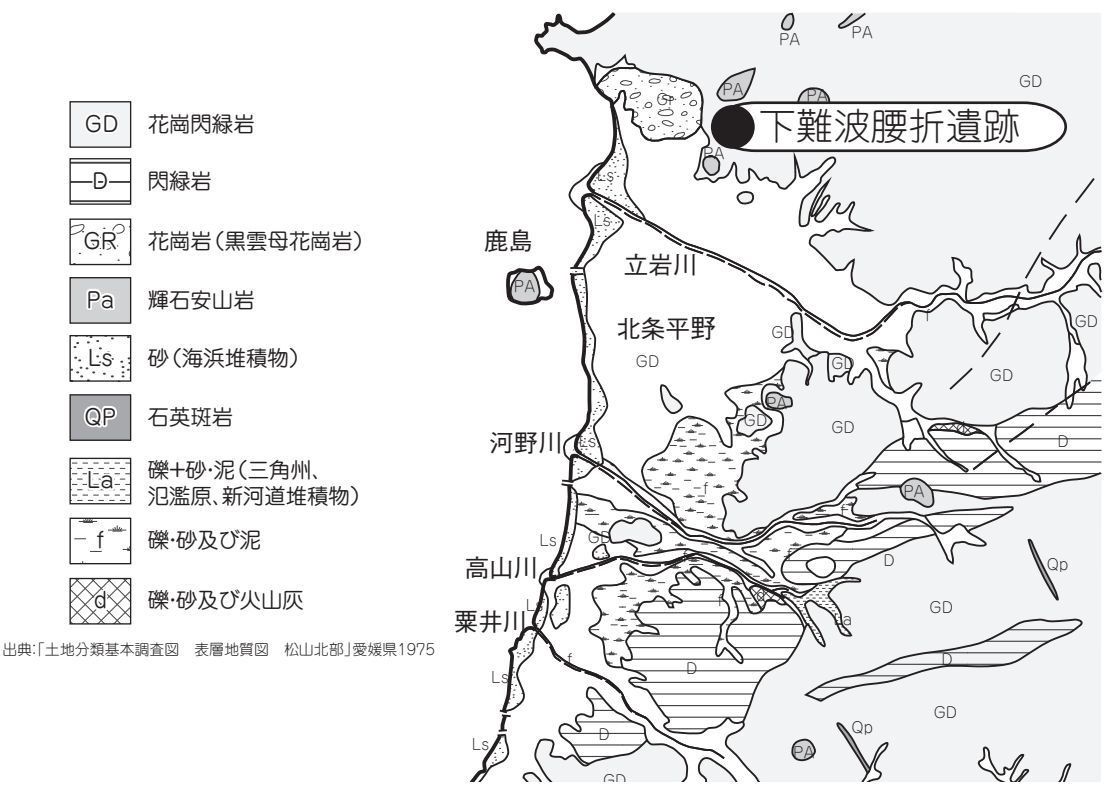
〔令和４年度　整理・刊行組織〕（令和４年４月１日時点）

公益財団法人松山市文化・スポーツ振興財団	理事長	本田　元広
事務局	局　長	片山　雅央
	次　長	宇髙　徹二
施設管理部	部　長	宇髙　徹二
埋蔵文化財センター	所長兼考古館館長	梅木　謙一
	主　査	吉岡　和哉
	専門嘱託職員	相原　浩二（整理担当）
	一般嘱託職員	山邊　進也（整理担当）

第３節　遺跡の立地と歴史的環境

１. 地理的環境

北条平野は松山市北部の斎灘に面し、瀬戸内海に突出する高縄半島の西縁部に位置する。平野の東には標高 986m の高縄山をはじめとする高縄山系が広がりをみせ、そこから延びる尾根により南は松山平野に北東側は今治平野にと隔たれている。平野内の主要河川には平野の北から、立岩川、河野川、高山川、粟井川が瀬戸内海へと注いでいる。いずれも、海岸に迫った高縄山地に源流があることから河川長は短く、急流な河川となっている。このため、山裾から平野部に形成される扇状地堆積物は大きな礫を多量に含んでいる。この平野の北西の丘陵部には、その山容が特徴的な恵良山と腰折山の二



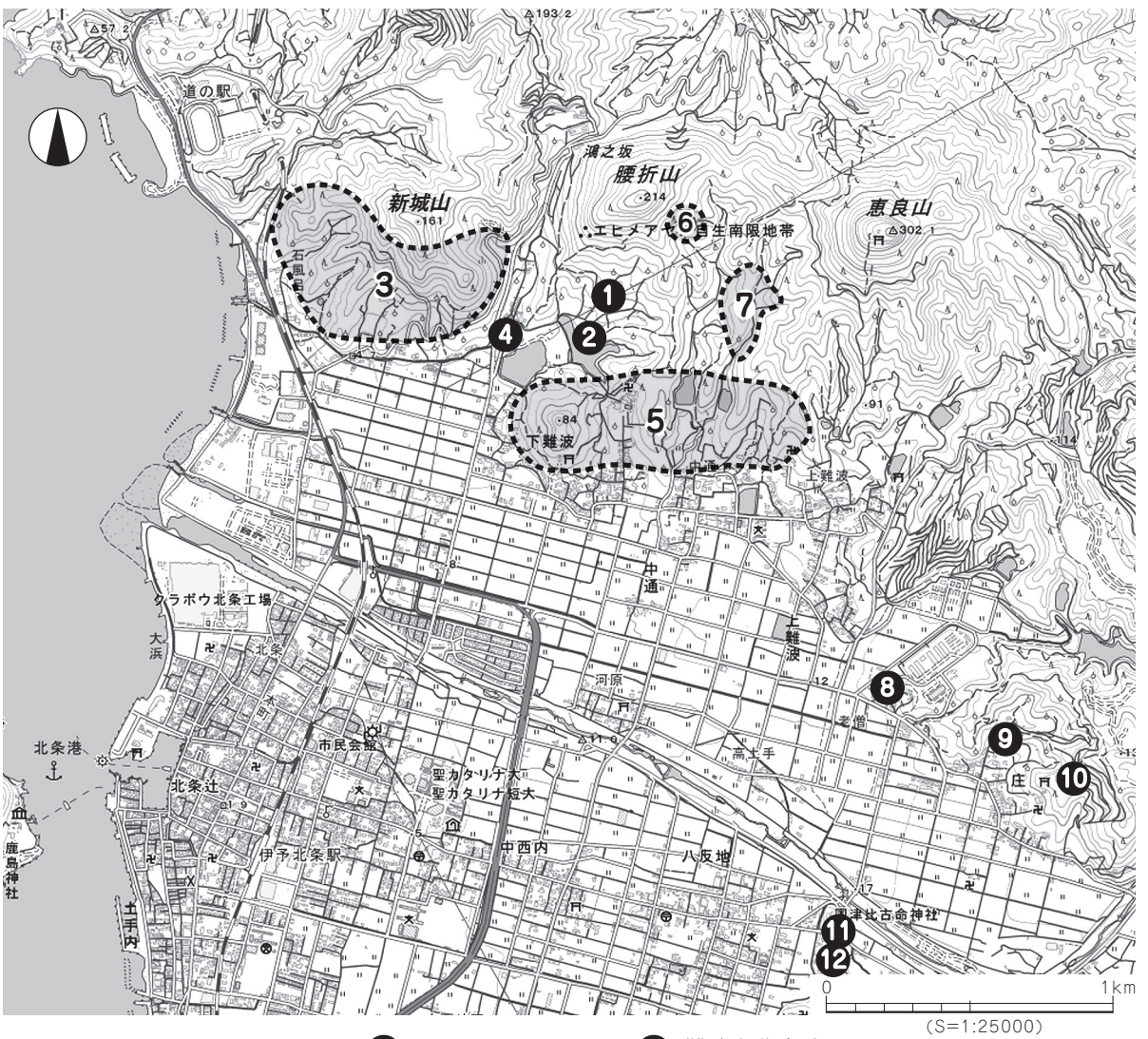
第3図　周辺地質図

山が東西に鎮座する。東側の恵良山は標高 302m、腰折山は標高 214m を測る。調査地はこの腰折山南麓の標高 35m ～ 45m に立地している。高縄山系の地質は領家花崗岩類を主として形成されるが恵良山や腰折山頂部には安山岩が貫入している。腰折山山頂の東側は、安山岩が露頭し急峻な崖地となっている。

2. 歴史的環境

ここでは、主に北条平野の古墳について述べる事とする。北条の古墳は主に北条平野を取り囲む丘陵地に造られるが、その分布は立岩川の右岸（北側）に集中している事も一つの特徴となっている。

前期の古墳は、平野北部の八反地にある櫛玉比売命神社古墳で、主体部は竪穴式石室といわれる全長 75m、4 世紀末の前方後円墳である。この古墳は、立岩川が平野に流れ込むあたりの丘陵部に造営



❶ 下難波腰折遺跡 1 次調査
❷ 下難波腰折遺跡 2 次調査
❸ 新城古墳群
❹ 十八人塚古墳
❺ 下難波古墳群
❻ 腰折山東遺跡
❼ 三島ヶ谷遺跡
❽ 上難波南古墳群
❾ 難波奥谷古墳
❿ 西ケ谷山古墳群・西ケ谷遺跡
⓫ 国津比古命神社古墳
⓬ 櫛玉比売命神社古墳

第4図　調査地周辺の主な遺跡

されている。この丘陵の先端には国津比古神社があり、この神社の鎮座する部分にも全長 50m 程度の前方後円墳があったと言われている。

中期の古墳は、確認されたものも少ない。上難波南古墳群中の第 10 号古墳が竪穴式石室で中期後半とされている。

後期では、数多くの古墳が分布するようになる。古墳の形態は主として円墳で、主体部は横穴式石室である。これまでの観察では、立岩川以北の古墳の主体部はそのほとんどが巨石を使用した横穴式石室であるが、立岩川以南では横穴式石室で最も古いものは、片山丘陵上に立地していた龍徳寺山 1 号古墳で 5 世紀末～ 6 世紀初頭である。6 世紀後半になると立岩川の北にある恵良山、腰折山、新城山を中心とした丘陵地帯にこの北条地区では最大の古墳群を形成している。新城山の新城古墳群から上流に向かって下難波古墳群、上難波古墳群、上難波南古墳群、奥谷古墳群などがあり、これらの古墳群には大型の石材を使用した横穴式石室が見られる。代表的なものとして県指定史跡の「難波奥谷古墳」がある。墳丘は大半が流失し、墳形や規模は定かではないが直径 15 ～ 20 m程度の古墳時代後期の円墳と推定されている。主体部は北条地区では最大規模の横穴式石室で、全長 10m、玄室長 5m、玄室幅 1.8 ～ 1.9m、天井高 2m、羨道部長 5m、幅 1.1m を測る両袖式の石室である。

この奥谷古墳群の北側には上難波南古墳群がある。昭和 57（1982）年愛媛県農業試験場建設用地造成に伴う発掘調査では、古墳 13 基、土坑墓、竪穴建物跡や掘立柱建物跡などが検出されている。古墳の主体部は横穴式石室、竪穴石室、箱式石棺、木棺直葬の土坑墓など様々となっている。いずれも開発行為による破壊の程度が著しいため墳形・墳丘規模・主体部の形態など不明な部分が多い。遺物は須恵器に、提瓶・坏・広口壺・短頸壺・長頸壺、鉄器には、大刀・刀子・鋤鍬先・鎌・斧・轡・鏃、装身具には耳環・ガラス玉・管玉・土玉などが出土している。

上難波古墳群、下難波古墳群にも十数基の古墳の存在は知られるがその大半は開墾などにより消滅しているものと見られている。本格的な調査もなく詳細不明の古墳群である。

海岸に近い新城古墳群は、新城山より南北にのびる丘陵上に所在する古墳群で、壊れているものや開口し石室の様子がわかるものが 13 基程度確認されている。本格的な調査は行われていないため全容不明ながら、箱式石棺や石室全長が 10m を超えるものや、大型の石材を使用した横穴石室などを主体部とする古墳で形成されており、中には石棚をもつものが含まれている。

十八人塚古墳は新城古墳群と下難波古墳群の間に所在する。弘法大師の逸話を残す鎌大師の境内にあり松山市指定の史跡となっている。規模、墳形は不明ながら墳丘と天井石を残す。主体部は南西方向に開口する横穴式石室で現存規模は玄室長 4.4m、幅 2.0m、高さ 1.5m を測る。本来の玄室床面は、現在の地表面より 40 ～ 50㎝下になるものと考えられる。現在、玄室内には鎌倉末期と伝わる石仏や塚が祀られている。

文　献

1979『北条市龍徳寺山 1 号古墳発掘調査報告書』愛媛県北条市教育委員会

1990『小山田Ⅱ遺跡　小山田支群―サンセットヒルズカントリークラブ鹿島建設に伴う発掘調査報告書―』
（財）愛媛県埋蔵文化財調査センター

阪本安光ほか 1982『北条市上難波南古墳群調査報告書』愛媛県教育委員会

長井数秋 1992『奥ノ谷山・西ヶ谷山遺跡群』愛媛県北条市教育委員会

常盤　茂　1998「北条平野の横穴式石室」『遺跡』第 36 号　遺跡発行会

第Ⅱ章　調査の概要

第１節　調査の経緯

調査は、遺構･遺物が確認された２箇所を令和元年度と２年度の２ヶ年に分けて実施することなり、遺跡名も令和元年度調査を下難波腰折遺跡１次、２年度調査を２次調査とした。両調査とも一部は発掘調査国庫補助事業の対象となっているため、調査区をＡ区とＢ区の二つに分け、Ｂ区を国庫補助対象地にしている。今回の調査で見つかった古墳については名称を「腰折古墳」とし調査着手順に１号、２号・・と番号を配した。

１次調査は、令和元（2019）年 10 月 15 日～令和２（2020）年１月 31 日の３ヶ月半の間に行った。１次調査で見つかった主な遺構は横穴式石室を主体部とする古墳３基（腰折１～３号墳）、石室形態不明の小さな主体部の古墳１基（腰折４号墳）を確認した。いずれの古墳もかなり破壊されて天井石を伴うものは無い。墳丘も開墾などにより削平されているため全容がわかるものは無い。遺物は須恵器、土師器のほか、各種の鉄器類、耳環などの金銅製品や玉類などが出土している。調査終了時にはドローンによる空中写真撮影も実施した。なお、現地説明会は令和２年１月 25 日（土）に一般の見学者を対象として開催し、たくさんの参加を頂いた。

２次調査は令和２（2020）年 10 月 15 日～同年 12 月 25 日の２ヶ月半の間に行った。横穴式石室を主体部とする古墳１基（腰折５号墳）、石室形態不明の小さな主体部の古墳２基（腰折６・７号墳）のほか、祭祀跡とみられる性格不明遺構１基（SX1）などを確認した。いずれの古墳も１次調査地と同様に天井石を伴うものは無い。墳丘も開墾などにより削平されいてるため全容がわかるものは無い。遺物は須恵器、土師器のほか、各種の鉄器類、耳環などの金銅製品や玉類などが出土している。このうち５号墳からは石室内より子持ち高坏２点のほか、鉄器や玉類が多く出土している。２次調査も調査終了時にはドローンによる空中写真撮影も実施した。現地説明会は、コロナの影響もあり一般の参加は見送り、契約者と調査関係者に限って行った。

第２節　整理作業

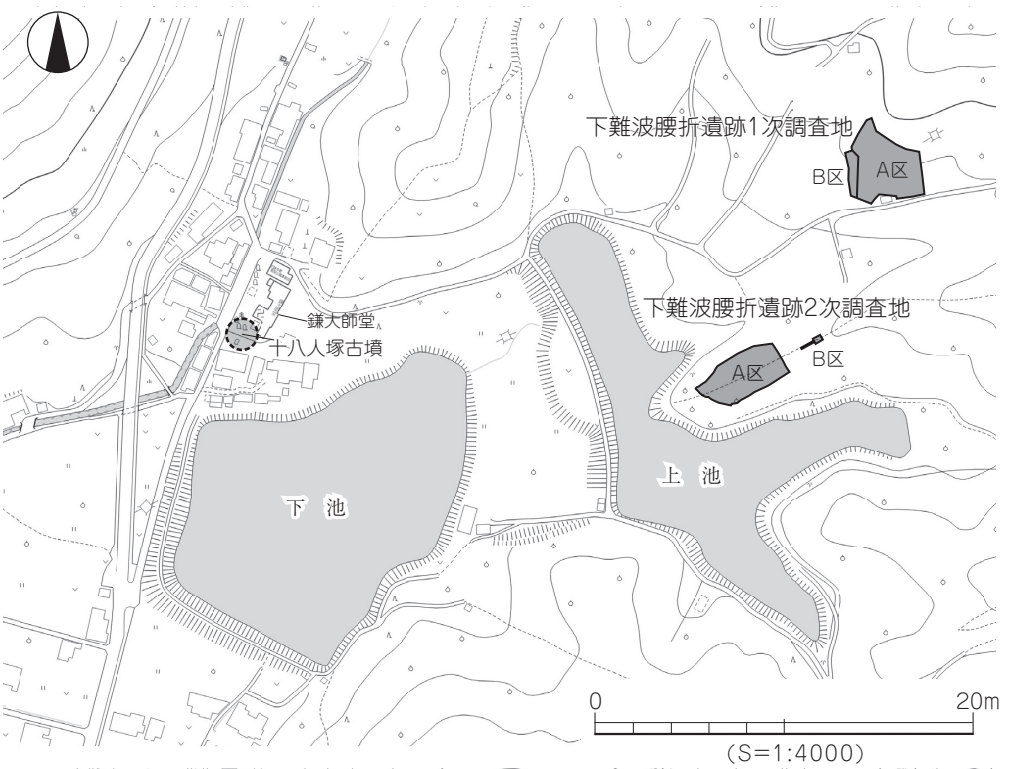
報告書刊行のための整理作業は令和３年度と４年度に実施した。

１.令和３年度

令和３（2021）年４月、公益財団法人松山市文化･スポーツ振興財団埋蔵文化財センター（以下、「埋文センター」という。）と愛媛県中予地方局（以下、「契約者」という。）との間で、平成 31 年度から令和２年度にかけて実施した下難波地区農地整備工事に伴う埋蔵文化財発掘調査〔遺跡名：下難波腰折遺跡１次 ･2 次調査〕に関する文化財整理業務について協議が行われた。その結果、令和３年度中に遺物の復元・遺物実測・遺構図作成・トレース・図版作成業務を実施することになった。埋文センターと契約者との間で協議を重ねた結果、令和３（2021）年５月 28 日付けで業務委託契約を締結した。

（１）業務の経緯

整理業務は事前に作成した工程表に基づき、令和３年７月１日から令和４年２月 22 日までの間に



第５図　調査区位置図

実施した。以下、作業工程を略記する。なお、本業務は調査担当者と整理員４名が担当した。

令和３年

７月 1日（木）　整理作業員による出土遺物の洗浄作業に入る。それに伴い担当者が遺物を選別し、実測作業の準備を行う。7 月 12 日（月）に終了する。

７月13日（火）　担当者による出土遺物の復元作業に着手。８月２日（月）に終了する。

８月 3日（火）　発掘現場での原図を元に図面作成作業を始める。

９月14日（火）　出土遺物の実測作業に着手。11 月末までの作業となる。

12 月 1日（水）　遺構図作成業務に入る。

令和４年

１月 4日（火）　遺物実測図､及び､遺構図のトレース作業に着手。1 月 27 日（木）までに終了する。

２月 7日（月）　業務実績報告書作成業務に着手し、2 月 22 日（火）に終了する。

（２）業務の内容

(a) 整理作業準備・洗浄作業

本業務を実施するにあたり、作業工程を協議し、その後具体的な作業内容を検討する。まず発掘してきた遺物（主に土器、埴輪）を洗浄乾燥し、遺構ごとに整理し選別の準備をする。7 月 1 日から開始し、7 月 5 日に終了する。作業に要した期間は３日間である。

(b) 出土遺物選別・計測作業

出土遺物の選別・計測作業は、洗浄した遺物の乾燥後に遺構ごとに天箱に収納し、出土場所がわかるように注記する。7 月 6 日から開始し、7 月 12 日に終了する。作業に要した期間は４日間である。

(c) 出土遺物の復元作業

鉄器類や装飾品についても同様の処置を施す。遺構ごとに選別した土器のうち、復元可能な土器の復元作業を行う。復元遺物は 28 点である。7 月 13 日から開始し、8 月 2 日に終了する。作業に要した期間は 11 日間である。

(d) 図面作成業務

報告書に掲載する図面作成のため、担当者の指示のもとに整理員が原図を作成する。原図は現場調査で記録した図面を浄書したもので、調査地の全体図をはじめ各遺構の測量図や土層図などであり、方眼紙を用いて作成する。8 月 3 日から開始し、9 月 3 日に終了する。作業に要した期間は 22 日間である。

(e) 遺物実測業務

出土品の実測（測量）は専用の器具（真弧、キャリパー、コンパス、ディバイダー等）を使用し、方眼紙上に等倍サイズで土器や鉄器の作図を行う。必要に応じて一部の調整や文様を拓本で図化した。9 月 14 日から開始し、11 月 30 日に終了する。実測作業に要した期間は約 2 ヶ月半である。

(f) 遺構図作成業務

作成した原図を各遺構ごとに報告書に使用するための合成作業を行う。12 月 1 日から開始し、12 月 27 日に終了する。作業に要した期間は 17 日間である。

(g) 遺構図・遺物トレース、図版作成

遺物実測や図面作成の作業により完成した図面類をスキャナーを使用してパソコンに取り込み、描画ソフトを使用してデジタルトレース作業を行う。1 月 4 日から開始し、1 月 27 日に終了する。デジタルトレース作業に要した期間は 15 日間である。

(h) 実績報告書作成

2 月 7 日（月）整理作業の業務工種をまとめた業務実績報告書の作成に着手し、2 月 22 日（火）に終了する。

2. 令和 4 年度

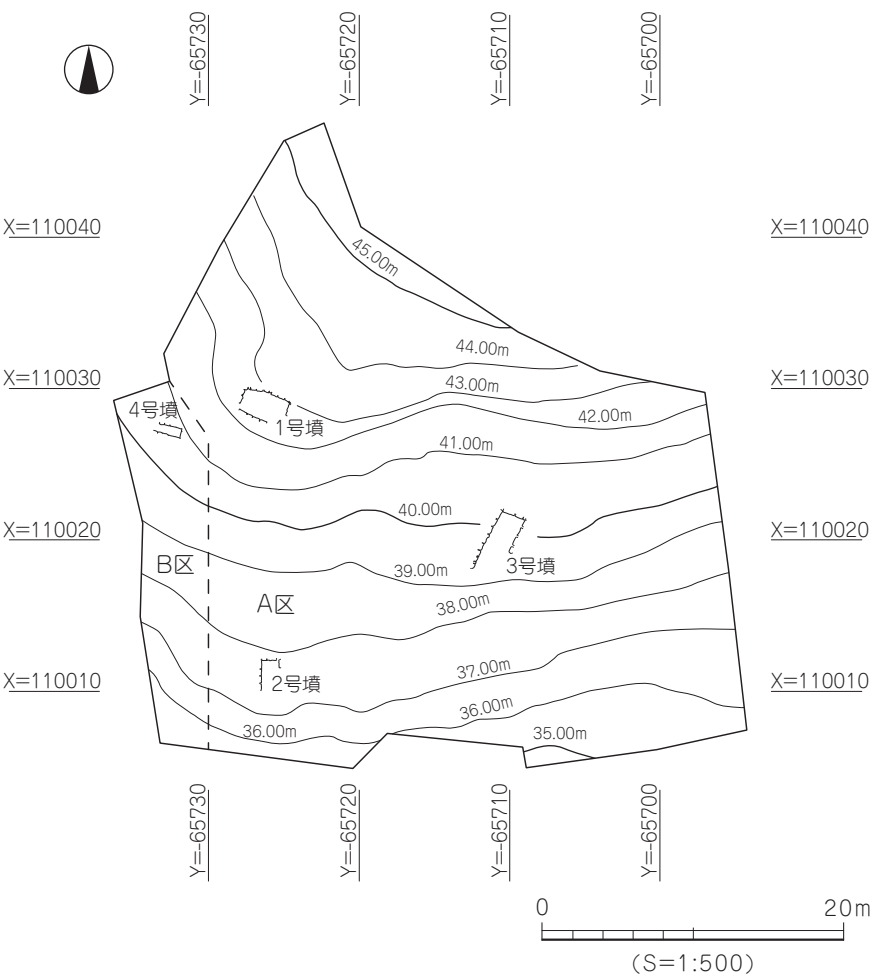
4 年度は、報告書刊行のための遺物写真撮影、原稿執筆、版下・台割の作成、編集作業などを行い報告書を刊行するための作業を実施した。刊行後は、全国の図書館や博物館などの関係機関へ報告書の送付を行う。

第Ⅲ章　下難波腰折遺跡１次調査

第１節　調査区と検出遺構

調査地は腰折山南麓の尾根上標高 34 ～ 46m に位置する。北方向から南に下る緩やかな斜面地で、西方～南西方向にかけて開ける。調査地の西側には小さな谷が南北に走り、それに並行して尾根筋が通っている。その尾根上に古墳が立地している。調査地からの眺望は良好で瀬戸内に浮かぶ島のうち鹿島、忽那島、中島、由利島のほか、山口県の水無瀬島まで望むことができる。また、陽当たりは抜群で冬場の調査ではあったが、季節風である冬の北西風の影響を受けることが少ないまま調査を終了する事ができた。

調査地の地番は松山市下難波乙 114 番 2、乙 114 番 21、乙 115 番 2 の各一部で、調査面積は 2,323 ㎡である。調査は調査費用の都合上、A 区と B 区に分けて行った。B 区は国庫補助対象地である。A 区で見つかった主な遺構は古墳 3 基、B 区で見つかった遺構は古墳 1 基である。見つかった古墳の名称については、それぞれ遺跡名を冠し調査順に腰折 1 号墳、2 号墳、・・とした。



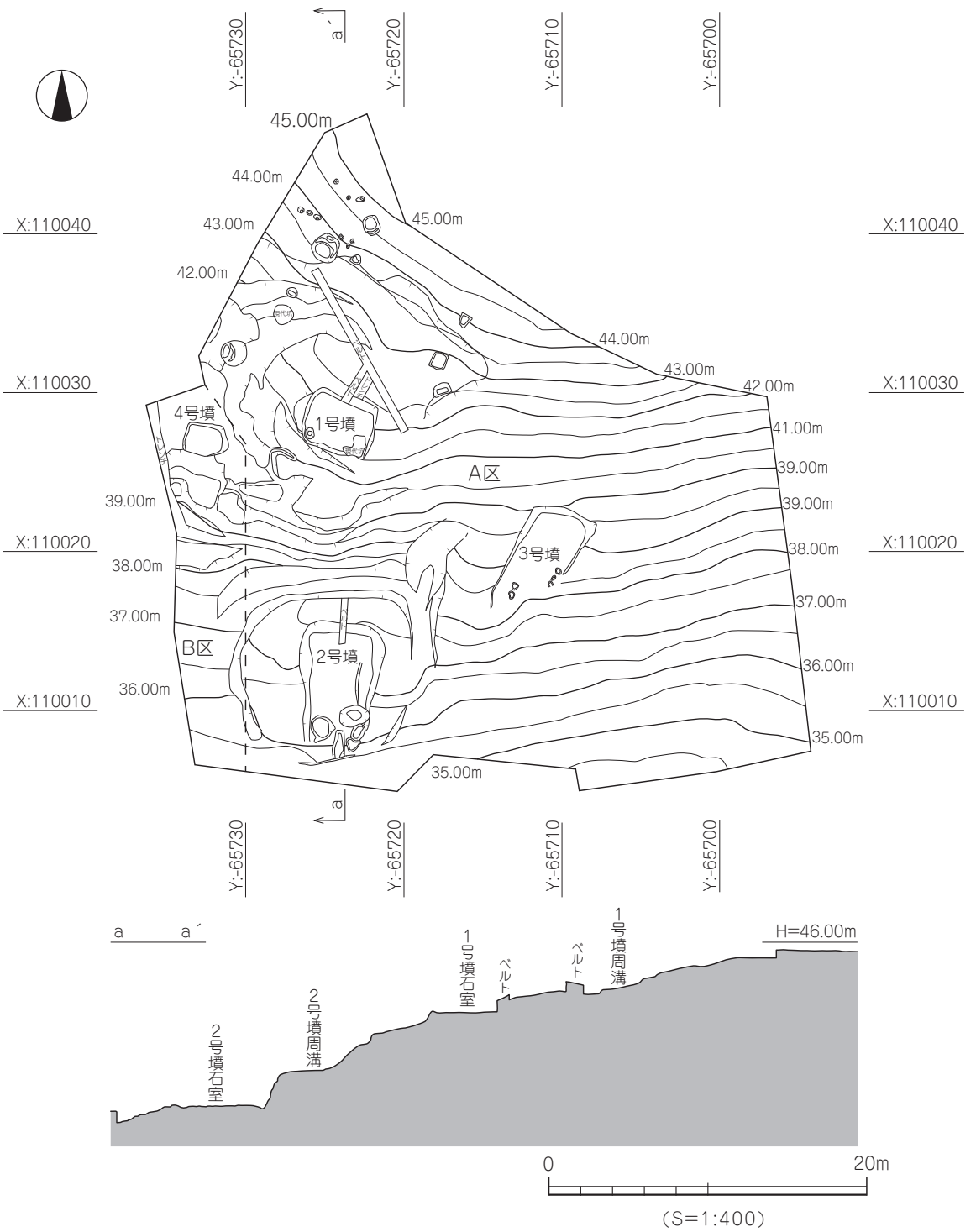
第6図　調査前測量図

第２節　Ａ区の調査

１.腰折１号墳

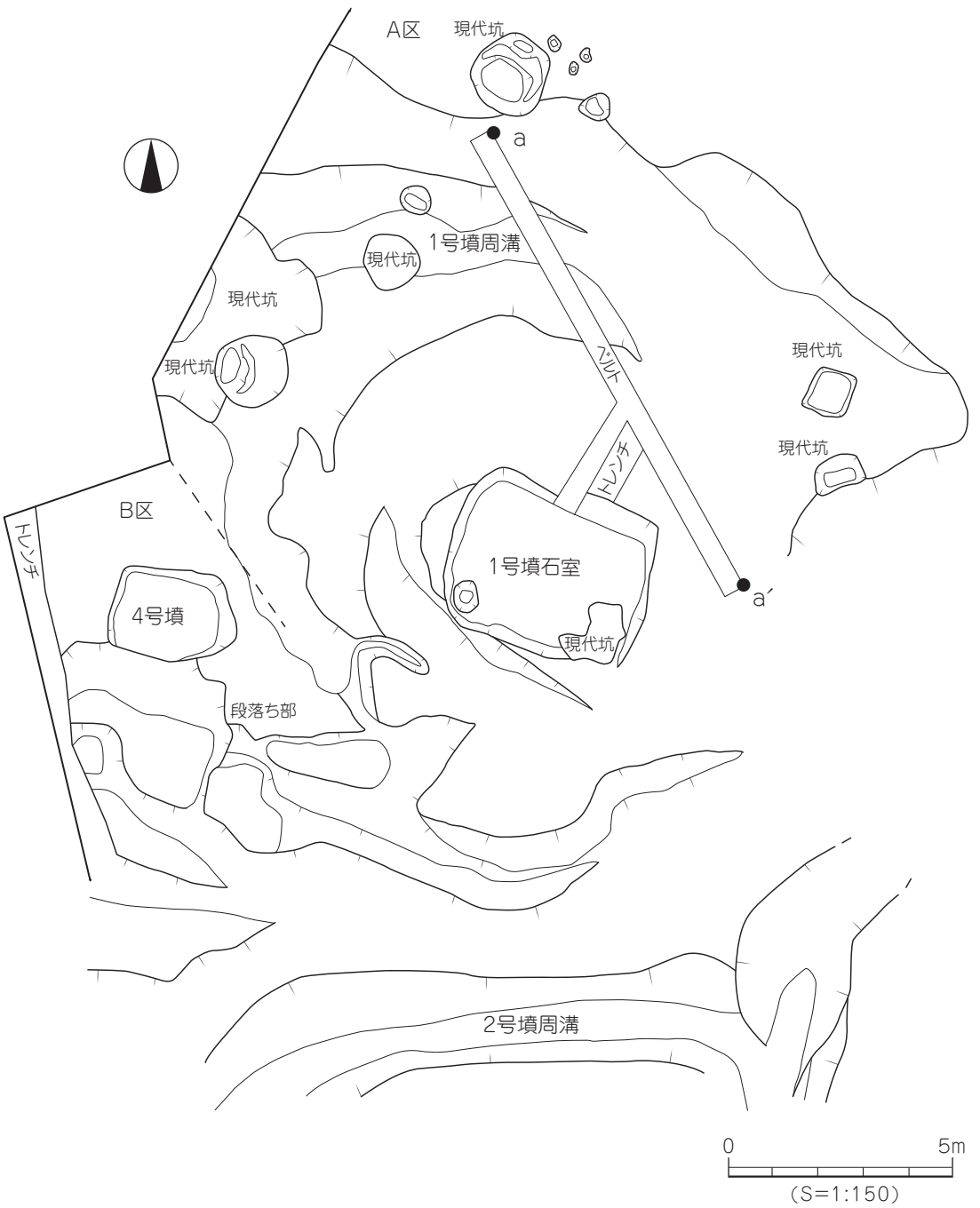
（１）墳丘と墳形（第７～９図）

墳丘の盛土は、開墾等の開発行為によりほとんど失われている。わずかに、表土掘削時に石室北側

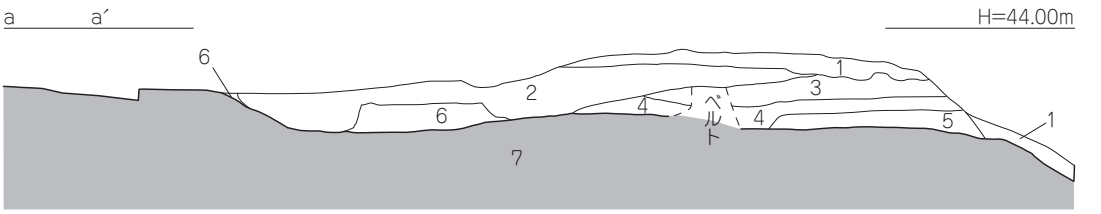


第7図　遺構配置図と調査地エレベーション図

に設定したベルト土層の一部で幅 3.0m、層厚 0.50m ～ 0.80m の盛土と思われる堆積土を確認したのみである。盛土は地山直上に構築され、細かな版築状の互層が確認できる。このことは古墳の築造に伴い、地山整形が行われているものと考えられる。石室の中央部から６ｍの北西部（山側）には外部施設として周溝を検出している。東側や南側（谷側）では検出していない。周溝は、山側の尾根筋に直行するように掘られている。南側は元々の地形が急な傾斜となっていることから、掘削されていないものと考えられる。西側については、4 号墳や現代の開発行為などにより明確に検出していない。1 号墳の規模や形状は、検出した周溝の形状などから、周溝を含めた直径 14 ｍ前後の円墳と考えられる。



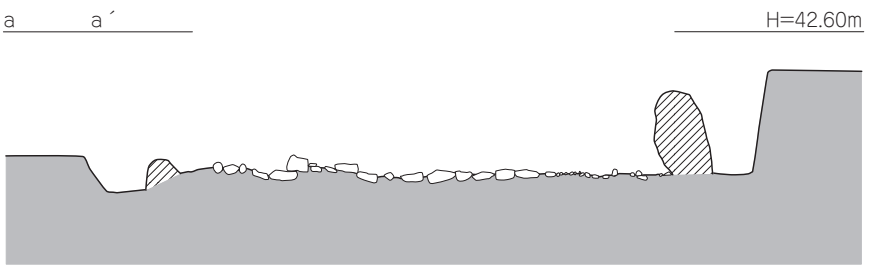
第8図　腰折1号墳完掘図

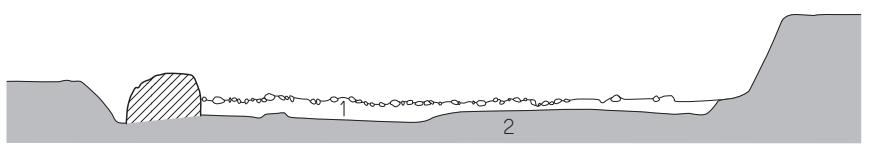


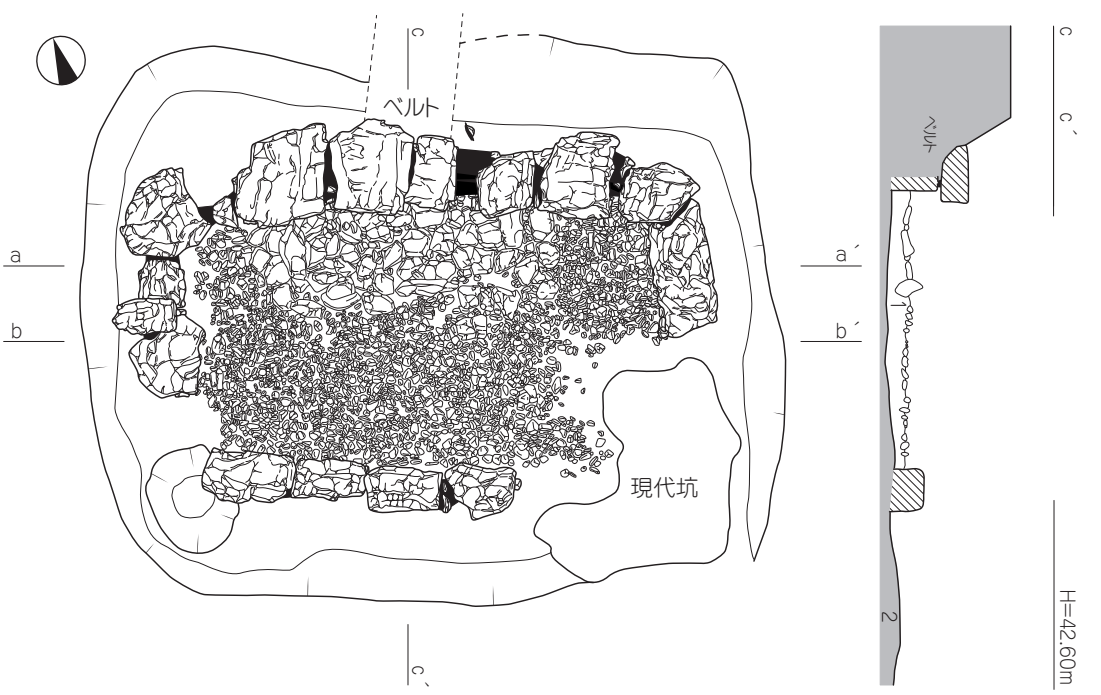
1　灰黄色土2.5Y 7/2（表土）
2　浅黄色土2.5Y 7/4（現代層）
3　淡黄色土2.5Y 8/3に灰白色砂質土5Y 8/2が混じる（盛土）
4　淡黄色土2.5Y 8/3（盛土）
5　灰白色砂質土5Y 8/2に淡黄色土2.5Y8/1が混じる（盛土）
6　浅黄色土5Y 8/4（周溝埋土）
7　黄色土5Y 8/8（地山）

0　5m
（S=1:150）

第9図　腰折1号墳ベルト土層図







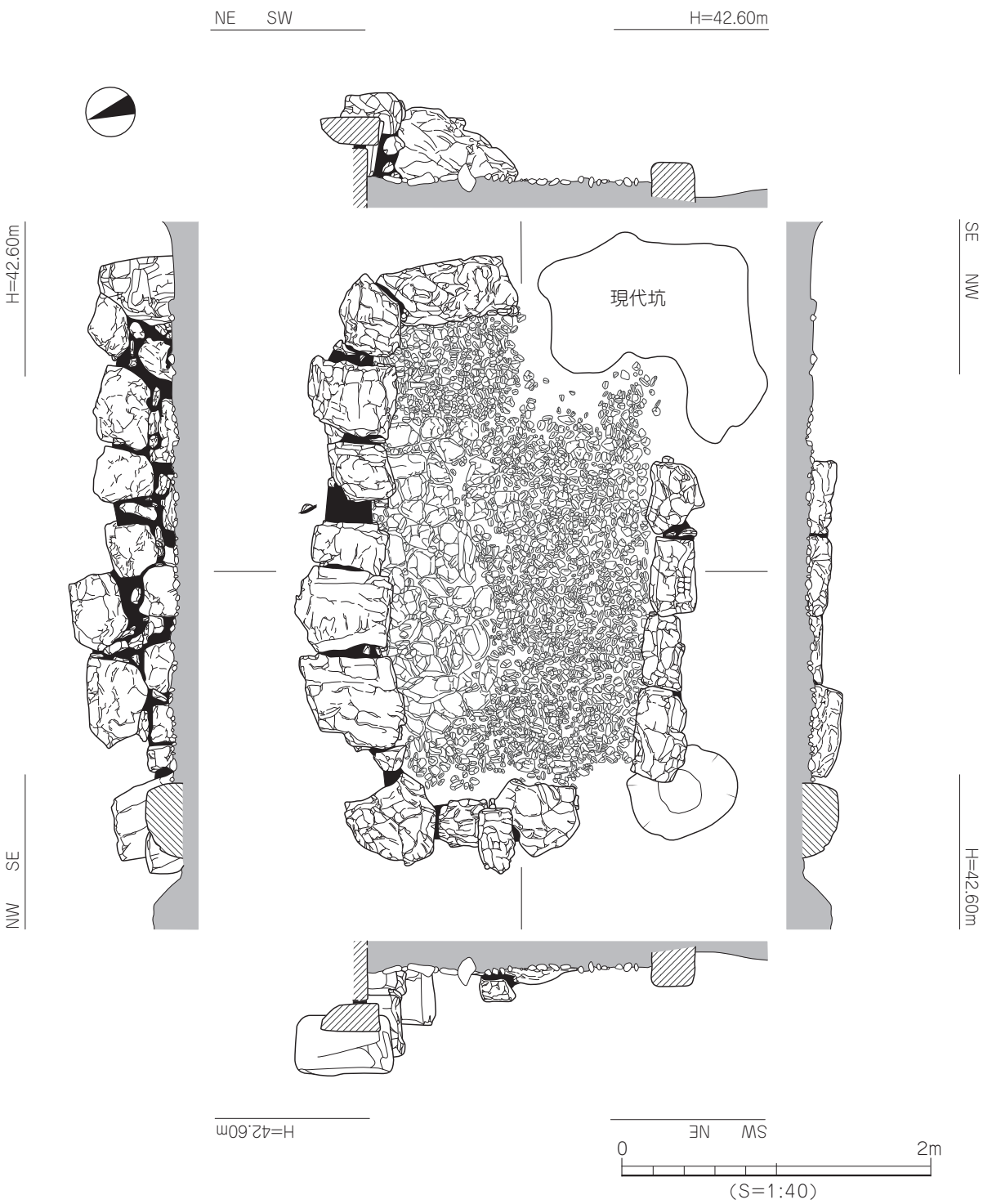
1 淡黄色土2.5Y 8/4（貼床）
2 黄色土5Y 8/8（地山）

0　2m
（S=1:50）

第10図　腰折1号墳石室・墓坑測量図

（２）墓坑（第 10 図）

墓坑は地山面での検出である。尾根線上に直交して東西方向に掘られ、南側はひどく削平されている。平面形は隅丸長方形である。検出規模は長軸（東西）4.50 m、短軸（南北）3.20 ～ 3.50 m、深さ 0.25 ～ 0.65m を測る。



第11図　腰折1号墳石室測量図

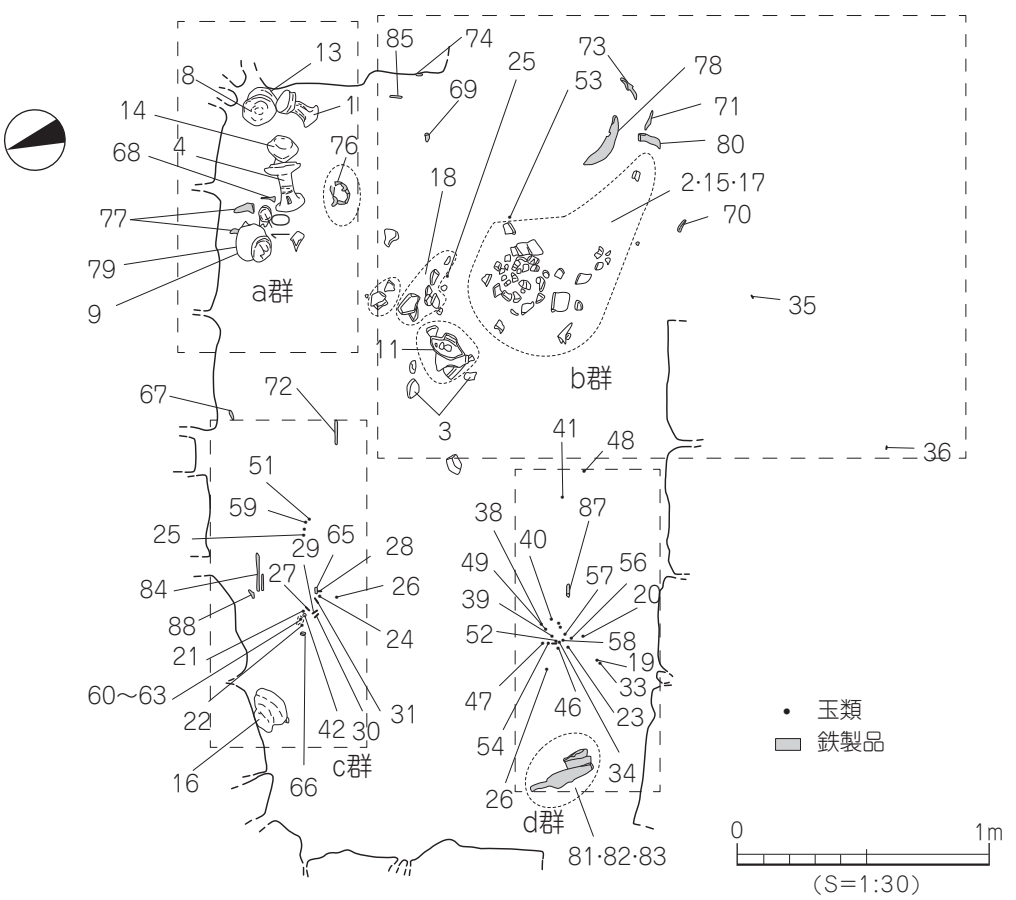
（3）石室（第 10・11 図）

石室は西側に開口する横穴式石室である。主軸方位はＥ 20° Ｓである。天井石は石室内への落下も無く、すべて失われている。壁体は北側の側壁が 2 段程度を残すが、奥壁は北側の基底石 1 石を残すのみで、石室東南部では、奥壁や側壁の基底石も失われている。南側の側壁は 4 個の基底石を残すのみである。壁体の使用石材の大きさに見る特徴は奥壁に大形の石を配し、側壁の基底石は上部の石材より小ぶりな石を使用している。玄門部もひどく壊され詳細は不明であるが、袖部の形態は玄門北側に袖石が見られ南側の袖石は失われているが、床面状況などから両袖の石室と考えられる。袖石の間には塊石による框が石を残す。羨道部や前庭部などの施設の様相は不明である。壁体の石材は主に安山岩が使用されている。

玄室規模は長さ 3.10 m、幅 1.40 ～ 1.80 m、残高 0.50 m を測る。床面は直径 2.0 ～ 9.0cm の玉石を貼床（厚さ 8.0 ～ 14.0cm）上に敷き詰めて礫床とするほか、北側中央部の側壁沿いの長さ 2.05m、幅 0.60 ～ 0.70m の間に、直径 9.0 ～ 18.0cm、厚さ 2.0 ～ 3.0cm の花崗岩や安山岩のやや扁平な割石を敷き区画部を設け屍床としている。区画部の西側には長さ 35.0cm、幅 15.0cm を測る枕石が据えられている。

（4）石室内外の遺物出土状況（第 12 図）

遺物は須恵器、鉄器、装身具がある。土師器は 1 点も出土していない。人骨の出土もなく被葬者の配置状況は明確ではない。玄室内で出土した遺物は、その出土位置から大きく分けて a 群～ d 群の 4 群に大別した。a 群は玄室奥壁の北側にあり、須恵器と鉄製品で構成される。b 群は玄室中央部のや



第12図　腰折1号墳出土遺物平面図

や奥側にあり須恵器、管玉、鉄製品で構成される。遺物は、崩落石の影響のため須恵器などが砕けている。b 群の遺物と思われる遺物が玄室外に掻き出されている。c 群は区画された屍床部から出土した遺物で須恵器や装身具、鉄製品で構成される。d 群は c 群の南約 1m の玄門に近い場所にあり、ヒスイ製の勾玉や管玉、ガラス玉の装身具のほか、鉄製品で構成される。

須恵器の器種には蓋坏、高坏、短頸壺、広口壺、瓶、提瓶がある。装身具ではヒスイ製の勾玉１点、碧玉製の平玉１点、琥珀製の平玉１点、碧玉製管玉 12 点、切子玉２点、算盤玉１点、水晶製丸玉１点、ガラス玉 25 点、臼玉２点、耳環２点、鉄器は鉄鏃、鋤先、鎌、鑿、鉄斧、刀子、轡、などが出土している。

（５）出土遺物（第 13 ～ 16 図）

須恵器（1 ～ 18）

1 ～ 3 は無蓋高坏。1 は口縁端部内面に１条の沈線が巡る。文様帯には波状文が施される。脚は細く長い。脚柱は長方形のスカシを１段３方向に施す。脚端は内側で接地する。2 は崩落石により破損したもので細片を復元したものである。脚部は一部しか復元できなかった。口縁部は外反する。口縁端部は丸くおさめる。口縁部と底部との境には段がつく。脚柱は２方向に長方形のスカシが施される。3 は底部と口縁部を分ける稜は短く突出する。脚柱中央に２条の凹線を巡らし、長方形の細長いスカシを１段２方向に施す。

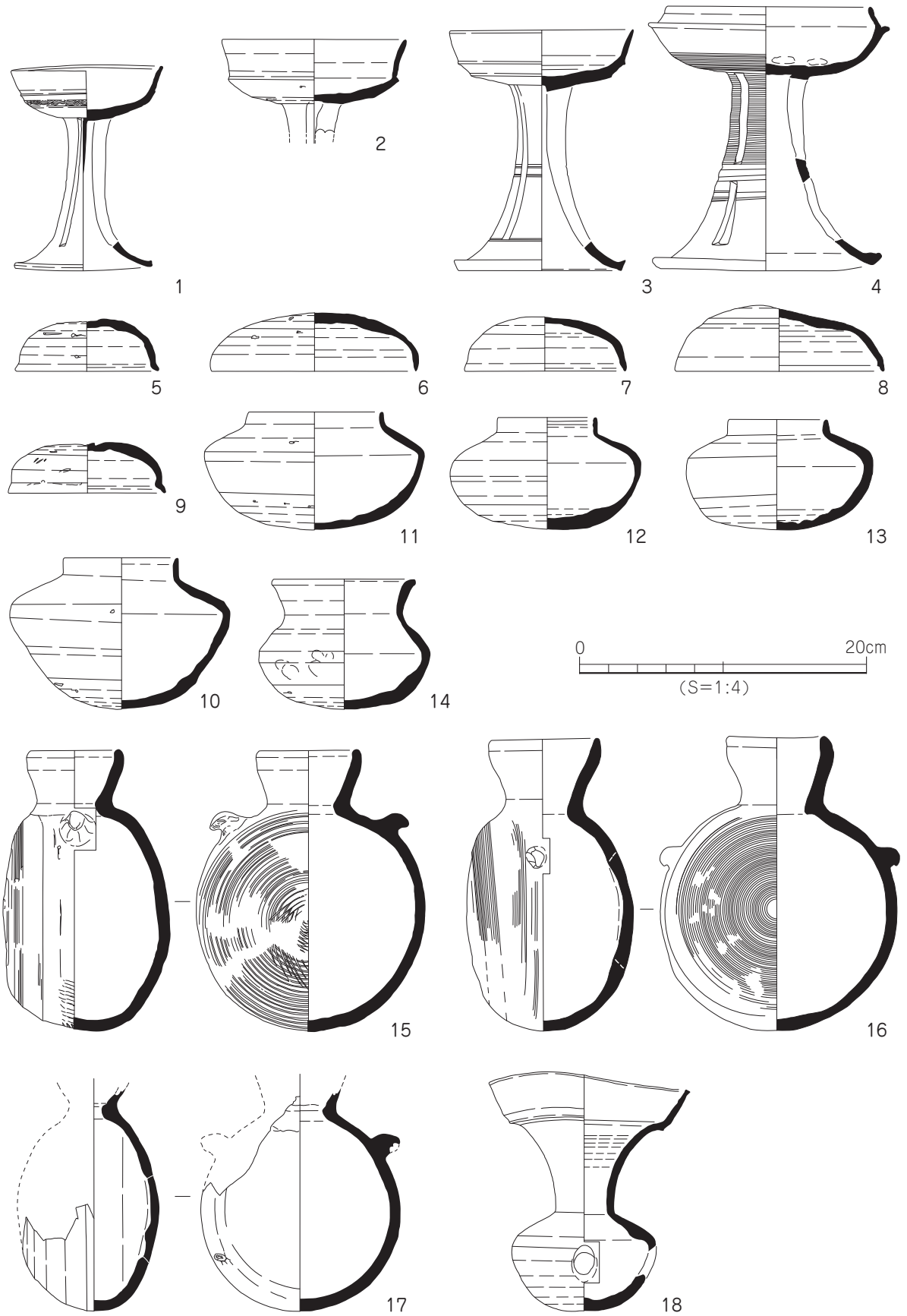
4 は有蓋高坏。口径 14.1cm、器高 18.4cmを測る。たちあがりは内傾し、端部は丸く仕上げる。脚柱中央に２条の凹線を巡らし、上下２段の長方形スカシを３方向に施す。

5 ～ 9 は蓋。短頸壺や有蓋高坏の蓋として使用されたものと考えられる。セット完形がわかるものは 9 と短頸壺 10 である。5 はやや扁平な天井部。口縁端部は外反し内側に内傾する面をもつ。6 はやや扁平な天井部。口縁端部は丸くおさめる。7 の天井部は丸みを帯びる。口縁端部は内側に内傾する面をもつ。8 の天井部は歪む。口縁端部は丸く仕上げ、端部内面には強いナデにより稜が巡る。内面に粘土ひもの巻上げ痕を残す。9 は平坦な天井部。口縁下部は強いナデにより外へ開く。口縁端部は丸くおさめる。有蓋短頸壺 10 とセット関係となる。

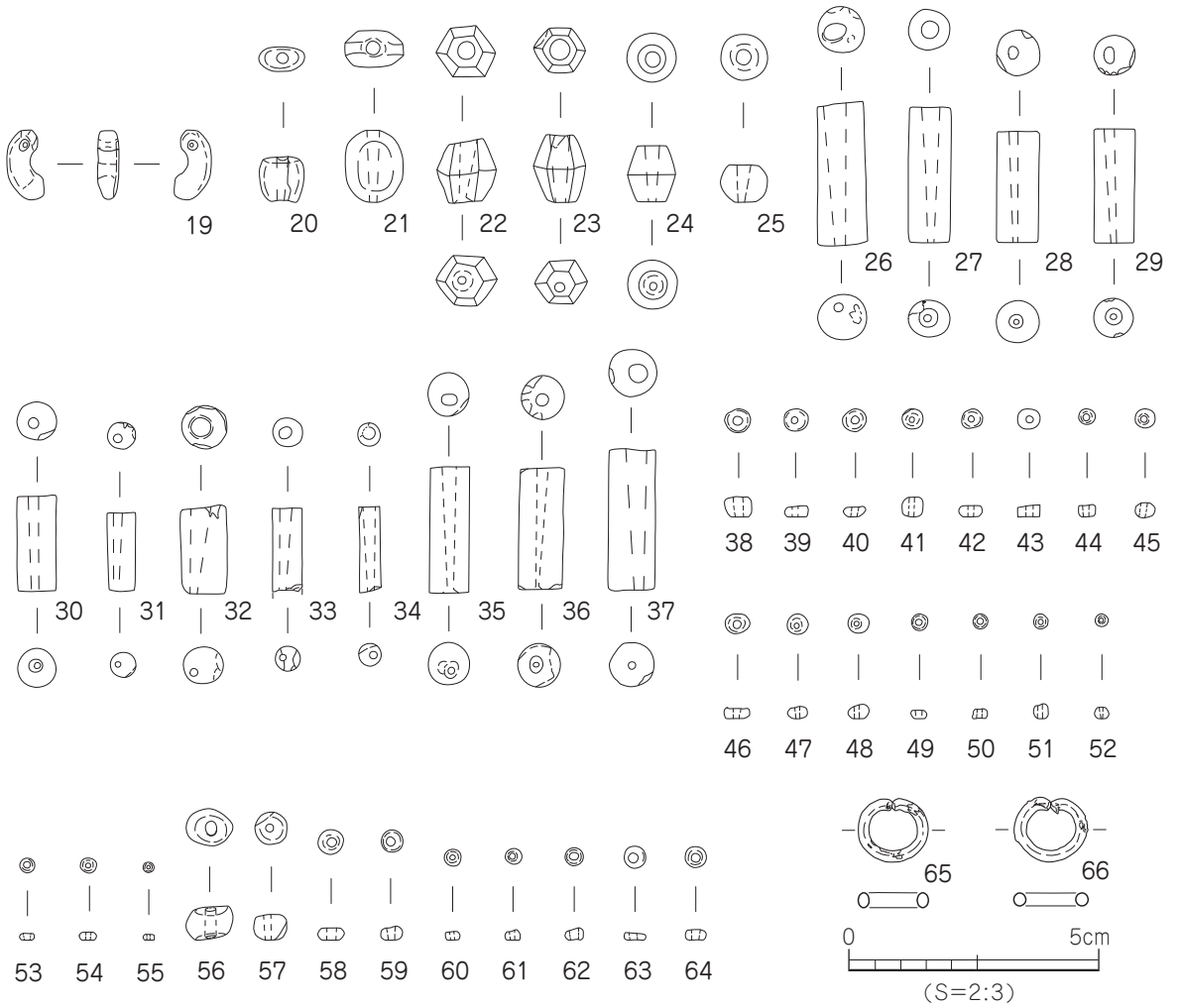
10 ～ 13 は有蓋短頸壺。10 は完存品。口径 8.0cm、器高 10.6cmを測る。体部は算盤形を呈する。肩は張り、口縁部は直立して短くのびる。口縁端部は丸くおさめる。底部内面に粘土ひもの積みあげ痕跡を残す。底部は不安定な丸底である。蓋 9 とセット関係となる。11 は肩の張る体部。口縁部は直立して短くのびる。口縁端部は丸くおさめる。底部は不安定な丸底である。12 の口縁部は直立して短くのびる。口縁端部は丸くおさめ、端部直下内面に沈線が巡る。底部内面に粘土ひもの巻き上げ痕を残す。底部は不安定な丸底である。

14 は広口壺。肩の張りは弱く、頸部は短く直立し、口縁部は外反する。口縁端部は肥厚して丸くおさめる。底部は丸味をもった不安定な平底である。

15 ～ 17 は提瓶。15・16 の口縁部は内湾してたちあがり口縁端部は丸くおさめ漏斗状となる。15 は口径 6.6cm、器高 19.7cm、厚さ 11.5cmを測る。16 は屍床部西側で単独で出土したものである。口径 6.8cm、器高 20.2cmを測る。17 は崩落石により破損したもので細片を復元したものである。口頸部～胴部にかけての一部は復元できていない。体部のふくらみは 15・16 と比べると少ない。体部に施されるカキ目の調整幅も狭くなっている。3 点とも体部の耳は退化して小型になり、先端部の鉤状屈曲は形式化している。



第13図　腰折1号墳出土遺物実測図(1)



第14図　腰折1号墳出土遺物実測図(2)

18 は瓶。頸基部は細く口頸部はラッパ状に開く。口縁部は大きく歪んでいる。頸部と口縁部の境に段をもつ。体部は無文である。底部は丸く不安定。

装身具（19 ～ 66）

19 はヒスイ製の勾玉。色調は淡緑白色を呈する。長さ 1.40㎝、最大の厚さ 0.50㎝、重さ 0.844 g の小型品。

20･21 は平玉。20 は琥珀製で長さ、幅とも 0.90㎝、重さ 0.248g である。21 は碧玉製で長さ 1.40㎝、幅 1.11㎝、重さ 1.894g を測る。

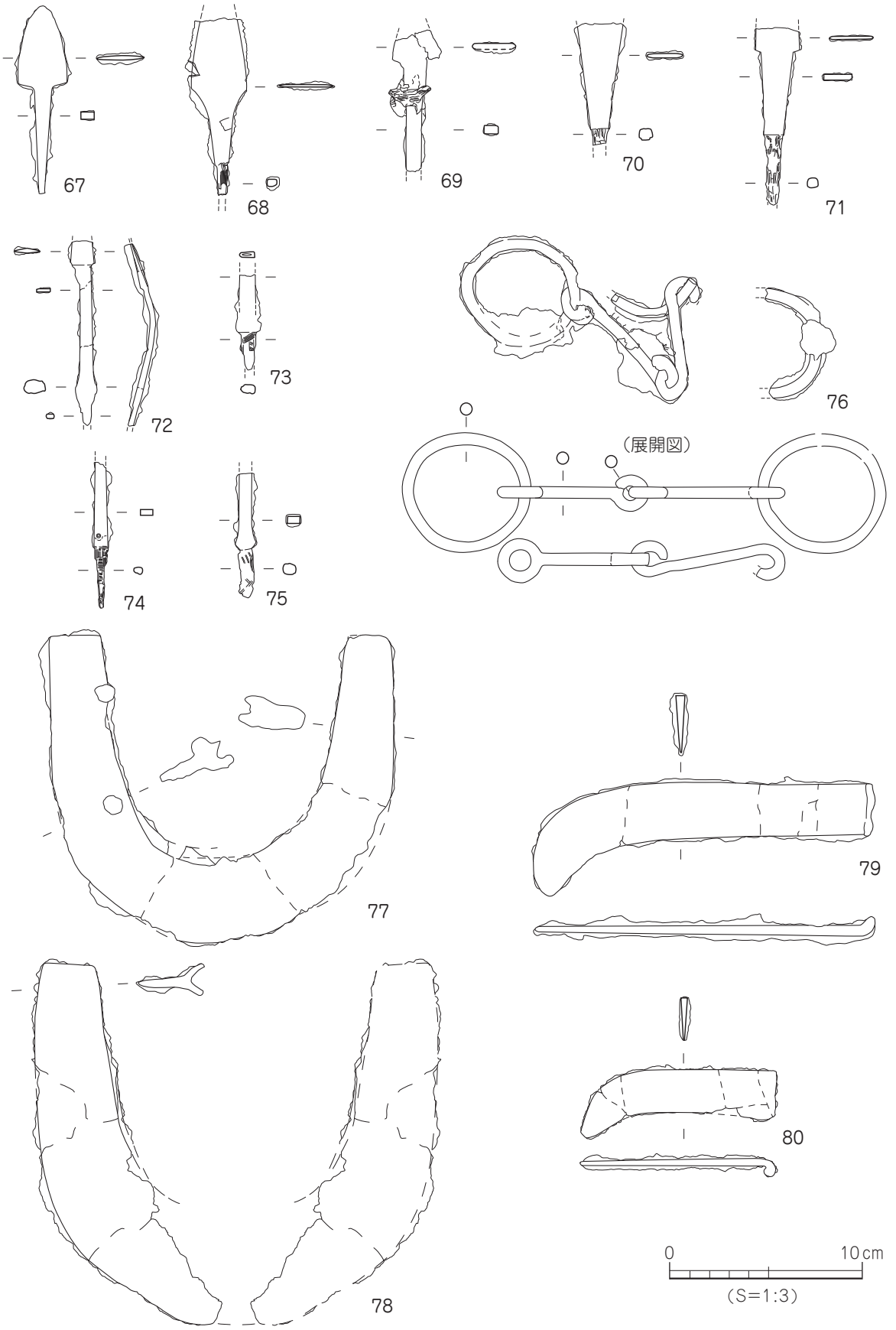
22・23 は切子玉。水晶製。22 は重さ 2.385g、23 は重さ 1.815g を測る。

24 は算盤玉で水晶製。重さ 1.312g を測る。

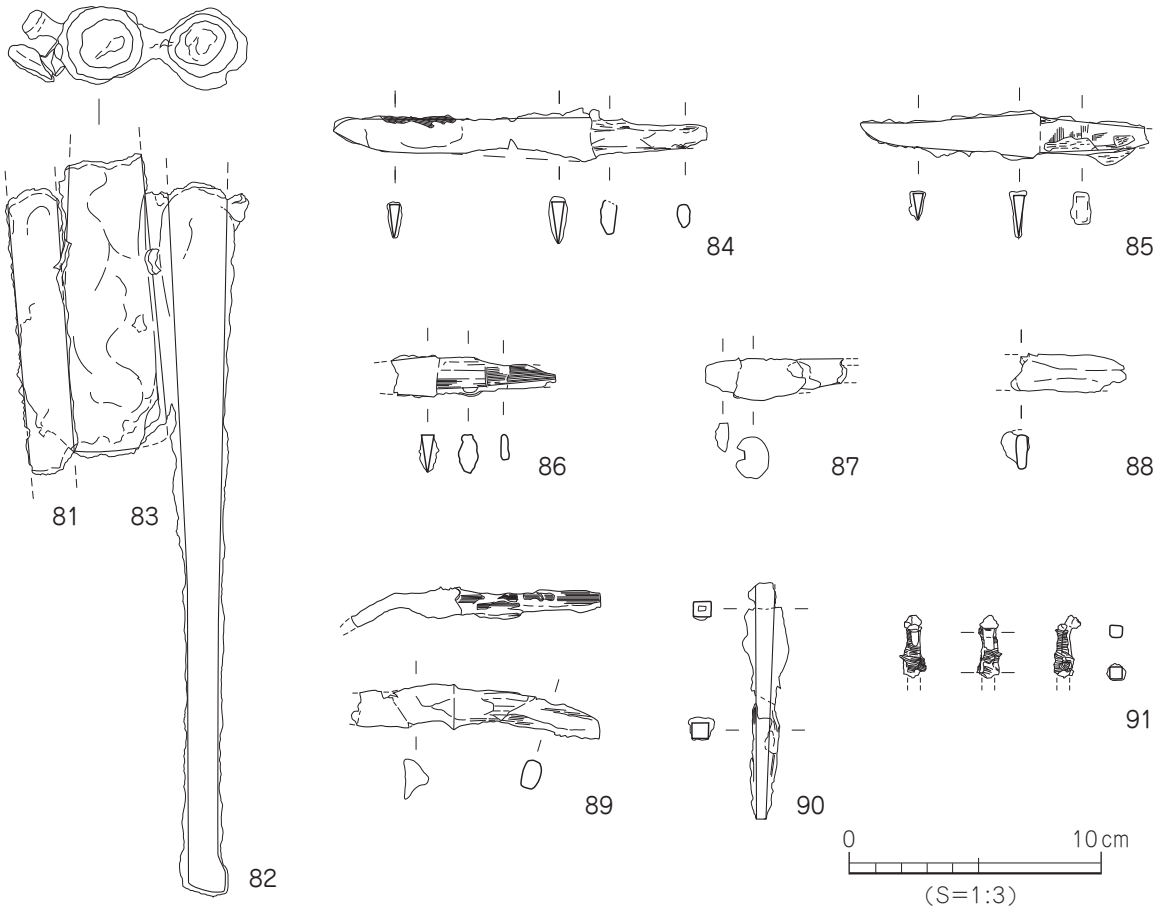
25 は丸玉で水晶製。重さ 1.031g を測る。

26 ～ 37 は碧玉製の管玉。34 は高さ 1.60㎝、上径 0.46㎝を測る。色調は淡灰色を呈する。富山産の碧玉と考えられる。37 は b 群から掻き出されて石室外となった遺物と考えられる。高さ 2.80㎝、上径 0.90㎝を測り、1 号墳出土の管玉で最大級となる。

38 ～ 62 はガラス玉。a 群からの出土は無い。c 群、d 群からの出土である。ガラス玉はいわゆる丸玉や小玉で構成される。色調は淡青色、淡緑色、濃青色の 3 種の色調に大別できる。



第15図　腰折1号墳出土遺物実測図（3）



第16図　腰折1号墳出土遺物実測図(4)

63・64 は臼玉。滑石製である。

65・66 は銅芯銀張りの耳環である。区画された屍床部 c 群での出土である。

鉄製品（67 ～ 87）

67 ～ 75 は鉄鏃である。67 ～ 69 は有茎式長三角形鏃、70・71 は有茎式方頭鏃である。68 ～ 70 は鏃身部が欠失する。72 ～ 75 は頸部から茎にかけての破片である。

76 は轡。素環の鏡板と銜部で引手は付属していない。

77・78 は U 字の鋤鍬先である。

79・80 は鎌。

81 ～ 83 は鉄錆びによって融着している。81 は鎌、82 は袋状鉄斧。83 は鑿である。

84 ～ 88 は刀子。86 ～ 87 は刃部が欠損する。87・88 の柄部は鹿角製、ほかは木柄である。

89 は鉇である。柄部は木柄。

90・91 は釘である。床土の洗浄作業で見つかったもので出土位置は不明。91 は木質が残る。

（７）周溝（第８図）

周溝は石室中央部から北側 5.50m で一部を検出した。検出規模は幅 3.50 ～ 4.50m、深さ 0.20 ～ 0.30m を測る。断面形状は舟底状となる。西側や東側では地山も開墾の影響をうけているためか検出してい

ない。石室南側については、傾斜のきつい斜面地ため周溝は掘削されなかったものと考えられる。

2．腰折２号墳

（１）墳丘と墳形（第 17 図）

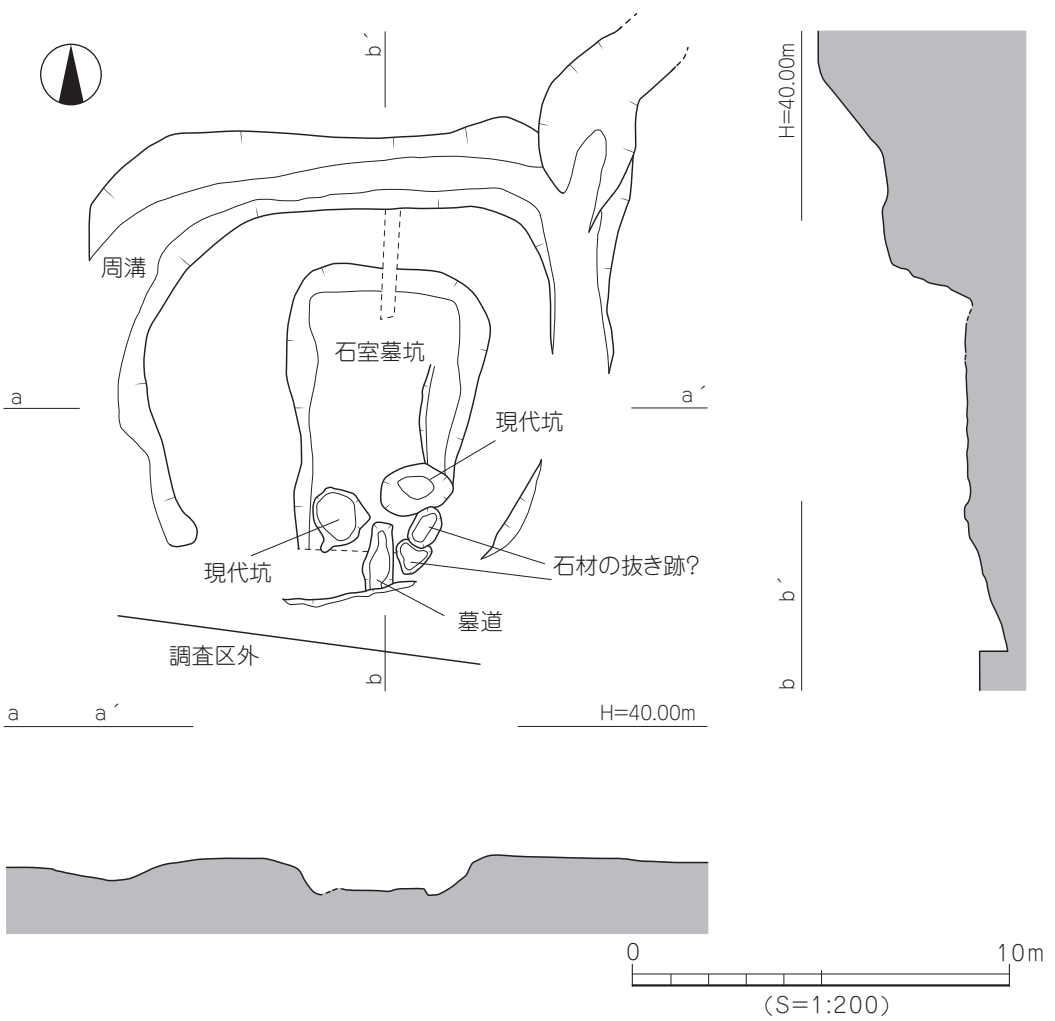
２号墳は、１号墳の南に隣接する。１号墳の石室中央より２号墳の石室中央までの距離は約 17 ｍを測る。１号墳と２号墳の間は急峻な斜面地となり段をもっている。石室北側では、外部施設として周溝を検出しているが、北側（山側）に限られ南側（谷側）では検出していない。墳丘の盛土はほとんど失われ、地山整形についても不明である。２号墳は検出した周溝の形状などから、１辺 12 ｍ前後の方墳と考えられる

（２）墓坑（第 18 図）

墓坑は地山面での検出である。尾根線上に平行して南北方向に掘られる。北側が深く、南側はひどく削平され浅くなっている。平面形は隅丸長方形を呈するが南側が狭くなる。検出規模は長軸（南北）7.50 ｍ、短軸（東西）3.40 ～ 5.20 ｍ、深さ 0.05 ～ 2.14m を測る。

（３）石室（第 18・19 図）

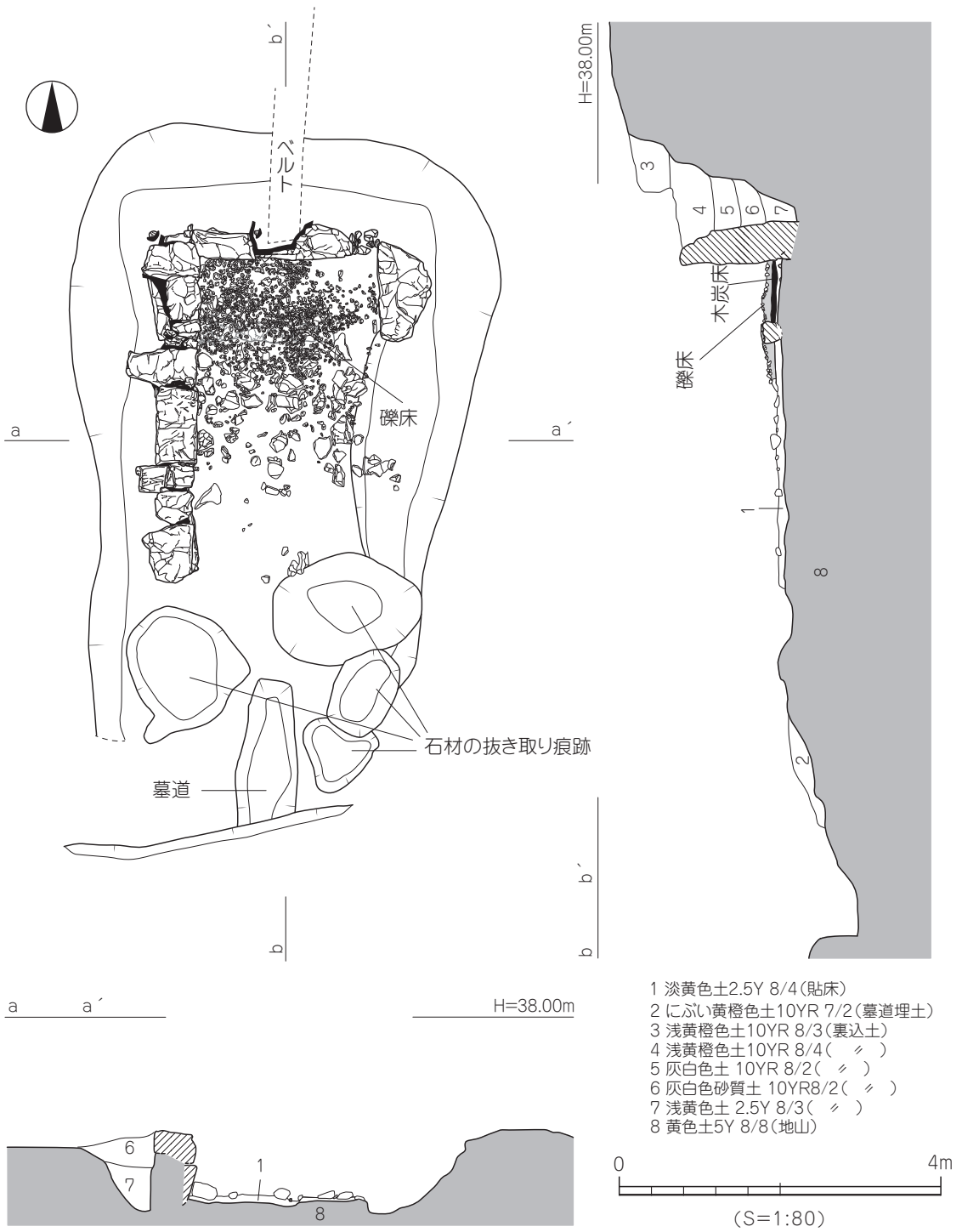
石室は南側に開口する横穴式石室である。主軸方位はＮ 0° である。天井石は石室内への落下も無く、



第17図　腰折2号墳完掘図

すべて失われている。壁体は西側の側壁や奥壁にかけては１段から２段程度を残すのみである。南側から東側にかけてひどく壊され、基底石も多く抜き取られている。袖部の形態は石の抜き跡から両袖と考えられる。羨道部については不明である。このほか、石室の南側で墓道を検出している。

検出規模は現存長 4.13 m、幅 2.24 m、残高 0.94 mを測る。壁体の石材は花崗岩や安山岩などの巨石が使用され、奥壁には板状の巨石を配している。東側から南側にかけては基底石も抜き取られており全容は不明である。床面は厚さ 4.0 ～ 8.0cm の貼床が施されるほか、奥壁沿いには礫床と木炭床二



第18図　腰折2号墳測量図（1）

つの施設を検出した。

（4）礫床（第 18 図）

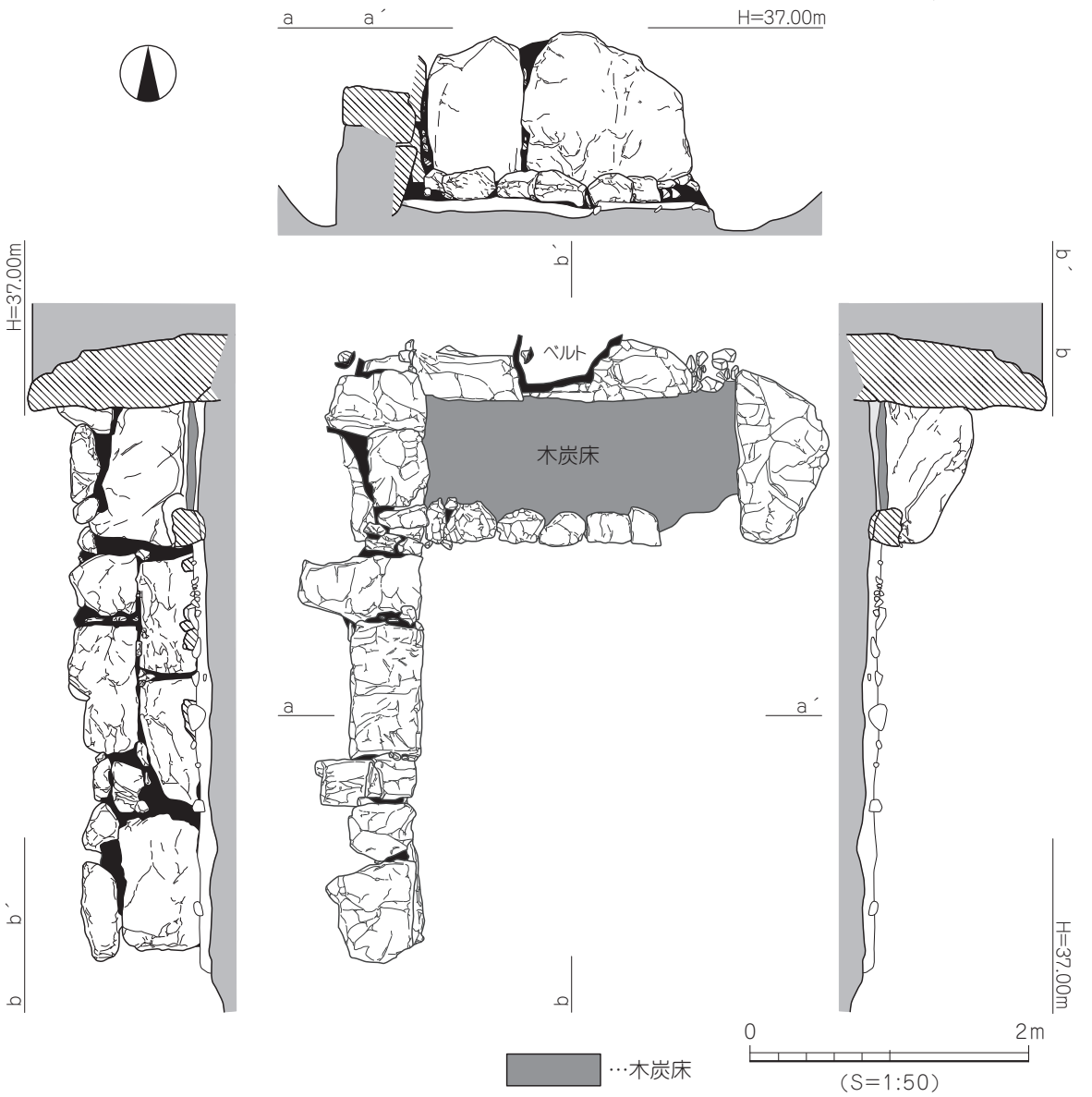
玄室の奥壁沿いに検出した。奥壁から入口側 1.60 m までに直径 2.0 ～ 8.0cm の河原石を木炭床を覆い隠すように厚さ 10.0 ～ 12.0cm ほど敷き礫床としている。この礫床上では若干の炭粒が散見されたが人骨や土器などの遺物は検出していない。

（5）木炭床（第 19 図）

礫床の河原石を取り除いて検出した遺構である。玄室の奥壁から約 0.8m の入り口側にブロック状の石を奥壁と平行に並べて仕切った間にあり、貼床上に炭が 4.0 ～ 6.0cm の厚さで敷かれ木炭床としている。この木炭の上面では、人骨や土器などの遺物は全く出土しなかった。遺物は、炭を取り除いた後の貼床中に須恵器の小片が 1 点出土したのみである

（6）石室内遺物出土状況（第 20 図）

遺物は、主に玄室の奥壁から約 1m 以上の南側で出土している。須恵器、鉄器、装飾品などが出土



第19図　腰折2号墳測量図(2)

しているが完存品は少なく、その殆どが割れて散乱気味となっている。須恵器には蓋坏、高坏などがあり、鉄器は鉄鏃、釘、装飾品では耳環２点などが出土している。そのほか、玄室南側では中世の瓦器椀１点、土師器の皿１点とともに持ち込まれて並べられたような埴輪片が数点出土している。

（７）石室内出土遺物（第 21・22 図）

92 ～ 105 は須恵器。92 は坏蓋。宝珠つまみが付き内面の口縁端部近くにかえりをもつ。かえりは、口縁部よりも下方に突出する。93・94 は坏身。93 はやや外反する口縁部。口縁端部は丸くおさめ、底部と体部の境界に凹線が一条巡る。底部外面は粘土ひもの痕跡を残す。94 は内湾して上方に立ち上がる口縁部。口縁端部は丸くおさめる。底部は粘土の凸面があり不安定である。

95 ～ 97 は無蓋高坏。95 は坏底部と口縁部の境に凹線を巡らす。96・97 の脚部は欠失する。ともに坏部外面は口縁部、坏底部との境に段がつく。

98・99 は長頸壺。同一品と思われるが接合部が見つかっていない。98 の頸部は外傾して立ち上がり口縁部は短く外反する。口縁端部は丸くおさめる。頸部に２条の凹線が巡る。99 の肩部の文様帯には櫛状工具による斜位の刺突文が施される。

100 は広口壺の口縁部片。口縁部は外反し、口縁端部は外に肥厚して丸くおさめる。

101 は有蓋の短頸壺。口縁部は直立して短くのびる。口縁端部は外方に肥厚して丸い。肩部に１条の凹線を巡らし、体部上半に縦線２状のヘラ記号が施される。

102 ～ 105 は平瓶。102 の口縁部は漏斗状となる。体部上面は扁平で肩部と体部の境には明確な稜を有する。底部は平坦に仕上げる。103 の口縁部は漏斗状で少し焼け歪みがみられる。体部上面は扁平で、底部は平坦に仕上げる。104 は体部の 1/3 が欠失する。口縁部は直立気味に立ち上がる。口縁部と体部の接合部は窪む。底部は平坦に仕上げる。105 の口縁部は漏斗状である。口縁基部の外面は強い横ナデにより凹線状の痕跡を残す。体部の一部と底部は欠失する。

106 ～ 108 は玄室南側の床面中央部で出土したもので、鎌倉時代に石室内に持ち込まれた遺物と考えられる。106 は円筒埴輪で推定口径 28.8㎝、残高 10.9㎝の口縁部片。口縁部は外傾して上方に立ち上がり、口縁端部は面をもつ。タガは低く断面はM字状を呈している。１次調査で唯一の埴輪片である。107 は土師器皿。完形品で口径 8.9㎝、器高 1.4㎝を測る。口縁端部は丸くおさめ、口縁端部直下の内面は強い横ナデによって凹む。底部の切り離しは僅かに糸切痕跡を残す。108 は瓦器椀で復元完形品である。口径 17.0㎝、器高 5.4㎝を測る。内湾して立ち上がる口縁部。口縁端部は丸くおさめる。高台は内側に段をもち外側で接地する。

109・110 は耳環。２点とも銅芯金張りである。

111 は大刀の刃部の破片と思われる。刃部の一部と茎部が欠失する。

112 は刀子。茎部の破片である。

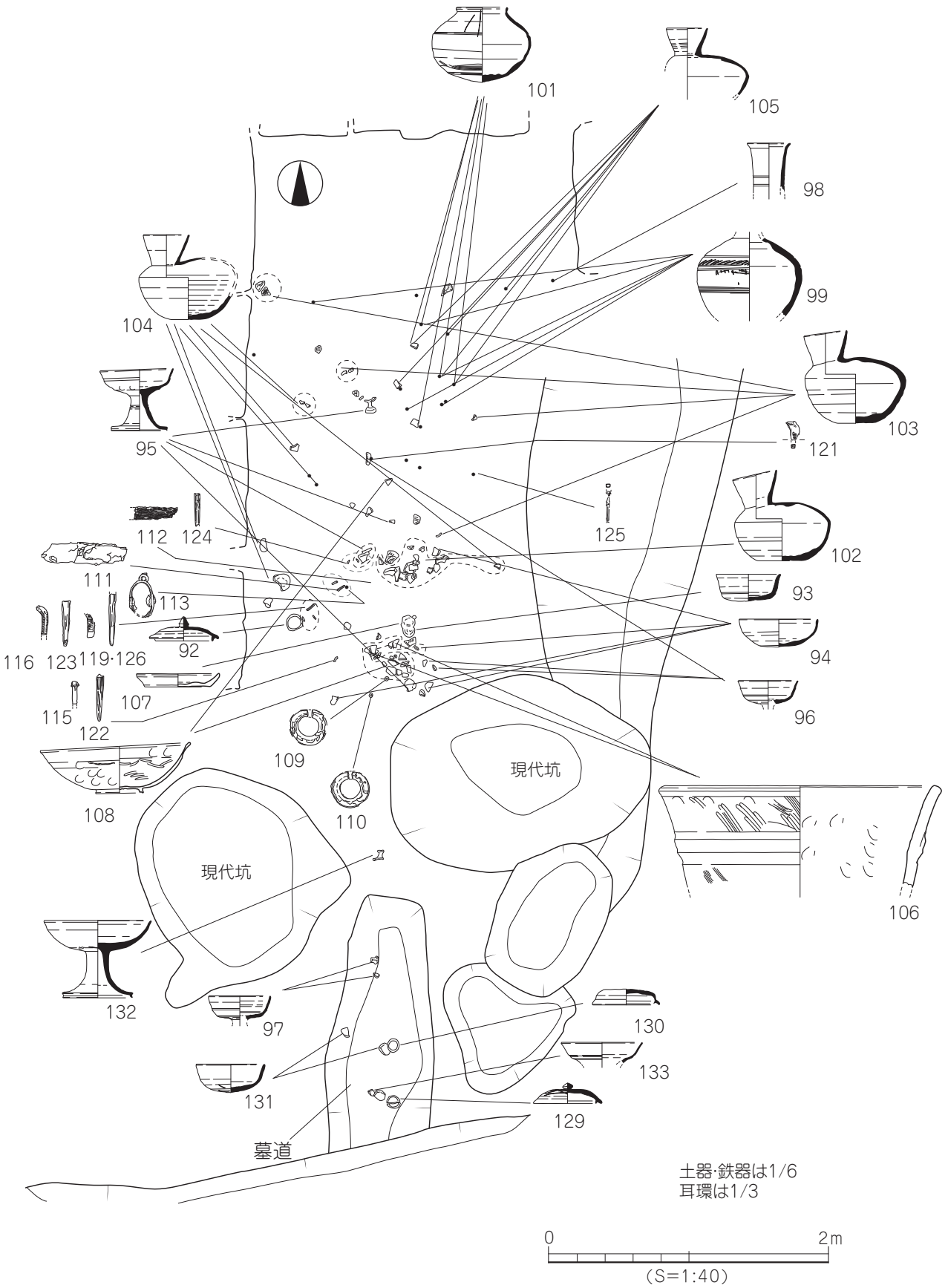
113 は大刀の吊り金具。111 に近接して出土している。

114・115 は両頭金具の破片と考えられる。

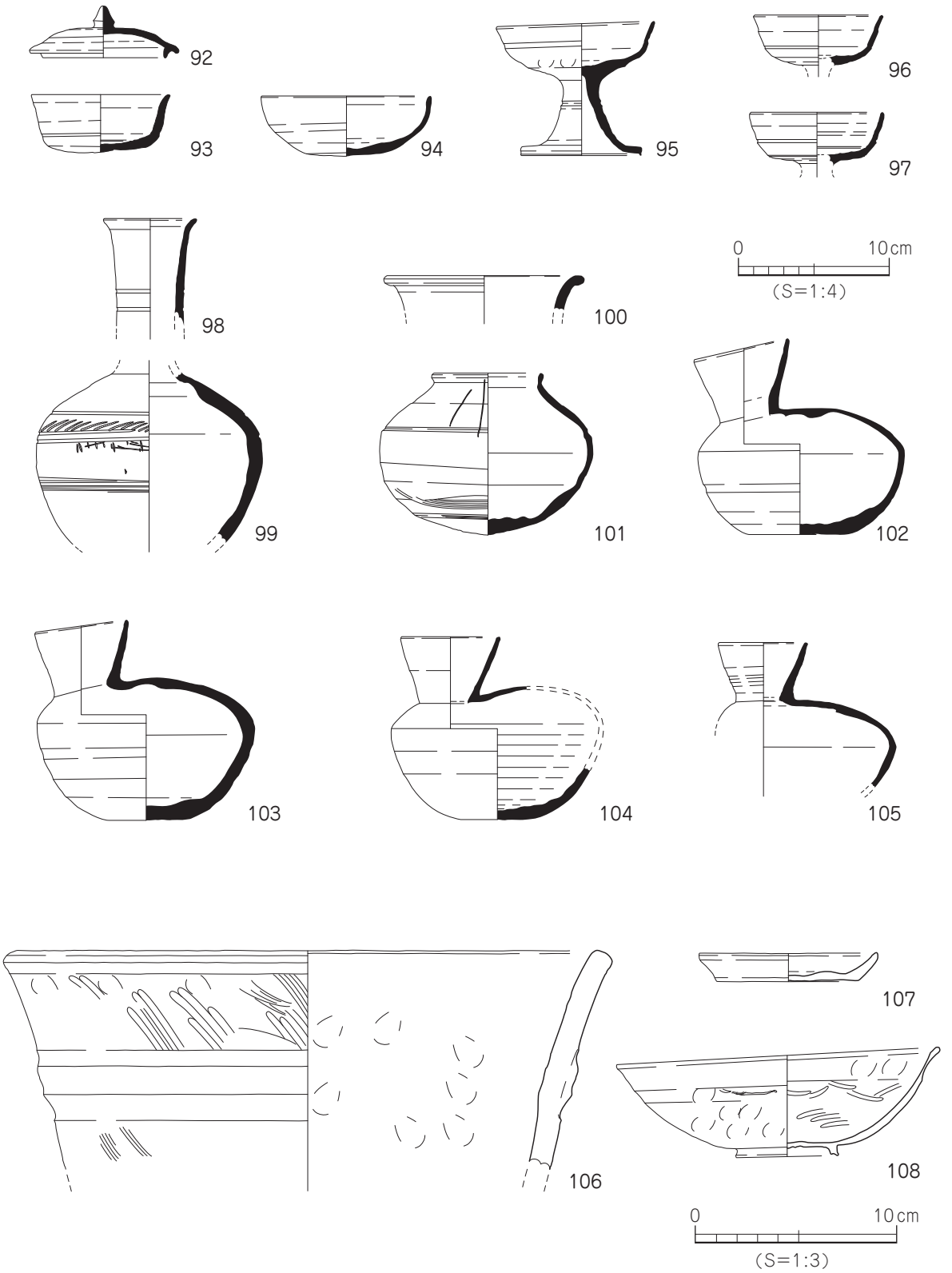
116 ～ 128 は釘。完存するものはない。出土位置がわかるものに 116・119・121 ～ 126 がある。他は土振るいで出土したものである。

（８）墓道（第 18・20 図）

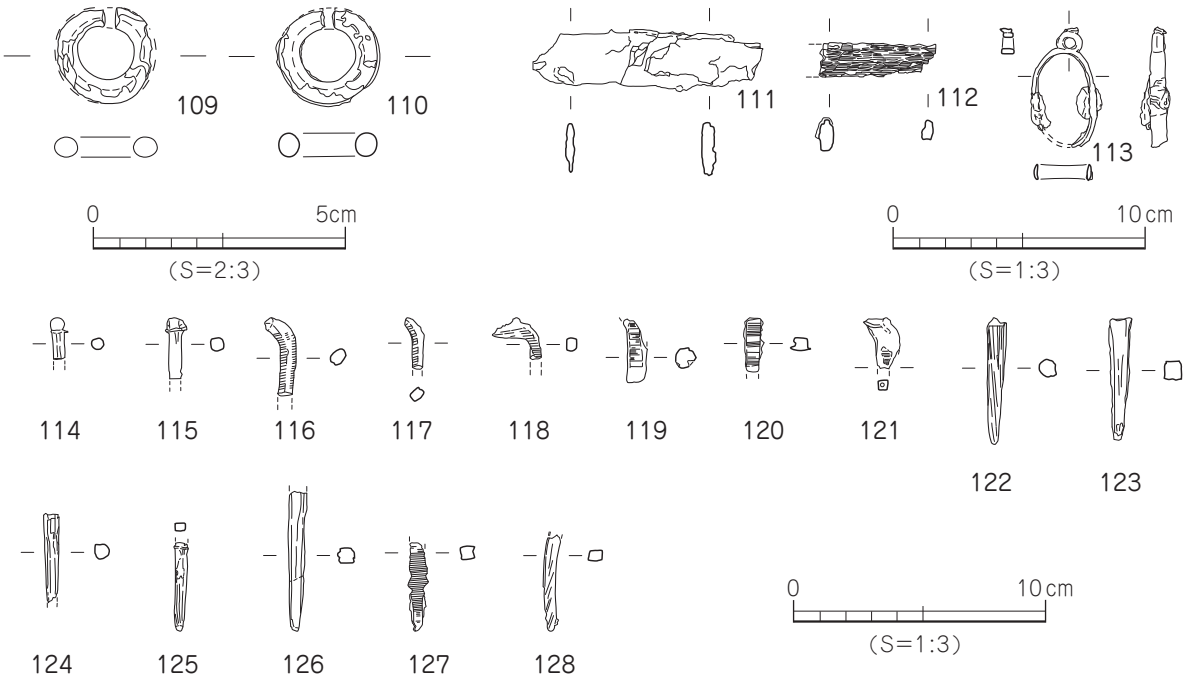
石室奥壁の中央から南約 5.20m で検出した溝状の掘り込みである。北から南へ緩やかな傾斜をもつ。遺構の北側は石室中央を向き、南側は削平されていて全容は不明である。検出規模は長さ 1.90m、



第20図　腰折2号墳出土遺物平面図



第21図　腰折2号墳石室内出土遺物実測図(1)

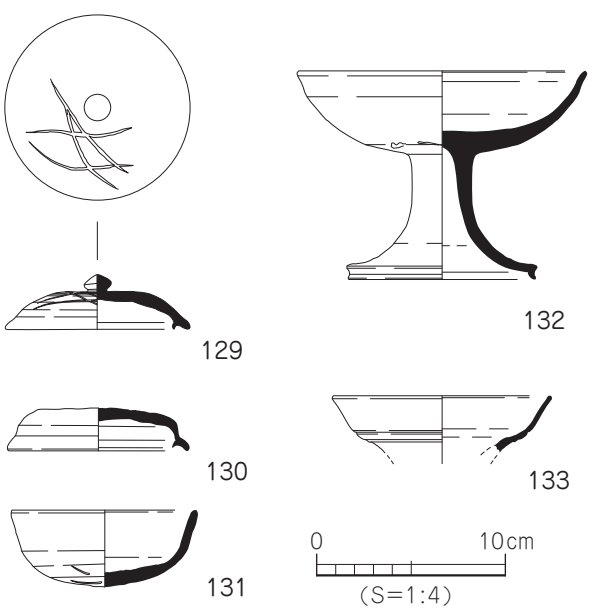


第22図　腰折2号墳石室内出土遺物実測図(2)

幅 0.43 ～ 1.00m、深さ 0.16m を測る。遺物は基底面より須恵器の蓋 2 点、坏身 1 点、甕、高坏などが出土している。

（9）墓道出土遺物（第 23 図）

129・130 は坏蓋。129 は天井部中央に宝珠形のつまみがつく。口縁部内面のかえりは口縁端部よりも突出しない。130 は扁平な天井部。天井部中央につまみの接合痕跡を残す。口縁部内面のかえりは口縁端部よりも突出しない。



第23図　腰折2号墳墓道出土遺物実測図

131 は坏身。底部は丸く不安定で口縁部は外上方に開き、口縁端部は丸くおさめている。

132 は無蓋高坏。坏部は内湾して外方に立ち上がる。口縁端部は丸くおさめる。脚裾は外方に開き、裾端部は下方に拡張して接地している。

133 は甕。口縁部片。口縁端部は丸くおさめる。頸部と口縁部境に凹線が巡る。

（10）周溝（第 17 図）

石室中央部から西側 6.0m、北側 5.0m、東側 4.5 mで外部施設として周溝を検出した。石室周囲を方形状に巡るが、東南部～西南部にかけては地山面まで削平されているためか検出していない。検出規模は幅 1.5 ～ 3.0m、深さ 0.05 ～ 0.35m を測る。断面形状は逆台

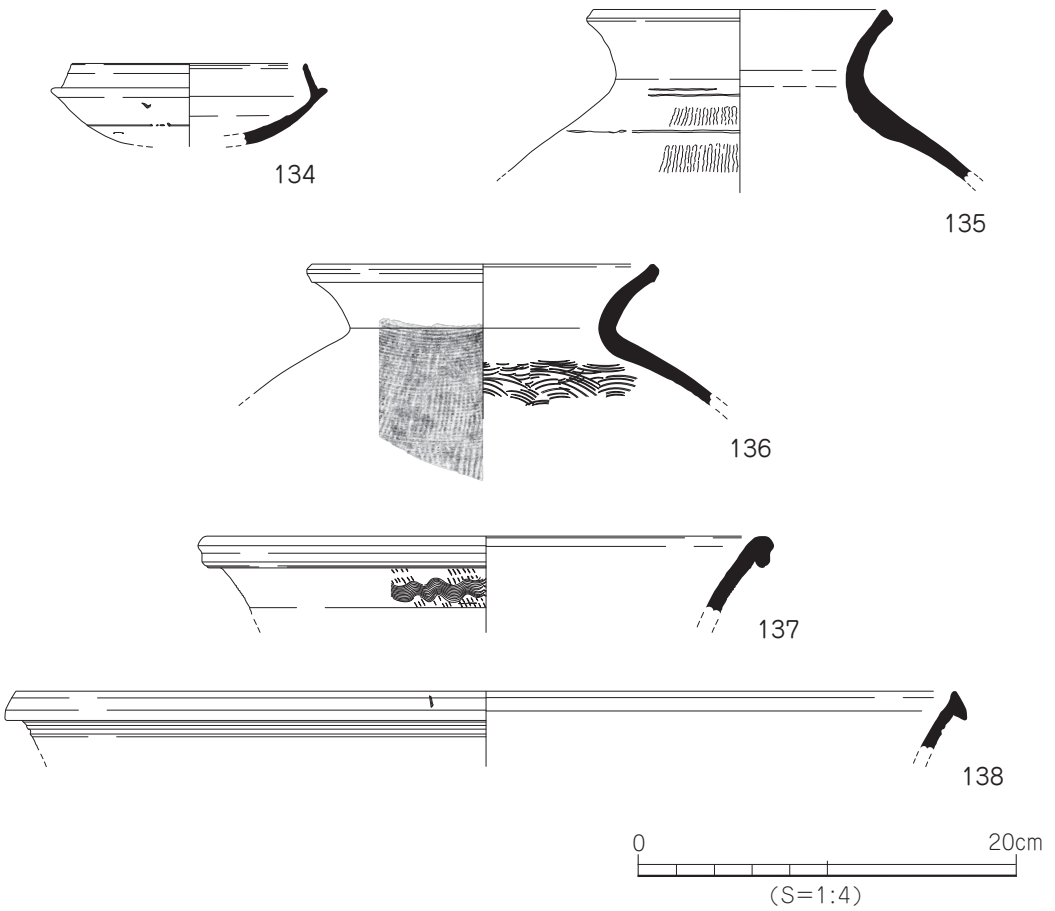
形状で、南側に下ると浅くなる。遺物は主に周溝北側の西北部からの出土が多く、周溝検出時に出土したものである。検出後の埋土掘削時には溝底からの出土遺物は無かった。

（11）周溝出土遺物（第 24 図）

134 は坏身。口縁部は内傾して立ち上がる。口縁端部は丸くおさめ、受部は短く水平にのびる。底部は欠失する。

135 は壺。口縁部から肩部にかけての破片である。口縁部は短く外反し口縁端部は面をもつ。

136 ～ 138 は甕でいずれも破損品。136 の口縁部は外反して上方に立ち上がり、口縁端部はやや肥厚して丸くおさめる。137 は短く外反する口縁部で端部は面をもつ。138 の口縁端部は上下に拡張する。口縁端部直下の外面に 2 条の凹線が施される。



第24図　腰折2号墳周溝出土遺物実測図

3．腰折 3 号墳

（1）墳丘と墳形

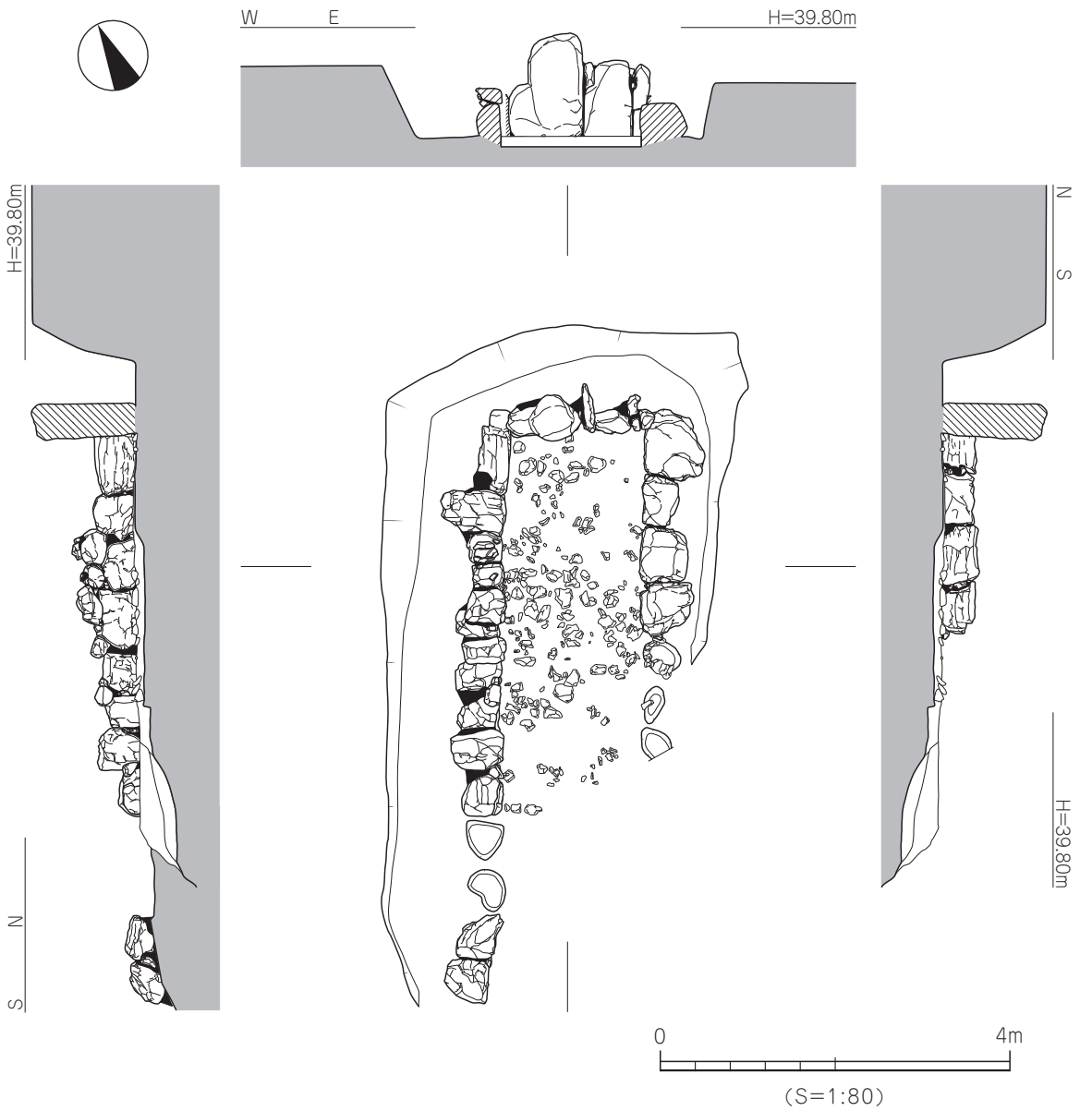
腰折 3 号墳は、2 号墳の石室中央から北東 15m の斜面地に位置する。墳丘の盛土はすべて失われ、周溝も確認できていない。このため、墳形、規模とも不明である。石室の西側には、現代の農業用排水溝と考えられる落ち込みが見られる。

（２）墓坑（第 25 図）

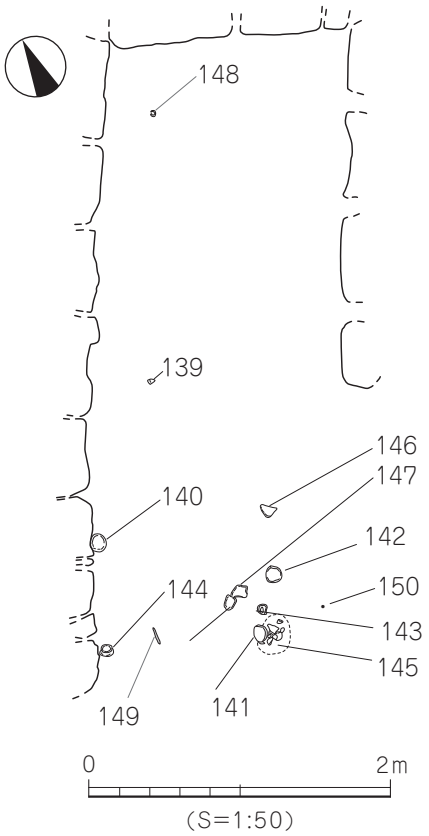
墓坑は地山面での検出である。緩やかな尾根線上に平行して南北方向に掘られる。南側はひどく削平されている。平面形は隅丸長方形である。検出規模は長軸（南北）7.60 m、短軸（東西）3.70 m、深さ 0.05 ～ 0.75m を測る。

（３）石室（第 25 図）

石室は南側に開口する横穴式石室である。主軸方位はＮ 24° Ｅである。天井石は石室内への落下も無く、すべて失われている。壁体は１段から２段程度を残すのみである。南側はひどく壊され、玄室と羨道部を分ける袖部の基底石や羨道部の石も抜き取られ、一部しか残っていない。このため、袖部や羨道部についての形態や様相は不明である。現況での平面形態は長方形を呈する。検出規模は長さ 6.50 m、幅 1.62 m、残高 1.21 mを測る。



第25図　腰折3号墳石室と墓坑測量図



第26図　腰折3号墳出土遺物平面図

玄室は、袖部や仕切り石などが無くなっているため正確な規模は不明であるが、奥壁から 4.50 m までには遺物が出土していることからこの辺りまでが玄室と推察される。奥壁からの長さは 4.30m を測る。壁体の石材は主に安山岩が使用される。奥壁の基底石は 3 枚配され、そのうち 2 枚は板状の巨石を使用している。床面は厚さ 6.0 ～ 10.0cm の貼床が施されるほか、貼床上には直径 5.0 ～ 15.0cm の割石が不規則に配されており、玉石は見られない。

（４）石室内遺物出土状況（第 26 図）

遺物は須恵器、装飾品がある。須恵器には蓋坏、鉢、壺、装飾品では耳環が出土している。土器類は石室の南側から比較的多く出土している。石室の奥壁側には耳環 1 点が出土している。土師器は 1 点のみの出土である。

（５）石室内出土遺物（第 27 図）

139 ～ 141 は須恵器の蓋。139 は口縁部の破片で天井部が欠失する。天井部と口縁部の境に沈線が巡る。口縁端部は丸く仕上げている。140 は扁平な天井部。口縁部は端部近くで短く外反する。141 は扁平な天井部で口縁端部は肥厚して丸くおさめている。

142 は坏身。底部は平坦で外面に小さな粘土粒が付着する。たちあがりは短く端部は尖り気味。坏部は比較的深くなっている。

143 は平瓶と思われる口縁部片。漏斗状の口縁部で端部は丸くおさめる。

144・145 は台付椀。144 は器高 11.4cmを測る完存品。体部は内湾して立ち上がり、外面に 2 条の凹線を施す。脚外面には 1 条の圏線を巡らし、脚端は下方に拡張して接地する。145 は体部は内湾して立ち上がり、短く上方にのびる口縁部。体部には 1 条の凹線を施す。脚端は上下に拡張する。

146 は甕の口頸部片。頸部から外反して立ち上がる口縁部。口縁端部は外側に肥厚する。

147 は土師器の椀。底部から体部にかけての破片。口縁部は欠失。丸味をもった平底の底部。底部内面の中央部はナデにより凹んでいる。

148 は銅芯金貼りの耳環である。錆化が著しい。

149・150 は鉄鏃。茎の破片である。

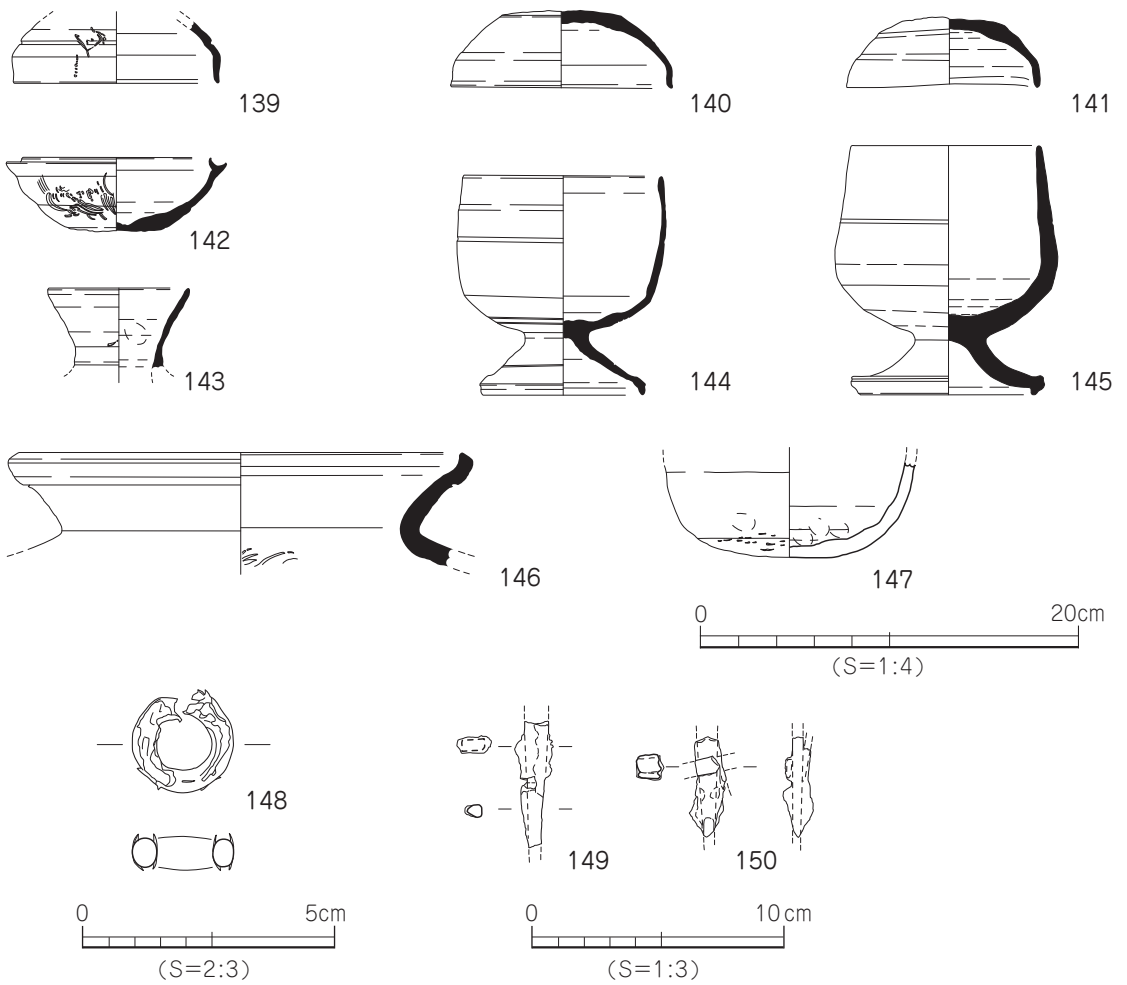
（６）その他の出土遺物（第 28 図）

3 号墳の主に南側表土掘削時に出土した遺物である。

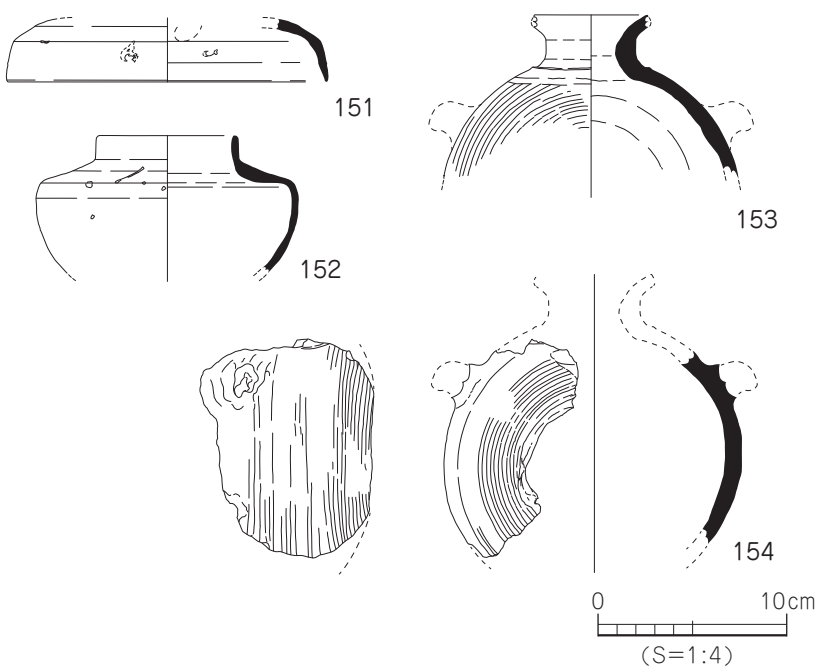
151 は蓋。口縁部片で天井部は欠失する。天井部と口縁部を分ける稜は失われる。口縁端部は尖り気味である。

152 は有蓋短頸壺。底部は欠失する。肩の張る胴部で口縁部は直立して短くのびる。口縁端部は丸くおさめている。

153・154 は提瓶。ともに把手部は欠失する。接合部はないものの同一個体の可能性がある。



第27図　腰折3号墳石室内出土遺物実測図



第28図　腰折3号墳その他出土遺物実測図

第３節　Ｂ区の調査

１．腰折４号墳

（１）墳丘と墳形

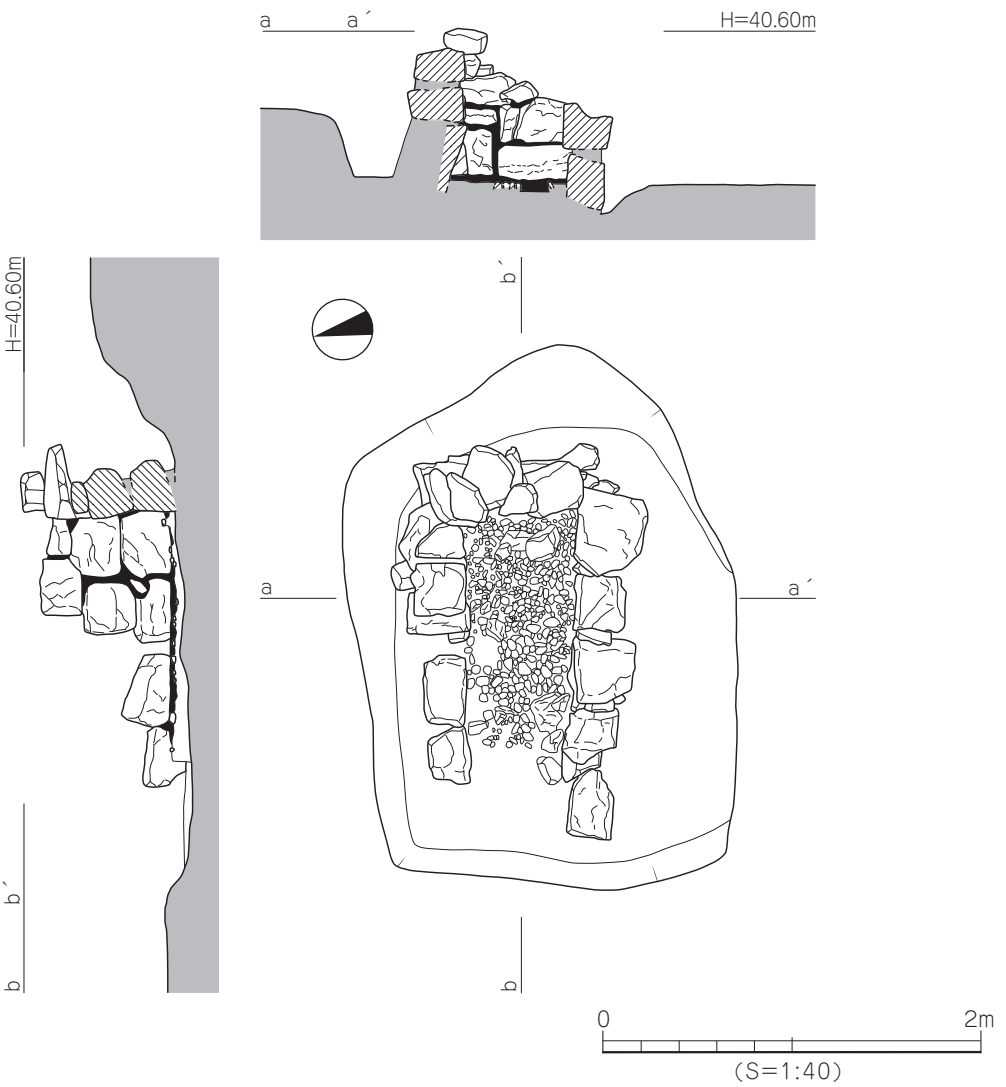
４号墳は、１号墳の石室中央部から西へ約 8m に位置する。古墳や周辺域の地形も大きく改変されているものと見られ、墳丘の盛土はすべて失われているほか、周溝も確認できていない。このことから墳形、規模とも不明である。

（２）墓坑（第 29 図）

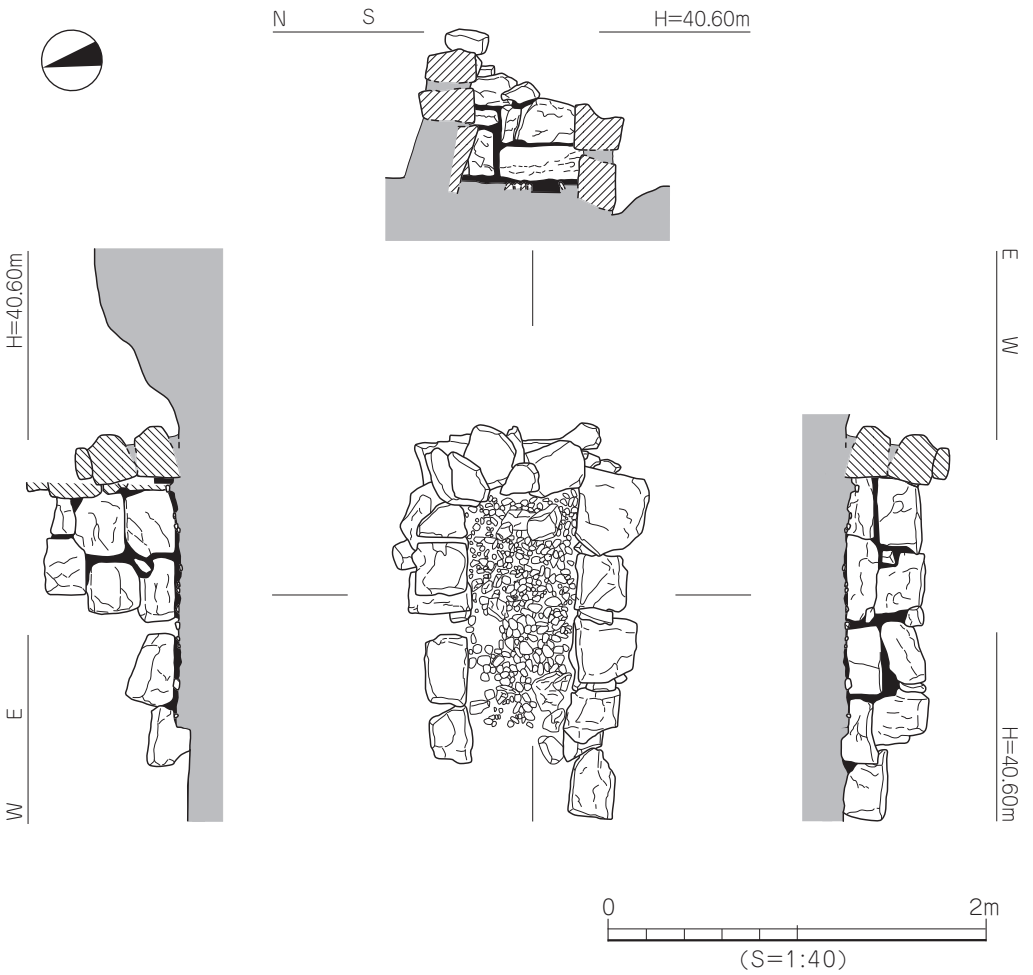
墓坑は地山面での検出である。緩やかな尾根線上の平坦面に東西方向に掘られる。南側はひどく削平されている。平面形は隅丸長方形を呈する。検出規模は長軸（東西）2.80 m、短軸（南北）1.90 m、深さ 0.05 ～ 0.31m を測る。

（３）石室（第 29・30 図）

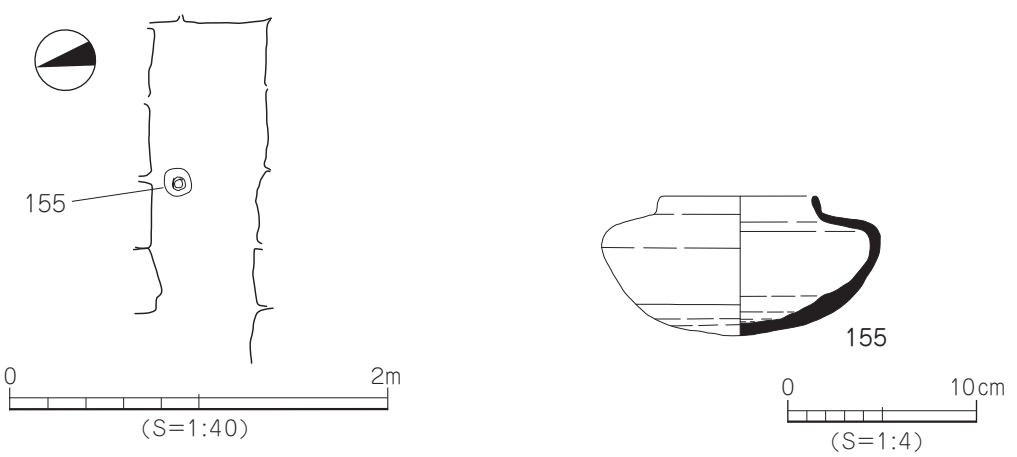
４号墳の石室形態については、西側の木口部が失われているため小型の横口式とも考えられるが明



第29図　腰折4号墳完掘図



第30図　腰折4号墳石室展開図



第31図　腰折4号墳出土遺物平面図・遺物実測図

確ではない。主軸方位はＥ 12° Ｓである。天井石は失われている。壁体は１段から３段程度を残す。西側はひどく壊され基底石も抜き取られている。現存長1.84ｍ、幅0.68ｍ、残高0.78ｍを測る。床面は、直径2.0 ～ 7.0cmの玉石を貼床（厚さ5.0 ～ 6.0cm）上に敷き詰めて礫床としている。石室中央部の北側に短頸壺１点が副葬されるが壺の下には玉石が貼られていない。

（４）石室内出土遺物（第31図）

遺物は北側の側壁沿い中央部で須恵器の短頸壺が１点出土したのみである。

155は口径8.2cm、器高7.4cmを測る完形品。肩の張る体部。口縁部はやや内傾して短くのびる。口縁端部は丸くおさめる。底部内面に粘土ひも巻上げ痕跡を残す。

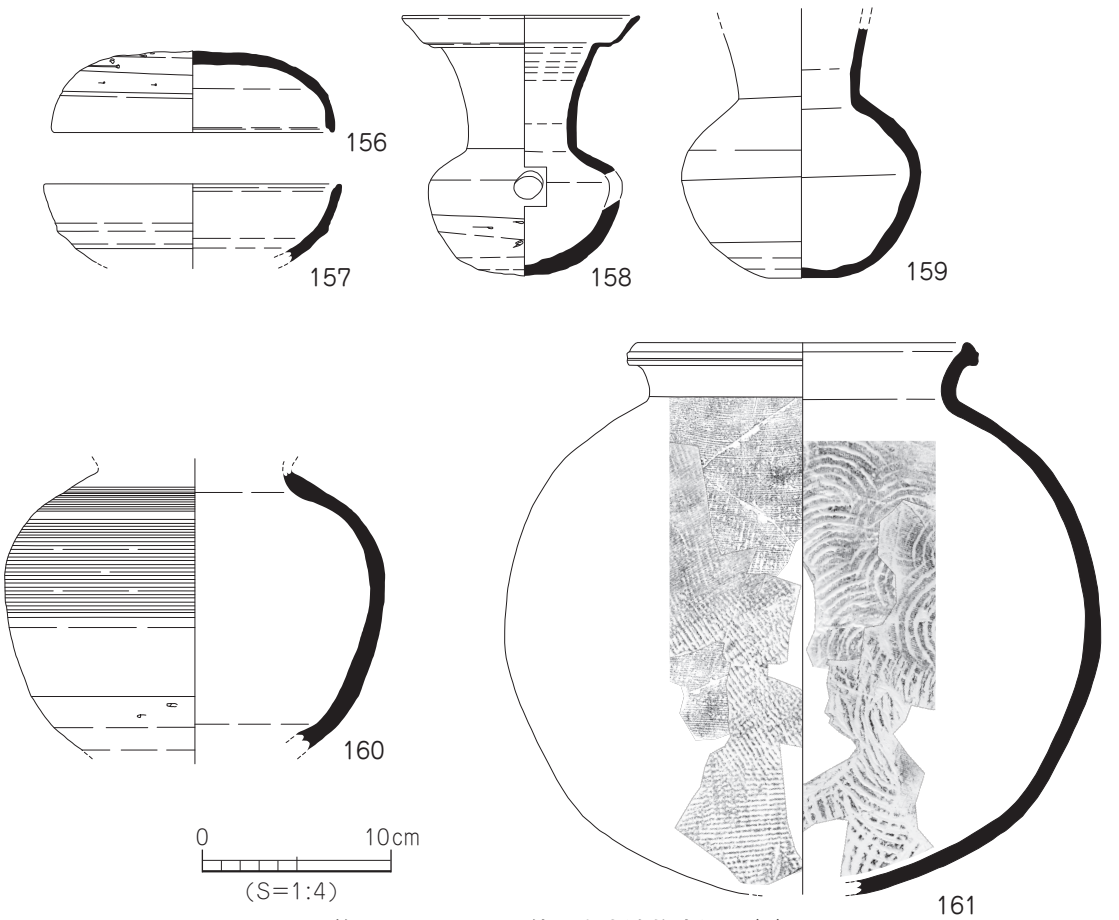
（５）その他の出土遺物（第32・33図）

４号墳の南側で表土掘削時に出土した須恵器である。１号墳の石室中央から南西約７～ 9m付近で出土した遺物群で、地山面からはかなり浮いた状態で破片が散在する出土状況であった。明確な遺構などは検出していない。

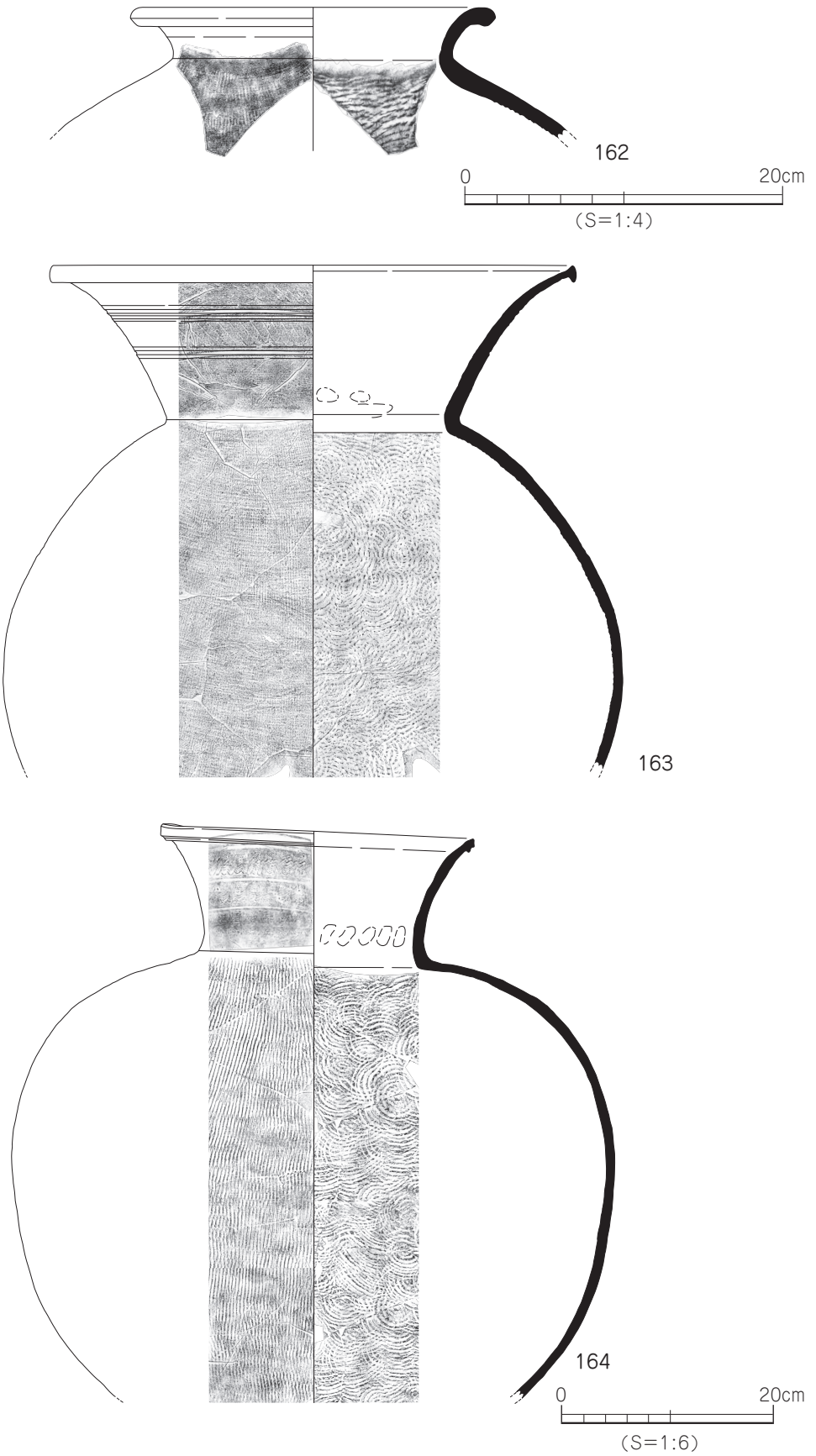
156は蓋。天井部と口縁部の境は凹線で分けられる。天井部は平坦で、口縁端部は段をもつ。

157は無蓋高坏と考えられる。口縁部は内湾して立ち上がり、端部は丸くおさめる。体部外面は口縁部と境に段をもつ。

158・159は瓶。158は太い頸部から段を有し大きく開く口縁部。肩部に円孔が穿たれる。底部は丸く不安定。159は口縁部や穿孔部が欠失する。



第32図　B区その他の出土遺物実測図（1）



第33図　B区その他の出土遺物実測図(2)

160 は壺。口縁部と底部は欠失する。体部から肩部にかけての破片。体部上半にカキ目調整が施される。

161 ～ 164 は甕。161 は体部から口縁部片。底部は欠失する。体部は球形を呈し、口縁端部は上下に拡張する。162 は外反する口縁部。口縁端部は肥厚して丸くおさめる。163 は口縁端部は上下に肥厚し、端部外面は丸味をもった面をもつ。口縁部の文様帯には上下 2 段の波状文が施される。164 は外反する口縁部。口端外面直下に断面三角形の突帯を巡らす。口縁部の文様帯には上下 2 段の波状文を施している。

第 4 節　小結

1次調査では 4基(腰折 1号墳～ 4号墳）の古墳を確認した。いずれも後期古墳と呼ばれる築造時期が6世紀中葉～ 7世紀中葉頃と考えられる古墳である。石室はいずれも壊れていて全容はわからなかったが 1号墳～ 3号墳は横穴式石室、4号墳はその規模から小型の横口式石室の可能性も考えられるが、石室形態不明としておきたい。

遺物は石室や周溝から須恵器、土師器、鉄器、装飾品などが出土している。この中で注目するものには 1号墳で検出した勾玉、平玉がある。勾玉はヒスイ製、平玉は碧玉と琥珀で作られており、これらの素材を用いた玉類の出土は松山市では珍しく、貴重なものである。

遺構のうち、注目されるものには 2号墳で検出した木炭床がある。木炭床は全国的にも珍しいもので、松山では瀬戸風峠 4号墳に次いで 2例目の貴重な発見であった。

下難波地区にはたくさんの古墳の存在が知られているが本格的な発掘調査の事例は少なく、様相が不明な地域であった。今回の調査でその一端が明らかになり、貴重な資料を得ることができたことは大きな成果であった。

遺物観察表　　－ 凡例 －

（1）　以下の表は、本調査地検出の遺物の計測値及び観察一覧である。

（2）　遺物観察表の各掲載について。

法量欄　　（　）：推定復元値

調整欄　　土製品の各部位名称を略記した。

例）口→口縁部、口端→口縁端部、天→天井部、肩→肩部、体→体部、体上→体部上位、体下→体部下位、脚→脚部、底→底部。

胎土欄　　胎土欄では混和剤を略記した。

例）石→石英、長→長石、金→金ウンモ、密→精製土、褐→褐色粒、黒→黒色粒、白→白色粒。

（　）の中の数値は混和剤粒子の大きさを示す。

例）石・長（1 ～ 3）→「1 ～ 3mm 大の石英・長石を含む」である。

焼成欄　　焼成欄の略記について。◎→良好、○→良。

表２　　腰折１号墳玄室内出土遺物観察表　土製品（1）

実測番号	器種	法量（㎝）		形態・施文	調整 外面	調整 内面	色調（外面）（内面）	胎土（mm）焼成	備考	図版
1	無蓋高坏	口径 器高 底径	10.5 14.4 9.4	口縁端部内面に１条の沈線が巡る。文様帯には波状文が施される。脚は細く長い。長方形のスカシを１段３方向に施す。	口横ナデ 坏底ヘラ削り 脚回転ナデ	坏横ナデ 脚ナデ、回転ナデ	灰色 N6/0 灰色 N6/0	石･長(0.5～4) ◎		5
2	無蓋高坏	口径 残高	12.9 6.5	外反する口縁部。口縁端部は丸くおさめる。口縁部と底部との境には段がつく。脚柱のスカシは２方向と思われる。	口横ナデ 坏底ヘラ削り 脚回転ナデ	坏横ナデ、ナデ 脚ナデ	灰色7.5Y6/1 灰色7.5Y6/1	長石(0.5～3)	外面自然釉	5
3	無蓋高坏	口径 器高 底径	12.8 16.8 11.3	底部と口縁部を分ける稜は短く突出する。脚柱中央に２条の凹線を巡らし、長方形の細長いスカシを１段２方向に施す。	口横ナデ 坏底ヘラ削り 脚回転ナデ	坏横ナデ 脚回転ナデ	暗灰色 N3/0 黒色 N2/0	長石(1～3)	内外面自然釉	5
4	有蓋高坏	口径 器高 底径	14.1 18.4 14.7	たちあがりは内傾し、端部は丸く仕上げる。脚柱中央に２条の凹線を巡らし、上下２段の長方形スカシを３方向に施す。	口横ナデ 坏底ヘラ削り 脚カキ目、回転ナデ	坏横ナデ、ナデ 脚ナデ、回転ナデ	灰色 N4/0 灰色 N5/0	石･長(1～4) ◎		5
5	蓋	口径 器高	9.9 3.7	やや扁平な天井部。口縁端部は外反し内側に内傾する面をもつ。	天ヘラ削り 口横ナデ	回転ナデ	青灰色5PB 6/1 青灰色5PB 6/1	長(0.5～5) ◎		5
6	蓋	口径 器高	14.3 4.1	やや扁平な天井部。口縁端部は丸くおさめる。	天ヘラ削り 口横ナデ	回転ナデ、ナデ	緑灰色 5G 6/1 オリーブ灰色 5GY5/1	石･長(1～5)		5
7	蓋	口径 器高	11.2 3.8	天井部は丸みを帯びる。口縁端部は内側に内傾する面をもつ。	天ヘラ削り 口横ナデ	回転ナデ	灰色 7.5Y3/1 灰色 10Y5/1	石･長(1～4) ◎		5
8	蓋	口径 器高	14.5 4.6	天井部は歪む。口縁端部は丸く仕上げ、端部内面には強いナデにより稜が巡る。内面に粘土ひもの巻上げ痕を残す。	天ヘラ削り 口横ナデ	ナデ、回転ナデ	灰色 7.5Y6/1 灰色 7.5Y6/1	石･長(1～4) ◎		5
9	蓋	口径 器高	10.8 3.5	平坦な天井部。口縁下部は強いナデにより外へ開く。口縁端部は丸くおさめる。	天ヘラ削り 口横ナデ	回転ナデ	灰色 5Y6/1 灰色 5Y6/1	石(0.5～1) 長(0.5～4) ◎	№10とペア	5
10	有蓋短頸壺	口径 器高	8.0 10.6	肩の張る体部。口縁部は直立して短くのびる。口縁端部は丸くおさめる。底部内面に粘土ひもの積みあげ痕跡を残す。	口横ナデ 体上横ナデ 体下ヘラ削り	回転ナデ、ナデ	青灰色5PB 6/1 青灰色5PB 6/1	石･長(1～6) ◎	№9とペア	6
11	有蓋短頸壺	口径 器高	9.3 8.3	肩の張る体部。口縁部は直立して短くのびる。口縁端部は丸くおさめる。	口横ナデ 体上横ナデ 体下ヘラ削り	回転ナデ、ナデ	灰色 7.5Y6/1 灰色 7.5Y6/1	長(0.5～4) ◎		
12	有蓋短頸壺	口径 器高	6.9 7.9	口縁部は直立して短くのびる。口縁端部は丸くおさめ、端部直下内面に沈線が巡る。底部内面に粘土ひもの巻き上げ痕。	口横ナデ 体上横ナデ 体下ヘラ削り	回転ナデ	灰色 N6/0 灰色 N6/0	石･長(0.5～4) ◎	外面自然釉	6
13	有蓋短頸壺	口径 器高	6.9 7.7	肩の張る体部。口縁部は直立して短くのびる。口縁端部は丸くおさめる。	口横ナデ 体上回転ナデ 体下回転ヘラ削り	回転ナデ	灰色 N6/0 灰色 N6/0	石･長(1～4) ◎		6

腰折１号墳玄室内出土遺物観察表　土製品（2）

実測番号	器種	法量（cm）		形態・施文	調整 外面	調整 内面	色調（外面）（内面）	胎土（mm）焼成	備考	図版
14	広口壺	口径 器高	9.9 9.1	太い頸部から外反気味に立ち上がる口縁部。端部は丸く仕上げる。肩は強く張る。底部は丸味をもった平底。	口横ナデ 体上横ナデ 体下ヘラ削り	回転ナデ	青灰色 5B 6/1 青灰色 5B 5/1	石(0.5～2) 長(0.5～6) ◎		6
15	提瓶	口径 器高 厚さ	6.6 19.7 11.5	口縁部は内湾気味に立ち上がる。耳は小型化し先端部の鉤状屈曲は形式化しする。体部背面は大きく膨らむ。	口横ナデ 体カキ目	口横ナデ	灰白色 10Y5/1 灰白色 10Y5/1	長(0.5～2) ◎		6
16	提瓶	口径 器高 厚さ	6.8 20.2 11.7	口縁部は内湾気味に立ち上がる。端部は丸く仕上げる。耳は小型化し先端部の鉤状屈曲は形式化している。	口横ナデ 体カキ目	口横ナデ	暗オリーブ灰色 2.5GY4/1 オリーブ褐色 2.5Y4/3	長(1～4) ◎		6
17	提瓶	残高 厚さ	15.6 (10.0)	耳は小型で形式化したものである。先端部は欠失する。体部背面は膨らみは少ない。	体部→横ナデ 体背→ヘラケズリ 回転ナデ	口→体 横ナデ	灰白色 5Y7/2 灰白色 5Y7/1	長(1～10) ◎		6
18	瓶	口径 器高	14.0 16.8	頸部は細く大きく外反する。口縁部はラッパ状に開く。口縁部と頸部の境は凸帯を巡らし明瞭な段となる。体部は無文。	口→頸 横ナデ 体上横ナデ 体下ヘラ削り	口横ナデ	青灰色 5PB 5/1 青灰色 5PB 5/1	長(1～4) ◎		7

表３　腰折１号墳玄室内出土遺物観察表　装身具（勾玉）

実測番号	器種	残存	材質	色	法量 長さ(cm)	法量 頭部幅(cm)	法量 最大厚(cm)	法量 右孔径(cm)	法量 左孔径(cm)	法量 重さ(g)	穿孔法	図版
19	勾玉	完形	翡翠	淡緑白	1.40	0.47	0.50	0.21	0.20	0.844	両面	7

表４　腰折１号墳玄室内出土遺物観察表　装身具（平玉）

実測番号	器種	残存	材質	色	法量 長さ(cm)	法量 幅(cm)	法量 厚さ(cm)	法量 上孔径(cm)	法量 下孔径(cm)	法量 重さ(g)	穿孔法	図版
20	平玉	一部欠損	琥珀	茶褐色	0.90	0.90	0.50	0.21	(0.28)	0.248	片面	7
21	平玉	完形	碧玉	暗緑灰色	1.40	1.11	0.71	0.27	0.15	1.894	片面	7

表５　腰折１号墳玄室内出土遺物観察表　装身具（切子玉・算盤玉）

実測番号	器種	残存	材質	色	法量 高さ(cm)	法量 最大幅(cm)	法量 上孔径(cm)	法量 下孔径(cm)	法量 迎孔径(cm)	法量 重さ(g)	穿孔法	図版
22	切子玉	完形	水晶	半透明	1.30	120	0.30	0.15	0.40	2.385	迎孔	7
23	切子玉	完形	水晶	半透明	1.35	1.10	0.40	0.20	—	1.815	片面	7
24	算盤玉	完形	水晶	半透明	1.40	1.11	0.30	0.15	0.30	1.312	迎孔	7

表６　腰折１号墳玄室内出土遺物観察表　装身具（丸玉）

実測番号	器種	残存	材質	色	法量 高さ(cm)	法量 直径(cm)	法量 上孔径(cm)	法量 下孔径(cm)	法量 迎孔径(cm)	法量 重さ(g)	穿孔法	図版
25	丸玉	完形	水晶	半透明	0.72	0.95	0.30	0.15	—	1.031	片面	7

表７　腰折１号墳玄室内出土遺物観察表　装身具（管玉）

実測番号	器種	残存	材質	色	法量 高さ(cm)	法量 上径(cm)	法量 下径(cm)	法量 上孔径(cm)	法量 下孔径(cm)	法量 迎孔径(cm)	法量 重さ(g)	穿孔法	図版
26	管玉	完形	碧玉	暗緑	2.80	0.95	0.98	0.45	0.20	—	5.011	片面	7
27	管玉	完形	碧玉	暗緑	2.70	0.80	0.30	0.15	0.40	0.40	3.636	迎孔	7
28	管玉	完形	碧玉	暗緑	2.20	0.90	0.92	0.30	0.10	0.26	3.577	迎孔	7
29	管玉	完形	碧玉	暗緑	2.30	0.80	0.80	0.40	0.10	0.30	3.068	迎孔	7
30	管玉	完形	碧玉	暗緑	1.70	0.80	0.80	0.20	0.10	0.27	2.467	迎孔	7
31	管玉	完形	碧玉	暗緑	1.60	0.60	0.51	0.20	0.10	—	1.059	片面	7
32	管玉	完形	碧玉	暗緑	1.80	0.90	0.80	0.40	0.18	—	2.754	片面	7
33	管玉	一部欠損	碧玉	緑灰	1.65	0.55	0.55	0.27	0.10	—	0.900	片面	7
34	管玉	一部欠損	碧玉	淡灰	1.60	0.46	0.46	0.27	0.15	—	0.558	片面	7
35	管玉	完形	碧玉	暗緑	2.50	0.80	0.80	0.35	0.15	0.35	3.647	迎孔	7
36	管玉	完形	碧玉	暗緑	2.40	0.90	0.88	0.25	0.08	0.30	3.986	迎孔	7
37	管玉	完形	碧玉	暗緑	2.80	0.90	0.92	0.40	0.15	—	4.170	片面	8

表８　　腰折１号墳玄室内出土遺物観察表　装身具（ガラス玉・臼玉）

実測番号	器　種	残　存	材　質	色	法　量				備　考	図版
					直径 (cm)	孔径 (cm)	高さ (cm)	重さ (g)		
38	ガラス玉	完形	ガラス	淡青	0.50	0.20	0.42	0.143	d 群	7
39	ガラス玉	完形	ガラス	淡青	0.48	0.15	0.20 ～ 0.29	0.091	d 群	7
40	ガラス玉	完形	ガラス	淡青	0.45	0.15	0.20	0.062	d 群	7
41	ガラス玉	完形	ガラス	淡青	0.42	0.10	0.40	0.095	d 群	7
42	ガラス玉	完形	ガラス	淡青	0.45	0.15	0.22	0.069		7
43	ガラス玉	完形	ガラス	淡青	0.45	0.15	0.18 ～ 0.24	0.062		7
44	ガラス玉	完形	ガラス	淡青	0.35	0.15	0.27	0.046		7
45	ガラス玉	完形	ガラス	淡青	0.40	0.10	0.30	0.066		7
46	ガラス玉	完形	ガラス	淡青	0.45	0.15	0.20	0.046		7
47	ガラス玉	完形	ガラス	淡青	0.41	0.10	0.22	0.047	d 群	7
48	ガラス玉	完形	ガラス	淡青	0.40	0.10	0.30	0.057		7
49	ガラス玉	完形	ガラス	淡青	0.30	0.15	0.17	0.027	d 群	7
50	ガラス玉	完形	ガラス	淡青	0.30	0.10	0.20	0.021		7
51	ガラス玉	完形	ガラス	淡青	0.30	0.10	0.30	0.028	c 群	7
52	ガラス玉	完形	ガラス	淡青	0.26	0.08	0.25	0.023	d 群	7
53	ガラス玉	完形	ガラス	淡青	0.31	0.15	0.16	0.019		7
54	ガラス玉	完形	ガラス	淡緑	0.32	0.10	0.18	0.027	d 群	7
55	ガラス玉	完形	ガラス	淡緑	0.22	0.07	0.12	0.007		7
56	ガラス玉	完形	ガラス	濃青	0.93	0.21	0.66	0.638		7
57	ガラス玉	完形	ガラス	濃青	0.70	0.15	0.50	0.319		7
58	ガラス玉	完形	ガラス	濃青	0.50	0.20	0.24	0.090	d 群	7
59	ガラス玉	完形	ガラス	濃青	0.42	0.18	0.30	0.063	c 群	7
60	ガラス玉	完形	ガラス	濃青	0.30	0.10	0.18	0.030		7
61	ガラス玉	完形	ガラス	濃青	0.30	0.18	0.22	0.023		7
62	ガラス玉	完形	ガラス	濃青	0.35	0.20	0.23	0.047		7
63	臼玉	完形	滑石	灰白	0.43	0.19	0.15	0.037		7
64	臼玉	完形	滑石	灰白	0.40	0.20	0.20	0.043		7

表９　　腰折１号墳玄室内出土遺物観察表　装身具（耳環）

実測番号	器種	残存	材質	法　量				備考	図版
				長さ (cm)	幅 (cm)	厚さ (cm)	重さ (g)		
65	耳環	完形	銅芯銀板張り	2.6	2.8	0.6	8.50	c 群	7
66	耳環	完形	銅芯銀板張り	2.6	2.9	0.4 ～ 0.6	8.06	c 群	7

表 10　　腰折１号墳玄室内出土遺物観察表　鉄製品（鏃）

実測番号	種類	残存	材質	法　量							備考	図版
				全長 (cm)	身部長 (cm)	身部幅 (cm)	身部厚 (cm)	頸部長 (cm)	茎部長 (cm)	重さ (g)		
67	有茎式長三角形鏃	茎の一部欠損	鉄	(9.70)	(4.20)	(2.10)	0.60	—	(4.50)	15.74	平根無頸	7
68	有茎式長三角形鏃	茎の一部欠損	鉄	(9.10)	(3.70)	(2.90)	0.50	3.80	(1.60)	18.12	平根短頸	7
69	有茎式長三角形鏃	身部先、茎の一部欠損	鉄	(7.35)	(1.95)	(2.50)	(0.30)	—	(5.40)	13.21		7
70	有茎式方頭鏃	茎部欠損	鉄	(6.20)	—	—	—	(5.40)	(0.80)	13.81	平根無頸	7
71	有茎式方頭鏃	身部先、茎の一部欠損	鉄	(9.20)	(1.20)	(2.40)	(0.25)	—	(8.00)	13.85	平根有頸	7
72	長頸鏃	身部先、茎の一部欠損	鉄	(9.90)	(1.30)	(1.40)	(0.30)	(8.60)	—	7.72	平根	7
73	長頸鏃	身部、頸部の一部、茎端部欠損	鉄	(4.90)	—	—	—	(2.90)	(2.00)	6.15		7
74	長頸鏃	身部、頸部の一部欠損	鉄	(7.60)	—	—	—	(4.50)	3.10	6.70		7
75	長頸鏃	身部先、茎の一部欠損	鉄	(6.40)	—	—	—	(3.90)	(2.50)	8.32		7

表 11　腰折１号墳玄室内出土遺物観察表　鉄製品（馬具）

番号	器種	形態	残存	材質	法　量（鏡板）		法　量（銜部）		備考	図版
					直径 (cm)	厚さ (cm)	長さ (cm)	厚さ (cm)		
76	轡	素環	一部欠損	鉄	6.30	0.60	14.90	0.60		7

表 12　腰折１号墳玄室内出土遺物観察表　鉄製品（農工具ほか）

番号	器種	残存	材質	法　量				備考	図版
				長さ (cm)	幅 (cm)	厚さ (cm)	重さ (g)		
77	鋤鍬先	一部欠損	鉄	16.00	18.40	0.80 ～ 1.40	303.66		8
78	鋤鍬先	一部欠損	鉄	(19.10)	(20.3)	0.80 ～ 1.60	154.65		8
79	鎌	ほぼ完形	鉄	17.70	3.30	0.74	89.09		8
80	鎌	ほぼ完形	鉄	9.20	2.70	0.38	24.555		8
81	鎌	一部欠損	鉄	(11.20)	2.20	0.40	427.27		8
82	鉄斧	一部欠損	鉄	(12.10)	3.40 ～ 3.80	2.65			8
83	鑿	一部欠損	鉄	(28.10)	1.10 ～ 2.60	3.10			8
84	刀子	刃部、茎部など一部欠損	鉄	(14.80)	(1.25 ～ 1.65)	0.45 ～ 0.52	25.45		8
85	刀子	刃部、茎部など一部欠損	鉄	(11.40)	1.00 ～ 1.65	0.40	19.66		8
86	刀子	刃部、茎部欠損	鉄	(6.60)	(1.3 ～ 1.7)	0.85	9.22	柄部木質	8
87	刀子	刃部、茎部欠損	鉄	(5.60)	(1.60)	(1.34)	9.25	柄部鹿角	8
88	刀子	刃部、茎部欠損	鉄	(4.5)	(1.50)	(1.20)	7.17	柄部鹿角	8
89	鉋	刃部、茎部など一部欠損	鉄	(9.80)	(1.80)	(1.10)	21.07	柄部木質	8
90	釘	頭部欠損	鉄	(9.30)	1.80	1.10	16.52		8
91	釘	欠損	鉄	(2.50)	0.50	0.50	1.46	木質付着	8

表 13　腰折２号墳玄室内出土遺物観察表　土製品（1）

実測番号	器種	法量（cm）		形態・施文	調　整		色調（外面）（内面）	胎土（mm）焼成	備考	図版
					外面	内面				
92	蓋	口径 器高	9.9 3.4	天井部中央に宝珠形のつまみが付く。内面の口縁端部近くにかえりをもつ。かえりは、口縁部よりも下方に突出する。	口横ナデ 天ヘラ削り→ナデ	坏横ナデ、ナデ 脚ナデ、回転ナデ	灰色 N4/0 灰色 N5/0	石・長・黒 (0.5～3) ◎		12
93	坏身	口径 器高	9.2 3.9	やや外反する口縁部。口縁端部は丸くおさめ、底部と体部の境界に凹線が一条巡る。底部外面は粘土ひもの痕跡を残す。	口横ナデ 底ヘラ削り→ナデ	回転ナデ	灰色 N5/0 灰色 N4/0	長石(1～3) ◎		12
94	坏身	口径 器高	11.2 5.0	内湾して上方に立ち上がる口縁部。口縁端部は丸くおさめる。底部は粘土の凸面があり不安定。	口横ナデ 底横ヘラ削り→ナデ	回転ナデ	灰色 N6/0 灰色 N7/0	長石(1～2) ◎		12
95	無蓋高坏	口径 器高 底径	10.4 8.9 7.9	坏底部と口縁部の境に凹線を巡らす。脚柱は中央部に１条の凹線を巡らす。脚裾は水平に開き、脚端部は下方にのびる。	口横ナデ 坏底ヘラ削り 脚回転ナデ	坏回転ナデ 脚回転ナデ	暗青灰色 N3/0 青灰 5B4/1	長石(1～3) ○		12
96	無蓋高坏	口径 残高	12.9 6.5	外上方に立ち上がる口縁部。口縁端部は丸くおさめる。外面は口縁部、坏底部との境に段がつく。脚部は欠失する。	口回転ナデ 坏底回転ヘラ削り	坏回転ナデ、ナデ	灰色7.5Y6/1 灰色7.5Y6/1	長石(0.5～3)		
97	無蓋高坏	口径 残高	8.8 3.7	坏底部と口縁部の境に凹線を巡らす。口縁端部は丸くおさめる。脚部は欠損。	口横ナデ 坏底ヘラ削り	坏回転ナデ	灰色 N6/0 灰色 N6/0	石・長(1～2) ◎	内面自然釉	
98	長頸壺	口径 残高	6.4 11.5	頸部～口縁部片。頸部は外傾して立ち上がり口縁部は短く外反する。口縁端部は丸くおさめる。頸部に２条の凹線が巡る。	口横ナデ	口横ナデ	灰色 5Y7/1 灰色 5Y8/1	石・長・黒 (0.5～4) ◎		13
99	長頸壺	残高	8.3	体部片。98 と同一個体と考えられる。底部は欠失する。肩部の文様帯に櫛状工具による斜位の刺突文を施す。	体上回転ナデ 体下一部カキ目→横ナデ	回転ナデ	灰色 N6/0 灰色 N5/0	石・長・黒 (0.5～5) ◎		
100	広口壺	口径 残高	(12.8) 2.3	口縁部片。外反する口縁部。口縁端部は外に肥厚して丸くおさめる。	口横ナデ	口横ナデ	灰色 N5/0 灰色 N6/0	石・長(1～2) ◎		
101	有蓋短頸壺	口径 器高	14.5 4.6	口縁部は直立して短くのびる。口縁端部は外方に肥厚して丸い。肩部に１条の凹線を巡らし、体部上半にヘラ記号を施す。	口横ナデ 体上回転ナデ 体下回転ヘラ削り	回転ナデ	灰色 N6/0 灰色 N6/0	石・長(1～4) ◎	ヘラ記号	12

表 13　腰折２号墳玄室内出土遺物観察表　土製品（2）

実測番号	器種	法量（cm）		形態・施文	調整 外面	調整 内面	色調（外面）（内面）	胎土（mm）焼成	備考	図版
102	平瓶	口径 器高	(6.9) 13.0	口縁部は漏斗状となる。体部上面は扁平で肩部と体部の境には明確な稜を有する。底部は平坦に仕上げる。	口横ナデ 体上回転ナデ 体下回転ヘラ削り	回転ナデ、ナデ	灰白色5Y7/1 灰白色5Y7/1	石・長(1～2) ◎	須恵器融着	12
103	平瓶	口径 器高	(6.6) 13.3	口縁部は漏斗状で少し焼け歪みがみられる。体部上面は扁平で、底部は平坦に仕上げられている。	口横ナデ 体上回転ナデ 体下回転ヘラ削り	回転ナデ、ナデ	灰白色5Y7/2 灰白色7.5Y7/1	石・長(1～3) ◎		12
104	平瓶	口径 器高	(6.6) 12.1	口縁部は直立気味に立ち上がる。口縁部と体部の接合部は窪む。底部は平坦に仕上げる。体部 1/3 は欠失。	口横ナデ 体上回転ナデ 体下回転ナデ	回転ナデ、ナデ	灰白色2.5Y7/1 灰白色2.5Y7/1	石・長・黒 (0.5～3) ◎		13
105	平瓶	口径 残高	(5.1) 9.6	口縁部は漏斗状である。口縁基部の外面は強い横ナデにより凹線状の痕跡を残す。体部の一部と底部は欠失。	口横ナデ 体上回転ナデ 体下回転ヘラ削り	回転ナデ、ナデ	灰白色2.5Y7/1 灰白色2.5Y7/1	石・長・黒 (0.5～3) ◎		13
106	円筒埴輪	口径 残高	(28.8) 10.9	口縁部片。外傾して上方に立ち上がる口縁部。口縁端部は面をもつ。タガは低く断面はM字状を呈する。	斜位のハケ目	ナデ	橙色 7.5YR6/6 橙色 7.5YR6/6	石・長・黒・金 (1～10) ◎		13
107	土師皿	口径 器高	8.9 1.4	口縁端部は丸くおさめる。口縁端部直下の内面は強い横ナデによって凹む。底部の切り離しは僅かに糸切痕跡を残す。	ナデ	ナデ	明黄褐 10YR6/6 明黄褐 10YR6/6	石・長・金 (1～4) ◎		14
108	瓦器椀	口径 器高	17.0 5.4	内湾して立ち上がる口縁部。口縁端部は丸くおさめる。高台は内側に段をもち外側で接地する。	ナデ→ミガキ	ナデ→ミガキ	灰色 N 6/0 灰色 N 5/0	長(1～3) ◎		14

表 14　腰折２号墳玄室内出土遺物観察表　装身具（耳環）

番号	器種	残存	材質	法量 長さ(cm)	法量 幅(cm)	法量 厚さ(cm)	法量 重さ(g)	備考	図版
109	耳環	完形	銅芯金張り	1.90	1.80	0.40	3.16		13
110	耳環	完形	銅芯金張り	1.90	2.05	0.45	3.22		13

表 15　腰折２号墳玄室内出土遺物観察表　鉄製品

番号	器種	残存	材質	法量 長さ(cm)	法量 幅(cm)	法量 厚さ(cm)	法量 重さ(g)	備考	図版
111	刀子	刃部一部と茎部欠損	鉄	(9.10)	(2.30)	(0.78)	16.84		13
112	刀子	茎部	鉄	(4.60)	(1.35)	(0.80)	8.25		
113	吊り金具	一部欠損	鉄	4.70	2.70	0.68	3.62		13
114	両頭金具	頭部	鉄	(1.60)	(0.60)	(0.57)	1.01	土洗浄出土	13
115	両頭金具	頭部	鉄	(2.40)	0.80	0.55	1.76		13
116	釘	頭部	鉄	(3.10)	0.90	0.60	2.45		13
117	釘	頭部	鉄	(2.01)	0.70	0.40	1.15	土洗浄出土	13
118	釘	頭部	鉄	(1.60)	0.40	0.50	1.97	土洗浄出土	13
119	釘	頭部	鉄	(2.50)	0.75	0.78	2.26		
120	釘	頭部	鉄	(2.10)	0.40	0.50	1.74		
121	釘	頭部欠損	鉄	(2.00)	1.00	0.76	2.20		
122	釘	頭部欠失	鉄	(6.00)	0.70	0.70	4.72		13
123	釘	頭部欠失	鉄	(4.80)	0.50	0.70	5.51		13
124	釘	頭部欠失	鉄	(3.50)	0.68	0.67	2.06		
125	釘	頭部欠失	鉄	(3.50)	0.55	0.50	1.54	土洗浄出土	
126	釘	頭部欠失	鉄	(5.50)	0.70	0.75	5.33		13
127	釘	頭部欠失	鉄	(3.50)	0.76	0.50	1.86		
128	釘	頭部欠失	鉄	(3.80)	0.50	0.48	1.75	右側壁抜跡	

表 16　腰折２号墳墓道出土遺物観察表　土製品

実測番号	器種	法量（cm）		形態・施文	調整 外面	調整 内面	色調（外面）（内面）	胎土（mm）焼成	備考	図版
129	蓋	口径 器高	9.8 2.9	天井部中央に宝珠形のつまみがつく。口縁部内面のかえりは口縁端部よりも突出しない。	天ヘラ削り→ナデ 口横ナデ	回転ナデ、ナデ	灰色 N 6/0 灰色 N 5/0	石・長・黒 （0.5～1） ◎	ヘラ記号	14
130	蓋	口径 器高	9.4 2.3	扁平な天井部。天井部中央につまみの接合痕跡を残す。口縁部内面のかえりは口縁端部よりも突出しない。	天ヘラ削り→ナデ 口横ナデ	回転ナデ、ナデ	灰色 N 5/0 灰色 N 5/0	石・長・黒 （0.5～1） ◎	天井部につまみ接合痕跡	14
131	坏	口径 器高	9.8 4.1	底部は丸く不安定。口縁部は外上方に開き、口縁端部は丸くおさめる。	天ヘラ削り→ナデ 口横ナデ	回転ナデ、ナデ	灰白色 2.5Y8/2 灰白色 2.5Y8/2	石・長・黒 （0.5～1） ○		14
132	無蓋高坏	口径 器高 底径	（15.2） （11.1） （9.9）	坏部は内湾して外方に立ち上がる。口縁端部は丸くおさめる。脚裾は外方に開き、裾端部は下方に拡張して接地する。	口横ナデ 坏底ヘラ削り 脚回転ナデ	坏横ナデ	灰白色 5Y7/1 灰白色 5Y7/2	石・長・黒 （1～2） ○		14
133	甕	口径 残高	（11.6） 3.0	口縁部片。口縁端部は丸くおさめる。頸部と口縁部境に凹線が巡る。	口横ナデ	口横ナデ	灰白色 5Y7/1 灰色 5Y6/1	石・長・黒 （0.5～1） ◎		

表 17　腰折２号墳周溝出土遺物観察表　土製品

実測番号	器種	法量（cm）		形態・施文	調整 外面	調整 内面	色調（外面）（内面）	胎土（mm）焼成	備考	図版
134	坏身	口径 器高	9.9 9.1	内傾して立ち上がる口縁部。口縁端部は丸くおさめる。受部は短く水平にのびる。底部は欠失。	口横ナデ 坏底ヘラ削り	坏底横ナデ、ナデ	青灰色 5B 6/1 青灰色 5B 5/1	石（0.5～2） 長（0.5～6） ◎		14
135	壺	口径 残高	（15.5） 9.2	肩～口縁部片。短く外反する口縁部。口縁端部は面をもつ。	口→頸横ナデ 肩タタキ	口横ナデ 頸ナデ 肩タタキ→ナデ	灰色 5Y5/1 青灰色 5PB5/1	石・長・黒 （1.5～7） ○		14
136	甕	口径 残高	（18.1） 7.5	肩～口縁部片。外反して上方に立ち上がる口縁部。口縁端部はやや肥厚して丸くおさめる。	口横ナデ 肩タタキ→カキ目	口横ナデ 頸横ナデ 肩タタキ	灰色 N 6/0 灰色 N 5Y6/1	石・長・黒 （1.0～2.0） ○		14
137	甕	口径 残高	（15.5） 9.2	肩～口縁部片。短く外反する口縁部。口縁端部は面をもつ。	口→頸横ナデ 肩タタキ	口横ナデ 頸ナデ 肩タタキ→ナデ	灰色 5Y5/1 青灰色 5PB5/1	石・長・黒 （1.5～7） ○		14
138	甕	口径 残高	（49..6） 3.1	口縁部片。口縁端部は上下に拡張する。口縁端部の直下外面に２条の凹線が巡る。	口横ナデ	口横ナデ	暗青灰 5B4/1 青灰 5B5/1	石・長・黒 （0.5～5） ○		14

表 18　腰折３号墳石室内出土遺物観察表　土製品

実測番号	器種	法量（cm）		形態・施文	調整 外面	調整 内面	色調（外面）（内面）	胎土（mm）焼成	備考	図版
139	蓋	口径 残高	（9.8） 2.9	口縁部片で残存 1/3。天井部は欠失する。天井部と口縁部の境は沈線が巡る。口縁端部は丸くおさめる。	口回転ナデ	回転ナデ	灰色 10Y6/1 灰白色 7.5Y7/1	石・長 （1～3） ◎		16
140	蓋	口径 器高	11.6 4.1	扁平な天井部。口縁部は端部近くで短く外反する。端部は丸くおさめる。	天ヘラ削り→ナデ 口回転ナデ	回転ナデ	灰色 7.5Y6/1 灰色 5Y 6/1	石・長 （1～4） ◎		16
141	蓋	口径 器高	10.2 3.7	扁平な天井部。口縁端部は端部近くで肥厚し、丸くおさめる。	天ヘラ削り→ナデ 口回転ナデ	回転ナデ	灰オリーブ色 灰色 5Y6/1	石・長 （1～5） ○		16
142	坏身	口径 器高	（10.0） 4.9	底部は平坦である。底部に外面に粘土の小塊が付着する。たちあがりは短く端部は尖り気味。坏部は比較的深い。	口回転ナデ 坏底ヘラ削り	回転ナデ 坏底指頭痕あり	灰色 N6/0 灰色 N5/0	石・長・黒 （1～2） ○		16
143	平瓶	口径 残高	（7.4） 4.2	残存 1/3 の口縁部片。漏斗状の口縁部。口縁端部は丸くおさめる。	回転ナデ	回転ナデ	灰白色 5Y7/1 灰白色 5Y7/1	石・長（1～3） ◎		16
144	台付椀	口径 器高 底径	10.4 11.5 8.4	体部は内湾して立ち上がる。体部に２条の凹線を施し、脚外面には１条の圏線を巡らす。脚端は下方に拡張して接地する。	体→ヘラ削り 脚→回転ナデ	体→回転ナデ 脚→回転ナデ	灰色 N6/0 灰色 N6/0	石・長 （1～3） ◎		16
145	台付椀	口径 器高 底径	9.9 13.2 9.3	体部は内湾して立ち上がり、短く上方にのびる口縁部。体部には1条の凹線を施す。脚端は上下に拡張する。	体→回転ナデ 底→ヘラ削り 脚→回転ナデ	体→回転ナデ 脚→回転ナデ	灰色 N6/0 灰色 N6/0	石・長・金 （1～3） ◎		16
146	甕	口径 残高	（23.4） 6.0	残存1/4の口頸部片。頸部から外反して立ち上がる口縁部。口縁端部は外側に肥厚する。	回転ナデ	回転ナデ	灰色 N4/0 灰色 N6/0	石・長（1～3） ◎		16
147	土師器椀	残高	5.0	底部から体部にかけての破片。口縁部は欠失。丸味をもった平底の底部。底部内面の中央部は凹む。	回転ナデ、ナデ	ナデ、回転ナデ	鈍い黄橙 10YR7/4 鈍い黄橙 10YR7/4	石・長（1～2） ○		

表 19　腰折 3 号墳玄室内出土遺物観察表　装身具（耳環）

実測番号	器種	残存	材質	法量				備考	図版
				長さ (cm)	幅 (cm)	厚さ (cm)	重さ (g)		
148	耳環	完形	銅芯金張り	2.10	2.00	0.69	5.16	剝離が著しい。	16

表 20　腰折 3 号墳玄室内出土遺物観察表　鉄製品

実測番号	器種	残存	材質	法量				備考	図版
				長さ (cm)	幅 (cm)	厚さ (cm)	重さ (g)		
149	鏃	茎の一部	鉄	(5.00)	(1.60)	(0.60)	(5.12)		16
150	鏃	茎の一部	鉄	(4.00)	(1.40)	(0.60)	(5.65)	他の個体が付着	16

表 21　A 区その他出土遺物観察表　土製品

実測番号	器種	法量（cm）		形態・施文	調整		色調（外面）（内面）	胎土（mm）焼成	備考	図版
					外面	内面				
151	蓋	口径 器高	(16.9) 3.35	口縁部片で天井部は欠失する。天井部と口縁部を分ける稜は失われる。口縁端部は尖り気味。	口横ナデ	口横ナデ	灰色 7.5Y3/1 灰色 10Y5/1	石・長(1～4) ◎		
152	有蓋短頸壺	口径 残高	(7.9) 7.2	肩の張る体部。口縁部は直立して短くのびる。口縁端部は丸くおさめる。	口横ナデ 体上横ナデ	回転ナデ	暗青灰色 10BG4/1 暗青灰色 5B4/1/0	石・長(0.5～4) ◎		
153	提瓶	口径 残高	－ 8.7	口縁端部は欠失する。№154 と同一個体か？	口回転ナデ 体カキ目	回転ナデ、ナデ	灰色 10Y5/1 灰色 10Y5/1	石・長(0.5～5) ◎		
154	提瓶	口径 残高	－ 11.5	把手部は欠失する。№153 と同一個体か？	体カキ目	回転ナデ、ナデ	灰色 10Y5/1 灰色 10Y5/1	石・長(0.5～5) ◎		

表 22　B 区腰折 4 号墳石室内出土遺物観察表　土製品

実測番号	器種	法量（cm）		形態・施文	調整		色調（外面）（内面）	胎土（mm）焼成	備考	図版
					外面	内面				
155	有蓋短頸壺	口径 器高	8.2 7.4	肩の張る体部。口縁部はやや内傾して短くのびる。口縁端部は丸くおさめる。底部内面に粘土ひも巻上げ痕跡を残す。	口横ナデ 体横ナデ 底ヘラ削り	回転ナデ、ナデ	灰色 N 6/0 灰色 N 6/0	石・長(1～3) ◎		17

表 23　B 区その他出土遺物観察表　土製品

実測番号	器種	法量（cm）		形態・施文	調整		色調（外面）（内面）	胎土（mm）焼成	備考	図版
					外面	内面				
156	蓋	口径 器高	(15.3) 4.35	天井部と口縁部の境は凹線で分けられる。天井部は平坦で、口縁端部は段をもつ。	天ヘラ削り 口横ナデ	回転ナデ	黄灰色 2.5Y6/1 灰色 7.5Y6/1	石・長(1～5) ◎		
157	無蓋高坏	口径 残高	(15.7) 4.2	脚部は欠失。内湾して上方にのびる口縁部。口縁端部は丸くおさめる。	口横ナデ	口横ナデ	灰オリーブ 5Y6/2 灰オリーブ 5Y6/2	石・長・黒 (0.5～2) ◎		
158	瓶	口径 器高	(13.0) 13.8	太い頸部から段を有し大きく開く口縁部。肩部に円孔が穿たれる。底部は丸く不安定。	口横ナデ 体上横ナデ 体下底ヘラ削り	口横ナデ 体上横ナデ 底横ナデ、ナデ	口紫灰5P6/1 青灰色5PB6/1 青灰色5PB6/1	石・長(0.5～4) ◎		18
159	瓶	残高	13.3	口縁部は欠失する。小さく平坦な底部。体部最大径は中央部で測る。頸部は外傾して上方にのびる。	口横ナデ 体上横ナデ 底ヘラ削り	頸横ナデ 体～底横ナデ	灰色 N6/0 灰色 N4/0	石・長(1～3) ◎		18
160	壺	残高	(15.0)	口縁部と底部は欠失する。体部から肩部にかけての破片。体部は球形を呈する。	体カキ目 底ヘラ削り	体横ナデ 底横ナデ、ナデ	灰色 N6/0 オリーブ灰 2.5Y6/1	石・長(0.5～5) ◎		
161	甕	口径 残高	(17.3) 24.9	体部から口縁部片。底部は欠失する。口縁端部は上下に拡張する。体部は球形を呈する。	口頸板状工具による斜位のナデ 体タタキ→カキ目	口横ナデ 頸ナデ、回転ナデ 体同心円タタキ	灰白色 5Y7/1 灰白色 5Y7/1	石・長(1～4) ◎		19
162	甕	口径 残高	(21.8) 8.3	外反する口縁部。口縁端部は肥厚して丸くおさめる。	口横ナデ 体タタキ→カキ目	口横ナデ 頸ナデ、回転ナデ 体同心円タタキ	灰色 7.5Y6/1 灰色 5Y6/1	石・長(0.5～4) ◎		18
163	大甕	口径 残高	(48.8) 47.7	口縁端部は上下に肥厚し、端部外面は丸味をもった面をもつ。口縁部の文様帯には上下 2 段の波状文が施される。	口カキ目 体格子状タタキ	口横ナデ 体同心円タタキ	口暗青灰5B4/1 青灰色5BY5/1 灰色N5/0	石・長(0.5～4) ◎		19
164	大甕	口径 残高	(29.4) 50.0	外反する口縁部。口端外面直下に断面三角形の突帯を巡らす。口縁部の文様帯には上下 2 段の波状文を施す。	口横ナデ 体縦位のタタキ	口横ナデ 体同心円タタキ	口暗灰色N3/0 灰色2.5Y6/1 灰色2.5Y6/1	石・長(1～2) ◎		19

第Ⅳ章　下難波腰折遺跡２次調査

第１節　調査に至る経緯

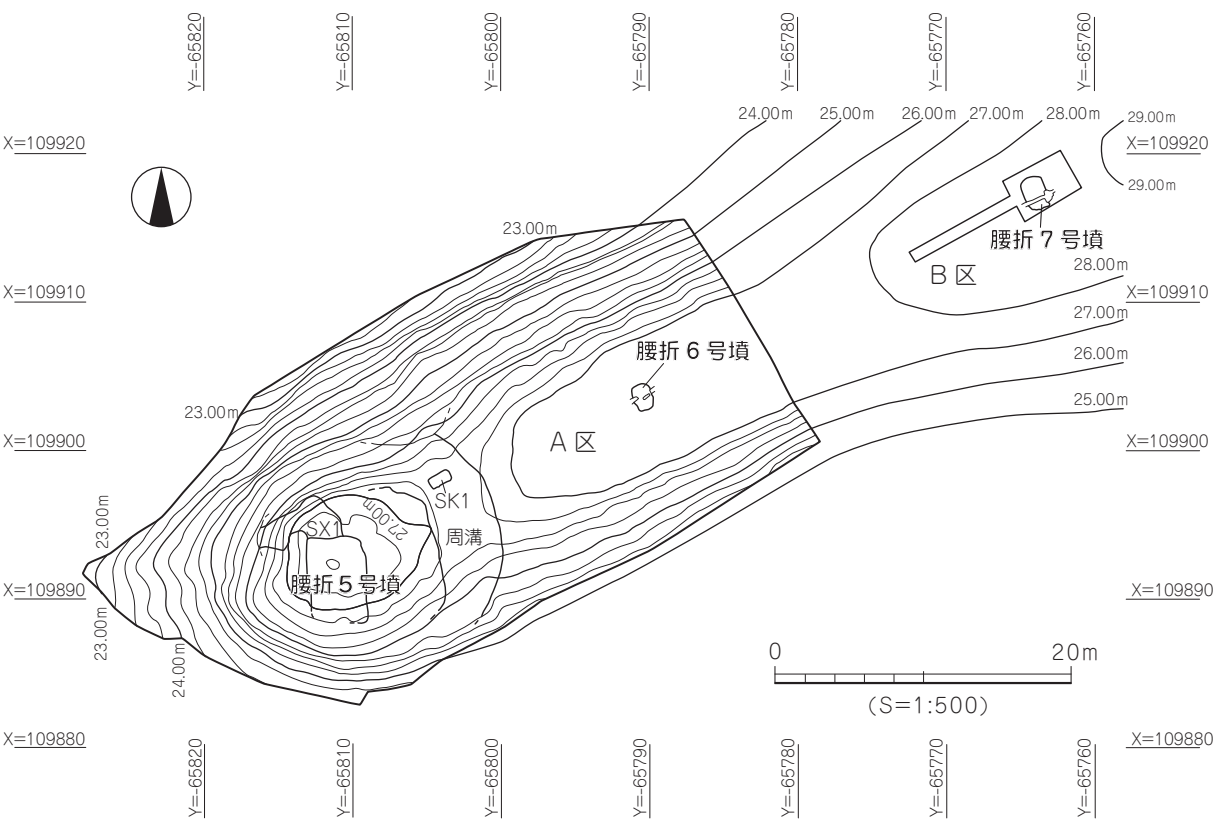
本調査は、松山市埋蔵文化財包蔵地外における農地中間管理機構関連農地整備事業「下難波地区農地整備工事」に伴う2回目の事前調査である。

平成 30（2018）年 12 月 21 日、申請者より下難波地内における埋蔵文化財の確認申込書が、松山市教育委員会文化財課（以下、文化財課という）に提出された。申請地全体の面積は 91,739㎡、地目は畑、田である。現況は、ミカン栽培地のほか成長の早い樹木が生い茂る林地となっている。

周辺の遺跡には、南側に下難波古墳群、西側に市指定史跡の十八人塚古墳や新城古墳群、東側から北にかけては主に弥生時代の遺跡である三島ヶ谷遺跡、腰折山東遺跡などの包蔵地が知られており、申請地はそれらの包蔵地に囲まれた遺跡の空白地帯となっている。

これらのことから、文化財課では埋蔵文化財の有無や遺跡の範囲を確認するため試掘調査を行う事となった。試掘調査は、公益財団法人文化・スポーツ振興財団埋蔵文化財センター（以下、埋文センターという）が委託を受け､平成 31（2019）年２月６日（水）～同年３月１日（金）の間に実施した。調査は掘削場所の樹木の伐採を行ったのち、重機や手掘りで 54 ヶ所に及ぶトレンチの掘削を実施した。このうち、腰折山南麓の尾根上と上池に接する尾根先端部の二ヶ所で、古墳の盛土と思われる土層や古墳の石材などが見つかったほか、須恵器や埴輪などが出土し遺跡の存在が確認された。

この結果を受け、埋文センターと申請者及び関係者は発掘調査についての協議を行い、工事によっ

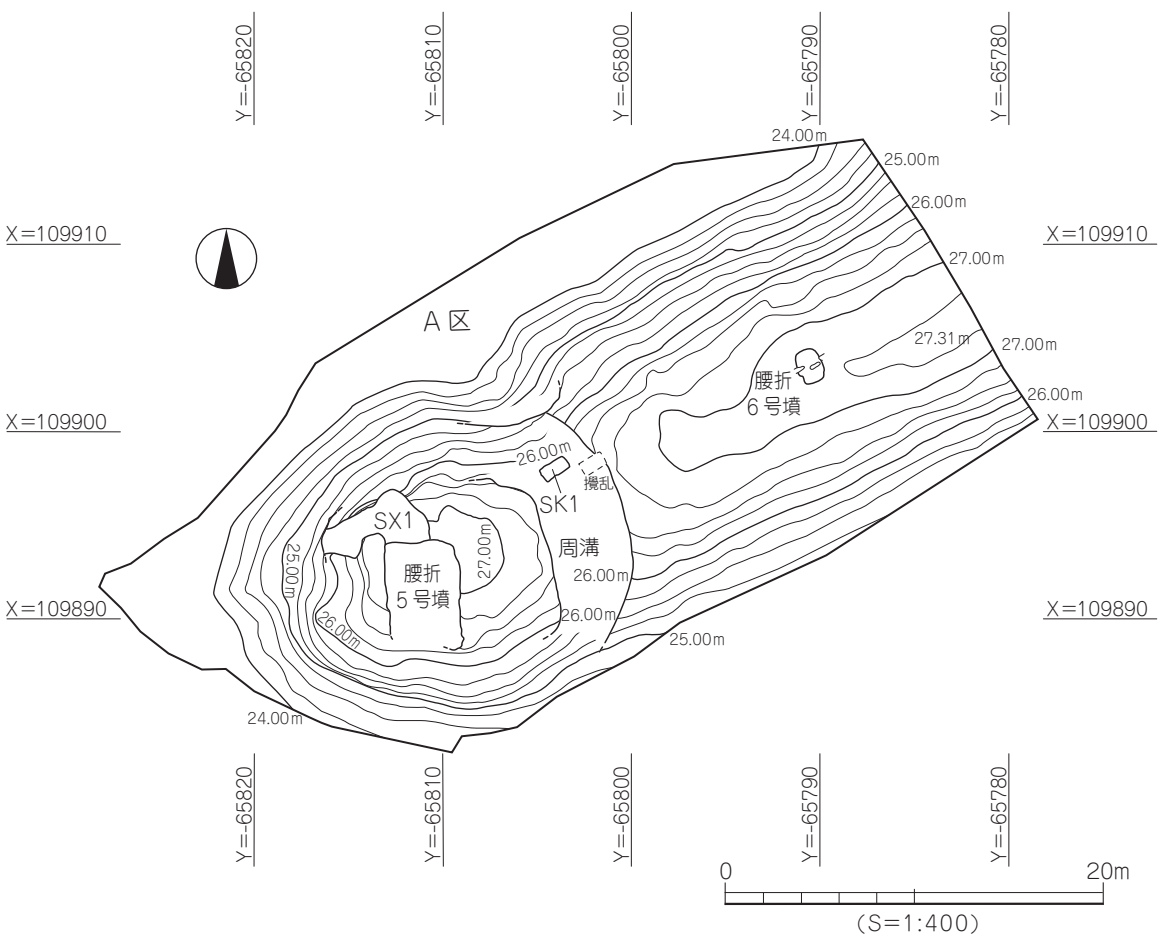


第 34 図　調査区位置図及び遺構配置図

て失われるこの二カ所について記録保存のため発掘調査を実施することになった。調査は一ヵ所ずつ行う事となり、まず令和元年度に申請者と埋文センターとが委託契約を結び、腰折山南麓の遺跡名を「下難波腰折遺跡 1 次調査」として令和元（2019）年 10 月 15 日（火）～令和 2（2020）年 1 月 31 日（金）の間に調査を実施した。今回は 2 回目の調査であることから「下難波腰折遺跡 2 次調査」として令和 2（2020）年 10 月 15 日（木）～令和 2（2020）年 12 月 25 日（金）の間に調査を行った。

第 2 節　調査区と検出遺構

調査地は腰折山南麓の尾根上標高 25 ～ 28m に位置し、調査前の現況はミカン栽培の農地である。地番は松山市下難波乙 9 番 41、乙 9 番 42、乙 109 番 1 の各一部で、調査面積は 1,349㎡である。調査地が所在する丘陵は、東から西に下る緩やかな斜面地で西方向に開ける。その眺望は瀬戸内に浮かぶ鹿島、野忽那島、中島、由利島などの島々を望むことができる。陽当たりは良好であるが、冬期の季節風の風当りも良好で風を遮るものも無く吹きさらしとなる。尾根の北側と南側はやや傾斜の強い斜面地となり谷部に下っている。両斜面ともミカン栽培のため造成され、標高差 10m 程の間に 1.50m 前後の間隔で段カットされ 3 段から 4 段の幅 80cm 程度の平坦面が造られている。尾根平坦部の中央部には、幅 30cm 程の溝が地山面に掘られ、尾根の先端部まで灌水のための送水パイプが通されてい



第 35 図　A 区調査後コンター測量図

第36図　腰折５号墳墳丘測量図

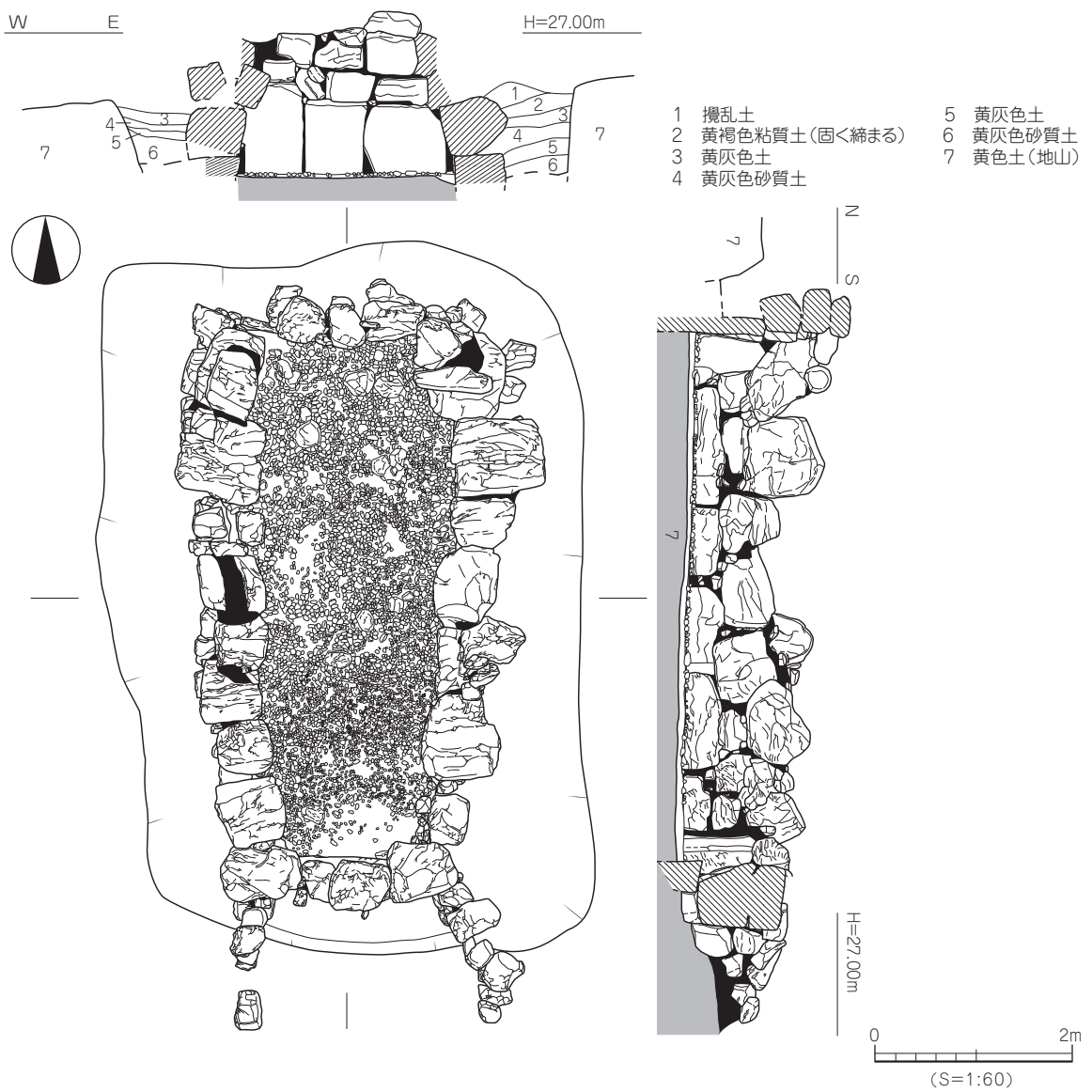
る。調査はＡ区とＢ区に分けて行なった。Ｂ区は国庫補助対象地である。Ａ区で見つかった主な遺構は古墳２基（腰折５･６号墳）、性格不明遺構（SX1）、Ｂ区で見つかった遺構は古墳１基（腰折７号墳）である。５号墳は横穴式石室、6、７号墳は石室形態不明の小さな石室である。

第３節　Ａ区の調査

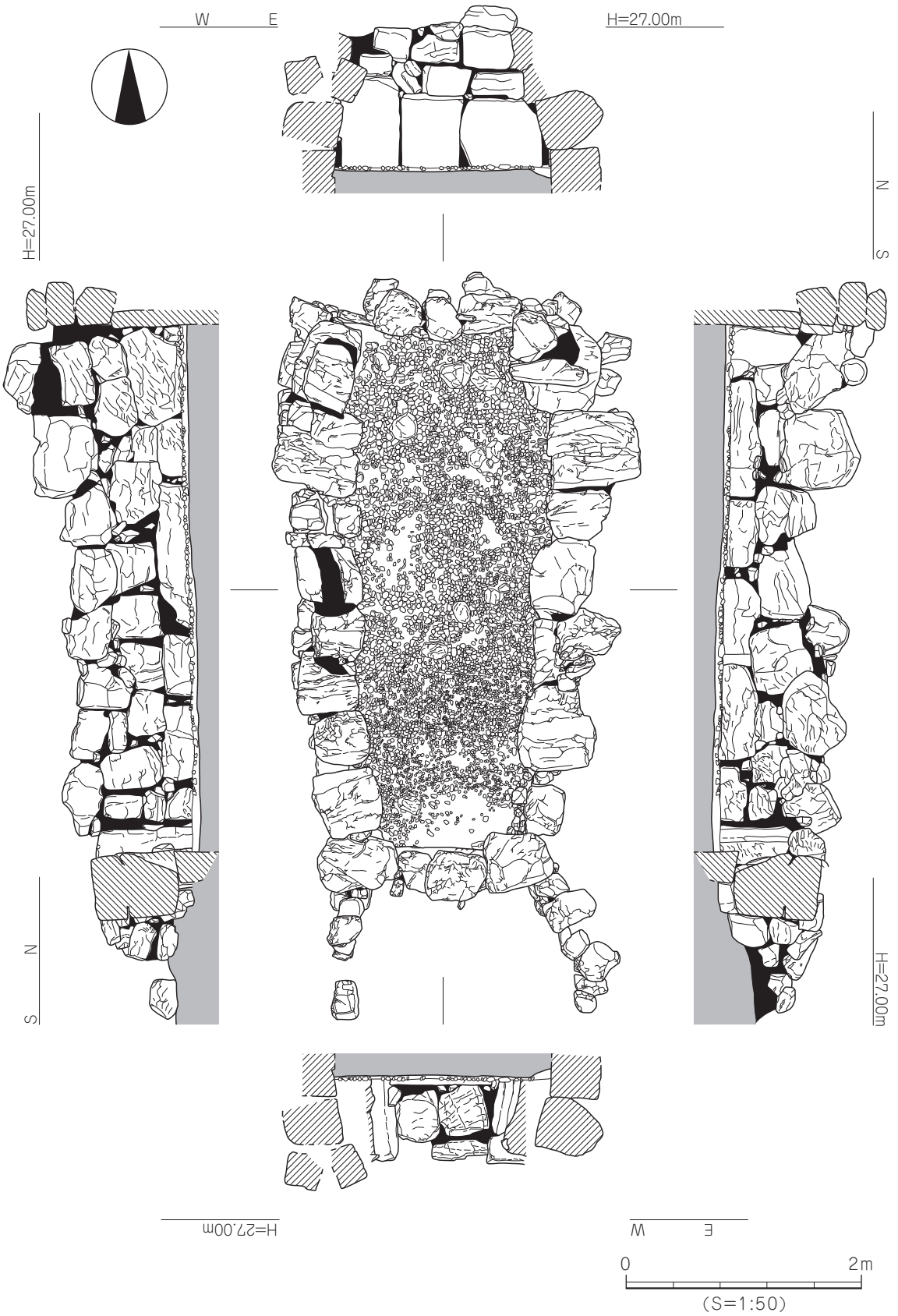
１．腰折５号墳

（１）墳丘と墳形（第 36 図）

腰折５号墳は、東から西に下る緩やかな尾根上（尾根平坦面の幅が約 6m）の傾斜変換付近に築造される。５号墳から西側は傾斜がきつくなり尾根は西側にある標高差 12m 下の上池へと下っている。墳丘東側（山側）～南側（谷側）では地山面まで削平され盛土はほとんど失われている。石室北側（谷側）～南側にかけては旧表土と考えられる黒色土層を検出した。墳丘を被覆する盛土は、この黒色土



第 37 図　腰折５号墳墓坑と石室測量図



第 38 図　腰折５号墳石室測量図

上面から施され西側と北側のベルト土層で層厚 0.2 ～ 0.5m の盛土を確認した。石室の中央部から 7m の東部には外部施設として周溝を検出している。周溝は尾根線を切るように弧状に巡り、石室の南部や北部では検出せず全周はしない。5 号墳の規模や墳形は、検出した周溝の形状と盛土の検出状況から直径 14m 前後の円墳と考えられる。

（2）墓坑（第 37 図）

墓坑は東側で地山面、西側では旧表土層と考えられる黒色土上面での検出である。尾根線上に直交して南北方向に掘られている。平面形は隅丸長方形を呈する。検出規模は主軸の南北で 5.60m、主軸の東西 3.60m、地山からの深さは主軸の奥壁側で 0.45m 以上、東西方向の主軸東側で 0.95 m以上を測る。全掘はしていない。

（3）石室（第 37・38 図）

石室は南側に開口する横穴式石室で玄室と「ハ」の字状に開く石積を伴う前庭部で構成される。羨道部と呼べるものはない。石室規模は奥壁の内側から前庭部の石積先端までで全長 5.76m を測る。主軸方位は N0゜で座標北を示す。天井石と見られる石材は石室内への落下も無く、古墳周辺でも確認できていない。壁体は 1 段から 4 段程度を残す。壁体に使用される石材は主に安山岩系であるが、石室の東側側壁の奥壁よりの 4 段目に円柱状の直径 20㎝、長さ 60cm 程の緑色片岩が 1 個だけ使用されている。石室東側の側壁 4 段目の 3 石ほどが西側に押されて石室内に落ち気味の状態であった。このことから、掘削作業の安全を図るために重機や人力によって取り除いた。

玄室規模は長さ 4.36m、幅 1.30 ～ 1.80m、残高は最大で 1.20m を測る。平面形態は羽子板状となり、奥壁から玄門部に向かって幅が少し狭くなっている。奥壁には厚さ 20cm 程度の薄い板状の石材 3 枚を立てて鏡石としている。両側壁の腰石には上部の石材に比べ横長の石材を使用している。壁体に使用される石材は全体的に大ぶりではあるが巨石とまでは言えない。

玄門部は、東西とも方柱状に石を立て突出した両袖を形成する。東側の袖石は短く 2 段積みとなっている。袖石の間には框石を置く。框石の上には閉塞石 2 段が遺存する。閉塞に使用された石材の大きさは 35 ～ 50㎝、高さ 30 ～ 40㎝を測り、比較的大きな石が使われている。

床面は直径 2.0 ～ 7.0cm の玉石を貼床（厚さ 6.0 ～ 8.0cm）上に敷き詰めて礫床としている。奥壁の西側隅の一部は敷かれていない。奥壁沿いには、赤色顔料が残る人頭大の塊石 1 個のほか、同じような大きさの塊石 4 個が不規則に置かれている。玄室内では人骨は出土していない。

前庭部側壁の石積は、玄門部袖石に連接する位置にあり、東西方向に「ハ」の字状に開くように配される。袖石部で 3 段、先端部で 1 段を残す。検出規模は玄門の仕切り外側から石積の先端まで 1.26m、幅は玄門付近で 1.40m、先端部で 1.88m を測る。石積みに使用される石材は、玄室と同じ石材であるが大きさに違いが見られ、小ぶりな石材が使用されている。前庭部からは遺物の出土は無かった。

（4）玄室内遺物出土状況（第 39 図）

床面から出土した遺物は土師器、須恵器、鉄器、装飾品がある。土師器は器形がわかるものに坏がある。須恵器は高坏、有蓋短頸壺、広口壺、瓶、提瓶、子持器台、鉄器は鉄鏃、鋤先、刀子、轡、装飾品では耳環、勾玉、管玉、切子玉、平玉、丸玉、ガラス玉などが出土している。人骨は出土していない。このほか、石室埋土中より、流れ込んだと思われる埴輪が出土している。床面から出土した遺物は完形品が多く、壊れた石室にしてはさほど盗掘の影響を受けていないものと考えられる。

遺物は奥壁側、玄室中央部やや北よりの側壁側、玄門から入った西側側壁沿いの 1m から 2m の間

第 39 図　腰折５号墳石室内出土遺物平面図

に多く出土している。

A. 土器類（第 40 ～ 43 図）

1 ～ 4 は土師質である。1 は坏。2 ～ 4 は高坏。1 は平坦な底部から内湾して立ち上がり、口縁端近くでやや外反する口縁部。端部は丸くおさめる。器壁は薄い。2 の口縁端部は欠失する。低脚で脚基部は太い。脚柱に 3 方向の円孔が施される。坏底部外面にカキ目調整が施される。3・4 は坏底部と脚柱の破片。脚柱に 3 方向の円孔が施される。

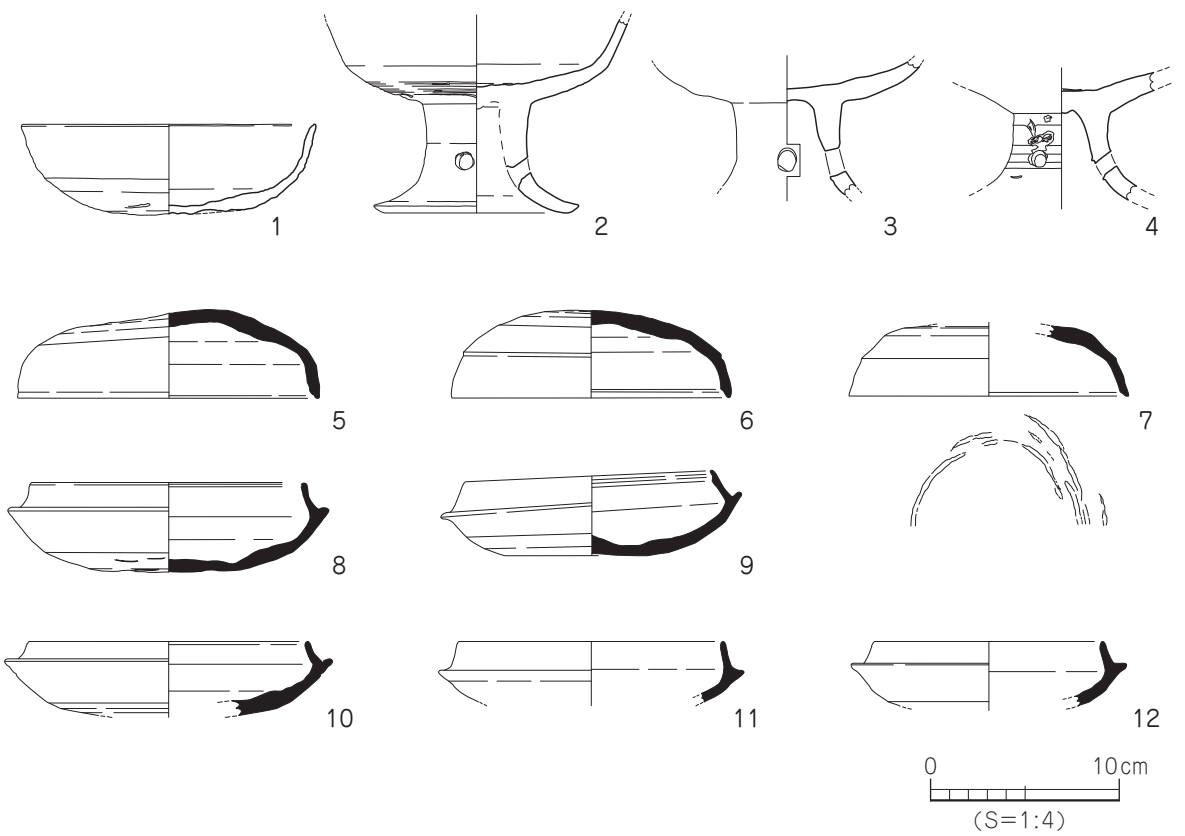
5 ～ 7 は須恵器の蓋。扁平な天井部で天井部と口縁部を分ける稜はほぼ失われている。口縁端部内面は内側に段をもつ 5 と凹面となる 6・7 がある。7 の内面に当て具の痕跡を残す。

8 ～ 12 は坏身。いずれも口縁部は内傾して立ち上がる。口縁端部は内側に段をもつもの 9 があり、ほかは丸くおさめている。

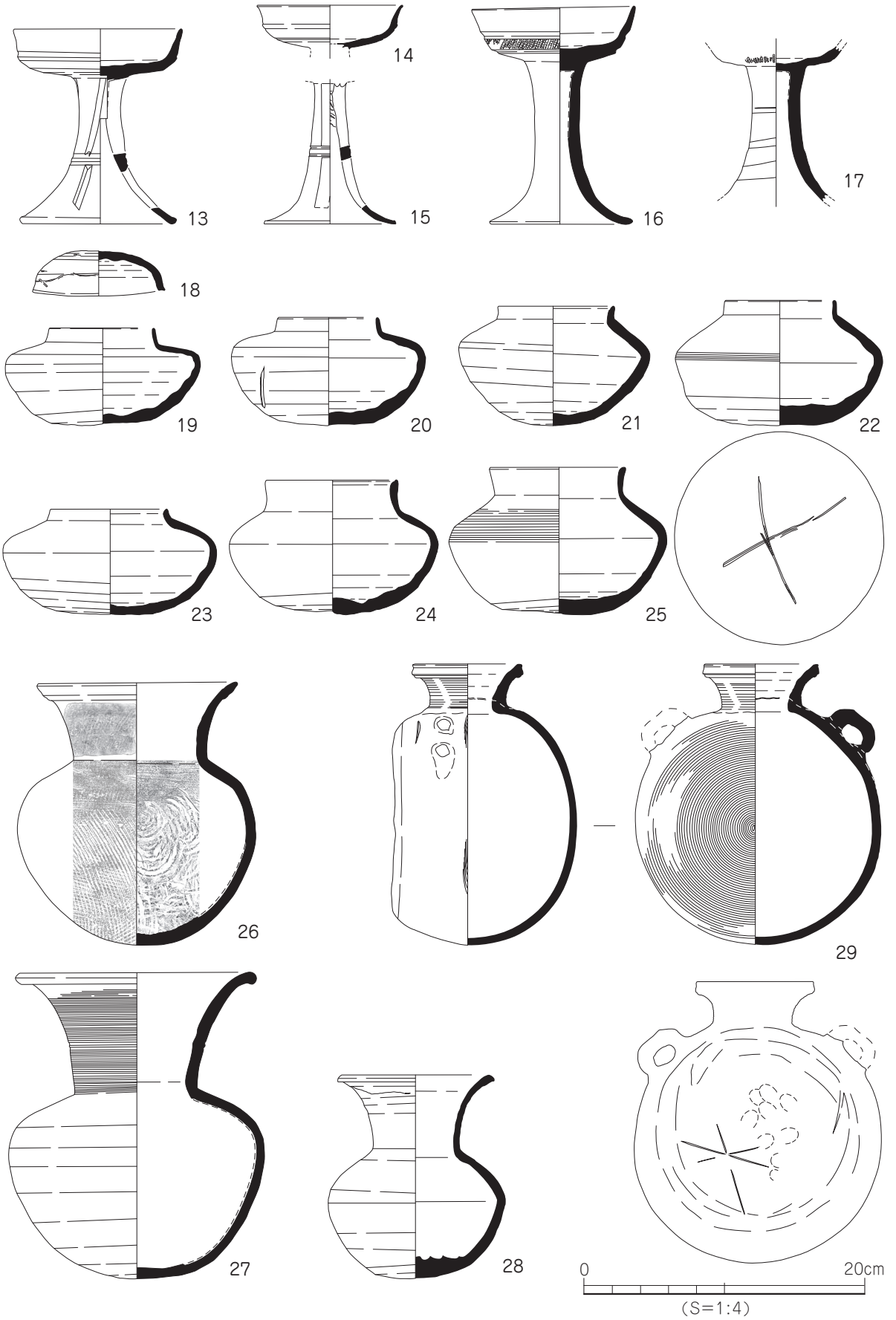
13 ～ 17 は高坏。13 は坏部の底部と口縁部の境は 1 条の凹線が巡る。脚は長脚で 3 方向に 2 段スカシが施される。14 は坏部片で 15 は脚部片である。同一個体と考えられるが接合部が見当たらない。14 は坏底部と口縁部の境は段をもつ。15 は長脚で上下 2 段のスカシが施される。16 の坏部外面には 2 条の凹線で区画された文様帯に櫛状工具による刺突文が施される。17 の坏底部外面に櫛状工具による縦位の刺突文が巡る。

18 は蓋。有蓋短頸壺 19 の蓋として使用されている。器壁は全体的に厚い。やや扁平な天井部で口縁端部はやや外に肥厚する。口縁端面は凹面となる。

19 ～ 25 は短頸壺。19 は蓋 18 とセット関係となる。口縁部は内傾して立ち上がる。体部は肩が強く張る。20 も肩の張る体部。体部外面に「丨」のヘラ記号あり。21 の口縁部は短く外傾する。体部



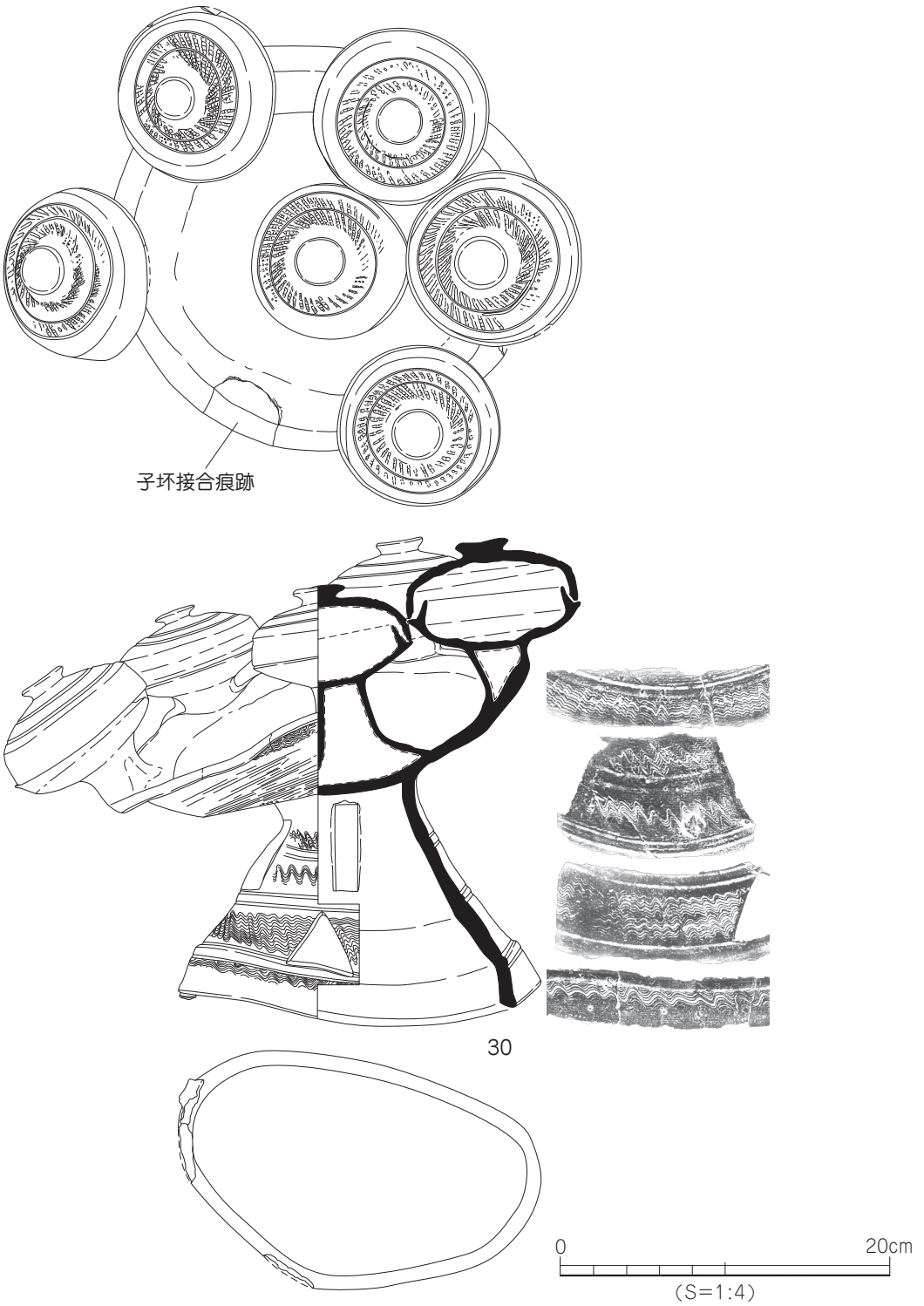
第 40 図　腰折 5 号墳石室内出土遺物実測図（1）



第 41 図　腰折５号墳石室内出土遺物実測図（2）

の肩は算盤形になる。底部は不安定な丸底である。22 は肩の張りが弱い。口縁部は短く直立する。底部内面に同心円文の当て具痕跡、外面には「×」状のヘラ記号が施される。23 は口縁部は内傾して短く立ち上がる。口縁端部は丸く仕上げ、底部は扁平である。24 は口縁端部が肥厚して内に段をもつ。25 は底部が平坦である。

26 ～ 28 は広口壺。26 は外反する口縁部。口縁端面は丸くおさめる。底部は丸味をもった小さな平

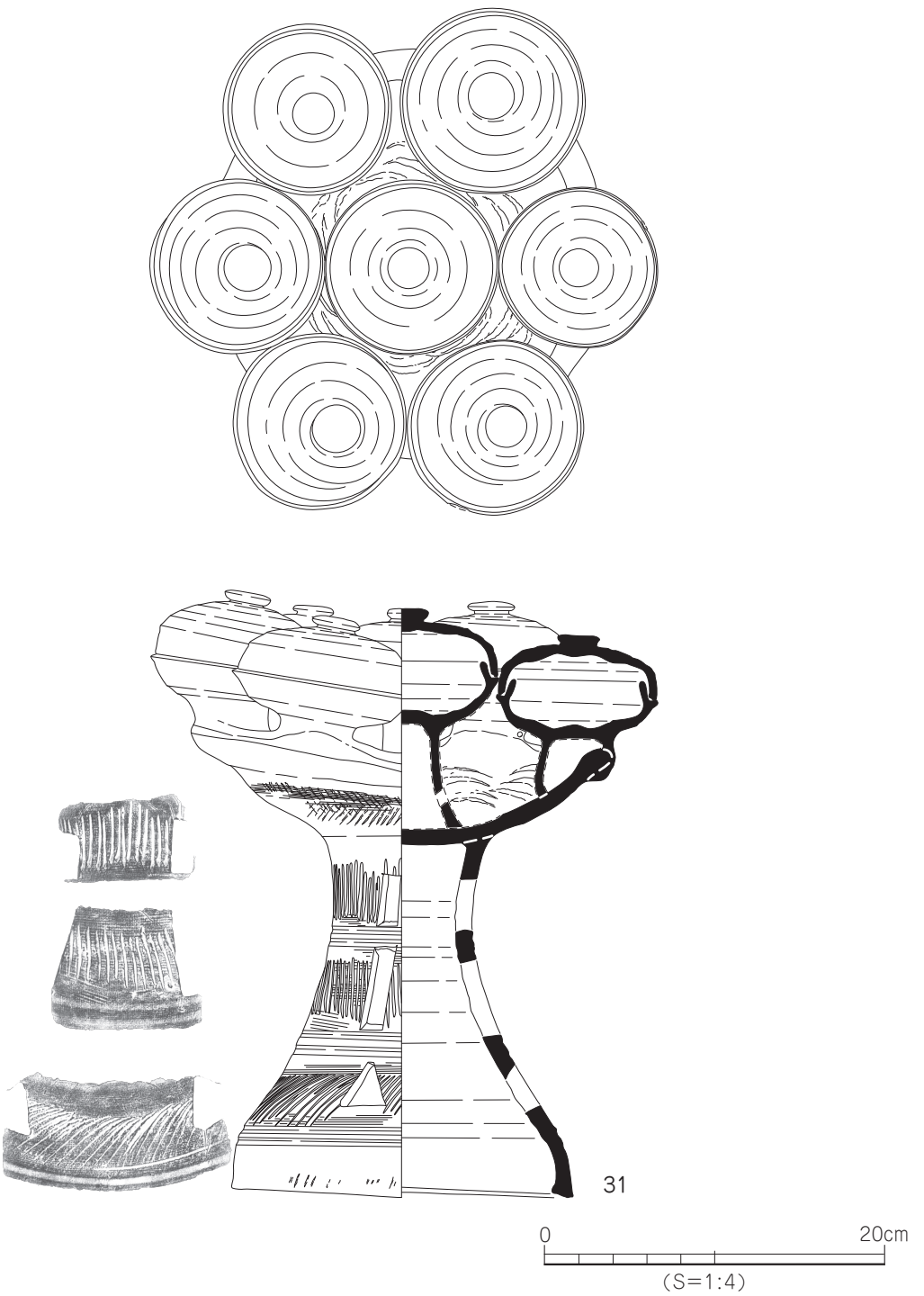


第 42 図　腰折 5 号墳石室内出土遺物実測図（3）

底である。27 の口縁部は外に肥厚し２条の浅い凹線が施される。底部は不安定な丸底である。28 は外反する口縁部。口縁端部は外に肥厚し丸くおさめる。頸部に１～２条の凹線を施す。

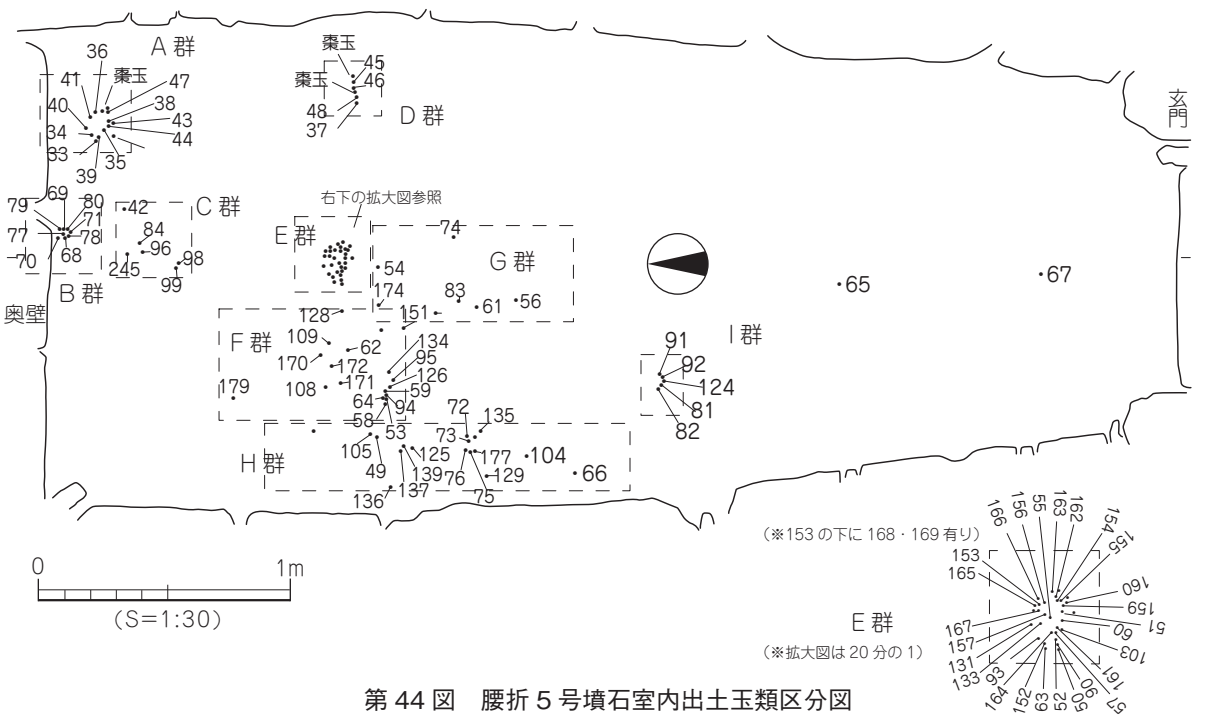
29 は提瓶。体部の前面は丸く膨れ、背面は平らである。肩部の耳は環状である。片方は欠失する。

30・31 は子持器台。親器台の坏部に高坏形の子坏を載せたものである。30 は玄室内で横倒しの状態で出土した。親器台の坏口縁部に子坏５個と中央部に１個の計６個体を載せたものである。本来、

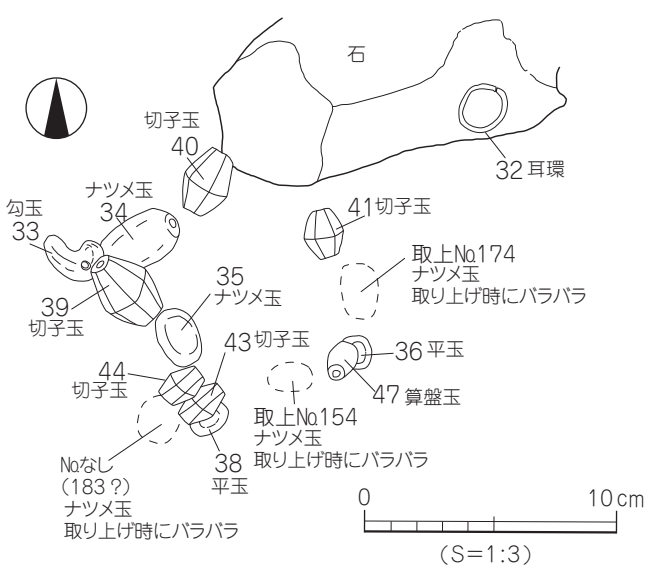


第 43 図　腰折５号墳石室内出土遺物実測図（4）

子坏は６個体あったものと考えられる。坏口縁部には、子坏１個体分の接合痕跡を残すが、石室内からは出土していない。焼成は、焼成前の乾燥が不充分なためか全体が大きく歪んでいる。子坏の蓋には中央が凹むツマミがすべてに付いている。この歪みにより中央部の子坏の蓋は外側２個の子坏が干渉して蓋が開かない状態となっている。施文は子坏の蓋外面にツマミ部を中心とした櫛状工具による連続する刺突文を巡らしたのち、凹線２条を施して天井部を３区画に分けている。脚部は凹線によって４段に区画され各区画に波状文が施される。スカシは上位２段を切って長方形のスカシを３方向に施し、上位３段目には三角形のスカシを長方形のスカシとは段違いに３方向に施している。胎土は、器台本体や子坏には粒子の大きい長石を多く含んでいる。色調は、焼成が悪いためか黒ずんでいる。全体的に焼け歪んで安定感に欠ける焼き物ではあるが、部分的に自然釉がかかり黒光を発し、ある種の趣が感じられる逸品となっている。31 は均整のとれた器形で焼成も良好な器台である。親器台の坏部の口縁部に子坏６個と中央部に１個の計７個の子坏を載せている。子坏は、高坏状の形状で中央部の子坏の脚は長くなっている。脚部には直径８ミリの円孔が２方向に穿たれている。坏部周縁の子坏は、中央部の子坏と高さを揃わすために脚は短くなっている。子坏の接合は、坏口縁部を外側から巻き込み内側に貼り付けている。空洞の接合

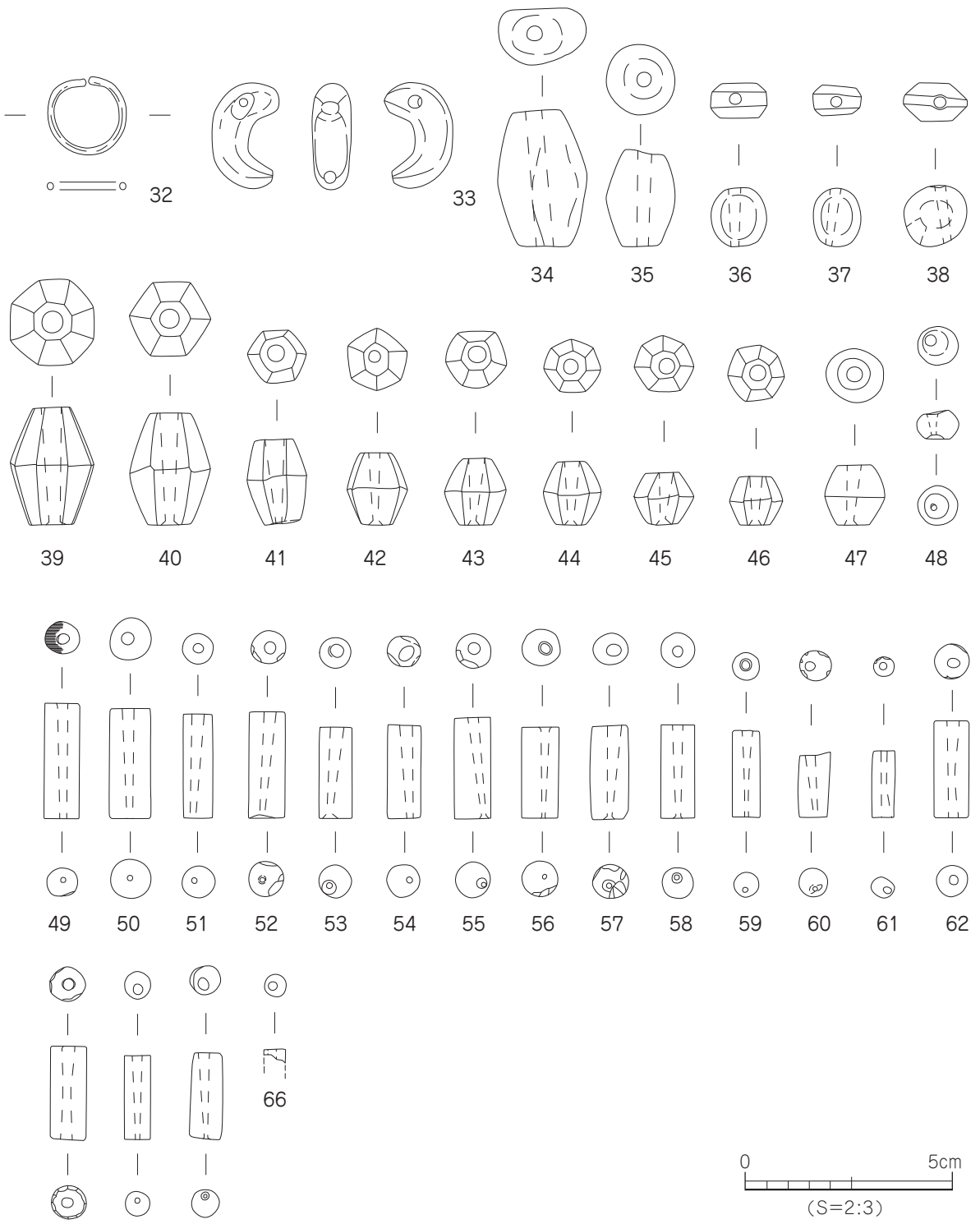


第 44 図　腰折５号墳石室内出土玉類区分図



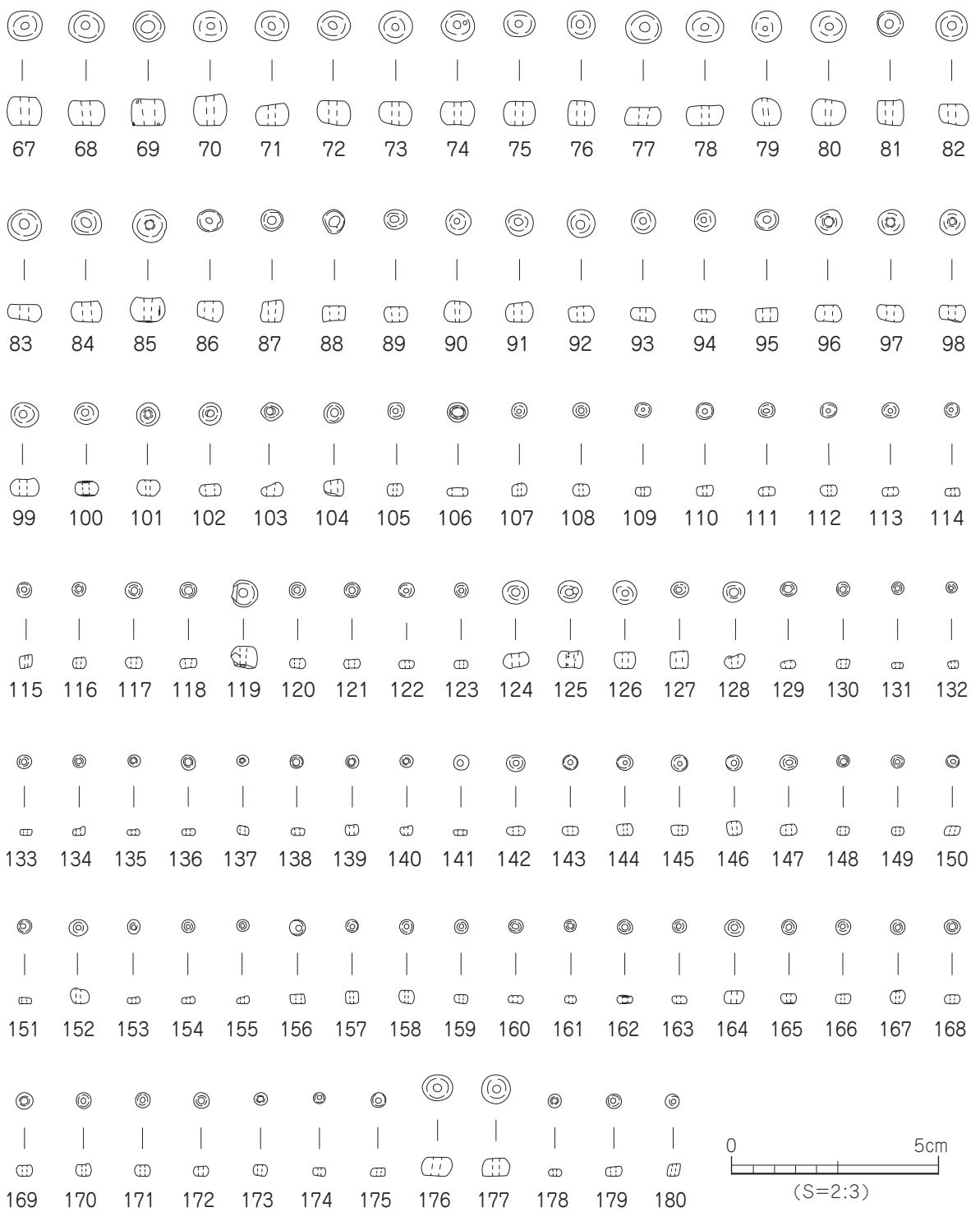
第 45 図　腰折５号墳玉類 A 群出土平面図

脚には、破裂を防ぐための直径３ミリ程度の円孔が施される。円孔は向かって左側の側面に穿たれるもの５個と両側面に穿たれているものが１個ある。この円孔は、30 の子坏の接合部には見られない。子坏の蓋はすべてツマミが付き、扁平なものと中央部が凹むものとがある。子坏の蓋の口縁端部は凹面もしくは段をもつが、坏の口縁端部は丸く仕上げている。鉢部の調整は外面タタキのちカキ目調整やナデが施される。内面にタタキの当て具痕を残す。脚は凹線により４段に区画され、上位２段に長



第 46 図　腰折５号墳石室内出土遺物実測図（5）

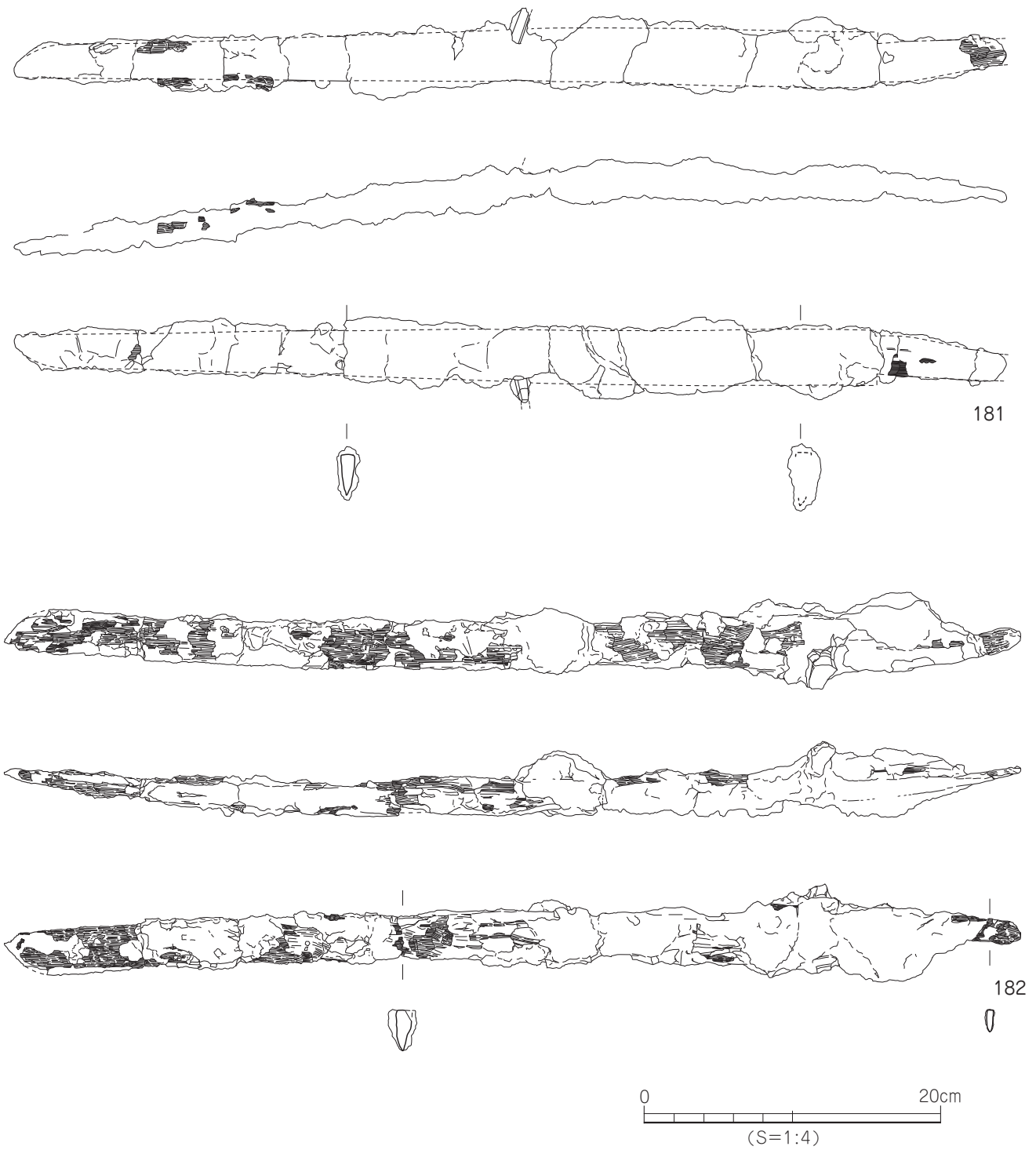
方形、3段目に三角形のスカシを4方向に施している。施文は上位3段に縦位、斜位のヘラ描き沈線文、最下段に櫛状工具による縦位の沈線文が浅く施される。出土状況は脚部と中央部の子坏を残し、鉢口縁部に付された子坏は鉢ごと割れて本体周囲の床面に脱落していた。土器周辺に崩落石などが見られないことから、打ち欠きの行為があったものと推察される。



第47図　腰折5号墳石室内出土遺物実測図（6）

B. 装飾品（第 44 ～ 47 図）

耳環、勾玉、棗玉、平玉、切子玉、算盤玉、丸玉、管玉、ガラス玉などが出土している。それぞれ出土位置からＡ群～Ｉ群までの９グループに図面上で選別している。それらの出土状況より、紐などに通された順番が想定されるものもある。中でもＡ群出土の環状に出土した装飾品は首飾りと思われる。



第 48 図　腰折５号墳石室内出土遺物実測図（7）

32 は銀製の耳環。5 号墳からは 1 点のみの出土である。A 群での出土である。

33 は長さ 2.5cmの水晶製の勾玉。A 群での出土である。

34・35 は琥珀製の棗玉。34 は長さ 3.3cm、35 は長さ 2.35cmを測る。琥珀製の棗玉は A 群のみの出土である。この 2 点のほか、3 点が確認できたが、出土段階で粉々に割れており、形のあるままで取り上げができず、復元も不可能であった。A 群からの琥珀製の棗玉は計 5 点となる。

36 ～ 38 は碧玉製の平玉である。36・38 は A 群、37 は D 群からの出土である。

39 ～ 46 は切子玉。39 ～ 41・43・44 は A 群からの出土である。39・40 は大型品。42 は C 群、45・46 は D 群からの出土である。穿孔方法は片面と両面がある。

47 は水晶製の算盤玉。穿孔方法は両面である。A 群での出土である。

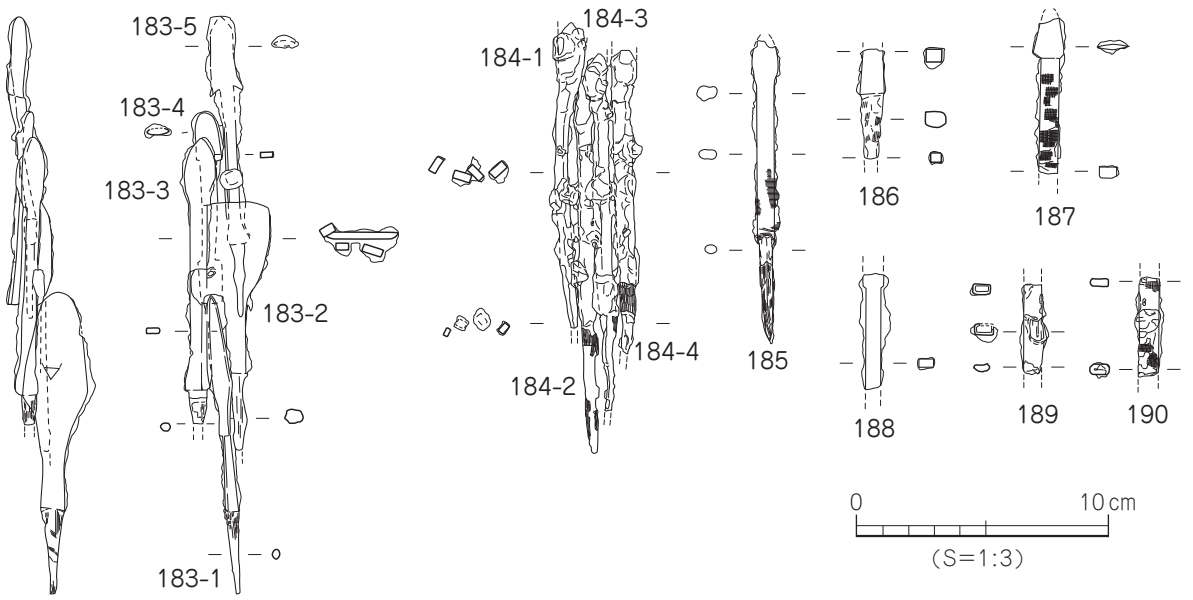
48 は水晶製の丸玉。穿孔方法は両面である。D 群での出土である。

49 ～ 66 は碧玉製の管玉。E 群 7 点、F 群 5 点、G 群 3 点、H 群 2 点と単独 1 点の計 18 点が出土している。長さ 1.60 ～ 2.70cm、直径 0.20 ～ 0.30cmまでのものが出土している。穿孔方法は片面と両面がある。

67 ～ 180 はガラス玉。いわゆる丸玉と小玉とで構成される。丸玉には円柱状を呈するものが多い。法量は径 0.26 ～ 0.74cm、高さ 0.16 ～ 0.75cm、孔径 0.07 ～ 0.23cmを測る。出土数は、ガラス丸玉よりガラス小玉のほうが多い。色調は濃青色、青色、淡青色、緑色、淡緑色、黄色などがある。152 ～ 155 は色調が黄色のいわゆる粟玉である。

C. 鉄製品（第 48 ～ 51 図）

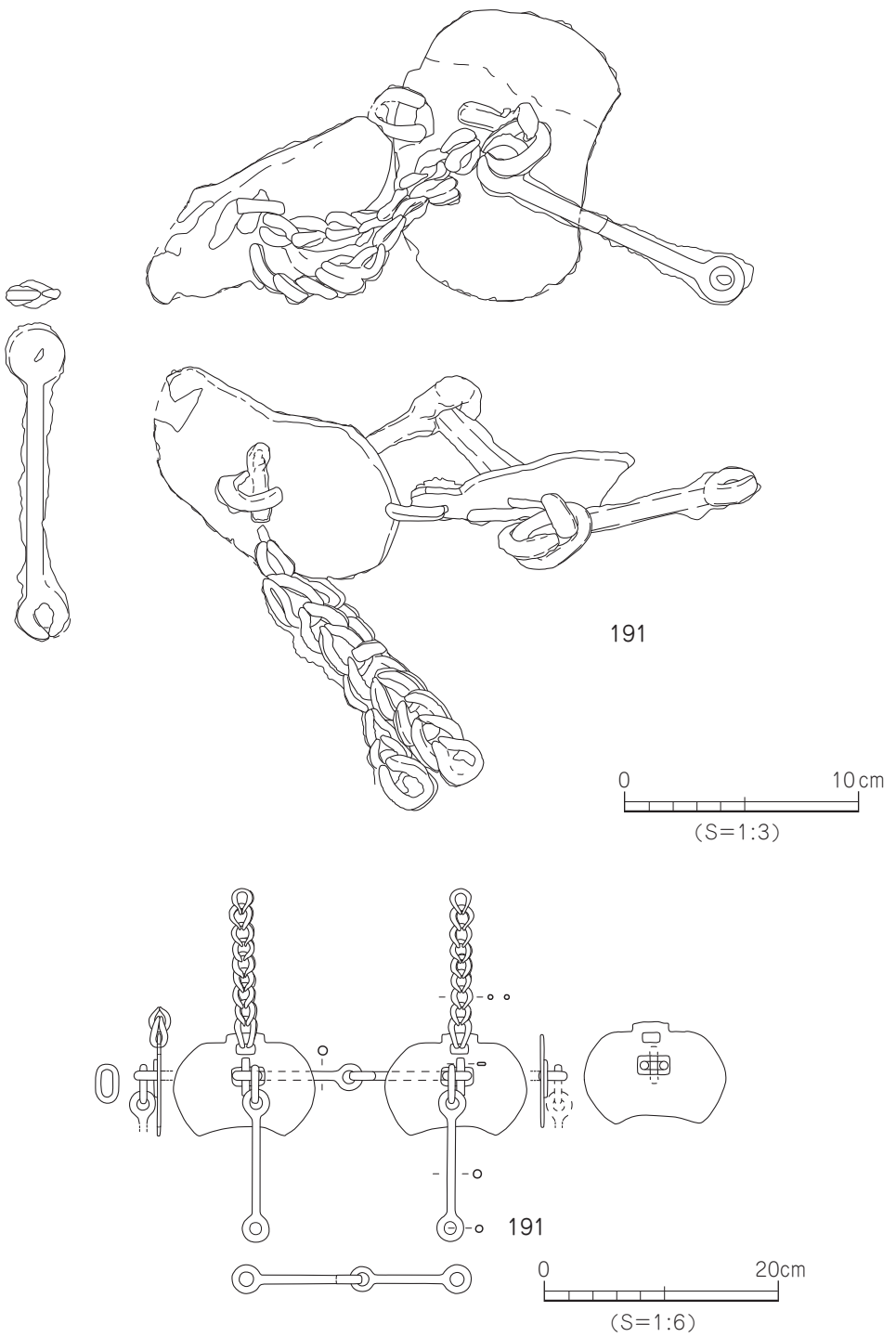
181・182 は大刀である。181 は玄室奥壁側のやや東よりの約 30cmのところで奥壁に並行して置かれたものである。茎尻は欠失している。現存長 66.8cmを測る。刀身は茎の上方で刃部を下にして左方向に少し屈曲している。刃部に長頸鏃の頸部が錆着している。182 は西側の側壁沿いで出土したもので、茎尻まで完存する。木鞘に入っていたと思われ、刀身には木質が遺存する。現存長 68.8cmを測る。この大刀も刀身の切先から約 12cmのあたりで刃部を下にして右方向に少し屈曲している。鞘表面の



第 49 図　腰折 5 号墳石室内出土遺物実測図（8）

一部に布目痕が看取される。

183 ～ 190 は鉄鏃。183 は５本（183-1 ～ 183-5）が錆着する。183-1 は有頸で撫関の長三角形鏃。スカシが施される。183-2 は有頸の方頭鏃、183-3･183-4 は長頸鏃で 183-3 は段違い関、183-4 は角関である。183-5 の関は腸抉で鏃身部は柳葉形を呈する。184 は４個体の長頸鏃が錆着する。鏃身部や関部はひどく錆びているため形態は不明瞭となっている。茎部に木質を残すものもある。185 は長頸鏃。鏃身部先端が欠失する。茎部に木質を残している。D 群の玉類と並列して出土している。186 ～ 190 は頸

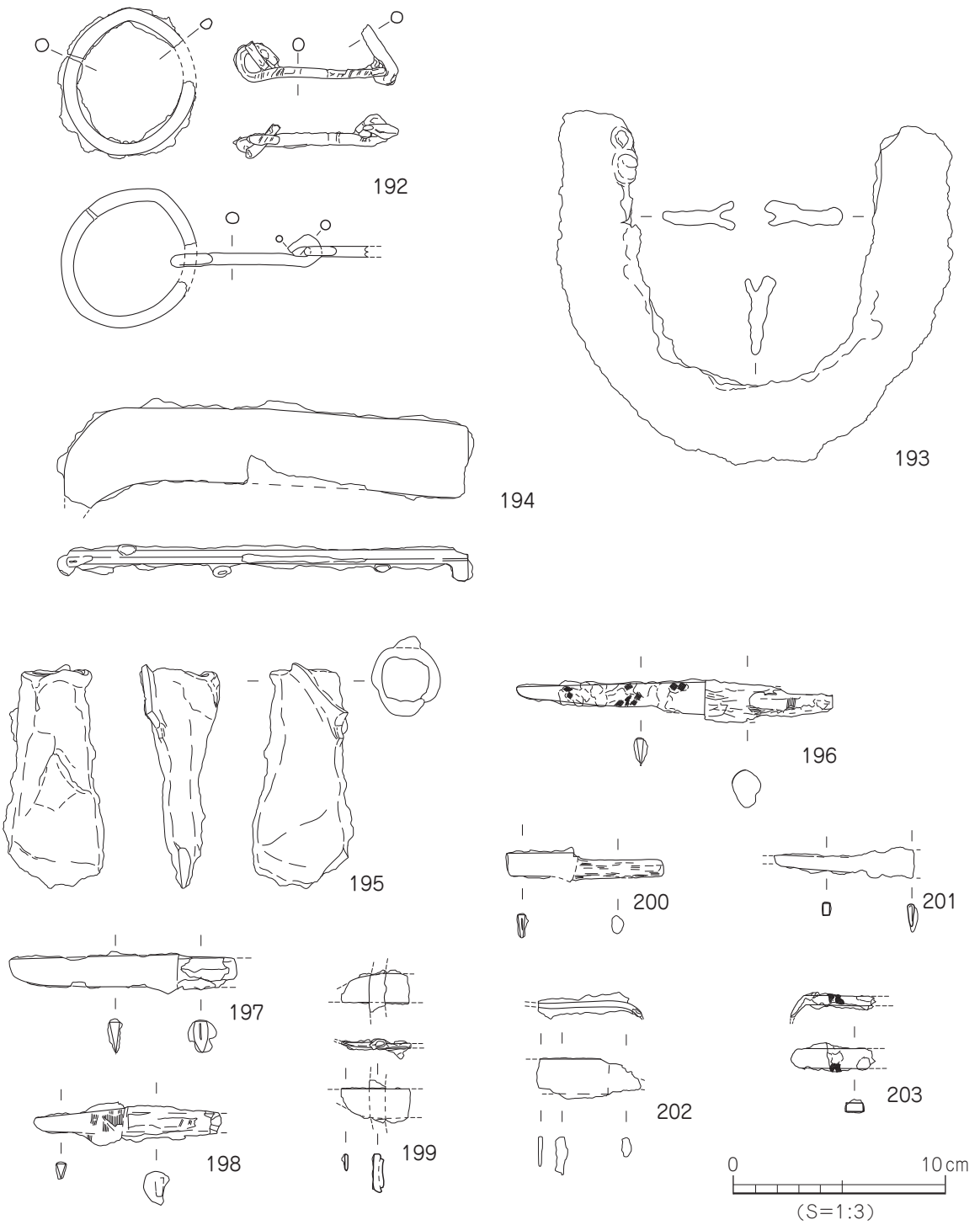


第 50 図　腰折５号墳石室内出土遺物実測図（9）

部～茎部にかけての個体である。

191 は鉄製楕円形鏡板付轡である。玄室奥の西側、短頸壺 23 の上に重なって出土した。鏡板は長さ 12.1cm、幅 8.4cmを測る。立聞部は方形状に突出する。立聞部から続く兵庫鎖の片方は錆化のためか腐食して外れている。外れた兵庫鎖は片方の兵庫鎖に錆着している。銜は鏡板中央部の芯に連結し、引手と銜は平面楕円形の遊環を介して連結する。引手と銜の断面形は円形を呈している。

192 は玄室中央部東側の側壁沿いで出土したものである。素環の轡で鏡板は片方しか出土していな



第 51 図　腰折 5 号墳石室内出土遺物実測図（10）

い。銜も片方が破損している。素環の鏡板と銜の断面形は円形を呈している。

193 はＵ字形の鋤鍬先。奥壁よりの東側側壁沿いで出土した。内側にＶ字溝を有する。長さ 16.7cm、幅 18.7cm、刃幅 3.8cmを測る。

194 は鎌。193 の北側で出土した。刃部の先端が欠失する。現存長 19.6cm、幅 4.0cmを測る。

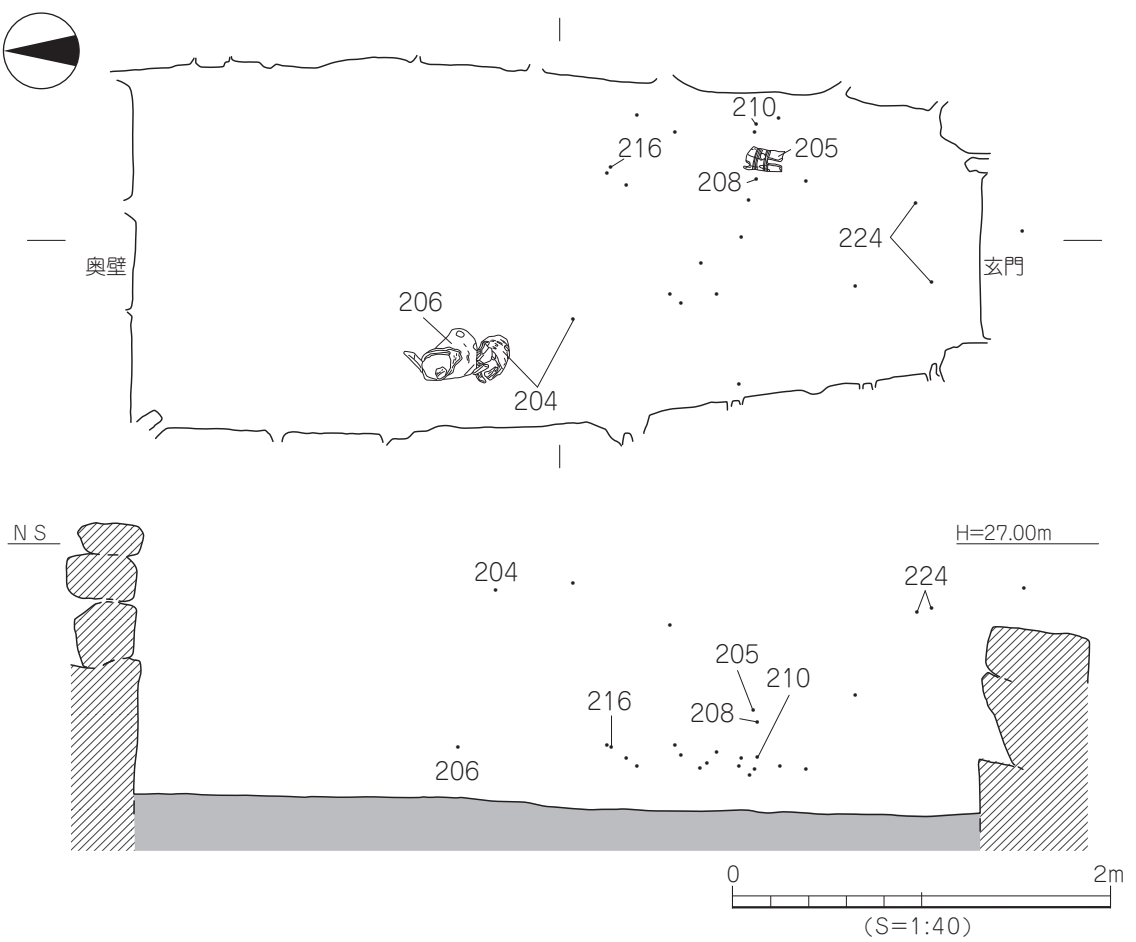
195 は鉄斧。全長 10.6cm、最大幅 4.75cmを測る。両側折り返しの袋状を呈している。

196 ～ 201 は刀子、または刀子と考えられるものである。196 はほぼ完形品。長さ 14.80cm、刃幅 1.90cm、厚さ 0.30cmを測る。刃部は先細り木質が一部に付着する。柄部は鹿角製である。197 は刃部は完存するが茎尻部が欠失する。現存長 10.70cm、刃幅最大で 1.75cm、刃厚 0.45cmを測る。関は両関と考えられる。柄部は鹿角製である。198 は刃部が短く細い。現存長 8.9cm、刃幅は最大で 1.2cmを測る。刃部の一部には木質が遺存する。柄部は鹿角製で茎尻部が欠失する。199 は刃部の破片。他の鉄製品の一部が錆着している。200 は両関で柄部は木柄と考えられる。201 は錆膨れがひどく、刃部と茎部の破片と考えられるものである。

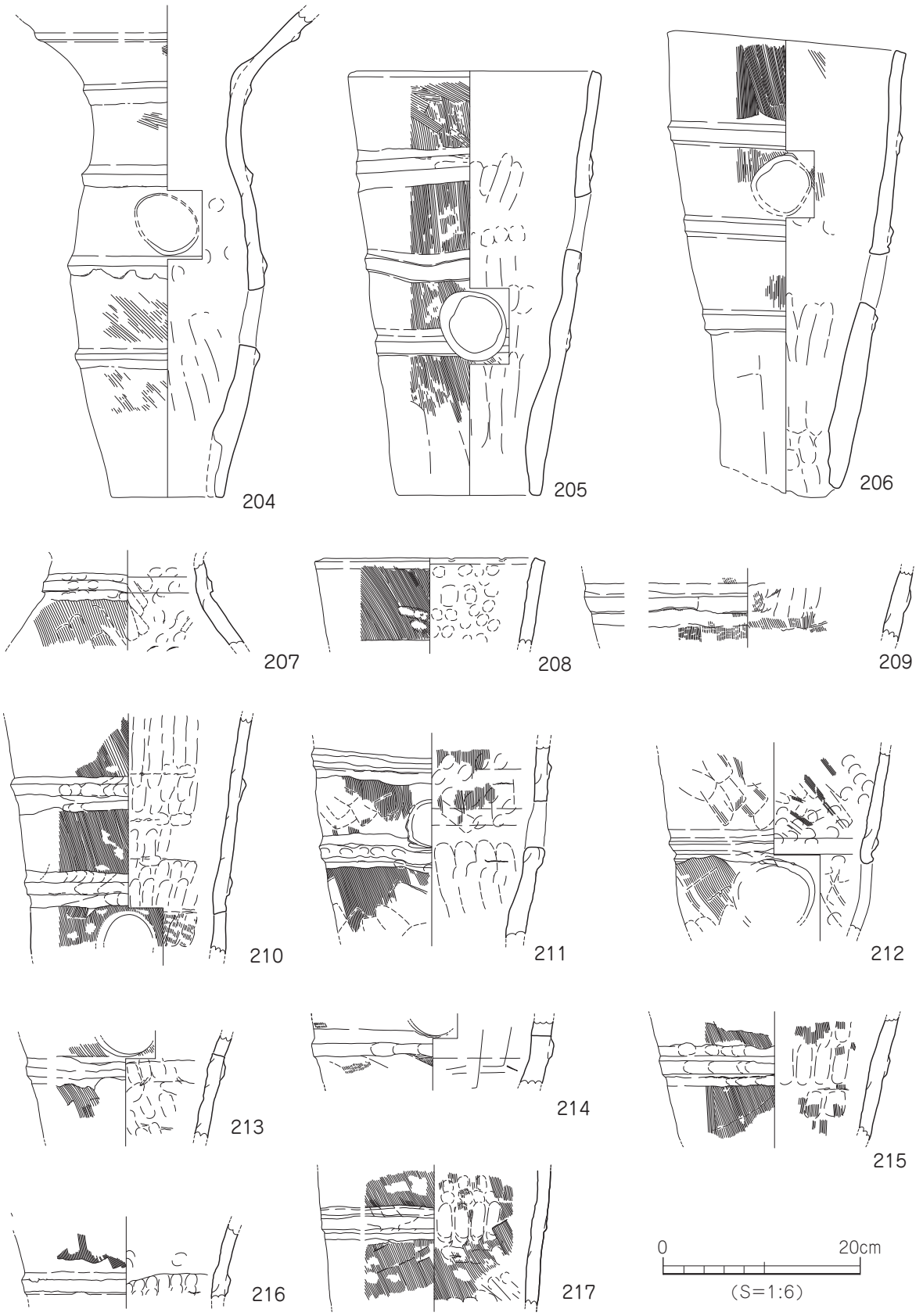
202・203 は鉋の刃部の破片とおもわれる。

Ｄ．埴輪（第 52 ～ 54 図）

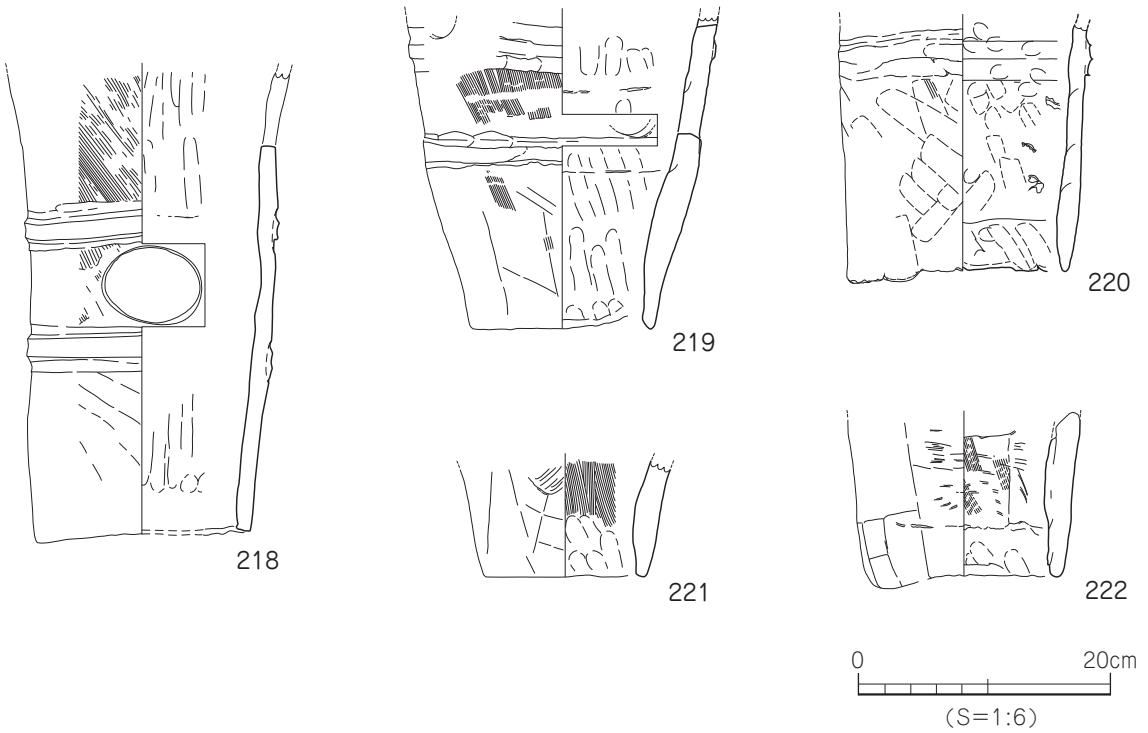
５号墳から出土した埴輪は、その殆どが玄室内埋土からの出土である。表土掘削時や周溝の埋土中からは細片が僅かに出土しているのみで現位置を保つものは無い。



第 52 図　腰折５号墳石室内埴輪出土位置図



第 53 図　腰折 5 号墳石室内出土遺物実測図（11）



第 54 図　腰折５号墳石室内出土遺物実測図（12）

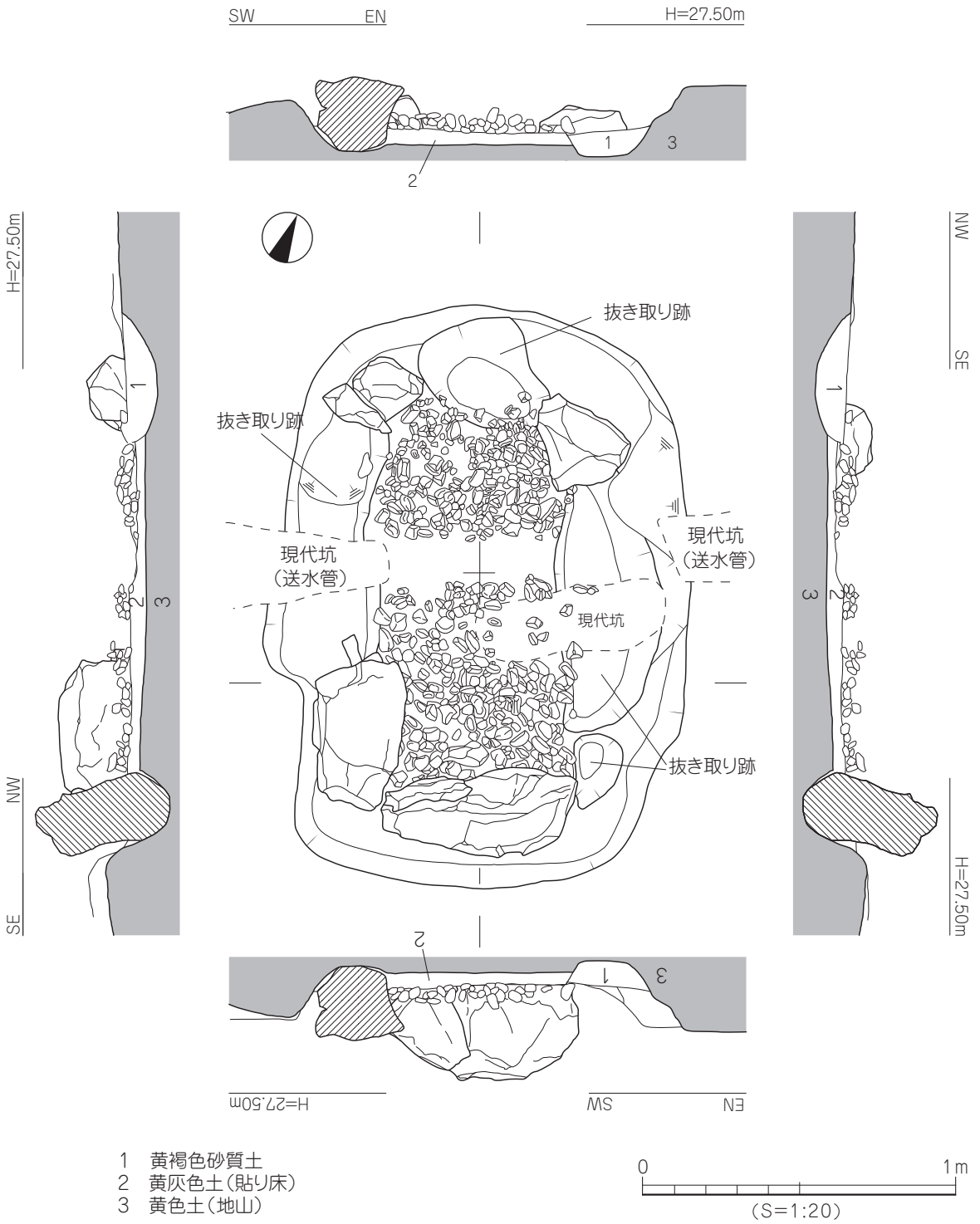
玄室内の埋土は大きく２層に大別できる。第１層は床面から 20cm程度の層厚を測る灰褐色の粘質土、第２層は第１層の上に堆積する地山によく似た茶褐色土である。土層堆積状況より、第１層は古墳が壊される以前に、第２層は現代の開発行為に伴い堆積した土壌と考えられる。埴輪の出土はすべてこの第２層中からの出土である。農地整備などにより墳丘や石室の損壊時に、墳丘上部にあったものが崩落したり、石室が埋め戻される時に投げ込まれたものと推察される。出土した埴輪は、朝顔形埴輪と円筒埴輪で形象埴輪は出土していない。

204・207・214 は朝顔形埴輪。204 は口縁端部が欠失する。底径 11.4cm、残高 49.3cmを測る。器壁は全体的に厚く仕上られている。突帯は筒部に３条、頸部に１条、口縁部に１条の計５条が認められる。いずれも強いナデによって低く幅広となる。断面形は総じて三角形を呈する。207 は頸部の破片。突帯が１条が施される。214 は筒上部の破片である。

205・206・208 ～ 213・215 ～ 222 は円筒埴輪である。205 は復元完形品。口径 23.8cm、器高 43.1cm、底径 14.2cmを測る。口縁部にかけて直線的に開く形状で、口縁端部は強いナデによって窪む。突体は３条を施され中段の突体の歪みが目立つ。スカシ孔は口縁部と基底部を除く上下２段に突帯を切って円孔が穿たれている。基底部は高さ 18.0cm程度になり突帯間距離（5.5 ～ 8.0cm）より 6cmほど長くなっている。206 は口径 24.5cm、器高 47.5cm、基底部径 12.2cmを測る。口径に対して基底部はかなり絞られた器形を呈する。口縁端部は強いナデによって窪む。スカシ孔は口縁部と基底部を除く上下２段に円孔が穿たれる。基底部は高さ 13.2 ～ 17.2cmを測り突帯間距離より長くなる。基底部端は指頭圧痕を残してかなり波を打っている。208 は口縁部の破片。内面に指頭圧痕を顕著に残す。209 ～ 213、215 ～ 217 は筒部の破片。突帯は低く、断面「M」字状のものが多い。218 ～ 222 は筒部～基底部と基底部の破片である。218 のスカシ孔は横長の楕円形を呈する。突帯は低く、断面「M」字状を呈する。219 ～ 222 の基底部端は強い指頭圧痕で尖り気味である。

（5）周溝（第 35 図）

周溝は石室中央部から東側 7.00m で検出した。石室東側の東西にのびる尾根線を切るように南北方向の弧状に掘られる。東側だけに限られて全周はしない。検出規模は長さ約 10.0m 幅 3.00m、深さ 0.20 ～ 0.30m を測る。断面形状はレンズ状となり、周溝底までは緩やかな傾斜となっている。遺物は埴輪の小破片が数点出土したのみである。



第 55 図　腰折 6 号墳測量図

2. 腰折６号墳

（１）墳丘と墳形（第 55 図）

５号墳の石室中央から東へ 24m に位置する。盛土は、開墾のため地山近くまで削平されすべて失われている。周溝などの施設も確認できていない。石室のみの検出で墳形、規模とも不明である。

（2）墓坑（第 55 図）

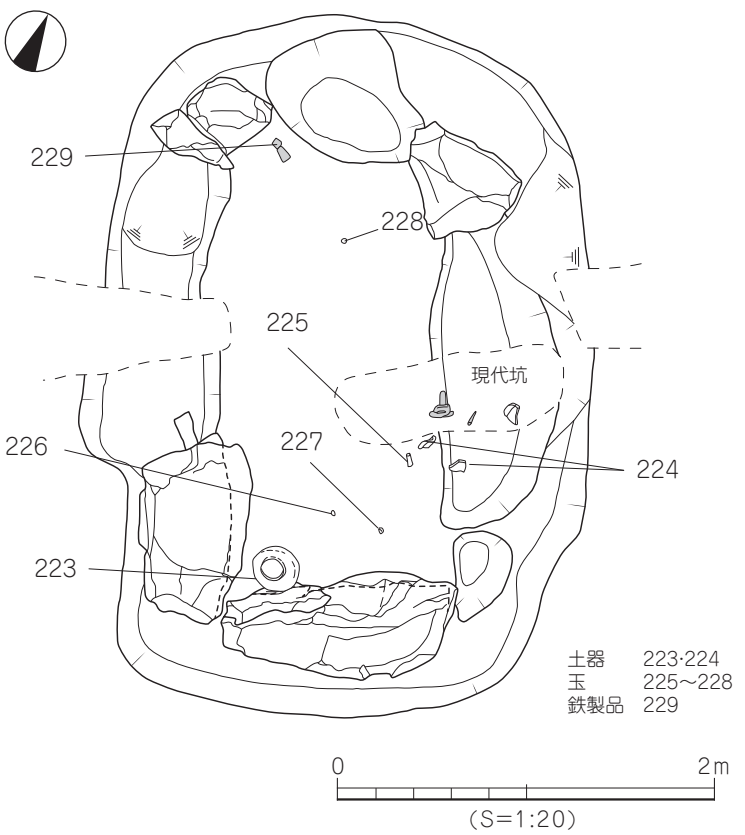
墓坑は地山面での検出である。平面形は隅丸長方形を呈する。検出規模は長軸（南北）1.84m、短軸（東西）1.40m、深さ 0.14m を測る。

（3）石室（第 55 図）

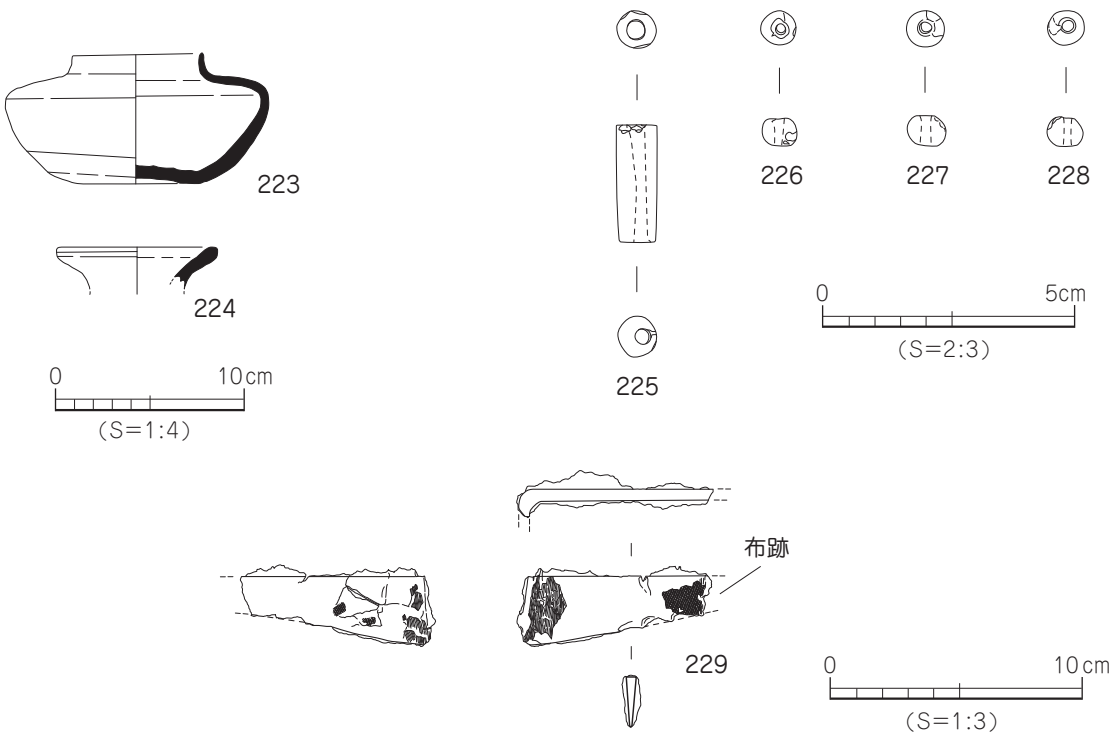
石室はひどく壊され基底石も部分的に抜かれている。主軸方位は N24° E である。南側の木口部はやや厚めの板状の石材１枚を立てて腰石としている。北側の木口部は石材も抜かれており、その抜取り痕跡を検出している。側壁は西側の基底石２石、東側の側壁は基底石が１石しか残っていない。石室の検出長（奥壁の内側～木口部の抜取り痕内側）1.08m、幅（内法）0.50 ～ 0.55m を測る。床面は直径 2.0 ～ 6.0cm の玉石を貼床（厚さ 3.0 ～ 6.0cm）上に敷き詰めて礫床としている。人骨は検出していない。遺物は石室南側での出土が多い。石室形態については北側木口部に石材の抜き取り跡を残すが、上部構造が失われていることから不明としておく。

（4）出土遺物（第 56・57 図）

遺物は南側の奥壁西隅に須恵器の短頸壺１点のほか、南側や北側の床面上で鉄鎌１点、管玉１点、土製丸玉３点などが出土している。そのほか、埋土中より須恵器が１点出土している。



第 56 図　腰折６号墳遺物出土平面図



第 57 図　腰折 6 号墳石室内出土遺物実測図

223 は短頸壺の完形品で南側木口の西隅で出土したものである。口径 7.0cm、器高 6.9cmを測る。口縁部は短く直立して立ち上がる。口縁端部は丸く仕上げる。肩部の張りは強く、底部は平坦で中央部は内に窪んでいる。

224 は提瓶の口縁部と考える破片である。口縁部は外上方に開き、端部は端部は丸く仕上げる。端部外面に 1 条の沈線が巡る。

225 は碧玉製の管玉。長さ 2.32cm、径 0.77 ～ 0.78cm、重さ 2.687g を測る。穿孔方法は両面である。

226 ～ 228 は土玉である。色調はいずれも褐灰色を呈する。226 は直径 0.73cm、高さ 0.55cm、重さ 0.26g を測る。227 は直径 0.75cm、高さ 0.65cm、重さ 0.320 を測る。228 は直径 0.75cm、0.25cm、重さ 0.269g を測る。

229 は鉄鎌である。刃先は欠失する。軸部に木質が付着し、刃部には布の付着痕が看取される。

3. その他の遺構・遺物

(1) ＳＸ１（第 58 図）

SX1 は、5 号墳の北西部で古墳築造前の旧表土層と思われる黒色土を精査中に検出したものである。この黒色土は、石室西側の東西方向の墳丘トレンチのベルト土層で確認したもので、地山直上や地山から 1 層挟んだ上面に堆積している。この黒色土は 5 号墳の墓坑に切られるほか、黒色土上には墳丘盛土が形成されている。このことから、墳丘範囲の確認のため黒色土の平面検出作業を行ったところ、5 号墳の墳丘盛土にパックされた SX1 が見つかった。

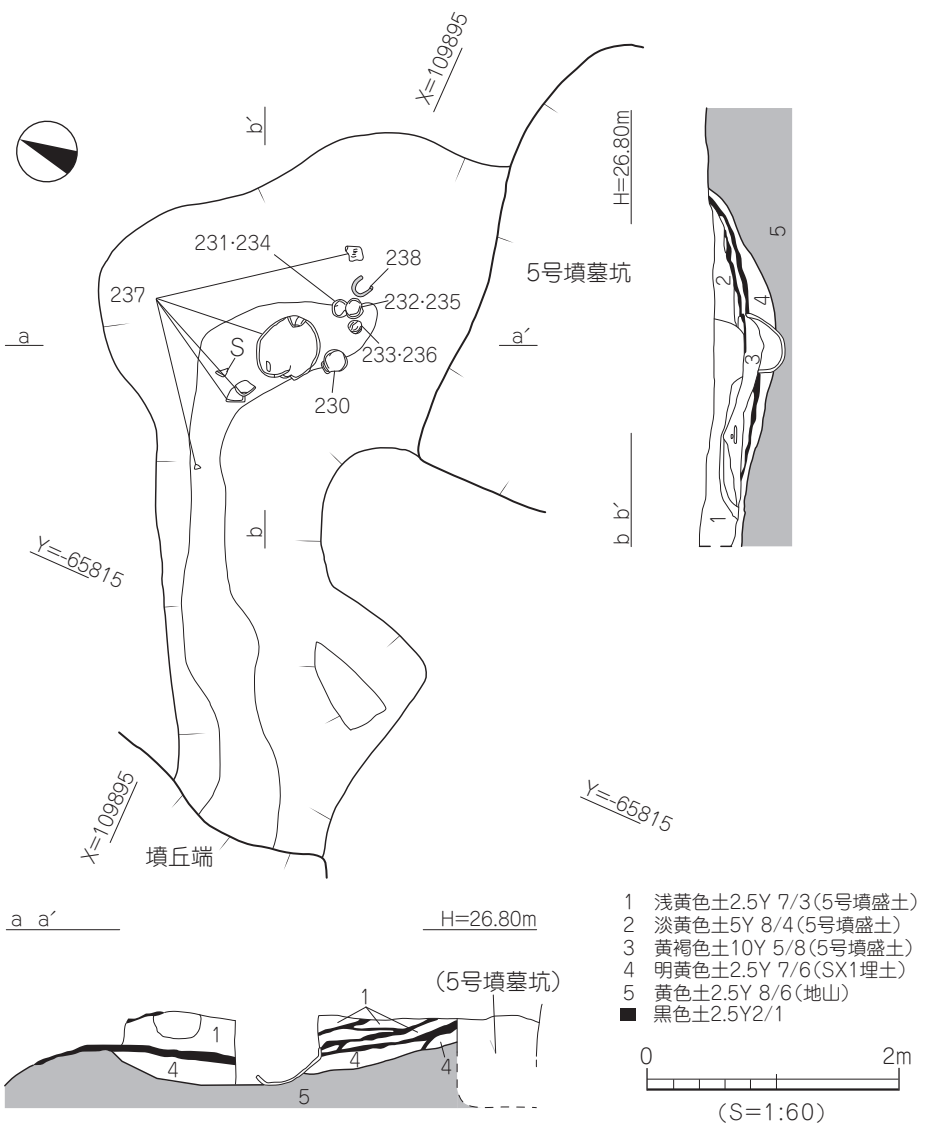
遺構は東西方向にのびたのち、東側で南方向に屈曲して底を上げながら 5 号墳の墓坑に切られてい

る。この切り合い関係により、５号墳築造前の遺構であることが判る。遺構の西側は、開墾などの影響のためか失われて全容は不明となっている。このため、平面形態は不整形となり、断面形態は「U」字状を呈する。検出規模は南北 1.30 ～ 3.00m、東西 5.70m、検出面（地山）からの深さ最大で 0.71m を測る。土層観察からは、５号墳の墳丘盛土と思われる土層にパックされている状況が伺われる。

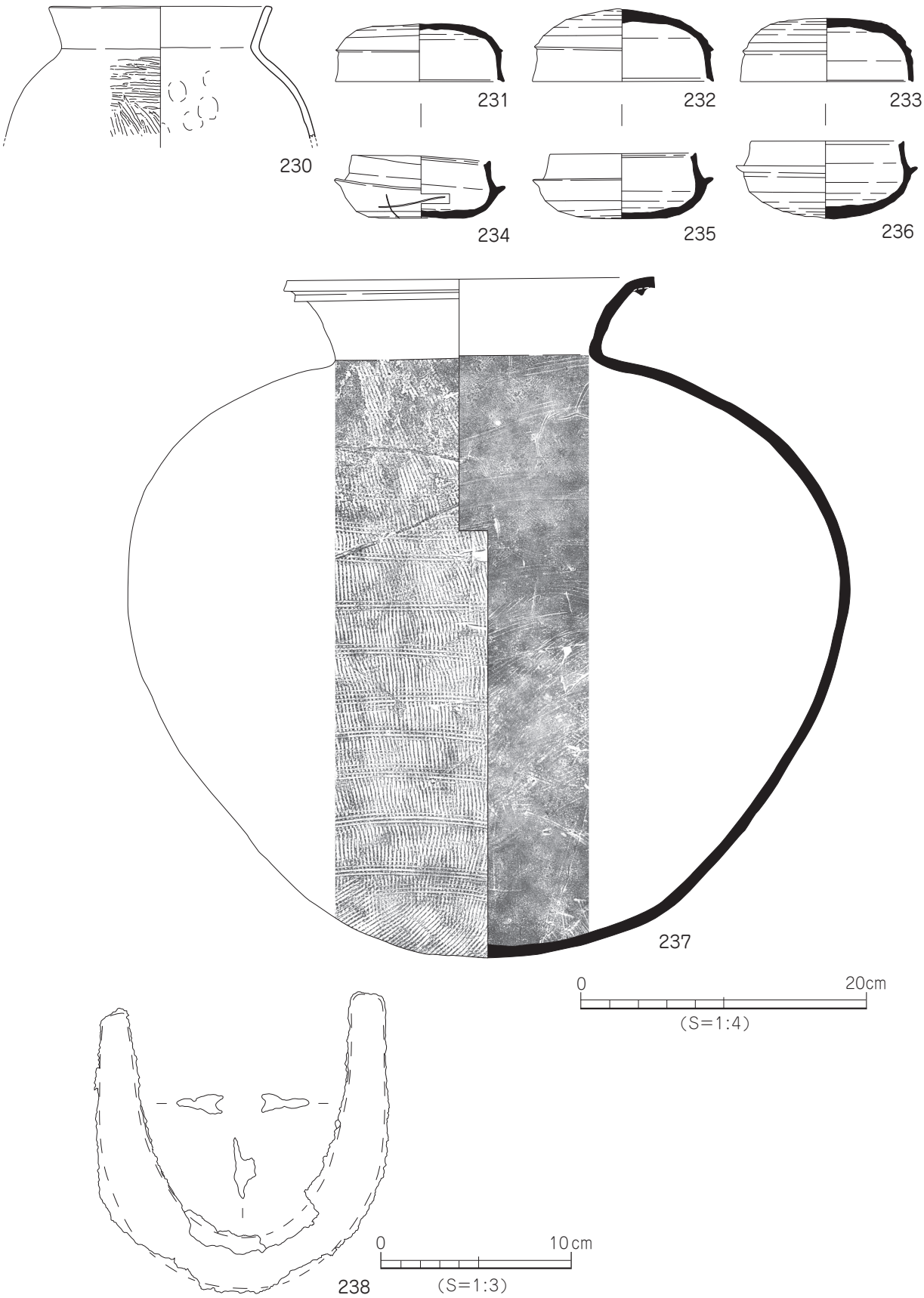
遺物は遺構の屈曲部でまとまって出土した。出土状況は、いずれも遺構掘削面の地山上に置かれた状態での出土である。土師器の甕１点、須恵器の蓋坏がセットで蓋３点、身３点、中型の甕が１点、鉄製の鋤先１点が出土している。さらに中型の甕以外はすべて完存品である。中型の甕は胴上半が壊れ内部に破片が落ち込んでいたが遺構埋土である黒色土上面に数点の破片が散らばっていたことからこの黒色土の堆積後に壊れたものであることがわかる。

出土遺物（第 59 図）

230 は土師器の甕。完形での出土であったが器壁が薄く脆弱なため取り上げ時に破損し、胴部中位から底部にかけては復元不能であった。口径は 15.4cmを測る。胴部上半にはヘラミガキが施される。



第 58 図　SX1 測量図

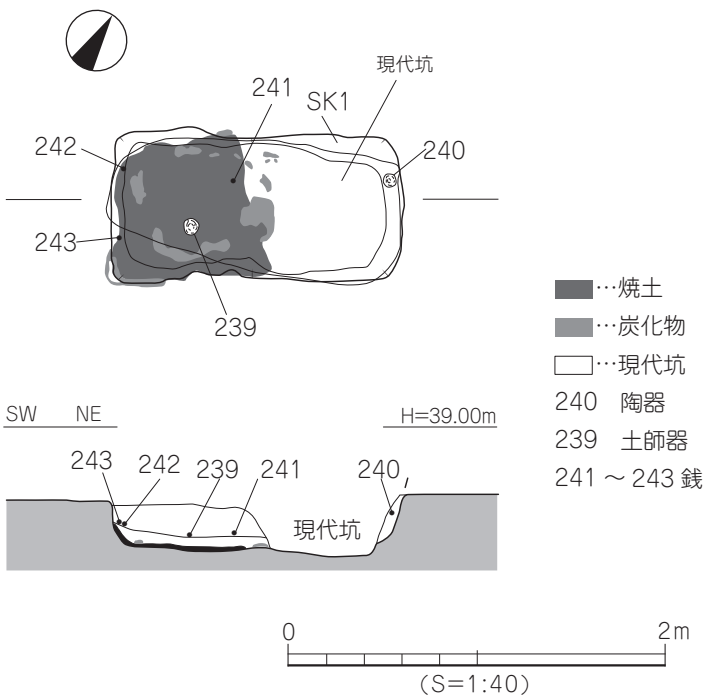


第 59 図　SX1 出土遺物実測図

231 ～ 236 は蓋坏。231 と 234、232 と 235、233 と 236 がセット関係となる。いずれも蓋をされた状態での出土であったが、中からの遺物の出土は無かった。231 は蓋。天井部には広い範囲に薄く朱が付着している。口径 11.8cm、器高 4.0cmを測る。天井部は扁平で稜は短く突出する。口縁中央部は強い横ナデによって窪み端部は外反する。端部内面は凹面をもつ。234 は坏身。口径 9.8cm、器高 4.4cmを測る。口縁部は上方に立ち上がる。口縁端部は内に段をもつ。底部は扁平で中央部がやや窪む。232 は蓋。口径 12.6cm、器高 5.1cmを測る。やや丸い天井部。稜は短く突出する。天井部のヘラ削りは広範囲に施されている。口縁端部内面は凹面をもつ。235 は坏身。口径 10.2cm、器高 4.6cmを測る。口縁部は上方に立ち上がる。口縁端部は内に段をもつ。底部は扁平である。233 は蓋。口径 12.0cm、器高 4.4cmを測る。天井部は扁平で、稜は突出するが 231 や 232 に比較すると丸く仕上げられている。口縁端部内面は凹面をもつ。236 は坏身。口径 10.6cm、器高 5.4cmを測る。口縁部は上方に立ち上がる。口縁端部内面は凹面をもつ。受部はやや上方にのびる。底部は丸味を帯びる。内面中央部に指ナデ調整を施し、底部外面のヘラ削りは 4/5 ほどの広範囲に施される。

237 は中型の甕。口径 25.7cm、器高 47.7cmを測る。頸部は外傾して立ち上がり口縁部は外反して水平にのびる。口縁端部はやや肥厚して面をもつ。口縁端部の外面直下に断面三角形の突帯を巡らしている。体部は肩が張り、その最大径を中位にもつ。調整は体部外面に縦位の平行タタキ目文を施し、体部内面はタタキ目をナデにより消している。施文は頸部直下の体部外面からカキ目状（幅約 1cm）の横線を螺旋状に底部近くまで施している。頸部は無文である。

238 はＵ字の鋤鍬先である。内側にＶ字溝を有する。長さ 15.8cm、幅 15.3cm、刃幅 2.1 ～ 2.7cmを測る。



第 60 図　SK1 測量図

(2) 近世墓ＳＫ１（第 60 図）

SK1 は、5 号墳の石室中央部から北東 9m に位置する東西方向の土坑墓である。南側から北方向に下る緩い斜面地での検出で 5 号墳の周溝を切って掘られている。遺構上部に同規模の現代坑が重複するように掘られており、遺構の東側半分は現代坑により遺構の底が失われている。

SK1 の平面形態は長方形を呈する。検出規模は長軸（東西）1.60m、短軸（南北）0.80m、深さ 0.31m を測る。掘り方底面や側面は被熱し赤く焼けているほか、焼けたと思われる白色化した人骨片も僅かに出土する状況から火葬を伴う土坑墓と考えられる。副葬品は埋土中より土師器皿 1 点、陶器の碗 1 点、寛永通寶 3 点が出土している。

出土遺物（第 61 図）

239 は土師器皿。口径 8.2cm、器高 1.7cmを測る。平底の底部で底部の切り離しは回転糸切りである。

240 は産地不明の小型の陶器碗。口径 8.0cm、器高 3.6cmを測る。器壁は薄く内外面とも釉が施され灰色を呈する。底部外面から高台にかけては露胎となる。

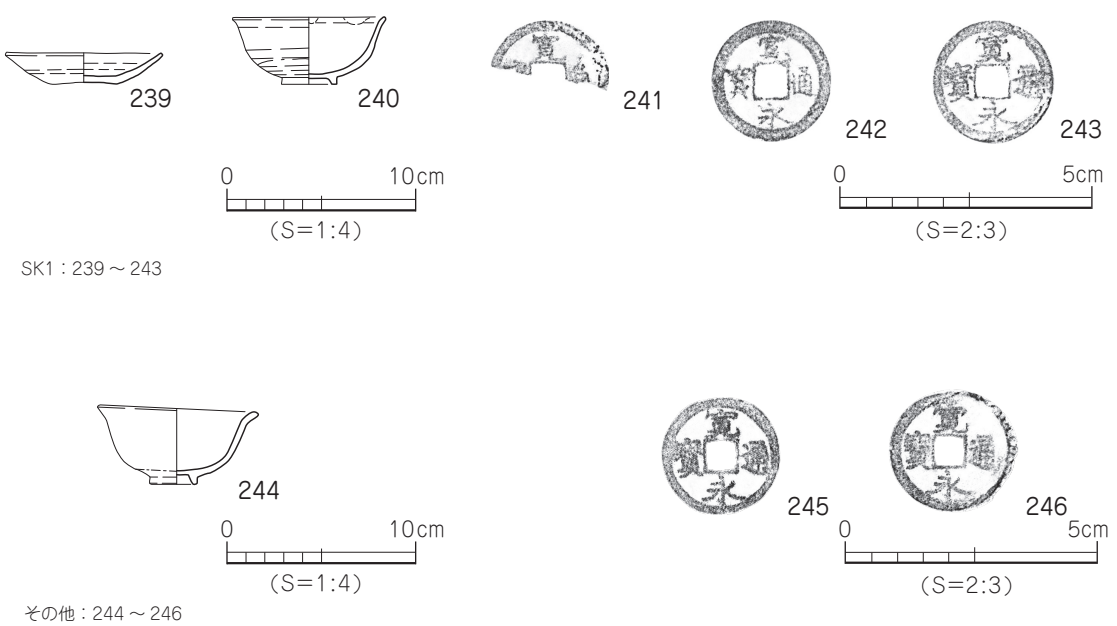
241 ～ 243 は「寛永通寶」の銅銭である。241 は残存 1/2 の破損品。直径 2.5cm、厚さ 0.1cm、重さ 1.21 グラムを測る。242 は直径 2.4cm、厚さ 0.1cm、重さ 2.41 グラムを測る。錆化のためか厚さが薄くなり、一部に小さな孔が空いている。243 は直径 2.5cm、厚さ 0.13cm、重さ 3.36 グラムを測る。

時期：出土した寛永通寶より江戸時代後半～明治時代の遺構と考えられる。

(3) その他の出土遺物（第 61 図）

244 ～ 246 は SK1 の北側斜面地で出土したもので、SK1 から掻き出された遺物と考えられるものである。

244 は陶器の碗。口径 8.2cm、器高 4.2cmを測る。SK1 で出土した 240 に形態がよく似る。内外面とも釉が施され灰色を呈する。底部外面から高台にかけては露胎となる。2 次的に被熱をしたと見られ



第 61 図　SK1・その他出土遺物実測図

施釉部分は溶けてざらついている。

245・246 は「寛永通寶」の銅銭である。245 は直径 2.9㎝、厚さ 0.1 ㎝、重さ 2.56 グラムを測る。246 は直径 2.5㎝、厚さ 0.13㎝、重さ 3.65 グラムを測る。

第４節　Ｂ区の調査

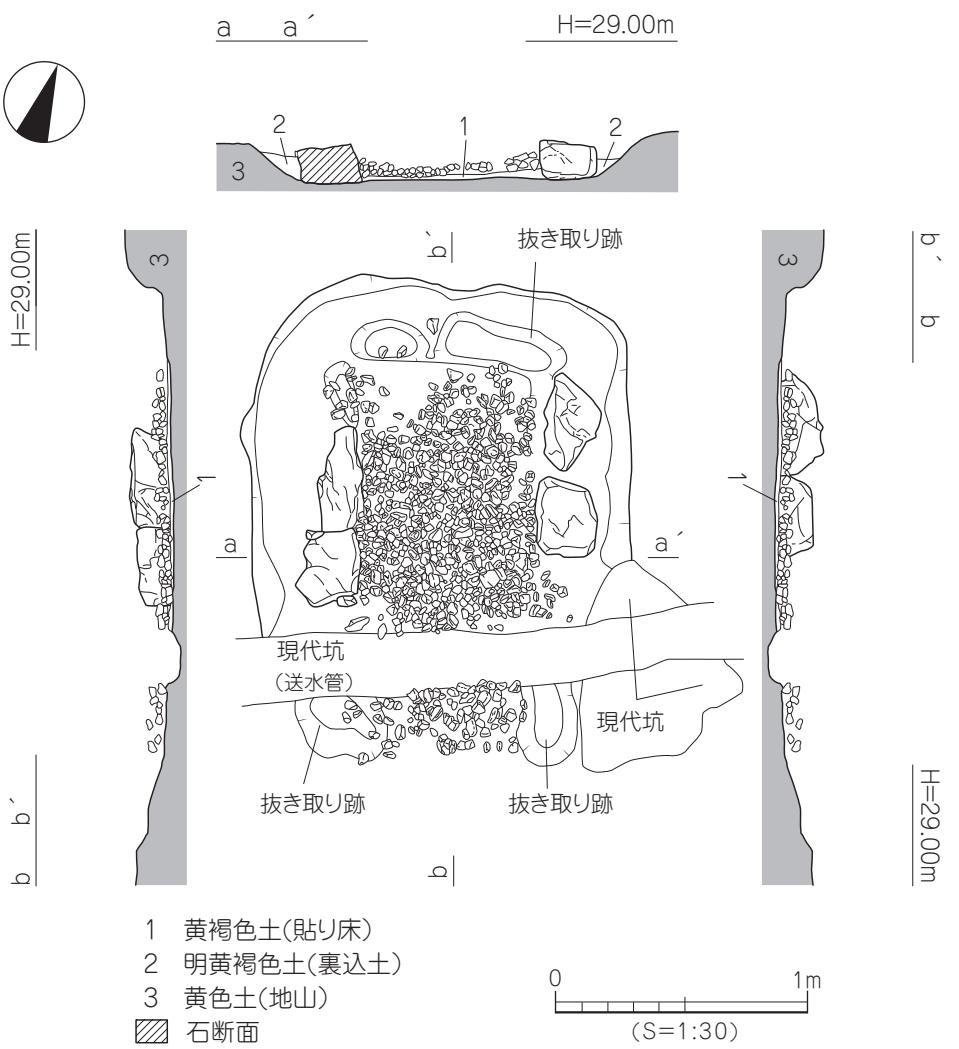
１. 腰折７号墳

（１）墳丘と墳形

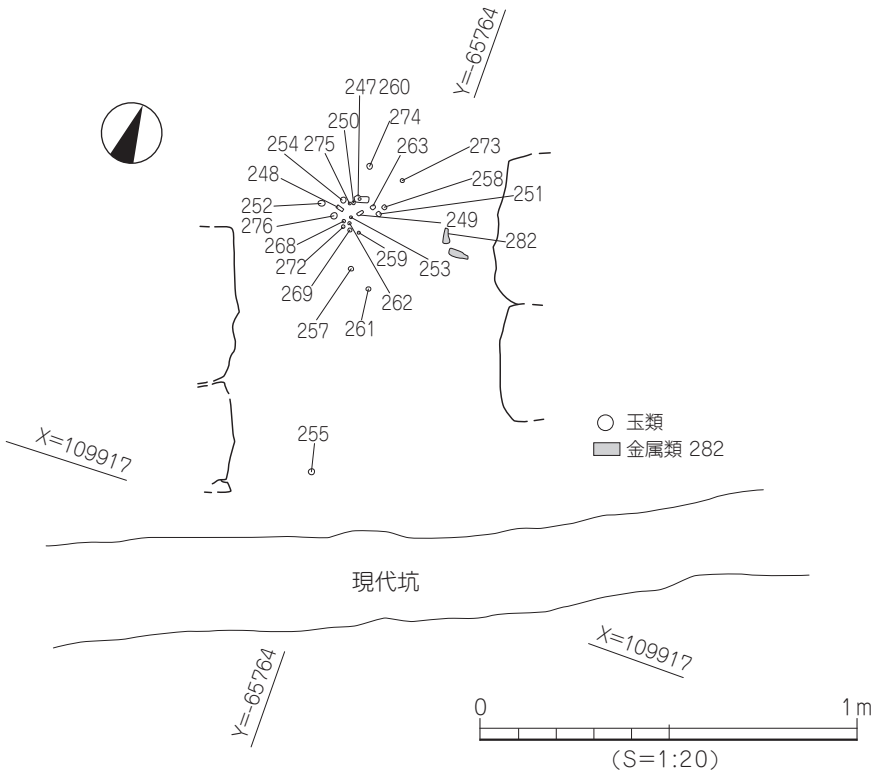
６号墳の東側約 30m での検出である。盛土は、開墾のため地山近くまで削平されすべて失われている。周溝などの施設も確認できていない。石室のみの検出で墳形、規模とも不明である。

（２）墓坑（第 62 図）

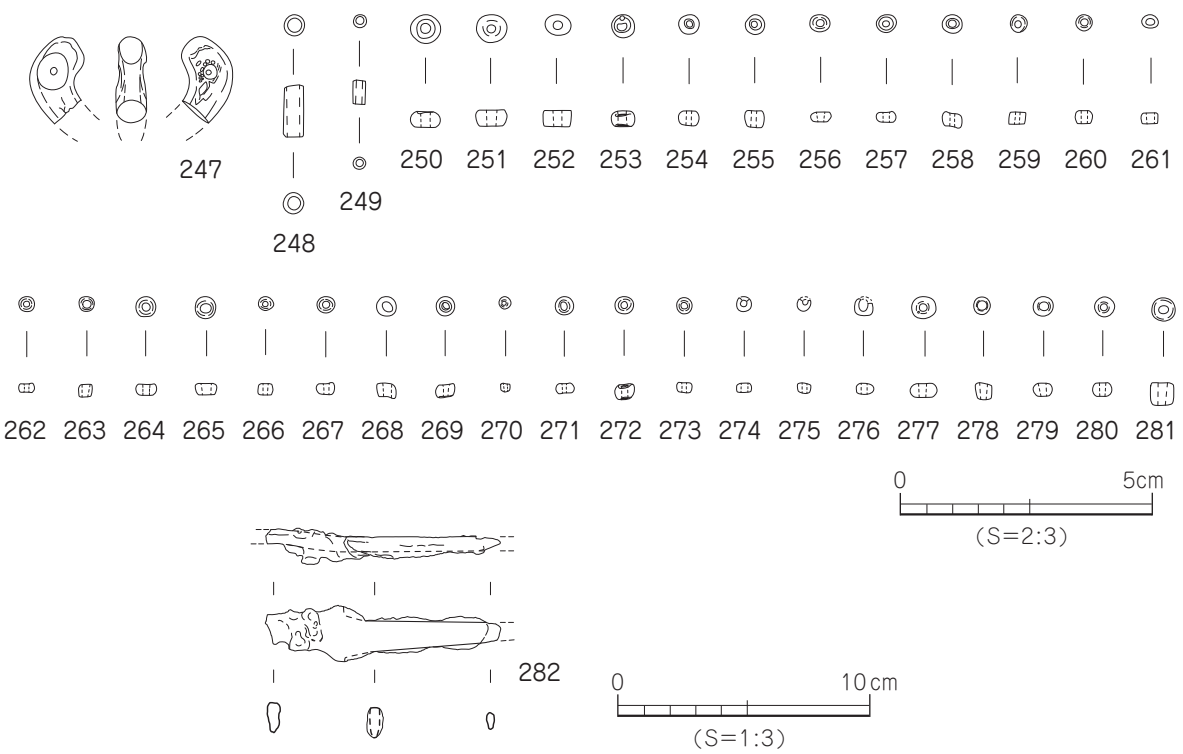
墓坑は地山面での検出である。平面形は隅丸長方形を呈する。検出規模は長軸（南北）2.33 m、短軸（東西）1.51m、深さ 0.22m を測る。



第 62 図　腰折７号墳測量図



第 63 図　腰折 7 号墳出土遺物平面図



第 64 図　腰折 7 号墳出土遺物実測図

（３）石室（第 62 図）

石室はひどく壊され東側と西側の基底部の２石が遺存するのみであとは抜き取られている。主軸方位は N19° W である。北側の木口部では石の抜取り痕跡を検出したが、南側では検出していない。南側では東側と西側の側壁の抜取り痕跡を検出している。検出長（北側の石の抜取り痕跡～南側の側壁の抜取り痕跡まで）1.59m、幅 0.70m、石材の床面までの高さ 0.22m を測る。床面は直径 2.0 ～ 6.0cm の玉石を貼床（厚さ 1.0 ～ 4.0cm）上に敷き詰めて礫床としている。両木口の石材も抜きとられているほか上部構造も不明なため、石室形態は不明としておく。

（４）石室内出土遺物（第 63・64 図）

遺物は主に石室北側中央部の礫床や貼床上で出土している。勾玉１点、管玉２点、ガラス玉 32 点、刀子１点、である。

247 は瑪瑙製の勾玉である。尾部が欠失する。現存長 1.7㎝、頭部幅 0.57㎝、最大厚は 0.62 ㎝を測る。穿孔方法は両面である。

248・249 は碧玉製の管玉である。248 は長さ 1.0㎝、径 0.4㎝を測る。249 は長さ 0.47㎝、径 0.23 ～ 0.24 ㎝を測る。穿孔方法は 248・249 とも片面と思われる。

250 ～ 281 はガラス玉。石室内で 32 点が出土している。そのうち５点は土振るいで検出したものである。250 ～ 252 は直径が 0.51㎝以上を測り、253 ～ 281 は直径が 0.50㎝以下のガラス玉である。直径 0.30㎝以下のものをガラス小玉に分類すれば、263・270・274・275 が該当する。271・272・277・279 は色調が黄色を呈するいわゆる粟玉である。

282 は刀子と考えられる破片である。錆化ひどく関部の形態も不明である。茎部にも木質は見られない。

第５節　小結

今回の調査では３基（腰折５～７号墳）の古墳と溝状の遺構１基（SX1）のほか、近世墓１基（SK1）などを確認した。古墳は築造時期が６世紀中葉～７世紀前葉と考えられる。石室はいずれも壊れていて全容はわからなかったが５号墳は横穴式石室、６号、７号墳は小さな石室形態不明の古墳である。遺物は比較的多く出土している。特に５号墳では石室内から多量の須恵器や鉄器、装飾品が出土した。このうち、子持器台は松山平野の南東部の古墳に比較的多く副葬されるが北条地区では稀な出土である。このほか、５号墳に先行する SX1 を検出している。この SX1 は古墳の周溝とも考えられるもので、遺構基底面からは土師器の甕や須恵器蓋坏、甕、鉄鎌などが出土しており、祭祀に使用された一括遺物として非常に資料価値の高い遺物群として評価されるものである。

今回の下難波腰折遺跡２次調査や前年度に調査した１次調査により、合計７基もの古墳を調査することができた。いずれも、６世紀以降に築造された後期古墳ではあるが、石室形態や副葬品など、下難波地区の古墳の様相を知る貴重な資料を得ることができた事は大きな成果であった。

遺物観察表　　－ 凡例 －

（1）　以下の表は、本調査地検出の遺物の計測値及び観察一覧である。

（2）　遺物観察表の各掲載について。

法量欄　　（　）：推定復元値

調整欄　　土製品の各部位名称を略記した。

例）口→口縁部、口端→口縁端部、天→天井部、肩→肩部、体→体部、体上→体部上位、体下→体部下位、脚→脚部、底→底部。

胎土欄　　胎土欄では混和剤を略記した。

例）石→石英、長→長石、金→金ウンモ、密→精製土、褐→褐色粒、黒→黒色粒、白→白色粒。

（　）の中の数値は混和剤粒子の大きさを示す。

例）石・長（1 ～ 3）→「1 ～ 3mm 大の石英・長石を含む」である。

焼成欄　　焼成欄の略記について。◎→良好、○→良。

表 24　　5 号墳玄室内出土遺物観察表　土製品（1）

番号	器種	法量（cm）		形態・施文	調整 外面	調整 内面	色調（外面）（内面）	胎土（mm）焼成	備考	図版
1	坏	口径 器高	10.2 3.7	丸味をもった平底の底部。口縁部は内湾して立ち上がる。器壁表面はかなりマメツしている。	口マメツ 底回転ヘラ削り	マメツ、一部ナデ	浅黄橙 10YR8/3 橙色 7.5YR7/6	石・長(0.5～5) ○	土師質	23
2	高坏	残高 底径	10.2 (10.8)	口縁端部は欠失する。坏体部は内湾する。低脚で脚基部は太い。脚柱に3方向の円孔が施される。	坏上→回転ナデ 坏底→回転ヘラ削り 脚柱→回転ナデ	坏底→回転ナデ、ナデ 脚柱→横ナデ 脚裾→横ナデ	橙色 7.5YR7/6 明黄褐色 10YR7/6	石・長(1～5) ○	土師質	23
3	高坏	残高	7.1	坏底部と脚柱の破片。脚柱に 3 方向の円孔が施される。	坏底→ヘラ削り 脚基部→ナデ 脚柱→回転ナデ	坏底→横ナデ、ナデ 脚柱→回転ナデ	橙色 7.5YR7/6 橙色 7.5YR7/6	石・長(1～7) ○	土師質	23
4	高坏	残高	6.7	坏底部と脚柱の破片。脚柱に 3 方向の円孔が施される。	脚基部→ナデ 脚柱→回転ナデ	坏底→横ナデ、ナデ 脚柱→回転ナデ	橙色 7.5YR7/6 橙色 7.5YR7/6	石・長(1～6) ○	土師質	23
5	坏蓋	口径 器高	(15.9) 4.7	扁平な天井部。天井部と口縁部を分ける稜はほぼ失われている。口縁端部内面は内側に段をもつ。	天回転ヘラ削り 2/3 口回転ナデ	天回転ナデ、ナデ 口回転ナデ	灰色 N4/0 灰色 N4/0	石・長(1～2) ◎		23
6	坏蓋	口径 器高	(14.8) 4.6	扁平な天井部。天井部と口縁部を分ける稜は丸く突出しない。口縁端部内面は内傾する凹面をもつ。	天回転ヘラ削り 2/3 口回転ナデ	天回転ナデ、ナデ 口回転ナデ	灰色 N4/0 灰色 N4/0	石・長(1～2) ◎		
7	坏蓋	口径 器高	(14.8) 3.7	扁平な天井部。天井部と口縁部を分ける稜は失われている。口縁端部内面は凹面となる。	天回転ヘラ削り 1/2 口回転ナデ	天回転ナデ、ナデ 口回転ナデ	灰色 N7/0 灰色 N7/0	石・長(1～2) ◎	内面当手具痕有り	23
8	坏身	口径 受部径 器高	(14.5) (17.0) (4.8)	口縁部は内傾して立ち上がる。口縁端部直下の内面に沈線が巡る。底部は扁平である。	口回転ナデ 底回転ヘラ削り 2/3	口回転ナデ、ナデ	オリーブ灰 5GY5/1 灰黄褐 10YR4/2	石・長(1～4) ○		23
9	坏身	口径 受部径 器高	(13.2) (15.8) (4.5)	口縁部は内傾して立ち上がる。口縁端部直下の内面は浅い段をもつ。底部はやや扁平である。	口回転ナデ 底回転ヘラ削り 2/3	口回転ナデ、ナデ	灰色 N4/0 灰色 N4/0	石・長(1～2) ◎		23
10	坏身	口径 受部径 器高	(12.0) (14.6) (3.4)	口縁部は内傾して立ち上がる。口縁端部は丸くおさめる。受部は水平にのびる。	口回転ナデ 底回転ヘラ削り 2/3	回転ナデ	灰色 N5/0 灰色 N5/0	石・長(1～2) ◎		
11	坏身	口径 受部径 器高	(12.0) (14.6) (3.4)	底部は欠失する。口縁部は内傾して立ち上がる。口縁端部は丸くおさめる。立ち上がりは比較的長い。	口回転ナデ	口回転ナデ	灰色 7.5Y6/1 灰色 5Y6/1	石・長(1～2) ◎		23
12	坏身	口径 受部径 器高	(12.0) (14.6) (3.4)	口縁部は内傾して立ち上がる。口縁端部は丸くおさめる。	口回転ナデ 底回転ヘラ削り 2/3	回転ナデ	灰白色 N7/0 灰白色 N7/0	石・長(1～2) ◎		

表 24　　５号墳玄室内出土遺物観察表　土製品（2）

番号	器種	法量（㎝）		形態・施文	調整 外面	調整 内面	色調（外面）（内面）	胎土（mm）焼成	備考	図版
13	高坏	口径 器高 底径	12.0 13.9 11.2	坏部の底部と口縁部の境は１条の凹線が巡る。脚は長脚で３方向に２段スカシが施される。	口回転ナデ 坏底→回転ヘラ削り 脚→回転ナデ	坏部→回転ナデ 脚柱→回転ナデ、ナデ、シボリ痕	暗灰色 N3/0 灰色 N6/0	石・長（1～2） ◎		23
14	高坏	口径 残高	(10.4) 3.1	坏部片。外反する口縁部。坏底部と口縁部の境は段をもつ。坏底 14 に１条の凹線を巡らす。	口回転ナデ 坏底→回転ヘラ削り	回転ナデ	灰色 N7/0 灰色 N4/0	石・長（1～2） ◎		23
15	高坏	残高 底径	10.1 (9.4)	脚部片。脚は長脚で２段スカシが施される。	脚→回転ナデ	脚柱→回転ナデ、ナデ、シボリ痕	灰色 N4/0 灰色 N4/0	石・長（1～2） ◎		
16	高坏	口径 器高 底径	11.5 15.5 10.2	口縁部は外傾して外上方にのびる。2条の凹線で区画された文様帯には櫛状工具による刺突文が施される。	口回転ナデ 坏底→マメツ 脚→回転ナデ	坏部→回転ナデ 脚柱→回転ナデ、ナデ、シボリ痕	黒色 N2/0 黒色 N2/0	石・長（1～3） ○		
17	高坏	残高	11.0	坏内面は赤焼けする。坏部の底部近くに櫛状工具の刺突文が施される。脚部に凹線状のナデ痕跡を残す。	脚→回転ナデ	脚柱→回転ナデ、ナデ、シボリ痕	灰白色 2.5Y7/1 坏内面 赤褐色 10R5/4	石・長（1～2） ○		
18	蓋	口径 器高	9.4 3.2	完形品。器壁は全体的に厚い。やや扁平な天井部。口縁端部はやや外に肥厚する。口縁端面は凹面となる。	天回転ヘラ削り 1/2 口回転ナデ	天回転ナデ 口回転ナデ	灰色 7.5Y5/1 灰色 7.5Y5/1	石・長（1～2） ◎		23
19	有蓋短頸壺	口径 器高	7.4 9.95	口縁部は内傾して立ち上がる。口縁端部は丸く仕上げる。体部の肩は強く張る。底部は扁平である。	口→体回転ナデ 底回転ヘラ削り	口→体回転ナデ 底横ナデ、ナデ	灰色 N5/0 灰色 N5/0	石・長（1～2） ◎		23
20	有蓋短頸壺	口径 器高	7.1 9.7	口縁部は内傾して立ち上がる。口縁端部は丸く仕上げる。体部の肩は強く張る。体部にヘラ記号あり。	口→体回転ナデ 底回転ヘラ削り	口→体回転ナデ 底横ナデ、ナデ	灰色 N5/0 灰色 N3/0	石・長（1～3） ◎		24
21	有蓋短頸壺	口径 器高	8.2 8.5	口縁部は直立して短く立ち上がる。口縁端部内面は強いナデにより段をもつ。体部の肩の張りは弱い。	口→体回転ナデ 底回転ヘラ削り	口→体回転ナデ 底横ナデ	灰色 N5/0 灰色 N5/0	石・長（1～2） ◎		24
22	有蓋短頸壺	口径 器高	7.8 8.9	口縁部は直立して立ち上がる。底部内面に同心円の当て具痕と、底部外面に「×」のヘラ記号が見られる。	口→体回転ナデ 底回転ヘラ削り	口→体回転ナデ 底横ナデ	灰色 N4/0 灰色 N5/0	石・長（1～3） ◎		24
23	有蓋短頸壺	口径 器高	8.4 7.5	口縁部は内傾して短く立ち上がる。口縁端部は丸く仕上げる。体部の肩は強く張る。底部は扁平である。	口→体回転ナデ 底回転ヘラ削り	口→体回転ナデ 底横ナデ、ナデ	灰白色 N7/0 灰色 N5/0	石・長（1～5） ◎		23
24	短頸壺	口径 器高	9.4 9.5	口縁部は直立して立ち上がる。口縁端部は肥厚して内側に段をもつ。	口→体回転ナデ 底回転ヘラ削り	口→体回転ナデ 底横ナデ	灰色 N4/0 灰色 N7/0	石・長（1～2） ◎		24
25	短頸壺	口径 器高	9.6 10.5	口縁部はやや外傾して立ち上がり、口縁端部はやや肥厚して丸くおさめる。底部は平坦である。	口回転ナデ 体上カキ目 底回転ヘラ削り	口→体回転ナデ 底横ナデ、ナデ	灰色 N4/0 灰色 N7/0	石・長（1～3） ◎		24
26	広口壺	口径 器高	10.6 14.5	外反する口縁部。口縁端面は丸くおさめる。底部は丸味をもった小さな平底である。	口→体回転ナデ 底回転ヘラ削り→ナデ	口→体回転ナデ	灰色 N5/0 灰色 N5/0	石・長（1～2） ◎		24
27	広口壺	口径 器高	14.1 18.7	外反する口縁部。口縁部は外に肥厚し２条の浅い凹線が施される。底部は不安定な丸底である。	口端回転ナデ 口→体タタキ→ 体回転ナデ	口体上回転ナデ 体下タタキ	灰色 N7/0 灰色 N7/0	石・長（1～4） ◎		24
28	広口壺	口径 器高	16.6 21.8	外反する口縁部。口縁端部は外に肥厚し丸くおさめる。頸部に１～２条の凹線を施す。底部は不安定な丸底。	口横ナデ 頸体下→カキ目 体上回転ナデ	口体上回転ナデ 底横ナデ、ナデ	灰色 N4/0 灰色 N4/0	石・長（1～2） ◎		25
29	提瓶	口径 器高	8.2 20.0	口縁端部は段をもつ。体部の前面は丸く膨れ、背面は平らである。肩部の耳は環状である。片方は欠失する。	口横ナデ 体前→カキ目 体背→回転ナデ、ナデ	口横ナデ 体前→回転ナデ 体背→回転ナデ、ナデ	灰色 N4/0 灰色 N4/0	石・長（1～3） ◎		25
30	子持器台	器高 鉢部口径 底径長軸	29.7 25.4 22.2	子坏の蓋には中央が凹むツマミが付く。蓋外面天井部に刺突文を施したのち、２条の凹線を巡らす。脚にはスカシと波状文が施される。	子→回転ケズリ、ナデ 坏→カキ目、ナデ 脚→ナデ	子→回転ナデ、ナデ 坏→ナデ 脚→回転ナデ、ナデ	暗灰色 N3/0 黒色 N1.5/0	石・長（1～6） △	焼け歪む・自然釉	25
31	子持器台	器高 鉢部口径 底径	35.0 30.0 20.0	蓋のツマミは中央が凹むものと扁平なものとがある。脚柱の文様帯には櫛状工具による縦位と斜位の沈線文が施される。	子→回転ケズリ、ナデ 坏→タタキ、ナデ、カキ目 脚→ナデ	子→回転ナデ、ナデ 坏→タタキ、ナデ 脚→回転ナデ、ナデ	灰色 N5/0 灰色 N5/0	石・長（1～4） ◎	自然釉	25

表 25　腰折 5 号墳玄室内出土遺物観察表　装身具（耳環）

番号	器種	残存	材質	法量				備考	図版
				長さ (cm)	幅 (cm)	厚さ (cm)	重さ (g)	出土群	
32	耳環	完形	銀	1.90	1.90	0.20	1.13	A 群	26

表 26　腰折 5 号墳玄室内出土遺物観察表　装身具（勾玉）

番号	器　種	残　存	材　質	色	法量						穿孔法	図版
					長さ (cm)	頭部幅 (cm)	最大厚 (cm)	右孔径 (cm)	左孔径 (cm)	重さ (g)	出土群	
33	勾玉	完形	水晶	透明	2.50	0.90	0.95	0.30	0.20	4.583	片面？ A 群	26

表 27　腰折 5 号墳玄室内出土遺物観察表　装身具（棗玉）

番号	器　種	残　存	材　質	色	法量						穿孔法	図版
					長さ (cm)	幅 (cm)	厚さ (cm)	上孔径 (cm)	下孔径 (cm)	重さ (g)	出土群	
34	棗玉	一部欠損	琥珀	暗褐色 7.5YR3/4	3.30	2.10	1.40	0.30	0.30	5.912	両面 A 群	26
35	棗玉	完形	琥珀	暗褐色 7.5YR3/4	2.35	1.70	1.70	0.30	0.30	3.816	両面 A 群	26

表 28　腰折 5 号墳玄室内出土遺物観察表　装身具（平玉）

番号	器　種	残　存	材　質	色	法量						穿孔法	図版
					長さ (cm)	幅 (cm)	厚さ (cm)	上孔径 (cm)	下孔径 (cm)	重さ (g)	出土群	
36	平玉	完形	碧玉	暗緑灰 10GY3/1	1.40	1.30	0.80	0.30	0.15	2.452	迎孔 A 群	26
37	平玉	完形	碧玉	暗緑灰 10GY3/1	1.40	1.15	0.70	0.25	0.16	1.935	片面 D 群	26
38	平玉	完形	碧玉	暗緑灰 10GY3/1	1.40	1.50	0.90	0.30	0.15	2.271	迎孔 A 群	26

表 29　腰折 5 号墳玄室内出土遺物観察表　装身具（切子玉・算盤玉・丸玉）

番号	器　種	残　存	材　質	色	法量						穿孔法	図版
					長さ (cm)	最大幅 (cm)	上孔径 (cm)	下孔径 (cm)	迎孔径 (cm)	重さ (g)	出土群	
39	切子玉	完形	水晶	半透明	2.80	2.00	0.50	0.20	0.40	13.998	迎孔 A 群	26
40	切子玉	完形	水晶	半透明	2.70	2.00	0.50	0.20	0.35	11.329	迎孔 A 群	26
41	切子玉	一部欠損	水晶	半透明	2.00	1.50	0.40	0.15	0.30	5.289	迎孔？ A 群	26
42	切子玉	一部欠損	水晶	半透明 飴色	1.25	1.50	0.28	(0.15)	—	(4.343)	— C 群	26
43	切子玉	完形	水晶	半透明	1.60	1.50	0.35	0.15	0.30	3.983	迎孔 A 群	26
44	切子玉	完形	水晶	半透明	1.50	1.35	0.35	0.15	0.30	3.527	迎孔 A 群	26
45	切子玉	完形	水晶	半透明	1.22	1.40	0.35	0.15	0.25	3.201	迎孔 D 群	26
46	切子玉	完形	水晶	半透明	1.20	1.35	0.30	0.15	0.25	2.900	迎孔 D 群	26
47	算盤玉	完形	水晶	半透明	1.45	1.40	0.30	0.20	0.30	3.517	迎孔 A 群	26
48	丸玉	完形	水晶	半透明	0.73	0.98	0.25	0.10	0.50	1.013	迎孔 D 群	26

表 30　　腰折５号墳玄室内出土遺物観察表　装身具（管玉）

番号	器　種	残　存	材　質	色	法　量							穿孔法 出土群	図版
					長さ (cm)	上径 (cm)	下径 (cm)	上孔径 (cm)	下孔径 (cm)	迎孔径 (cm)	重さ (g)		
49	管玉	完形	碧玉	暗オリーブ灰色 2.5GY4/1	2.70	0.80	0.80	0.27	0.14	—	3.528	片面 H 群	26
50	管玉	完形	碧玉	暗緑灰 7.5GY3/1	2.50	0.85	0.90	0.25	0.10	—	4.585	片面 E 群	26
51	管玉	完形	碧玉	暗緑灰 10GY3/1	2.50	0.75	0.75	0.30	0.15	—	2.956	片面 E 群	26
52	管玉	完形	碧玉	暗緑灰 7.5GY3/1	2.40	0.80	0.85	0.25	0.10	—	3.188	片面 E 群	26
53	管玉	完形	碧玉	暗緑灰 10GY3/1	2.30	0.80	0.80	0.30	0.10	0.35	2.778	迎孔 F 群	26
54	管玉	完形	碧玉	暗緑灰 10GY3/1	2.30	0.80	0.80	0.30	0.15	—	3.207	片面 G 群	26
55	管玉	完形	碧玉	暗緑灰 7.5GY3/1	2.30	0.85	0.85	0.25	0.10	0.22	3.174	迎孔 E 群	26
56	管玉	一部欠損	碧玉	暗緑灰 10GY4/1	2.20	0.90	0.90	0.35	0.15	—	3.555	片面 G 群	26
57	管玉	完形	碧玉	暗緑灰 10GY3/1	2.25	0.90	0.90	0.35	0.10	0.30	3.401	迎孔 E 群	26
58	管玉	完形	碧玉	暗緑灰 10GY3/1	2.25	0.80	0.80	0.25	0.10	0.25	2.816	迎孔 F 群	26
59	管玉	完形	碧玉	暗緑灰 10GY3/1	2.10	0.68	0.68	0.29	0.12	—	1.754	片面 F 群	26
60	管玉	完形	碧玉	暗緑灰 10GY3/1	1.55	0.73	0.72	0.25	0.10	—	1.822	片面 E 群	26
61	管玉	完形	碧玉	暗緑灰 10GY3/1	1.60	0.60	0.60	0.25	0.20	—	1.076	片面 G 群	26
62	管玉	完形	碧玉	緑灰 10GY6/1	2.34	0.84	0.80	0.25	0.23	—	2.774	両面？ F 群	26
63	管玉	完形	碧玉	緑灰 10GY6/1	2.26	0.87	0.87	0.30	0.30	—	2.663	両面？ E 群	26
64	管玉	完形	碧玉	緑灰 10GY6/1	2.00	0.67	0.67	0.20	0:10	—	1.545	片面 F 群	26
65	管玉	完形	碧玉	緑灰 10GY6/1	2.10	0.72	0.74	0.30	0.08	0.15	2.160	迎孔 単独	26
66	管玉	上孔面のみ遺存	碧玉	緑灰 10GY6/1	0.30	0.57	—	0.20	—	—	0.090	— H 群	26

表 31　　腰折５号墳玄室内出土遺物観察表　装身具（ガラス玉）(1)

番号	器　種	残　存	材　質	色	法　量				備　考 出土群	図版
					直径 (cm)	孔径 (cm)	高さ (cm)	重さ (g)		
67	ガラス玉	完形	ガラス	濃青色	0.82	0.20	0.67	0.627		
68	ガラス玉	完形	ガラス	濃青色	0.80	0.20	0.60	0.617	B 群	26
69	ガラス玉	完形	ガラス	濃青色	0.76	0.35	0.64	0.556	B 群	26
70	ガラス玉	完形	ガラス	濃青色	0.80	0.20	0.75	0.672	B 群	26
71	ガラス玉	完形	ガラス	濃青色	0.80	0.16	0.53	0.454	B 群	26
72	ガラス玉	完形	ガラス	濃青色	0.76	0.21	0.60	0.467	H 群	26
73	ガラス玉	完形	ガラス	濃青色	0.78	0.22	0.57	0.466	H 群	26
74	ガラス玉	完形	ガラス	濃青色	0.80	0.19	0.57	0.517	G 群	26
75	ガラス玉	完形	ガラス	濃青色	0.75	0.20	0.60	0.497	H 群	26
76	ガラス玉	完形	ガラス	濃青色	0.70	0.20	0.60	0.400	H 群	26

腰折５号墳玄室内出土遺物観察表　装身具（ガラス玉）(2)

番号	器　種	残　存	材　質	色	法　量				備　考	図版
					直径(cm)	孔径(cm)	高さ(cm)	重さ(g)	出土群	
77	ガラス玉	完形	ガラス	濃青色	0.85	0.20	0.46	0.472	H群	26
78	ガラス玉	完形	ガラス	濃青色	0.90	0.20	0.48	0.511	B群	26
79	ガラス玉	完形	ガラス	濃青色	0.70	0.10	0.63	0.472	B群	26
80	ガラス玉	完形	ガラス	濃青色	0.85	0.20	0.62	0.585	B群	26
81	ガラス玉	完形	ガラス	濃青色	0.65	0.17	0.62	0.368	I群	26
82	ガラス玉	完形	ガラス	濃青色	0.74	0.20	0.50	0.380	I群	26
83	ガラス玉	完形	ガラス	濃青色	0.81	0.23	0.45	0.383	G群	26
84	ガラス玉	完形	ガラス	濃青色	0.73	0.25	0.56	0.358	C群	26
85	ガラス玉	完形	ガラス	濃青色	0.84	0.17	0.56	0.571		26
86	ガラス玉	完形	ガラス	濃青色	0.62	0.20	0.56	0.250		26
87	ガラス玉	完形	ガラス	濃青色	0.55	0.20	0.53	0.228		26
88	ガラス玉	完形	ガラス	濃青色	0.52	0.24	0.42	0.163		26
89	ガラス玉	完形	ガラス	濃青色	0.55	0.19	0.40	0.141		26
90	ガラス玉	完形	ガラス	濃青色	0.65	0.10	0.51	0.343	E群	26
91	ガラス玉	完形	ガラス	濃青色	0.63	0.21	0.49	0.261	I群	26
92	ガラス玉	完形	ガラス	濃青色	0.64	0.20	0.40	0.251	I群	26
93	ガラス玉	完形	ガラス	濃青色	0.59	0.14	0.34	0.166	E群	26
94	ガラス玉	完形	ガラス	濃青色	0.51	0.16	0.33	0.114	F群	26
95	ガラス玉	完形	ガラス	濃青色	0.55	0.20	0.35	0.149	F群	26
96	ガラス玉	完形	ガラス	濃青色	0.64	0.25	0.40	0.178	C群	26
97	ガラス玉	完形	ガラス	濃青色	0.63	0.19～0.22	0.41	0.211	F群	26
98	ガラス玉	完形	ガラス	濃青色	0.62	0.17	0.40	0.210	C群	26
99	ガラス玉	完形	ガラス	濃青色	0.70	0.20	0.41	0.279	C群	26
100	ガラス玉	完形	ガラス	濃青色	0.58	0.16	0.34	0.139		26
101	ガラス玉	完形	ガラス	濃青色	0.57	0.13	0.41	0.173		26
102	ガラス玉	完形	ガラス	濃青色	0.55	0.28	0.30	0.119	F群	26
103	ガラス玉	完形	ガラス	濃青色	0.54	0.20	0.46	0.092	E群	26
104	ガラス玉	完形	ガラス	濃青色	0.47	0.18	0.40	0.105	H群	26
105	ガラス玉	完形	ガラス	濃青色	0.40	0.10	0.30	0.076	H群	26
106	ガラス玉	完形	ガラス	濃青色	0.51	0.26	0.19	0.048		26
107	ガラス玉	完形	ガラス	濃青色	0.38	0.10	0.32	0.068		26
108	ガラス玉	完形	ガラス	濃青色	0.42	0.10	0.30	0.074	F群	26
109	ガラス玉	完形	ガラス	濃青色	0.37	0.10	0.22	0.045	F群	26
110	ガラス玉	完形	ガラス	濃青色	0.40	0.10	0.24	0.057	側壁大刀	26

腰折５号墳玄室内出土遺物観察表　装身具（ガラス玉）(3)

番号	器　種	残　存	材　質	色	法　量				備　考	図版
					直径(cm)	孔径(cm)	高さ(cm)	重さ(g)	出土群	
111	ガラス玉	完形	ガラス	濃青色	0.40	0.15	0.26	0.057		26
112	ガラス玉	完形	ガラス	濃青色	0.37	0.07	0.27	0.054		26
113	ガラス玉	完形	ガラス	濃青色	0.40	0.15	0.21	0.040		26
114	ガラス玉	完形	ガラス	濃青色	0.35	0.10	0.31	0.049		26
115	ガラス玉	完形	ガラス	濃青色	0.33	0.10	0.31	0.049		26
116	ガラス玉	完形	ガラス	濃青色	0.35	0.13	0.29	0.039		26
117	ガラス玉	完形	ガラス	濃青色	0.41	0.12	0.29	0.060		26
118	ガラス玉	完形	ガラス	濃青色	0.41	0.16	0.27	0.050		26
119	ガラス玉	完形	ガラス	濃青色	0.63	0.17	0.53	0.301		26
120	ガラス玉	完形	ガラス	濃青色	0.42	0.13	0.27	0.053		26
121	ガラス玉	完形	ガラス	濃青色	0.40	0.14	0.22	0.040		26
122	ガラス玉	完形	ガラス	濃青色	0.39	0.10	0.22	0.040		26
123	ガラス玉	完形	ガラス	濃青色	0.35	0.10	0.22	0.040		26
124	ガラス玉	完形	ガラス	淡青色	0.64	0.17	0.36	0.168	Ｉ群	26
125	ガラス玉	完形	ガラス	緑青色	0.60	0.20	0.44	0.186	Ｈ群	26
126	ガラス玉	完形	ガラス	青色	0.58	0.15	0.40	0.164	Ｆ群	26
127	ガラス玉	一部欠損	ガラス	淡青緑色	0.44	0.17	0.46	0.091		26
128	ガラス玉	完形	ガラス	淡青色	0.52	0.20	0.33	0.101	Ｆ群	26
129	ガラス玉	完形	ガラス	淡青色	0.39	0.20	0.18	0.030	Ｈ群	26
130	ガラス玉	完形	ガラス	青色	0.30	0.15	0.21	0.027		26
131	ガラス玉	完形	ガラス	青色	0.30	0.12	0.15	0.020	Ｅ群	26
132	ガラス玉	完形	ガラス	青色	0.27	0.07	0.18	0.018	Ｆ群	26
133	ガラス玉	完形	ガラス	緑青色	0.30	0.10	0.14	0.018	Ｅ群	26
134	ガラス玉	完形	ガラス	緑色	0.31	0.14	0.22	0.023	Ｆ群	26
135	ガラス玉	完形	ガラス	青色	0.29	0.12	0.16	0.015	Ｈ群	26
136	ガラス玉	完形	ガラス	青色	0.35	0.15	0.14	0.022	Ｈ群	26
137	ガラス玉	完形	ガラス	青色	0.26	0.14	0.25	0.024	Ｈ群	26
138	ガラス玉	完形	ガラス	青色	0.33	0.15	0.18	0.028	Ｆ群	26
139	ガラス玉	完形	ガラス	青色	0.33	0.13	0.26	0.029	Ｈ群	26
140	ガラス玉	完形	ガラス	青色	0.32	0.10	0.26	0.026	Ｈ群	26
141	ガラス玉	完形	ガラス	緑色	0.36	0.18	0.18	0.030		26
142	ガラス玉	完形	ガラス	黄色	0.43	0.15	0.23	0.059	側壁大刀	26
143	ガラス玉	完形	ガラス	濃青色	0.35	0.10	0.220	0.040	側壁大刀	26
144	ガラス玉	完形	ガラス	濃青色	0.39	0.10	0.27	0.057	側壁大刀	26

腰折５号墳玄室内出土遺物観察表　装身具（ガラス玉）(4)

番号	器　種	残　存	材　質	色	法　量				備　考	図版
					直径(cm)	孔径(cm)	高さ(cm)	重さ(g)	出土群	
145	ガラス玉	完形	ガラス	濃青色	0.40	0.10	0.26	0.062	側壁大刀	26
146	ガラス玉	完形	ガラス	濃青色	0.39	0.10	0.32	0.070	側壁大刀	26
147	ガラス玉	完形	ガラス	濃青色	0.42	0.15	0.27	0.058	側壁大刀	26
148	ガラス玉	完形	ガラス	青色	0.32	0.15	0.22	0.031	側壁大刀	26
149	ガラス玉	完形	ガラス	青色	0.31	0.10	0.20	0.023	側壁大刀	26
150	ガラス玉	完形	ガラス	青色	0.33	0.10	0.23	0.028	側壁大刀	26
151	ガラス玉	完形	ガラス	緑色	0.33	0.15	0.16	0.025	G 群	26
152	ガラス玉（粟玉）	完形	ガラス	黄色	0.48	0.15	0.38	0.115	E 群	26
153	ガラス玉（粟玉）	完形	ガラス	黄色	0.32 ～ 0.34	0.10	0.18	0.027	E 群	26
154	ガラス玉（粟玉）	完形	ガラス	黄色	0.32	0.10	0.20	0.025	E 群	26
155	ガラス玉（粟玉）	完形	ガラス	黄色	0.30	0.10	0.19	0.023	E 群	26
156	ガラス玉	完形	ガラス	濃青色	0.35	0.15	0.22	0.044	E 群	26
157	ガラス玉	完形	ガラス	濃青色	0.31	0.10	0.33	0.052	E 群	26
158	ガラス玉	完形	ガラス	濃青色	0.36	0.11	0.33	0.058	E 群	26
159	ガラス玉	完形	ガラス	青色	0.35	0.10	0.21	0.033	E 群	26
160	ガラス玉	完形	ガラス	青色	0.38	0.17	0.20	0.030	E 群	26
161	ガラス玉	完形	ガラス	濃青色	0.31	0.13	0.17	0.017	E 群	26
162	ガラス玉	完形	ガラス	濃青色	0.40	0.13	0.17	0.029	E 群	26
163	ガラス玉	完形	ガラス	淡緑黄色	0.35	0.13	0.18	0.029	E 群	26
164	ガラス玉	完形	ガラス	淡青色	0.46	0.13	0.32	0.088	E 群	26
165	ガラス玉	完形	ガラス	青色	0.37	0.11	0.26	0.041	E 群	26
166	ガラス玉	完形	ガラス	濃青色	0.37	0.12	0.28	0.049	E 群	26
167	ガラス玉	完形	ガラス	濃青色	0.36	0.12	0.31	0.043	E 群	26
168	ガラス玉	完形	ガラス	青色	0.38	0.23	0.22	0.039	E 群	26
169	ガラス玉	完形	ガラス	青色	0.41	0.15	0.25	0.046	E 群	26
170	ガラス玉	完形	ガラス	濃青色	0.40	0.11	0.20	0.062	F 群	26
171	ガラス玉	完形	ガラス	濃青色	0.38	0.13	0.28	0.055	F 群	26
172	ガラス玉	完形	ガラス	濃青色	0.40	0.12	0.26	0.046	F 群	26
173	ガラス玉	完形	ガラス	淡青色	0.33	0.14	0.30	0.033		26
174	ガラス玉	完形	ガラス	青色	0.33	0.12	0.22	0.028	G 群	26
175	ガラス玉	完形	ガラス	淡緑色	0.37	0.15	0.21	0.38		26
176	ガラス玉	完形	ガラス	濃青色	0.74	0.17	0.48	0.332	側壁大刀	26
177	ガラス玉	完形	ガラス	濃青色	0.70	0.20	0.40	0.300	H 群	26
178	ガラス玉	完形	ガラス	淡青色	0.33	0.14	0.19	0.022		26

腰折５号墳玄室内出土遺物観察表　装身具（ガラス玉）(5)

番号	器　種	残　存	材　質	色	法　量				備　考 出土群	図版
					直径 (cm)	孔径 (cm)	高さ (cm)	重さ (g)		
179	ガラス玉	完形	ガラス	濃青色	0.38	0.10	0.23	0.036		
180	ガラス玉	完形	ガラス	濃青色	0.25	0.10	0.30	0.034		

表 32　腰折５号墳玄室内出土遺物観察表　鉄製品（大刀）

番号	器種	残存	材質	法　量				備考	図版
				長さ (cm)	幅 (cm)	厚さ (cm)	重さ (g)		
181	大刀	刃部、柄部	鉄	(66.8)	(2.4 ～ 3.0)	(0.5 ～ 1.2)	750.77		27
182	大刀	刃部、茎部の一部 鞘の一部	鉄 木製	(68.8)	(2.8 ～ 3.5)	(0.7 ～ 2.5)	913.65	木鞘、布目	27

表 33　腰折５号墳出玄室内土遺物観察表　鉄製品（鏃）

番号	種類	残存	材質	法　量							備考	図版
				全長 (cm)	身部長 (cm)	身部幅 (cm)	身部厚 (cm)	頸部長 (cm)	茎部長 (cm)	重さ (g)		
183-1	長三角形鏃	ほぼ完品	鉄	11.9	(4.9)	(2.8)	(0.28)	(3.5)	(3.5)	183-1 ～ -5 計 75.42	スカシ有	27
183-2	有頸 方頭鏃	茎の一部 欠損	鉄	(9.8)	(4.1)	(2.5)	(0.39)	(2.7)	(3.0)	※	※	27
183-3	長頸鏃	茎の先端 欠損	鉄	(11.4)	2.7	(1.4)	(0.6)	7.3	(1.4)	※	段違い関	27
183-4	長頸鏃	身部先、茎 の一部欠損	鉄	(7.5)	2.3	(1.0)	(0.3)	3.6	(1.6)	※	角関	27
183-5	長頸鏃	身部先、 茎部欠損	鉄	12.3	3.0	(1.2)	(0.4)	6.2	3.1	※	腸抉 柳刃	27
184-1	長頸鏃	茎部先 欠損	鉄	(12.1)	2.0	1.2	0.19	7.05	(2.8)	184-1 ～ -4 計 55.18		27
184-2	長頸鏃	ほぼ完品	鉄	(14.9)	—	—	—	—	—	※		27
184-3	長頸鏃	身部先、 茎部欠損	鉄	(14.2)	(2.8)	(1.41)	(0.28)	(6.4)	(5.0)	※		27
184-4	長頸鏃	身部先、 茎部欠損	鉄	(12.1)	(2.1)	(1.1)	(0.21)	—	—	※		27
185	長頸鏃	身部先 欠損	鉄	(12.0)	(1.4)	(1.1)	—	(6.4)	4.2	9.65		27
186	鉄鏃	茎部	鉄	(4.3)	—	—	—	(1.8)	(2.5)	4.90		27
187	鉄鏃	身部、頸部 の一部	鉄	(6.2)	(1.6)	(1.3)	(0.20)	(4.5)	—	5.90		27
188	鉄鏃	頸部	鉄	(4.6)	—	—	—	(0.4)	(4.1)	5.55		27
189	鉄鏃	頸部	鉄	(3.5)	—	—	—	—	(3.5)	3.21		27
190	鉄鏃	頸部	鉄	(4.0)	—	—	—	—	(4.0)	4.35		27

表 34　腰折５号墳玄室内出土遺物観察表　鉄製品（馬具）

番号	器種	形態	残存	材質	法　量（鏡板）		法　量（銜部）		備考	図版
					長さ (cm)	幅 (cm)	長さ (cm)	厚さ (cm)		
191	轡	鉄製楕円形 鏡板付轡	一部欠損	鉄	12.1	8.4	20.4	0.75		28
192	轡	素環付轡	素環と銜部	鉄	7.0	6.2	7.1	0.3 ～ 0.6		28

表 35　腰折 5 号墳玄室内出土遺物観察表　鉄製品（農工具ほか）

番号	器種	残存	材質	法量				備考	図版
				長さ (cm)	幅 (cm)	厚さ (cm)	重さ (g)		
193	U 字刃先	ほぼ完形	鉄	16.7	18.7	0.5 ～ 1.45	294.37		28
194	鎌	一部欠損	鉄	19.6	4.0	1.0	130.92		28
195	鉄斧	ほぼ完形	鉄	10.6	4.75	3.7	179.57	№194 鎌の刃部付着	28
196	刀子	ほぼ完形	鉄	(14.80)	1.90	0.30（刃部）	24.36		28
197	刀子	刃部、茎部一部欠損	鉄	(10.70)	1.90	0.45（刃部）	21.38		28
198	刀子	茎部一部欠損	鉄	(8.9)	1.2 ～ 2.0	0.40（刃部）	15.79		28
199	刀子	刃部、茎部一部欠損	鉄	(3.2)	2.1	0.43	3.55		28
200	刀子	刃部、茎部一部欠損	鉄	(7.4)	0.7 ～ 1.4	0.32（刃部）	8.07		28
201	刀子	身部先、茎部欠損	鉄	(6.6)	1.3	0.7	5.64		28
202	鉋	刃部、茎部など一部欠損	鉄	(9.80)	(1.80)	(1.10)	10.04		28
203	鉋	刃部、茎部など一部欠損	鉄	(4.0)	(0.9)	(0.4)	3.14		28

表 36　腰折 5 号墳出土遺物観察表　土製品（埴輪）

番号	埴輪種類	焼成	色調（外面）（内面）	法量		形状		基底部高	備考	図版
				測定部位	cm	口縁部	タガ	cm		
204	朝顔形埴輪	土師質（硬質）	橙色 2.5YR7/8 橙色 2.5YR7/8	基底部 残高	(11.4) (49.3)	—	断面はMと三角	13.9	口縁部は欠失する。	29
205	円筒埴輪	土師質（硬質）	橙色 2.5YR6/8 橙色 2.5YR6/8	口縁部 基底部 器高	(23.8) 14.2 43.1	断面「コ」字状	断面は低いM字状	15.1	ほぼ全形が残る。突帯 3 条 4 段構成の個体。突帯間距離より基底部長が大きく上回る。	29
206	円筒埴輪	土師質（硬質）	橙色 2.5YR7/6 橙色 2.5YR7/6	口縁部 基底部 器高	24.5 12.2 47.5	断面「コ」字状	断面は低いM字状	15.8	ほぼ全形が残る。突帯 3 条 4 段構成の個体。突帯間距離より基底部長が大きく上回る。	
207	朝顔形埴輪	半須恵質	にぶい褐色 7.5YR7/4 灰褐色 7.5YR5/4	くびれ部	(16.0)	—	断面は低いM字状	—	くびれ部の破片。	
208	円筒埴輪	半須恵質	にぶい赤褐色 2.5YR5/3 鈍い橙色 5YR6/3	口縁部	(23.2)	断面「コ」字状	—	—	口縁部の破片。	29
209	円筒埴輪	土師質（硬質）	にぶい黄橙色 10YR7/4 にぶい黄橙色 10YR7/4	筒部上	(33.2)	—	断面は低いM字状	—	筒部の破片。タガの上下接合部はナデにより少し凹む。タガは低い断面M字状であるが部分的に下部が潰れる。	
210	円筒埴輪	半須恵質	にぶい赤褐色 5YR5/4 にぶい褐色 7.5YR5/4	筒部上	(24.8)	—	断面は低いM字状	—	筒部の破片。円孔あり。№75,.41,132	29
211	円筒埴輪	土師質（硬質）	にぶい黄橙色 10YR7/4 にぶい黄橙色 10YR7/4	筒部上	(23.8)	—	断面はMと三角	—	筒部の破片。タガは低いM字状。部分的に下部は強いナデによって潰れ低くなる。	29
212	円筒埴輪	土師質（硬質）	橙色 7.5YR6/6 橙色 7.5YR6/6	筒部上	(28.4)	—	上部が厚低いM	—	筒部の破片。タガは低い断面M字状であるが部分的に下部が潰れる。	
213	円筒埴輪	半須恵質	灰色 5Y4/1 黄灰色 2.5Y4/1	筒部上	(20.6)	—	断面は低いM字状	—	筒部の破片。円孔あり。	
214	朝顔形埴輪	土師質（硬質）	にぶい黄橙色 10YR7/4 にぶい黄橙色 10YR7/4	筒部上	(24.4)	—	断面はMと三角	—	筒部の破片。タガは低いM字状。部分的に下部は強いナデによって潰れ低くなる。器壁は厚い。	29
215	円筒埴輪	土師質（硬質）	にぶい黄橙色 10YR7/4 にぶい黄橙色 10YR7/4	筒部上	(25.0)	—	断面は低いM字状	—	筒部の破片。タガの上下接合部は強いナデにより凹む。タガは低い断面M字状であるが部分的に下部が潰れる。	
216	円筒埴輪	半須恵質	灰褐色 5YR5/2 灰褐色 5YR6/2	筒部上	(20.6)	—	断面は低いM字状	—	筒部の破片。	
217	円筒埴輪	土師質（硬質）	にぶい黄橙色 10YR7/4 にぶい黄橙色 10YR7/4	筒部上	(23.6)	—	断面は低いM字状	—	筒部の破片。タガの上下接合部は強いナデにより凹む。タガは低いM字状。部分的に下部は強いナデによって潰れる。	
218	円筒埴輪	土師質（硬質）	橙色 7.5YR6/6 橙色 7.5YR6/6	筒部上 基底部	(22.3) 16.9	—	断面は低いM字状	—	筒部の破片。タガは低い断面M字状。	
219	円筒埴輪	土師質（硬質）	明黄褐色 10YR7/6 橙色 7.5YR6/6	筒部上 基底部	(24.3) (14.2)	—	断面は低いM字状	13.0	基底部～筒部の破片。タガは低い断面M字状であるが部分的に下部が潰れる。タガ上部の接合部は強いナデにより凹む。	29
220	円筒埴輪	土師質（硬質）	にぶい橙色 5YR6/3 赤灰 2.5YR5/1	基底部	(17.4)	—	断面は低いM字状	15.4	基底部～筒部の破片。タガは低い断面 M 字状。	29
221	円筒埴輪	土師質（硬質）	にぶい黄橙色 10YR7/4 にぶい黄橙色 10YR7/4	基底部	(12.7)	—	—	残高(9.2)	外面に板状の押さえ痕あり。	
222	円筒埴輪	土師質（硬質）	にぶい黄橙色 10YR7/4 にぶい黄橙色 10YR7/4	基底部	(15.6)	—	—	残高(14.3)	基底端部は先細り丸く仕上げる。	

表 37　腰折６号墳　出土遺物観察表　土製品

番号	器種	法量（cm）		形態・施文	調整 外面	調整 内面	色調（外面）（内面）	胎土（mm）焼成	備考	図版
223	有蓋短頸壺	口径 器高	7.0 6.9	口縁部は短く直立して立ち上がる。口縁端部は丸くおさめる。肩部の張りは強い。底部は内側少し凹む。	(体上)半→ナデ (体下)半→回転ヘラ削り	回転ナデ、ナデ	灰色 N 6/0 灰色 N 6/0	石・長・黒 (0.5～1) ◎		30
224	提瓶	口径 残高	8.4 2.2	口縁部片。外反する口縁部。口縁端部はやや肥厚して丸くおさめる。端部外面に1条の細い沈線が巡る。	横ナデ	横ナデ	灰色 N 5/0 灰色 N 6/0	石・長・黒 (0.5～1) ◎		

表 38　腰折６号墳玄室内出土遺物観察表　装身具（管玉）

番号	器種	残存	材質	色	法量 長さ(cm)	法量 上径(cm)	法量 下径(cm)	法量 上孔径(cm)	法量 下孔径(cm)	法量 迎孔径(cm)	法量 重さ(g)	穿孔法	図版
225	管玉	ほぼ完形	碧玉	暗緑灰色	2.32	0.78	0.77	0.35	0.26	―	2.687	両面	30

表 39　腰折６号墳玄室内出土遺物観察表　装身具（土玉）

番号	器種	残存	材質	色	法量 直径(cm)	法量 孔径(cm)	法量 高さ(cm)	法量 重さ(g)	備考	図版
226	土玉	ほぼ完形	粘土	褐灰色	0.73	0.18	0.55	0.260		30
227	土玉	完形	粘土	褐灰色	0.75	0.12	0.65	0.320		30
228	土玉	一部欠失	粘土	褐灰色	0.75	0.25	0.60	0.269		30

表 40　腰折６号墳玄室内出土遺物観察表　鉄製品（農工具）

番号	器種	残存	材質	法量 長さ(cm)	法量 幅(cm)	法量 厚さ(cm)	法量 重さ(g)	備考	図版
229	鎌	一部欠損	鉄	(7.7)	2.8	0.45	28.05	布付着痕有り	30

表 41　SX1 出土遺物観察表　土製品

実測番号	器種	法量（cm）		形態・施文	調整 外面	調整 内面	色調（外面）（内面）	胎土（mm）焼成	備考	図版
230	土師器甕	口径 残高	(15.4) 9.3	口縁部は外傾して立ち上がる。口縁端部は上方に面をもつ。	(口)横ナデ (体上)ヘラミガキ	ナデ、指頭痕	橙色 7.5YR6/6 橙色 7.5YR6/6	石・長(1～2) ○		32
231	坏蓋	口径 器高	11.8 4.0	扁平な天井部。天井部と口縁部を分ける稜は短く鋭い。口縁端部内面は内側に凹面をもつ。	(天)回転ヘラ削り 2/3 (口)回転ナデ	(天)回転ナデ (口)回転ナデ	黒色 N2/0 黒色 N2/0	石・長(1～2) ◎	天井部赤色顔料付着 234 の蓋	32
232	坏蓋	口径 器高	12.6 5.1	やや丸味をもった　天井部。天井部と口縁部を分ける稜は短く突出する。口縁端部内面は凹面をもつ。	(天)回転ヘラ削り 4/5 (口)回転ナデ	回転ナデ、ナデ	灰色 N6/0 灰色 N4/0	石・長(1～3) ◎	235 の蓋	32
233	坏蓋	口径 器高	12.0 4.4	やや扁平な天井部。天井部と口縁部を分ける稜は丸味をもつ。口縁端部内面は浅い凹面。	(天)回転ヘラ削り 2/3 (口)回転ナデ	(天)回転ナデ、ナデ (口)回転ナデ	灰色 N4/0 灰色 N4/0	石・長・黒色粒 (1～2) ◎	236 の蓋	32
234	坏身	口径 受部径 器高	9.8 12.0 4.4	口縁部は内傾して上方に立ち上がる。口縁端部直下の内面は段をもつ。底部は平坦。外面に「×」状のヘラ記号を施している。	(口)回転ナデ (底)回転ヘラ削り 2/3	(口)回転ナデ、ナデ	黒色 N2/0 黒色 N2/0	石・長(1～2) ○	231 の身	32
235	坏身	口径 受部径 器高	10.2 11.6 4.6	口縁部は内傾して上方に立ち上がる。口縁端部直下の内面は段をもつ。底部は平坦。	(口)回転ナデ (底)回転ヘラ削り 3/4	回転ナデ	灰色 N3/0 灰色 N3/0	石・長・黒色粒 (1～2) ◎	232 の身	32
236	坏身	口径 受部径 器高	10.6 11.6 5.4	口縁部は内傾して上方に立ち上がる。口縁端部直下の内面は凹面。底部はやや丸味をもつ。	(口)回転ナデ (底)回転ヘラ削り 4/5	(口)回転ナデ、ナデ	灰色 N5/0 灰色 N5/0	石・長・黒色 (1～3) ◎	233 の身	32
237	甕	口径 器高	25.7 47.7	外反する口縁部。口縁端部は肥厚して面をもつ。口縁端部外面直下に断面三角形の突帯を巡らす。底部は丸底。体部にカキ目状の横線を螺旋状に施す。	(口)横ナデ (体)縦位の平行タタキ目	(口)横ナデ (体)タタキ→ナデケシ	灰白色 N7/0 灰白色 N7/0	長(1～3) ◎		32

表 42　SX1 出土遺物観察表　鉄製品（農工具）

実測番号	器種	残存	材質	法量				備考	図版
				長さ (cm)	幅 (cm)	厚さ (cm)	重さ (g)		
238	U字刃先	刃部の一部欠損	鉄	15.80	15.30	1.30	102.95		32

表 43　近世土坑墓 SK1 出土遺物観察表　土製品（皿）

実測番号	器種	法量（cm）		形態・施文	調整		色調	胎土（mm）焼成	備考	図版
					外面	内面	（外面）（内面）			
239	土師器皿	口径 器高	8.2 1.7	平底の底部。底部の切り離しは回転糸切り。	回転ナデ	回転ナデ	にぶい黄橙色 10YR7/4 にぶい橙色 7.5YR7/4	石・長(1～2) ◎		33

表 44　近世土坑墓 SK1 出土遺物観察表　陶磁器

番号	出土場所	種別	器種	法量			釉薬	装飾	備考	図版
				口径	器高	底径				
240	SK1	陶器	碗	8.0	3.6	3.5	有り	無し	体部は内湾して立ち上がり口縁部は外反する。高台付き。内外面とも釉が施される。底部外面は露胎となる。	33

表 45　近世土坑墓 SK1 出土遺物観察表　金属製品（銭貨）

番号	出土場所	銭名	初鋳年	材質	法量				備考	図版
					径 (cm)	孔寸 (cm)	厚さ (cm)	重さ (g)		
241	SK1	寛永通寶	1636（寛永 13）年	銅	(2.5)	(0.6)	0.1	1.21		33
242	SK1	寛永通寶	1636（寛永 13）年	銅	2.4	0.6	0.1	2.41		33
243	SK1	寛永通寶	1636（寛永 13）年	銅	2.5	0.6	0.13	3.36		33

表 46　その他出土遺物観察表　陶磁器

番号	出土場所	種別	器種	法量			釉薬	装飾	備考	図版
				口径	器高	底径				
244	SK1 北側	陶器	碗	8.2	4.2	2.4	有り	無し	体部は内湾して立ち上がり口縁部は外反する。高台付き。内外面とも釉が施される。底部外面は露胎となる。	33

表 47　その他出土遺物観察表　金属製品（銭貨）

番号	出土場所	銭名	初鋳年	材質	法量				備考	図版
					径 (cm)	孔寸 (cm)	厚さ (cm)	重さ (g)		
245	SK1 北側	寛永通寶	1636（寛永 13）年	銅	2.9	0.6	0.1	2.56		33
246	SK1 北側	寛永通寶	1636（寛永 13）年	銅	2.5	0.6	0.13	3.65		33

表 48　腰折 7 号墳玄室内出土遺物観察表　装身具（勾玉）

実測番号	器種	残存	材質	色	法量						穿孔法	図版
					長さ (cm)	頭部幅 (cm)	最大厚 (cm)	右孔径 (cm)	左孔径 (cm)	重さ (g)		
247	勾玉	尾部欠損	瑪瑙	淡褐色	(1.7)	0.57	0.62	0.30 (迎孔)	0.10	1.317	迎孔	34

表 49　腰折 7 号墳玄室内出土遺物観察表　装身具（管玉）

実測番号	器種	残存	材質	色	法量							穿孔法	図版
					長さ (cm)	上径 (cm)	下径 (cm)	上孔径 (cm)	下孔径 (cm)	迎孔径 (cm)	重さ (g)		
248	管玉	完形	碧玉	暗オリーブ灰色 2.5GY4/1	1.0	0.4	0.4	0.25	0.25	—	0.248	片面か	34
249	管玉	完形	碧玉	暗緑灰 7.5GY3/1	0.47	0.23	0.24	0.15	0.12	—	0.035	片面か	34

表 50　　腰折７号墳玄室内出土遺物観察表（1）　装身具（ガラス玉）

実測番号	器　種	残　存	材　質	色	法　量				備　考	図版
					直径(cm)	孔径(cm)	高さ(cm)	重さ(g)		
250	ガラス玉	完形	ガラス	濃青色	0.61	0.20	0.36	0.166		34
251	ガラス玉	完形	ガラス	濃青色	0.60	0.20	0.31	0.178		34
252	ガラス玉	完形	ガラス	濃青色	0.55	0.20	0.37	0.161		34
253	ガラス玉	完形	ガラス	濃青色	0.47	0.22	0.32	0.077		34
254	ガラス玉	完形	ガラス	淡青色	0.43	0.12	0.32	0.066		34
255	ガラス玉	完形	ガラス	淡青色	0.39	0.12	0.36	0.068		34
256	ガラス玉	完形	ガラス	淡青色	0.40	0.18	0.20	0.042		34
257	ガラス玉	完形	ガラス	淡青色	0.40	0.13	0.0.20	0.039		34
258	ガラス玉	完形	ガラス	淡青色	0.42	0.14	0.31	0.062		34
259	ガラス玉	完形	ガラス	淡青色	0.33	0.10	0.25	0.038		34
260	ガラス玉	完形	ガラス	淡青色	0.32	0.17	0.24	0.031		34
261	ガラス玉	完形	ガラス	淡青色	0.34	0.14	0.20	0.034		34
262	ガラス玉	完形	ガラス	淡青色	0.34	0.14	0.18	0.021		34
263	ガラス玉	完形	ガラス	淡青色	0.30	0.15	0.24	0.030		34
264	ガラス玉	完形	ガラス	淡青色	0.39	0.16	0.22	0.040		34
265	ガラス玉	完形	ガラス	淡青色	0.39	0.16	0.22	0.040		34
266	ガラス玉	完形	ガラス	淡青色	0.33	0.10	0.26	0.030		34
267	ガラス玉	完形	ガラス	淡青色	0.38	0.14	0.23	0.034		34
268	ガラス玉	完形	ガラス	淡緑色	0.38	0.20	0.26	0.046		34
269	ガラス玉	完形	ガラス	淡緑色	0.39	0.14	0.25	0.046		34
270	ガラス玉	完形	ガラス	淡緑色	0.23	0.08	0.160	0.010		34
271	ガラス玉	完形	ガラス	黄色	0.37	0.13	0.20	0.032		34
272	ガラス玉	完形	ガラス	黄色	0.39	0.14	0.29	0.047		34
273	ガラス玉	完形	ガラス	濃青色	0.38	0.11	0.20	0.022		34
274	ガラス玉	2/3	ガラス	濃青色	0.30	0.15	0.18	0.012		
275	ガラス玉	1/2	ガラス	濃青色	0.28	(0.12)	0.19	0.011		
276	ガラス玉	1/2	ガラス	淡青色	(0.39)	(0.18)	0.20	0.036		
277	ガラス玉	完形	ガラス	黄色	0.50	0.13	0.30	0.069		
278	ガラス玉	完形	ガラス	淡青色	0.35	0.20	0.35	0.045		
279	ガラス玉	完形	ガラス	黄色	0.39	0.20	0.27	0.051		
280	ガラス玉	完形	ガラス	淡青色	0.37	0.15	0.27	0.051		
281	ガラス玉	完形	ガラス	濃青色	0.47	0.15 ～ 0.20	0.44	0.149		

表 51　　腰折７号墳出土遺物観察表　鉄製品（工具）

実測番号	器種	残存	材質	法　量				備考	図版
				長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重さ(g)		
282	刀子	刃部の一部欠損	鉄	9.30	2.10	0.50 ～ 0.60	18.80		34

第Ⅴ章　考　察　―腰折５号墳の埴輪とその評価―

第１節　埴輪資料の特徴

下難波腰折５号墳（以下、「５号墳」）の出土埴輪は、東側周溝および石室転落の個体が大半で、原位置を保つものは皆無である。天井石崩落（抜取？）の際に転落した個体が復元可能で、本来は墳頂部に配置されていた可能性が高い。器種としては円筒埴輪が殆どで、僅かに朝顔形埴輪が混じり、形象埴輪は現状では確認されてない。

そこで各種埴輪の諸特徴を列記したうえで、風早平野および周辺（松山・今治平野）の後期埴輪との比較検討を行い、埴輪からみた下難波腰折古墳群中での５号墳の評価を行いたい。

（１）円筒埴輪

全形を復元可能な個体（205・206）を参考にすると、器高 45 ～ 50cm を測り、突帯３条４段構成の個体が主体である。焼成には土師質・須恵質（硬質）と分類可能ではあるが、破片資料を含めて確認したところ、個体毎の製作手法や特徴に大きな相違はなく、複数類型は存在しないと考える。

また、突帯間距離と口縁･基底部長の観察では、突帯間隔が概ね９～ 10cm、口縁部長が 10cm 前後と、大きな差異はみられない。一方、基底部長は約 15 ～ 18cm と幅はあるが、いずれも突帯間隔を大きく上回る。その要因としては「基底部倒立調整」が大きく関係しており、後述する。

器面調整はタテまたはナナメ方向のハケが施されており、観察の限りでは正立状態で左上がりとなる。内面にも口縁部および体部にハケが残るが、連続的な指オサエ・ナデ痕が強く目立たない。スカシ孔は口縁・基底部を除く２段に、直交させて円形スカシを２個穿つ。205・211 のように貼付突帯を切る形で穿たれる個体もあり、最終段階での作業工程であることが再確認できる。

突帯は断面低平な「M」字形の個体が大半で、断面三角形状に見えるものは、ナデ調整の強弱による形状変化によるもので、基本形は同一と考える。また、突帯貼付方法には断続ナデを採用しており、突帯上・下端には横ナデ調整で消しきれない強い指ナデ（オサエ）の窪みが確認される。また、218 の突帯上端には、断続ナデ貼付で器面に残った指（爪）の擦れ痕が左上方に連続して認められる。

５号墳で注目されるのが基底部調整で、破片資料を含め、その全てに「基底部倒立調整」が施されている。基底部の遺存状態が良好な 205・206・218 では、基底部長が 15cm 前後であるのに対し、突帯間隔は約９cm と短い。これは倒立状態での外面板オサエ・内面指オサエに伴う「基底部の伸長化」が原因であり、基底部端が大きく波打ち正立時に不安定なのは、この「基底部倒立調整」後、そのままの状態で乾燥させるためである。

さらに細かく観察すると、５号墳の「基底部倒立調整」には上下複数の段階が存在する。

（ⅰ）Ⅰ段階（基底部全体の歪み修正）

個体を倒立後、最下段突帯の下側（起点は個体で異なる）から外面板オサエ（タタキ）・内面指オサエにより調整する。複数回のオサエ調整により基底部が大きく伸び外側に広がることが多い。

（ⅱ）Ⅱ段階（基底端部付近の調整）

基底部端から４～ 5cm あたりを外面板オサエ・内面指オサエを強く施す。その際、端部が広がらないよう「絞り気味」に端部を整えるため、最終形状が裾広がりにはならない。

（２）朝顔形埴輪

数量的にはごく僅かではあるが、特徴的な形状の朝顔形埴輪（土師質）が確認されている。

口縁端部付近を除き、ほぼ全形が残る 204 を参考に復元すると、器高約 55cm、口径はおよそ 40cm を想定する。口縁部は外面に突帯貼付することで「二重口縁」状とし、頸部から肩部にかけて大きな張りを持たず、肩部との区別が曖昧である。体部は扁球状に膨らみ、基底部にかけて窄まる。

突帯断面は「三角形」状を呈するが、詳細に観察すると、突帯下角がナデ付けにより大きく潰されており、基本的にはＭ字形と同一と考える。スカシ孔は基底部上から２段に、直交させて円形スカシが２個穿たれる。

基底部は下半部のハケ調整が消えていることから、外面板オサエによる「基底部倒立調整」が施された可能性が高いが、基底部端外面には粘土の潰れを直す横方向の板ナデ痕があり注意を要する。

第２節　風早平野および松山・今治平野の後期円筒埴輪との比較検討

５号墳が所在する風早平野には、古墳時代後期の埴輪祭祀が局所的には採用されているものの、近接する新城古墳群を除き、これまでほとんど報告されていない。５号墳の出土埴輪からは、①３条４段構成の円筒埴輪１種類、②突帯貼付は断続ナデ・オサエの後、指ナデ調整（断面Ｍ字形）、③基底部は伸長化し複数段階の板オサエを施す「基底部倒立調整Ｄ類」、④朝顔形埴輪は個性的だが、円筒埴輪との製作手法上の共通項が多い、という諸特徴が抽出できる。

年代的位置付けとしては、筆者の埴輪編年（山内 2008）で「伊予Ⅳ - ３期」に比定され、概ね６世紀中～後葉（TK10 ～ TK43）と想定される。石室副葬の須恵器や馬具との年代観とも矛盾しない。

同時期の埴輪資料が多い松山平野では、６世紀前葉（伊予Ⅳ - ２期）に中・大型前方後円墳での埴輪祭祀の採用が顕著で、一古墳に複数系統の円筒埴輪が採用されるのに対し、「伊予Ⅳ - ３期」になると、群集墳中での「埴輪採用≠首長墳」の構図がみえる。円筒埴輪自体の個性も古墳単位では乏しく、「基底部倒立調整」の複数パターンの存在が個性抽出のポイントとなっている。

風早平野での５号墳の埴輪は、松山平野での群集墳の在り方と大きな差異はなく、平野を超えた広範囲での共通項（一種の「決まり事」）が貫徹されている貴重な類例であると捉えられる。

また、北接する今治平野での円筒埴輪を概観すると、６世紀前葉～中葉の小型前方後円墳である高橋仏師１号墳・高地栗谷１号墳では、「基底部倒立調整」の採用に共通項はみられるものの、古墳ごとの差異が顕著で、その後の古墳群には埴輪祭祀が採用されない。５号墳の円筒埴輪は、基底部の伸長化や複数段階の「基底部倒立調整」など高橋仏師１号墳の個体に近く、胎土に砂粒の混入が多い点など、注目すべき点も多いが、その生産・供給は立岩川右岸の丘陵尾根上に展開する各古墳群内の有力首長層に供給された限定的なものとして理解すべきであろう。（山内英樹）

【参考文献】

山内英樹 2005「愛媛県出土埴輪の基礎的研究 (５) - 風早の埴輪資料について - 」『紀要愛媛』第４号 (財) 愛媛県埋蔵文化財調査センター

山内英樹 2008「伊予の埴輪編年」『紀要愛媛』第８号　(財) 愛媛県埋蔵文化財調査センター

山内英樹 2018「円筒埴輪『基底部調整』再考」『埴輪論叢』第８号　埴輪検討会

山内英樹 2022「西部瀬戸内の石見型埴輪 - 松山平野の出土資料 - 」『埴輪論叢』第 11 号　埴輪検討会

第Ⅵ章　まとめ

今回の調査で見つかった古墳は、地形の改変などにより壊れて全体がわかるものはないが、立地や内部構造・副葬品など諸様相を窺い知る事が出来た。ここでは、調査を行った腰折１～７号墳とSX1について特徴や時期について若干の考察を加え、本報告のまとめとしたい。

なお、須恵器の編年観は田辺昭三氏の陶邑窯編年と古代の土器研究会の飛鳥編年に基づいた。

［腰折１号墳］

石室と周溝の一部を検出した。古墳の規模と平面形は、周溝の検出状況から周溝を含めた直径14m前後の円墳と考えられる。石室は西側に開口する横穴式石室で、主軸方位はE20°Sとなり東西方向を指向する。石室平面形態は中央部がやや膨らむ羽子板状を呈する。袖部の形態は、石材の抜き取り痕跡より両袖と考えられる。この袖の間には、人頭ほどの塊石を並べ框石とする様子が伺われる。玄室は河原石を敷き詰め礫床とするが、北側の側壁に沿って平石を敷いた区画部を設けて屍床部としている。羨道部や前庭部の様相は壊れて不明である。遺物は須恵器、鉄器、装飾品があり土師器は１点も出土していない。須恵器は高坏、短頸壺、提瓶が多く出土している。装飾品では玉類が注目される。碧玉製管玉、切子玉、水晶製丸玉、ヒスイ製の勾玉、碧玉製の平玉、琥珀製の平玉、ガラス小玉、粟玉などである。出土した点数は多くはないが、種類と材料はバラエティーに富んでいる。このうち、ヒスイ製の勾玉は弥生時代の伝世品ではないかとの指摘がある。時期は出土した須恵器より、高坏１～３がTK10･MT85に、提瓶は15～17はTK43に、高坏４と蓋６～８はTK209に比定される。よって６世紀中頃に築造され６世紀末葉頃まで追葬が行われたものと考えられる。

［腰折２号墳］

２号墳は、1号墳から南に下った場所に位置し、石室中央間の距離は17m、石室床面との比高差は5.6mを測る。墳丘盛土は失われているが周溝、石室、墓道を検出した。古墳の規模と平面形態は、周溝の検出状況より周溝を含めた１辺14m前後の方墳と考えられる。石室は南側に開口する横穴式石室で、主軸方位はN0°で座標北を示す。袖部の形態は、開口部の壁体が失われているため不明である。石室規模は現存長4.13 m、床面最大幅2.24 mを測るが本来の石室長は、墓坑の検出長が7mを超えることから、石室も同程度かそれ以上の長さがあるものと考えられる。壁体に使用される石材は、大型の安山岩が使用されている。特に奥壁の基底石には、板状の巨石２枚を立並べて、見た目にインパクトを与えている。玄室では、奥壁側に礫床と木炭床の二つの屍床部を検出している。遺物は石室内での出土は少ない。中世の遺物も出土しており、盗掘の影響を受けているものと考えられる。時期は石室内や墓道出土の蓋坏92・93・94・129・131がTK217に、平瓶が飛鳥Ⅱ・Ⅲに比定でき、７世紀中葉頃に築造され、後葉頃まで追葬が行われたものと考えられる。

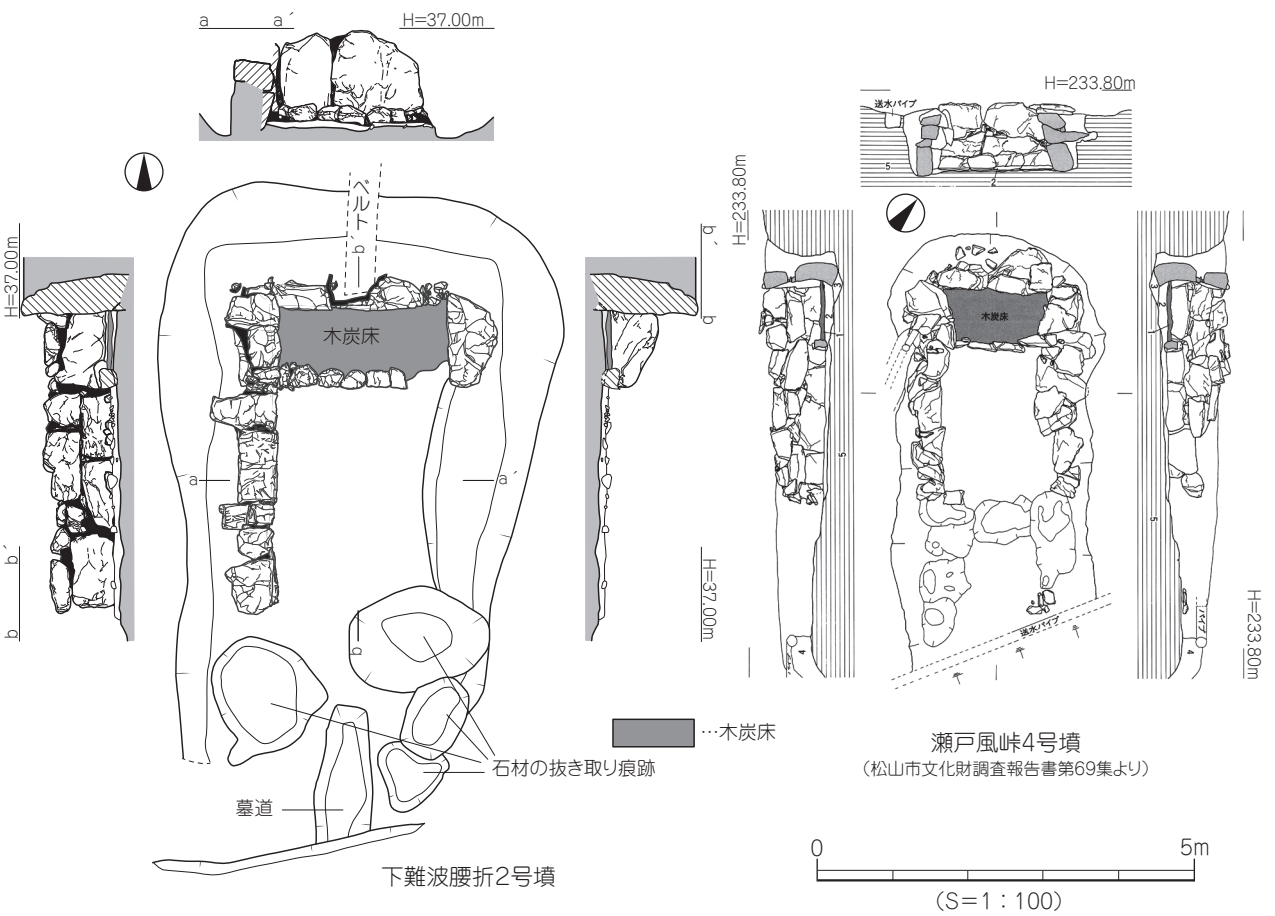
さて、２号墳で検出した礫床と木炭床について考えてみる。追葬時に礫床を造る例は、若干の相違はあるが松山平野北東部に所在する平井谷１号墳にみられる。平井谷１号墳は、６世紀後半に築造され７世紀中葉まで追葬が想定されている両袖の横穴式石室である。玄室床面のほぼ全面に平石を敷くが、追葬時にその平石の上面に河原石を敷き詰め新たな床面とする例が知られる。このような例から２号墳の礫床も追葬時に設けられた新たな屍床部と考えている。２号墳の礫床で副葬品が出土しなかった事は盗掘の影響があったものと思われる。

木炭床は、同形態のものに瀬戸風峠４号墳（第65図）があり、2号墳の木炭床は松山市では2例目となる。瀬戸風峠４号墳は、本古墳よりほぼ真南の約 14km 先に所在する古墳である。高縄山から派生する標高234m の丘陵頂部に立地し、墳形は不明ながら両袖式とみられる横穴式石室を主体部とする。玄室規模は現存長 2.7m、幅 1.50 ～ 1.60m を測る。木炭床は奥壁から約 80㎝入り口側に板石状の塊石４枚を奥壁と平行して立て並べ、玄室を仕切った部分に石炭を敷いて屍床部とする。木炭上では収骨された人骨と土師器坏や耳環などが出土している。時期は７世紀中葉頃の築造と考えられている古墳である。２号墳の木炭床では副葬品も人骨も検出していないことから、礫床を造る前に片付けられた可能性が高いと考えられる。

腰折２号墳と瀬戸風峠４号墳との位置関係は距離的には離れるものの、両古墳とも高縄山から派生する平野に近い丘陵部に所在することは共通しており、そこには何らかの繋がりや共通の意識が働いていたと考えられ興味深い。今回、石室内で木炭を使用する埋葬法としての広がりと下難波腰折古墳と瀬戸風峠古墳との繋がりを確認できたことは大きな成果であった。また、このような埋葬形態は被葬者の階層によるものか、古墳造営集団の影響によるものかを解明することが今後の課題であろう。

［腰折３号墳］

腰折３号墳は石室のみの検出で墳形や古墳の規模とも不明である。石室は南側に開口する横穴式石室である。主軸方位は N24゜E で南北方向を指向する。壁体はひどく壊されて袖部や羨道部についての形態は不明。奥壁から１段の基底石が残った開口部までの現存長は 10.20 m を測り、今回調査した古墳では最長と考えられる。石室に使用された石材の特徴には、奥壁の基底石に相似形の巨石を２枚立て並べ２号墳同様に見た目にインパクトを与えている。時期については蓋坏 139 ～ 142 は TK217 に、台付椀



第65図　腰折2号墳と瀬戸風峠4号墳石室測量図

144・145は飛鳥Ⅰ～Ⅱに比定され7世紀前葉から中葉にかけての築造と考えられる。

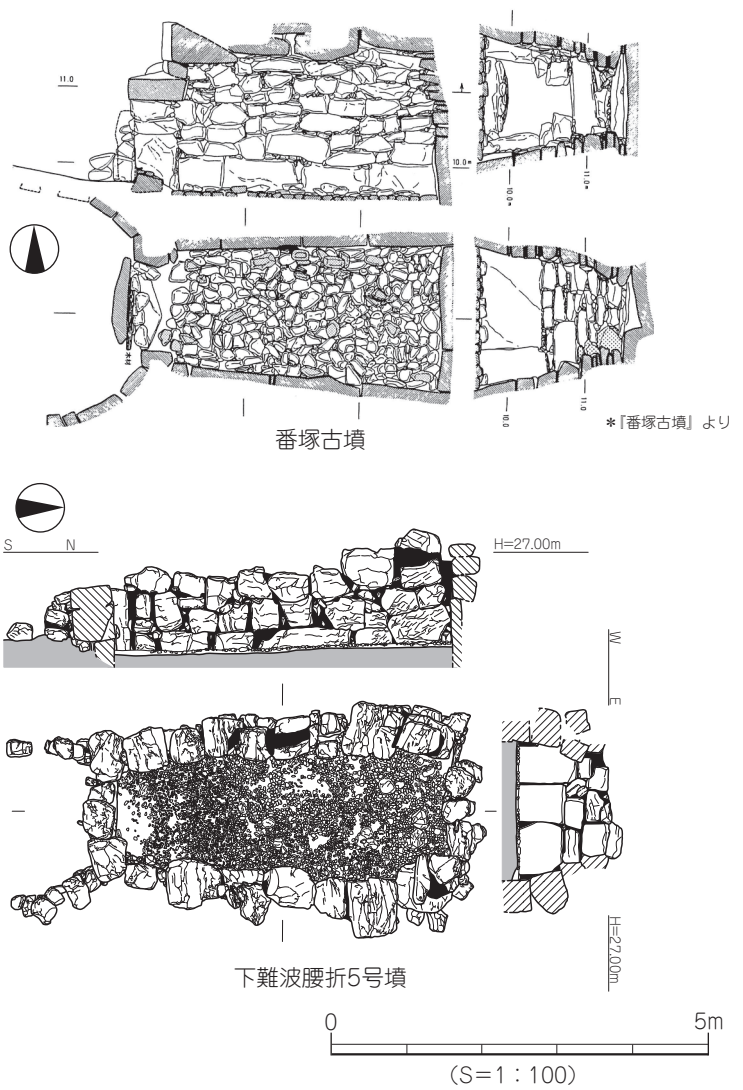
［腰折4号墳］

4号墳は石室のみの検出である。壁体は、1段から3段程度を残すのみで西側は壊され、基底石も失われている。このため、石室形態は不明である。石室は現存長1.84 m、幅0.68 mを測り、床面は礫床とする。主軸方位はE 12° Sで東西方向を指向する。遺物は短頸壺が1点出土している。時期については、出土した短頸壺1点に頼るしかない。この短頸壺は1号墳から出土した短頸壺と比較すると、肩部が水平気味で張りが強いことを特徴とする。この形態のものは1号墳では見られず、5号墳、6号墳で同じ形態のものが出土している。肩の張りが強い形態が後出する時期差を示すのならば、6世紀末葉頃に比定できるものと考える。

［腰折5号墳］

腰折5号墳は、検出した周溝の形状などの状況から、周溝を含めた直径20m前後の円墳と考えられる。石室は南側に開口する両袖の横穴式石室で玄室と石積の側壁を伴う前庭部で構成され、羨道部と呼べるものはない。平面形態は羽子板状を呈する。使用石材の特徴は、奥壁の基底石に板状の石材を3枚立て並べて玄門から見た目のインパクトを与えている。しかし、その石材は厚さが20㎝程度と薄く、上部にある石材の石室前面部の一部しか支えていない。床面は玉石を貼床上に敷き詰めて礫床とするが部分的に敷かれていない所も有る。玄門部には、東西とも方柱状の石を積立て突出した両袖を形成し、両袖の間には框石を敷いている。遺物は土師器、須恵器、鉄器、装飾品がある。時期は出土した蓋坏や提瓶にTK10・MT85と考えられるものがあり、高坏13～17はTK43～TK209に比定できる。よって6世紀前半でも中頃に築造され7世紀初頭までの追葬が想定される。

ここで5号墳の平面形態と出土遺物について少しだけ触れておく。5号墳の石室平面形態とよく似たものに福岡県豊前地域に所在する番塚古墳がある。番塚古墳は5世紀末～6世紀初頭の前方後円墳で豊前地域に定型化した横穴石室が築かれる画期となった古墳と言われている。5号墳の石室と比較すると平面形は羽子板状を呈し、両袖の袖部には方柱状の石を積み上げ、間には框石を置き、羨道部は無く、袖石から前庭部を囲む石積を持つなど構造的にも規模もよく似ている。この形態が豊前地域に広がる過程において、瀬戸内海の交易ルート



第66図　番塚古墳と腰折5号墳

を介在して本古墳も築造されたと考えられる。つまり、本古墳の被葬者は豊前地域と深い関わり合いをもつ、この地域の有力者と考えられる。遺物では注目するものに轡、子持器台、玉類などがある。轡は鉄製楕円形鏡板付轡と呼ばれるもので、松山市では斎院茶臼山古墳、三味線山古墳に次いで３例目となる。愛媛県下では今治市の治平谷１号墳、前方後円墳の高橋仏師１号墳などで出土している。子持ち器台は松山平野の東南部で比較的多く出土するが、北条平野での出土は希少となっている。玉類の出土点数は少ないものの、多様な玉類の出土のほか、墳丘には埴輪を伴うなど遺物からもこの地域の有力者といえる。

［**腰折６号墳**］

５号墳の石室中央から東へ24mに位置する。石室のみの検出で墳形、規模とも不明である。墓坑は地山面での検出で尾根線に直交して掘られる。石室はひどく壊され基底石の１段が部分的に遺存する。主軸方位はN24°Ｅで南北方向を指向する。床面は玉石を貼床上に敷き詰めて礫床としている。人骨は検出していない。石室形態は北側の石材が失われて全容が知れないことから不明とした。遺物は須恵器の短頸壺のほか、南側や北側の床面上で鉄鎌１点、管玉１点、土製丸玉３点などが出土している。鉄鎌の刃部の一部に布の付着痕が看取されることから、鉄鎌には布が巻かれていたと考えられる。時期は、石室内の出土の短頸壺は肩の張りが強く４号墳出土のものと形態が似る。このことや、５号墳との位置関係により５号墳築造後の６世紀末葉頃と考える。

［**腰折７号墳**］

６号墳の石室中央から東へ30mに位置する。石室のみの検出で墳形、規模とも不明である。墓坑は地山面での検出で尾根線に直交して掘られる。石室はひどく壊され東側と西側の基底部の２石が遺存するのみである。主軸方位はN19°Ｗで南北方向を指向する。床面は玉石を貼床上に敷き詰めて礫床としている。石室形態は、南や北側の石材が失われて全容が知れないことから６号墳と同様に不明とした。遺物は刀子１点、勾玉１点、管玉２点、ガラス玉32点である。時期は土器の出土がないものの、６号墳との位置関係より６号墳より後の６世紀末葉頃と考える。

［**ＳＸ１**］

５号墳の北側で検出した溝状の遺構である。平面形態は不整形である。５号墳の墓坑との切り合い関係より５号墳築造前の遺構である。性格については、５号墳築造前の古墳の周溝の可能性が高いと考えている。遺物は土師器の甕１点、須恵器の蓋坏がセットで３点、甕が１点、鉄製の鋤先１点などが出土しており、一括性の高い遺物で資料的に価値の高いものである。時期は出土した蓋坏の形態よりTK23～TK47に比定でき５世紀末葉頃と考える。

文　献

九州大学考古学研究室 1993『番塚古墳』
相原浩二・小玉亜紀子 1998『瀬戸風峠遺跡』　松山市教育委員会・（財）松山市生涯学習振興財団埋蔵文化財センター
栗田茂敏・加島次郎ほか 2003『葉佐池古墳』松山市教育委員会・（財）松山市生涯学習振興財団埋蔵文化財センター
栗田茂敏 2014『三味線山古墳・船ヶ谷向山古墳』松山市教育委員会・（公財）松山市文化・スポーツ振興財団埋蔵文化財センター
田城武志・高尾和長 1993『かいなご３号墳・平井谷１号墳』松山市教育委員会・（財）松山市生涯学習振興財団埋蔵文化財センター
阪本安光 1982『北条市上難波南古墳群調査報告書』愛媛県教育委員会・（財）愛媛県埋蔵文化財調査センター
田辺昭三 1981『須恵器大成』角川書店
田辺昭三 1966『陶邑古窯址群Ｉ』平安学園考古学クラブ
名本二六雄 1987「愛媛県出土古墳時代の馬具」『遺跡』第30号
真鍋修身 2002「愛媛の横穴式石室の地域相」『四国とその周辺の考古学』
宮代栄一 1993「5・6世紀における馬具の「セット」について」『九州考古学』第68号、九州考古学会
山内英樹 2008『高橋仏師１～４号墳』（財）愛媛県埋蔵文化財調査センター　埋蔵文化財発掘調査報告書第146集
古代の土器研究会編 1992『古代の土器Ｉ　都城の土器集成』

写真図版

写真図版 1 ～ 19　：1 次調査
写真図版 20 ～ 34　：2 次調査

写真図版データ

1．遺構は、デジタルカメラで撮影した。
　　使用機材：デジタルカメラ　Nikon D90　AF-S　DX18 ～ 55㎜

2．高所撮影は、南海放送サービス株式会社にドローン撮影を委託した。

3．遺物は、デジタルカメラで撮影した。
　　使用機材 :
　　デジタルカメラ　　Nikon D610　マイクロニッコール 105㎜・AF-S ニッコール 24 ～ 85㎜
　　ス ト ロ ボ　　コメット /CA32・CB2400
　　スタンド等　　トヨ無影撮影台・ウエイトスタンド 101

4．製　　版：写真図版 175 線
　　印　　刷：オフセット印刷
　　用　　紙：マットコート 110kg

【参考】『埋文写真研究』vol.1 ～ 21・『報告書制作ガイド』『文化財写真研究』vol.1 ～ 6

［大西 朋子］

1. 1次調査
調査前遠景
（伐採前・南東より）

2. 1次調査
樹木伐採後遠景
（東より）

3. 1次調査
調査前全景
（南より）

図版２

1. 1次調査
調査地完掘遠景
（南より）

2. 1次調査
完掘状況①
（上空より･写真上が北方向）

3. 1次調査
完掘状況②
（南西より）

1. 1号墳検出状況
（東より）

2. 1号墳
石室床面検出況
（西より）

3. 1号墳奥壁北東隅
遺物出土状況
（南より）

図版4

1. 1号墳
玉類出土状況
（北東より）

2. 1号墳
床面状況
（東より）

3. 1号墳
石室全景
（南上より）

1.1号墳出土遺物①

図版6

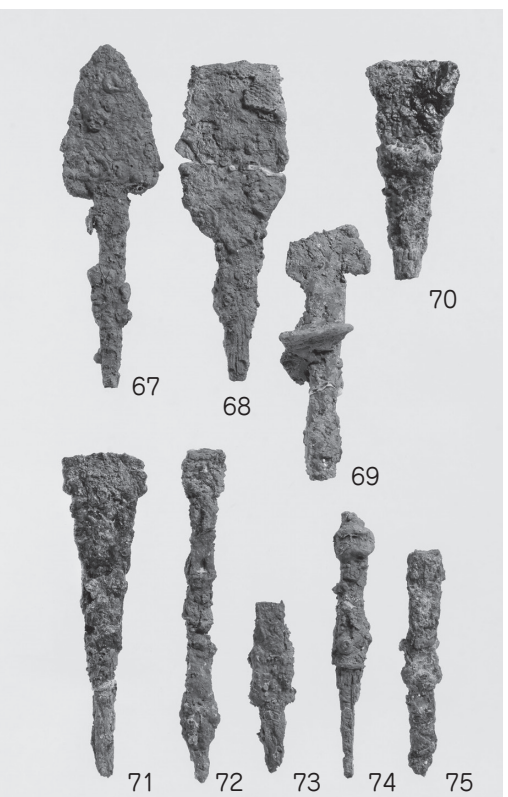
1.1号墳出土遺物②

18

65
66
27
26
29
28
24
31
21
30
64
59
～
22
51
45
44
42

25
32
36
35

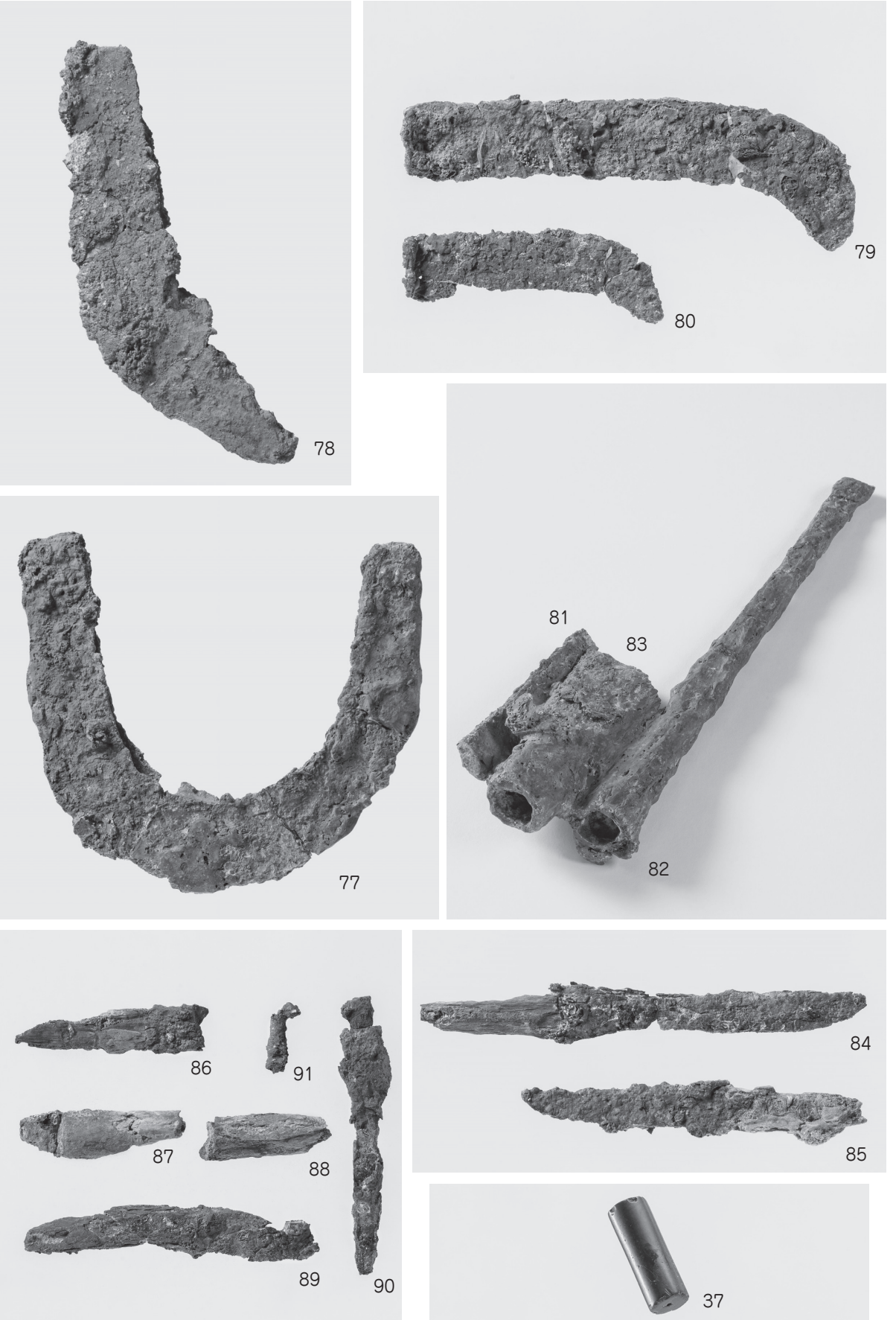
23
19
20
33
34
38～41・43・
46～50・
52～58


70
67
68
69
71
72
73
74
75

76

1.1号墳出土遺物③

図版8



1. 1号墳出土遺物④

1. 2号墳
石室検出状況
（東より）

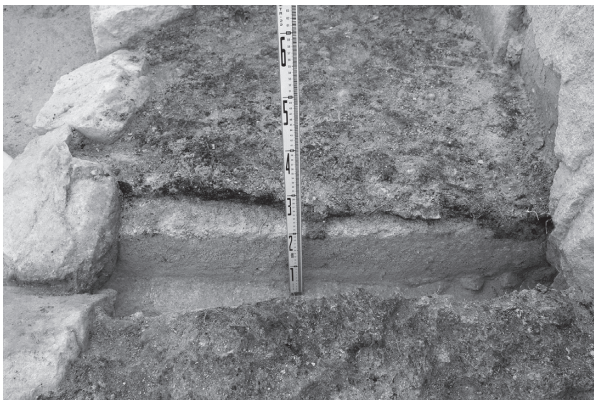
2. 2号墳
礫床検出状況①
（北東より）

3. 2号墳
礫床検出状況②
（北より）

1. 2号墳耳環出土状況　（南より）

2. 2号墳墓道遺物出土状況　（南より）

3. 2号墳木炭床検出状況　（南東より）



4. 2号墳木炭床断面状況　（東より）

5. 2号墳石室全景　（南より）

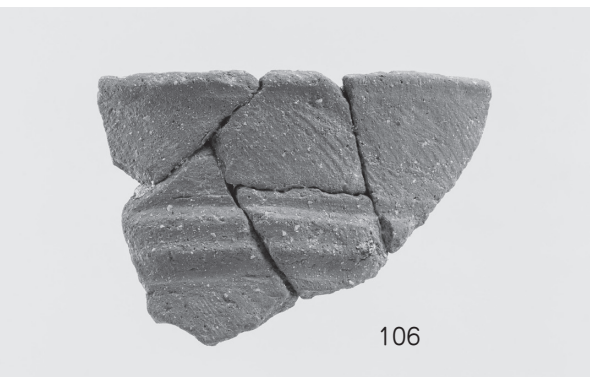
1. 2号墳奥壁の側面と裏込め土層（東より）

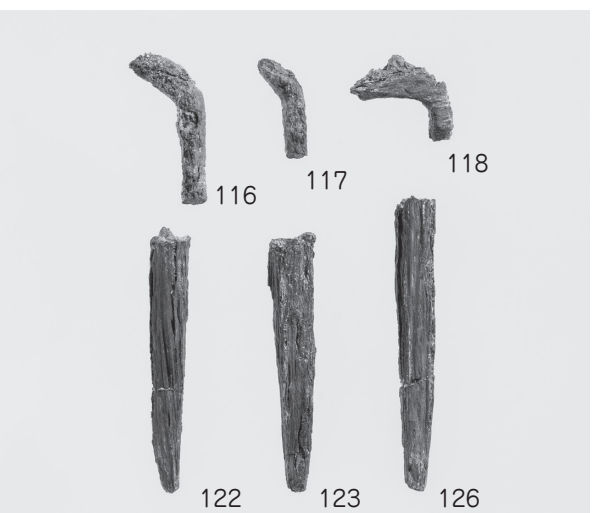
2. 2号墳木炭除去後の床面状況（南西より）

3. 2号墳全景（南より・木炭床検出前）

図版12

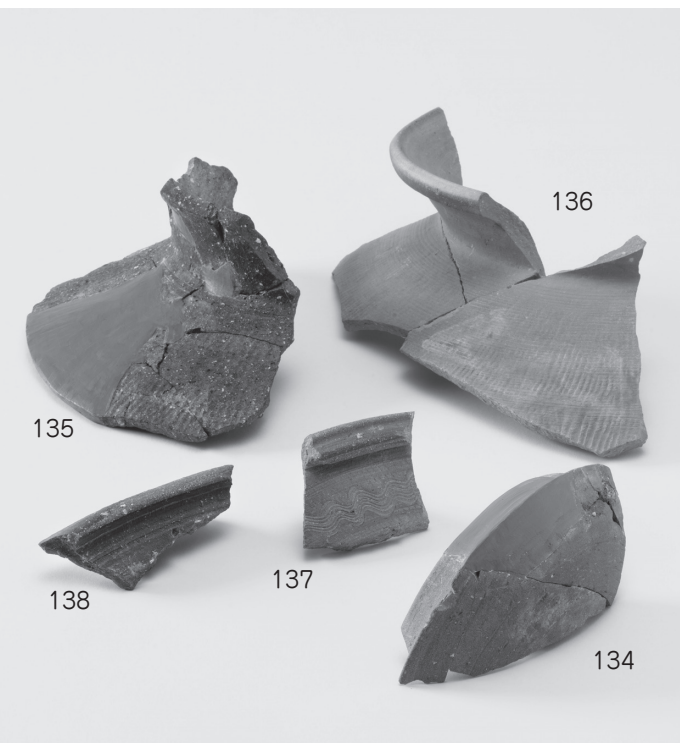
1.2号墳出土遺物①





1.2号墳出土遺物②

図版14



1.2号墳出土遺物③

1. 3号墳
石室検出状況
（南より）

2. 3号墳石室床面
遺物検出状況
（南より）

3. 3号墳完掘全景
（真上より・上が北方向）

図版16

1.3号墳出土遺物

1. B区4号墳検出状況　（東より）

2. 4号墳検出状況　（西より）

3. 4号墳遺物出土状況①　（西より）

4. 4号墳遺物出土状況②　（東より）

5. 4号墳完掘全景　（南より）

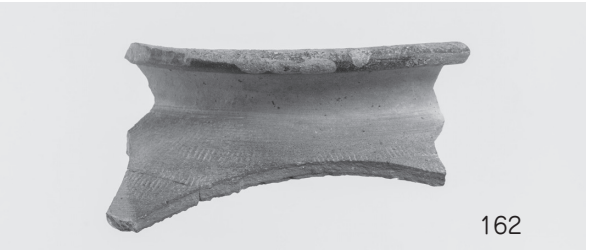
6. 4号墳出土遺物

図版18

1. B区遺物出土状況①　（北より）

2. B区遺物出土状況②　（北より）

3. B区遺物出土状況③　（北より）

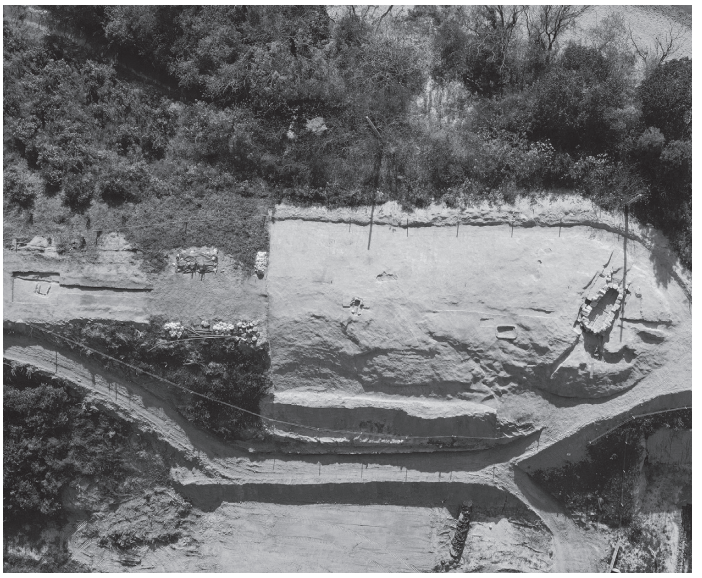


4. B区出土遺物①

1. B区出土遺物②

1. 2次調査地遠景　（東より）

2. 2次調査地 調査前状況　（北より）



3. 2次調査地 完掘全景　（北上より）

4. 2次調査地 B区完掘状況　（東より）

5. 5号墳石室西側ベルト土層①　（南より）

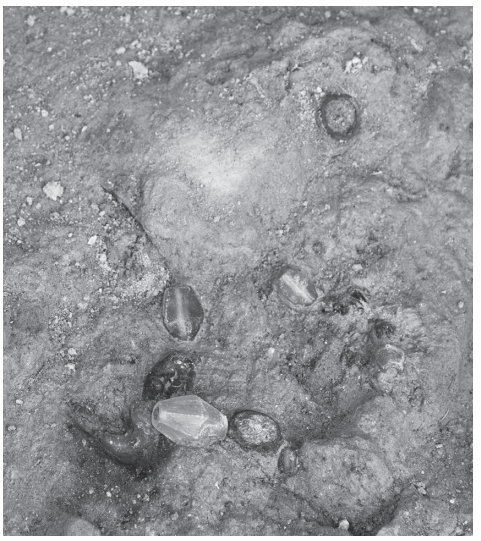
6. 5号墳石室西側ベルト土層②　（南より）

1. 5号墳検出状況①　（北西より）

2. 5号墳検出状況②　（南より）

3. 5号墳石室内埴輪出土状況①　（南より）

4. 5号墳石室内埴輪出土状況②　（西より）



5. 5号墳床面玉類出土状況　（南より）

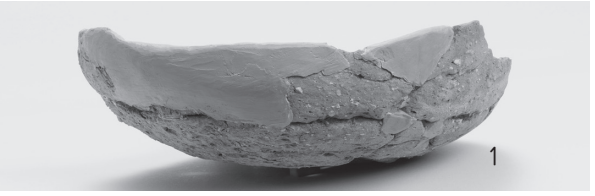
6. 5号墳床面須恵器出土状況　（東より）

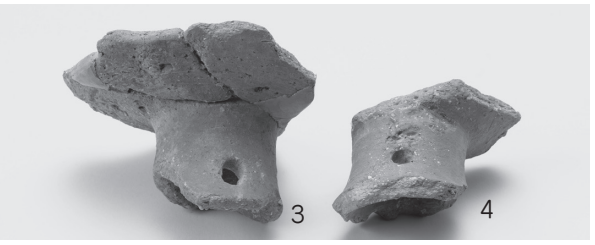
1. 5号墳床面状況　（北より）

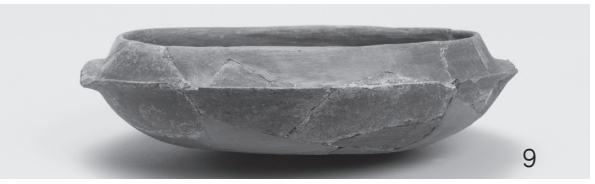
2. 5号墳前庭部　（南より）

3. 5号墳石室全景①　（北東より）

4. 5号墳石室全景②　（北上より）

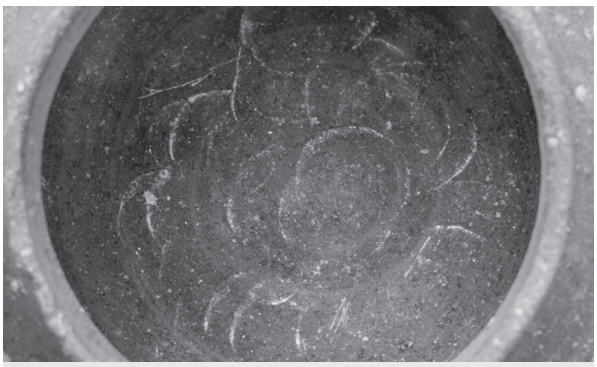






1. 5号墳出土遺物①

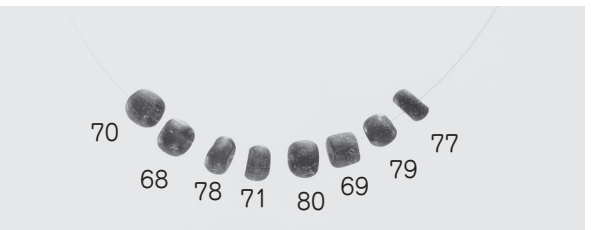
図版24

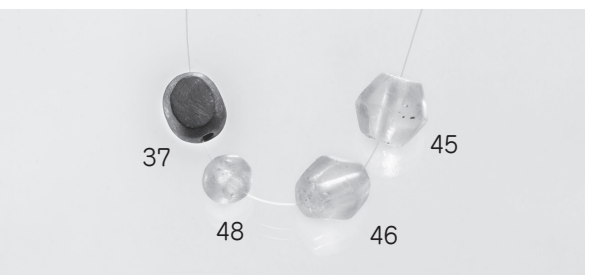


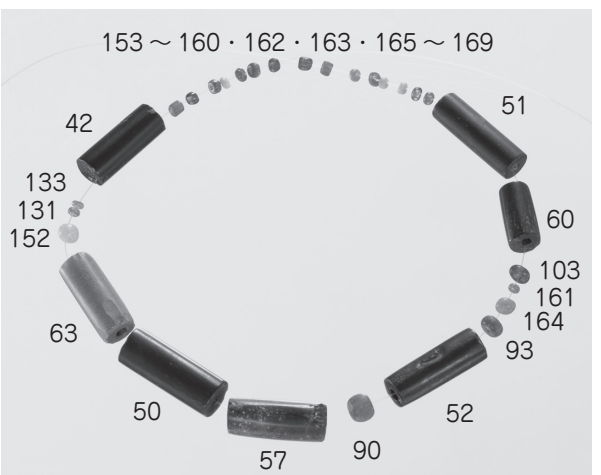
1.5号墳出土遺物②

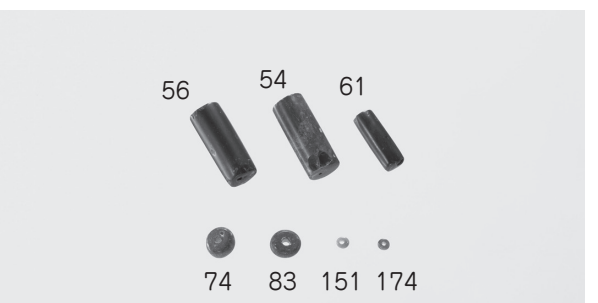
1.5号墳出土遺物③

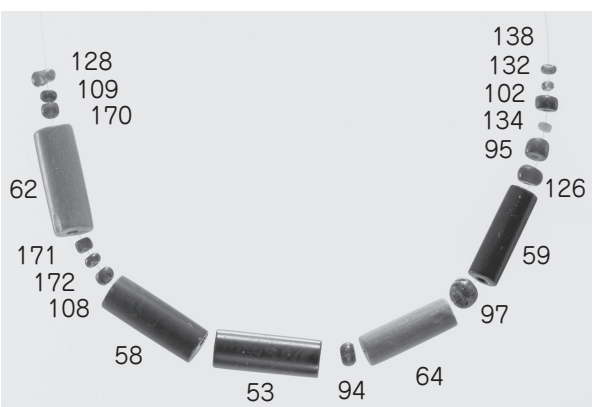
図版26

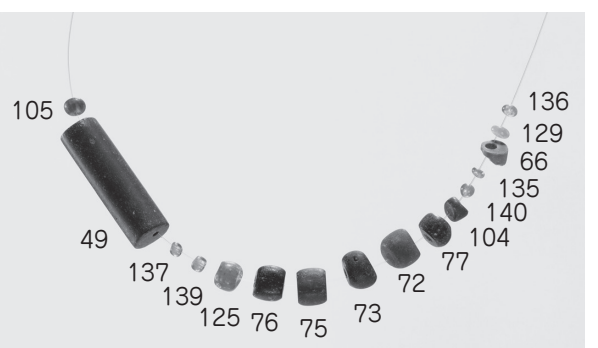


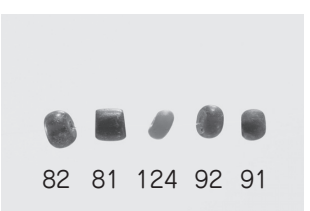


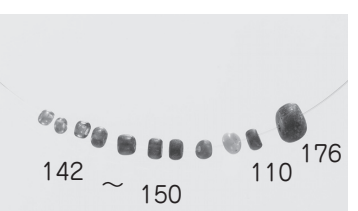


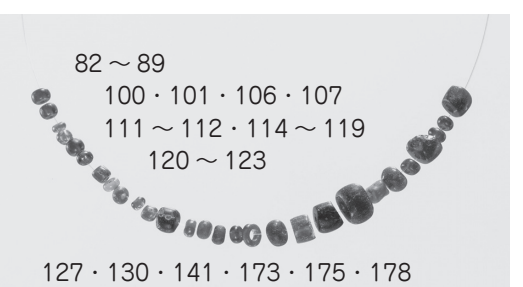








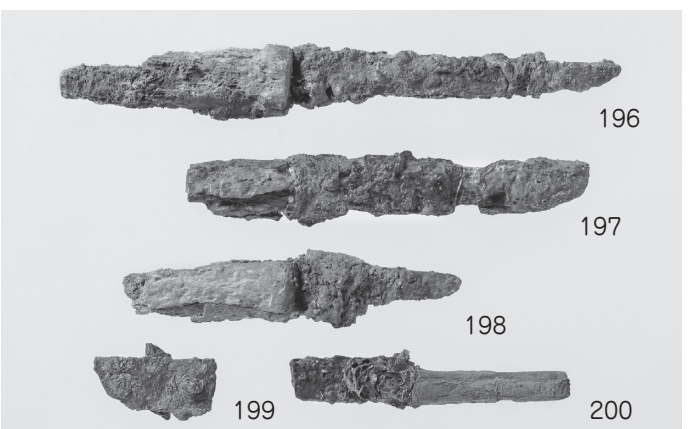


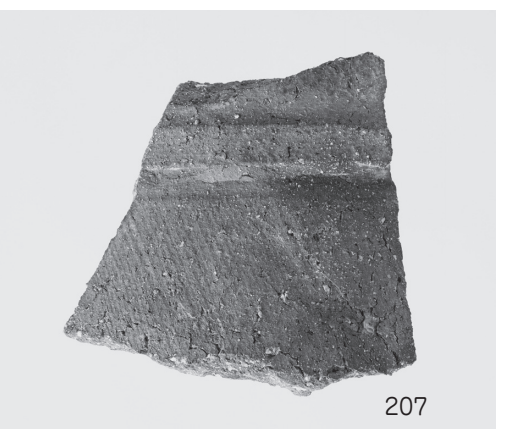


1.5号墳出土遺物④

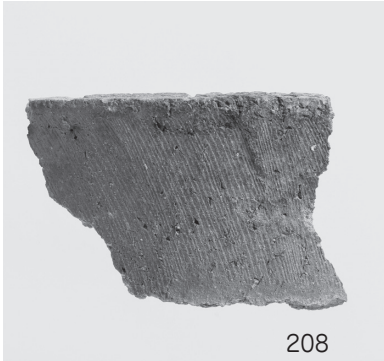
1.５号墳出土遺物⑤

図版28



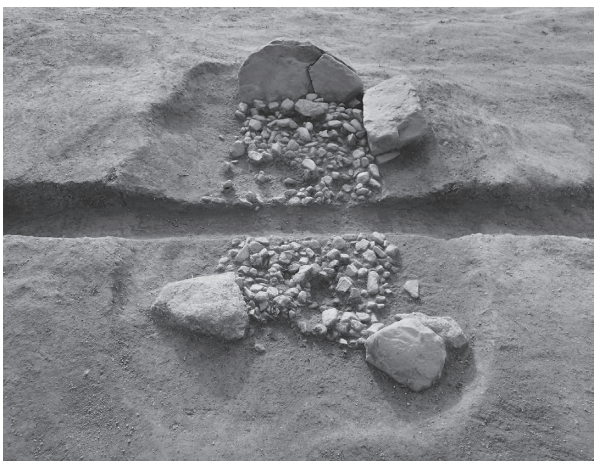


1. 5号墳出土遺物⑥



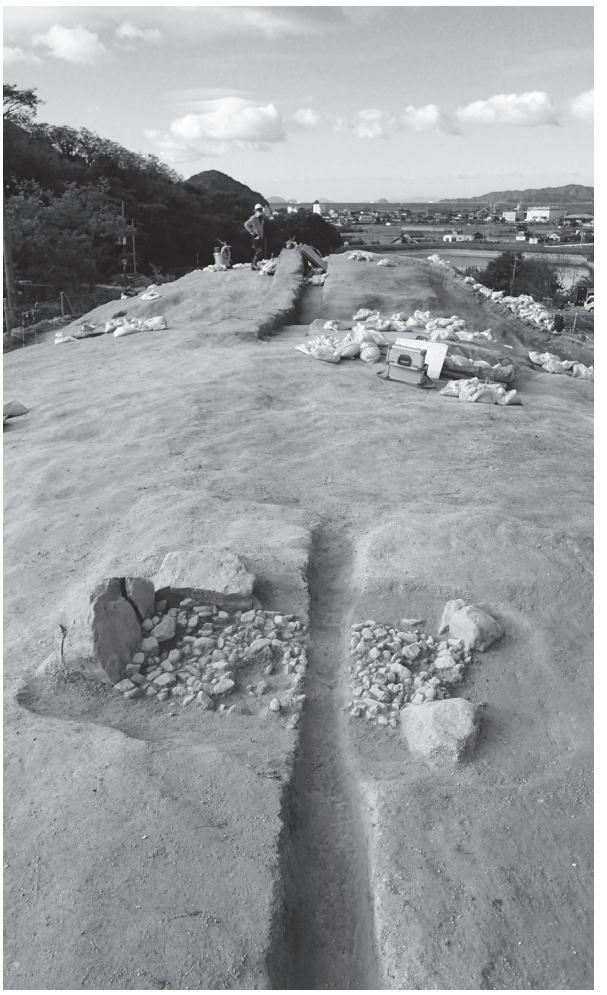
1.5号墳出土遺物⑦

図版30



1. 6号墳石室全景　（北より）

2. 6号墳鉄器出土状況　（北より）



3. 6号墳より5号墳を望む　（東より）

4. 6号墳出土遺物

1. SX1と5号墳　（北より）

2. SX1土層堆積状況①　（東より）

3. SX1土層堆積状況②　（南より）

4. SX1完掘状況　（東より）

5. SX1遺物出土状況全景　（北東より）

図版32

1. SX1出土遺物

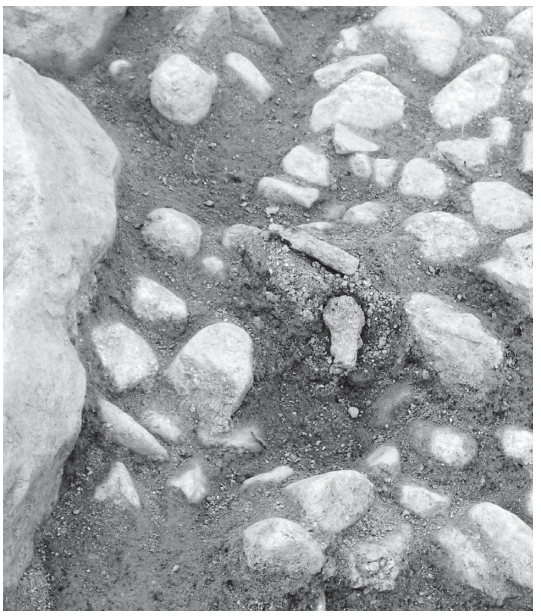
1. 近世墓 SK1
遺物出土状況
（北東より）

2. 近世墓 SK1
出土遺物

3. その他出土遺物

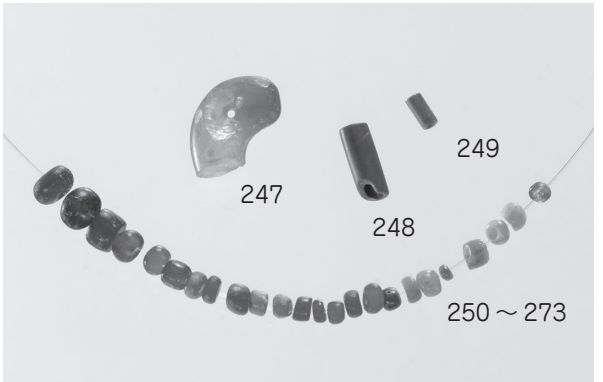
1. B区7号墳検出状況　（南より）

2. 7号墳勾玉出土状況　（北より）



3. 7号墳鉄器出土状況　（北より）

4. 7号墳石室全景　（北より）



5. 7号墳出土遺物

報　告　書　抄　録

ふりがな	しもなんばこしおれいせき　いちじ　にじ　ちょうさ
書名	下難波腰折遺跡　－１次・２次調査－
副書名	下難波地区農地整備工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書
巻次	
シリーズ名	松山市文化財調査報告書
シリーズ番号	第208集
編著者名	相原浩二
編集機関	公益財団法人松山市文化・スポーツ振興財団　埋蔵文化財センター
所在地	〒791－8032　愛媛県松山市南斎院町乙67番地6　TEL 089－923－6363
発行年月日	西暦2022（令和4）年12月23日

ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード 市町村	コード 遺跡番号	北緯 °′″	東経 °′″	調査期間	調査面積 （㎡）	調査原因
しもなんばこしおれ 下難波腰折遺跡 １次調査	まつやまししもなんばおつ 松山市下難波乙	38201		33°59′ 23.933″	132°47′ 19.227″	20191015 ～ 20200131	2,323	農地整備
しもなんばこしおれ 下難波腰折遺跡 ２次調査	まつやまししおなんばおつ 松山市下難波乙	38201		33°59′ 20.202″	132°47′ 16.137″	20201015 ～ 20201225	1,349	農地整備

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
下難波腰折遺跡１次調査	墳墓	古墳時代	古墳	土師器、須恵器、馬具、鉄鏃、工具、耳環、勾玉、平玉、棗玉、ガラス玉	腰折２号墳で木炭床を検出。松山市では２例目。
下難波腰折遺跡２次調査	墳墓	古墳時代	古墳	土師器、須恵器、馬具、鉄鏃、工具、耳環、勾玉、平玉、棗玉、切子玉、算盤玉、ガラス玉	腰折５号墳より子持ち高坏、鉄製楕円形鏡板付轡が出土。

要約

腰折１次調査

６世紀～７世紀に築造された古墳４基（腰折古墳１号墳～４号墳）が見つかった。１号墳～３号墳は横穴式石室、４号墳は小さな石室で形態は不明である。このうち１号墳からは、県内でも出土例の少ないヒスイ製勾玉、碧玉（へきぎょく）製平玉、琥珀（こはく）製平玉が出土した。このほか、２号墳では「木炭床」と呼ばれる遺構が見つかった。全国的にも珍しく、松山市では瀬戸風峠４号墳に次いで２例目の発見である。

腰折２次調査

６世紀～７世紀に築造された古墳３基（腰折古墳５号墳～７号墳）が見つかった。５号墳は横穴式石室、６・７号墳は石室形態不明で、石室内からは副葬品の土器・鉄器・装飾品などが出土した。このうち５号墳からは、子持ち高坏２点や鉄製楕円形鏡板付轡のほか、水晶（すいしょう）製勾玉や切子玉、碧玉（へきぎょく）製平玉や管玉のほか、ガラス玉などの装飾品約300点以上が出土した。

松山市文化財調査報告書　　第208集

下難波地区農地整備工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書

下難波腰折遺跡－1次・2次調査－

2022年12月23日　発行

編・発行　公益財団法人松山市文化・スポーツ振興財団
埋蔵文化財センター
〒791－8032　松山市南斎院町乙67番地6
TEL（089）923－6363
松山市教育委員会
〒790－0003　松山市三番町六丁目6番地1
TEL（089）948－6605

印　刷　不二印刷株式会社
〒790－0054　松山市空港通2丁目13－30
TEL（089）973－1266